

人が育つまち 人が育てたまち 飯田

～ 地域と人と教育のシンフォニー ～

「東京大学教育学部社会教育学演習」
2016年度飯田市社会教育調査実習報告

東京大学教育学部社会教育学研究室
2017年4月

市民すべてがアクターのまち

—「はじめに」に代えて—

牧野 篤

学生たちが飯田にお世話になった 2016 年は、戦後の公民館構想、つまり「公民館の設置運営について」と題する文部次官通牒が出されて 70 周年の年であった。古希を迎えた公民館は、敗戦によって荒廃した人心を建て直し、日本を民主的で平和な国へと再建するための、郷土の中核機関として構想されたものだった。

後に寺中構想と呼ばれることになるこの公民館構想を主導した当時の文部省社会教育課長・寺中作雄は、公民館構想を解説した著書『公民館の建設—新しい町村の文化施設』（公民館協会、1946 年）の冒頭で次のように語っている。長くなるが引用する。

「この有様を荒涼というのであろうか。この心持を索漠というのであろうか。目に映る情景は赤黒く焼けただれた一面の焦土、胸を吹き過ぎる思いは風の如くはかない一連の回想。焼トタン屋根の向うに白雲の峰が湧き、崩れ壁のくぼみに夏草の花が戦いでいる。

これが三千年の伝統に輝く日本の国土の姿であらうか。

あくせくと一身の利に走り、狂うが如く一椀の食を求めてうごめく人々の群。これが天孫の末裔を誇った曾ての日本人の姿であらうか。

武力を奪はれ、国富を削られた日本の前途は暗く、家を焼かれ、食に飢える人々の気力は萎え疲れている。これでよいのであろうか。日本は果たしてどうなるのであろうか。……（中略）… われわれは熱望する。お互いの教養を励み、文化を進め、心のオアシスとなってわれわれを育くむ適当な場所と施設がほしい。郷土の交友和楽を培う文化センターとしての施設を心から求めている。みんなが気を合せて働いたり楽しんだりするための溜まり場の施設が必要だ。そんな施設が各自の生活の本拠である郷土、われわれの愛する町村に一つ宛できたらなんとすばらしいことであらう。」

* * *

しかも、この公民館構想は、当時日本を占領していた連合軍総司令部(GHQ/SCAP)の成人教育担当官・ネルソンとも、寺中らが綿密な交渉を重ねて出されたものであった。ネルソンは、後に次のように語っている。

「成人教育計画は、実施すべく「青写真化」されて日本人に手渡されたものではなかった。」「日本を民主化するために合衆国の成人教育制度を移植しようとする試みは、不適切に見えた。」「地域共同体的な生活が復興され得ない限り、自己を発見し、確立するという最も緊急な課題を適切に処理することはできない。」「公民館が行おうとしている「顔と顔を突き合わせる地域の人間関係」をつくることの重要性……。」「問題は……集権化の傾向を補正する、あるいは打ち破る新し

い顔と顔を突き合わせる地域の人間関係を発見し、確立することである。そのような人間関係を通して、一般市民は、より広い地域の重要な諸問題に精通することができる……。」「公民館は、また、日本の文化様式に調和するかのようには思われた。」(J. M. Nelson, *The Adult-Education Program in Occupied Japan, 1946-1950, Ph.D. Dissertation submitted to the Department of Education and the Faculty of the Graduate School of the University of Kansas, 1954*, および名古屋大学グループによる占領期社会教育研究・大田高輝の研究成果より)

戦前・戦中の町内会や隣組制度を、軍国主義への民衆の動員組織とみなして解散を命じていた占領軍も、公民館は人々が顔と顔を突き合わせ、自らの生活課題を議論し、郷土を住民自身が経営する民主的で自治的な新しい日本社会をつくるのに相応しいだけでなく、それが日本の文化様式にも調和するものとして、奨励したのであった。

* * *

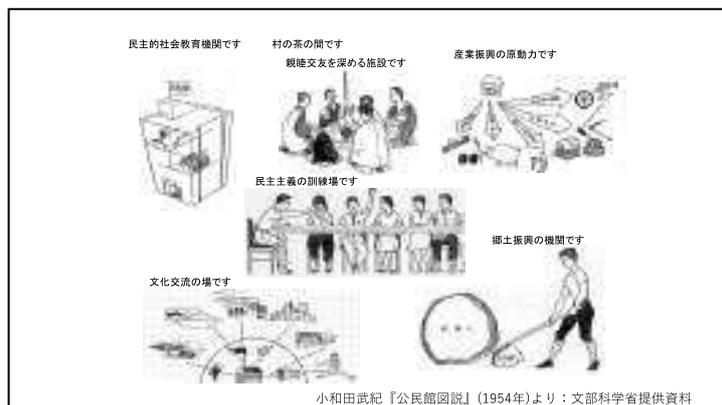
寺中は、公民館とは次のようなものだと述べている。

1. 公民館は社会教育機関である。
2. 公民館は社会娯楽機関である。
3. 公民館は町村自治振興の機関である。
4. 公民館は産業振興の機関である。
5. 公民館は新しい時代に処すべき青年の養成に最も関心を持つ機関である。

(前出、寺中作雄『公民館の建設-町村の新しい文化施設』)

さらに、これを受けて後年、国民の間に公民館を普及するために発行された小和田武紀『公民館図説』(岩崎書店、1954年)では、次のような図が掲出されている。

公民館は、当初、いわゆる教育機関としてではなく、地域の住民たちが自ら学び、生活課題を議論し、自らの郷土を自らの力で再建し、経営するための中核機関として位置づけられていたのである。このことは寺中の解説のみならず、文部次官通牒に次のように明記されていることから明らかであった。



「国民の教養を高めて、道徳的知識的並に政治的の水準を引上げ、または町村自治体に民主主義の実際的訓練を与えると共に科学思想を普及し平和産業を振興する基を築くことは、新日本建設の為に最も重要な課題と考えられる……。」この課題に応えるために「町村公民館の設置を奨励することになった……。」

「尚本件については内務省、大蔵省、商工省、農林省及厚生省に於て了解済である……。」

住民生活のさまざまな側面に対応した行政領域が地域社会で総合化された、中核的な機関として公民館が構想されていたことがわかる。

* * *

しかも、上記の『公民館図説』の図の中で、私が一番気になるのは、上段中央の「村のお茶の間です」とキャプションがつけられた絵である。ここには、囲炉裏を囲んで、祖父母から乳飲み子までもが描かれ、公民館が村の人々が顔と顔を突き合わせて懇談し、生活課題を話し合い、自ら村を経営していく基盤としての関係を築く場所であるだけでなく、次世代を育成し、その村を持続可能な村として経営していくための基盤でもあることがさりげなく描かれているのである。

この構想を受けて全国各地に公民館が設置されることとなるが、現飯田市の竜丘公民館の前身である旧竜丘村公民館の館報第1号には、この精神を汲んだ、次のような文章が掲げられている。

「公民館には特定の役者も演出家も用意されていない。舞台装置も演出家も何もかも一切合財皆がやるのだ。そして観客は一人も居ないのである。そういうのが公民館であろう。面白い芝居を観ようとするのではなく、よい芝居を演じようとするのである。そして一人ひとりが皆揃って千両役者や偉大な演出家になろうとするのである。公民館には観客は一人も居ないのである。」

(橋本玄進「みんなの公民館」『竜丘村公民館報』第1号、1948年3月1日。木下陸奥『地域と公民館-自治への憧憬』南信州新聞社出版局、2012年)

住民誰もがその役割を果たす場所として公民館はあり、そこには観客は一人もいない。旧竜丘村公民館はこう高らかに宣言しているが、それはまた公民館が単なる機関や施設ということではなく、むしろ生活そのものが公民館であるかのようにして経営されるべきものであることを暗に述べているのだといってよい。公民館で住民が親睦を深め、生活課題を議論し、自ら公民館を営み、次世代に関心を持ち、若者たちを育成することそのものが、自らその地域を自治的に治め、その地域を次世代へと引き継いでいくことにつながっている。つまり誰もがその地域の主役であり、アクターである、そういうまちづくりをしていく活動そのものであり、営みそのものであるもの、これが公民館だといっているように思われる。

そして、飯田市の公民館活動は、市民が「公民館をやる」というように、この精神を頑なに守り続け、市民一人ひとりが日常の生活を楽しみ、生活の中から新たな社会を紡ぎ出す活動そのものとして、つまり自らの生活を営み、地域を営み、地域を営むことそのものなのだといってよい。すべての市民一人ひとりが主役、アクターなのである。

* * *

私たちの学部ゼミが飯田市に調査実習にお世話になって6年になる。この間、毎年入れ替わる学生たちは、そのときそのときの飯田の公民館活動や市民の楽しそうな生活に触れる中で、とくに市民の日常の営みに魅せられ、それぞれの角度から、その秘密を解き明かそうと試みてきた。その成果が毎年の報告書として積み重なり、後に続こうとする者は、その報告書の蓄積の上に、自らの論理を組み立て、それまでの成果を乗り越えることが求められた。年々ハードルが高くなっていくといえよばよいだろうか。

そして、今年のゼミ生たちがとらえたのが「地域人教育」であった。「地域人教育」はまた、飯田の公民館が次世代の育成とともに持続可能なまちづくりの営みであることを十二分に示す新たな実践でもある。「地域人教育」は概念的には、地元の職業高校(県立高校)と飯田市という基礎自治体、さらに公民館などの地域密着型の組織がかかわって、高校生が地域社会を理解し、地域住民とともに地域課題を学び、その解決に向けて、様々な提案を行い、試行錯誤し、実践し、地域を担う主体として自己形成していく、その過程に地域のおとなたちがかわるという教育実践である。この実践では、過去、地域とは疎遠になると見なされていた高校生が、地域社会のまちづくりの主役となって活動するという、いわば逆転の発想とでもいべき考え方が活かされている。いまや、社会は、高校生が地域の住民とともに、新たな社会づくりの主役として活躍できるフィールドへと変化しているのであり、それを支えているのが、公民館主事であり、また「公民館をやる」住民なのである。

* * *

この「地域人教育」が「教育」であるのは、次のような事例が生まれているからだとは私は考えている。たとえば、高齢者が買い物難民化している地域があり、その問題解決のために、高校生が地元の人々と一緒になって調査し、その結果にもとづいて、リヤカー行商を始めたことがあった。高校生たちが商店から品物を仕入れ、リヤカーに積んで、売りに行くことで、買い物に困難を覚えている高齢者を支えようというのだ。この取り組みの過程で、高校生たちはあることに気づいていく。商品が売れ過ぎるのだ。高校生たちがリヤカーを引っ張って訪問すると、おじいさんやおばあさんが出てきては、必要のないものまで、買ってくれているように思えてならないというのだ。初めのうち、高齢者に感謝され、モノが売れることに舞い上がっていた高校生たちも、モノが売れ過ぎることにさすがに疑問を持ち始めたのだという。

そのうち、高校生たちは、高齢者は自分たちに会いたいがために、モノを買ってくれているのではないかと感じる。自分たちが来なくなってはさみしいから、必要のないものまで買ってくれているのではないかと、と感じ始める。改めて、モノが売れていく過程を思い返してみると、高齢者と自分たちの会話が弾む中で、モノが売れていたことに、彼らは気づき、高齢者は買い物に困っていたのではなくて、人間関係が希薄化していくことに寂しさを感じていたのではないかと、その結果が買い物にも不便するというところから思いついたのではないかと、思い至ることとなった。

人間関係が希薄化して、孤独を感じ、さみしく思うということなら、それは高齢者だけの問題ではなくて、自分たちにも当てはまる。だからこそ、おばあちゃんやおじいちゃんは、何の変哲もないペットボトルのお茶を「大事に飲むからね」といって、たくさん買ってくれるのではないかと。なぜなら、会話が弾むことで、嬉しくなって、その関係の中では、そのお茶はその関係の中で売られた／買われた特別なお茶になっているからではないか。こういうことに、高校生たちが気づいていくこととなった。

そしてそれは、自分が商業を学んでいることへの問い返しへとつながっていた。商業はモノを売り買いして、利益を得ることだと思っていたけれど、本当は、人と人とが結びつき、人間関係

が紡がれ、信頼感に基礎づけられた人と人との間にモノが売れていく、そしてそれが、社会をさらに豊かな関係で結びつけていく、そういうことが市場本来のあり方であり、商業の基本なのではないか。こういう、商業の本質にかかわることを、高校生が意識していくようになったのである。

このことはまた、商業とは人と社会との間に「信頼」を紡ぎ出していくことなのだという商業の核心に触れる学びでもあった。

* * *

「地域人教育」が行っているのは、この社会に「信頼」をつくりだし、社会を信用するに足りるものへと生み出していくこと、それを高校生という若い世代が担っていく実践なのだといえる。そしてそれはそのまま、既述の戦後公民館の構想と重なるものであり、また、飯田市民のいう「公民館をやる」ことそのものであるともいえる。未だ未知数であることを承知でいえば、この「地域人教育」は、曖昧で漠然とした社会をつくる活動ではなく、むしろ「公民館をやる」住民の営みと同様に、自分の日常生活そのものである、手に取ることができ、常に意識していないと忘れてしまいそうな、それほどまでに身近で、具体的な「小さな社会」をたくさんつくる活動なのだ、私は受けとめている。この「小さな社会」は、人々の想像力と信頼でできている。「地域人教育」はこれまでの「公民館をやる」生活を基礎にして、信頼で社会を覆う活動であるように見える。しかもそれは、その「小さな社会」をネットワークする活動ですらない。

むしろ、「小さな社会」をたくさんつくること、いわばドットをたくさん描くこと、そうすることで、まるで点描法が、一つひとつの点が役割を果たしつつ一つの大きな魅力的な絵を構成するように、多様な個性が自らを主張しながら飯田市を彩ること、そうしたことが志向されているように思われる。

* * *

こういう実践に学びながら、今年度のゼミの学生たちが試みたのは、飯田市民の生活の営みそのものを「地域人教育」として描こうとすることである。「地域人教育」を高校の教育実践に閉じ込めておくのではなく、むしろそれを可能にし、さらに高校生たちが活発にまちに出て活躍できる、そのことの基盤として飯田市民の社会教育があり、文化活動があり、「公民館をやる」営みがあるのであって、「地域人教育」はむしろ飯田市民が「公民館をやる」営みそのものとしてとらえることができるのではないか。いいかえれば、飯田市民の「公民館をやる」営みは、「地域人教育」としてとらえることができるのではないかというのが、彼らの見立てなのである。

本報告書は、彼らのこの見立てにしたがって、彼らがゼミで学び、また調査実習で得た知見を織り交ぜ、飯田市民の生き生きとした、楽しそうな、日常生活を描き出そうとしたものである。この試みが的を射たものであったかどうかは、読者とくに飯田市民の皆さんの判断におまかせしたいと思う。

しかし、この試みは、飯田の皆さんにお世話になり、その生き生きとした生活の営みに触れた学生たちが、その生活をとらえるために、新たな視点を提示し、市民の皆さんの生活をより豊か

に描き出そうとするものであることだけはお伝えしておきたいと思う。

本報告書が、お世話になった方々をはじめ、飯田市の皆さんに何らかのお役に立てるのであれば、ゼミの主宰者として、望外の喜びである。市民の皆さんの忌憚のないご意見をいただければと幸いに思う。

* * *

学生たちの度重なる訪問を快く受け入れて下さり、ご指導下さった市民の皆さま、魅力的な調査実習をアレンジして下さいました飯田市役所の関係者の方々に心から感謝を申し上げます。ありがとうございました。

—目次—

市民すべてがアクターのまち	i
調査実習の概要	1
報告書の構成	4
第一部 〈地域グループ〉	
はじめに	7
第1章 飯田市街地の地誌	8
1.1 はじめに	
1.2 飯田市街地の自然地理	
1.3 飯田市街地の歴史	
1.4 おわりに	
第2章 飯田遊郭史を取り巻くダイナミズムと現代「風俗営業」の分析視角提供の試み ...	21
2.1 はじめに—飯田の夜に誘われて	
2.2 議論の目的と背景	
2.3 先行研究の検討と方法	
2.4 遊郭という制度	
2.5 おわりに—課題と展望	
第3章 航空宇宙産業クラスター加入と「知の拠点」構想.....	32
3.1 はじめに	
3.2 飯田という地域と工業	
3.3 航空宇宙産業クラスター形成特区とは	
3.4 「知の拠点」整備構想案と航空産業宇宙クラスター加入の狙い	
3.5 飯田地域の変化と今後の展望	
3.6 終わりに	
第4章 持続可能なコミュニティのためにできること —観音寺市との比較—	47
4.1 はじめに～飯田での気づき～	
4.2 飯田市での取り組み	
4.3 観音寺市での取り組み	
4.4 各市での地域活性モデル	
4.5 おわりに	

第5章 「飯田型公民館」と「学習する地域」	57
5.1 はじめに	
5.2 飯田市と尼崎市の関係の発端	
5.3 飯田市による「解体新書塾」の取り組み	
5.4 尼崎市「みんなのサマーセミナー」と「みんなの尼崎大学」	
5.5 おわりに—飯田・尼崎両市の「学びあう」未来へ向けて—	
第6章 飯田におけるイベント活動の検証	70
6.1 はじめに	
6.2 研究方針	
6.3 事例①：「華齢なる音楽祭」のケース	
6.4 事例②：公民館で行われるイベントのケース	
6.5 考察	
6.6 おわりに	
おわりに	79
第二部 〈人グループ〉	
はじめに	83
第1章 飯田市社会教育関連活動従事者の生活観の分析	84
1.1 はじめに	
1.2 調査目的	
1.3 インタビュー概要と結果	
1.4 考察	
1.5 おわりに	
第2章 華齢なる音楽祭—多世代交流の機会に関する考察—	98
2.1 はじめに	
2.2 「多世代交流」	
2.3 「華齢なる音楽祭」の考察	
2.4 仕掛け：ものさしの提示	
2.5 仕掛け：協働の仕組み	
2.6 おわりに	
第3章 飯田市美術博物館と「人」	105
3.1 はじめに	
3.2 調査方法	

3.3 地域博物館について	
3.4 美術博物館に関わる飯田市住民の傾向	
3.5 美術博物館の取り組み	
3.6 美術博物館を中心とした人の関係性	
3.7 子どもとの関係性	
3.8 今後の目標	
3.9 おわりに	
第4章 博学連携	120
4.1 はじめに～飯田市美術博物館と博学連携について～	
4.2 飯田市美術博物館における博学連携への取り組みとその問題点	
4.3 他の地域の博学連携成功事例	
4.4 博学連携促進のための努力	
4.5 博学連携方法の提案	
4.6 おわりに	
おわりに	126
第三部 〈教育グループ〉	
はじめに	129
第1章 子どもたちから見た通学合宿	130
1.1 はじめに	
1.2 これまでの報告書の内容—先行研究の検討—	
1.3 本章の目的	
1.4 川路地区について	
1.5 川路地区通学合宿の概要	
1.6 調査概要	
1.7 子どもたちから見た「通学合宿」	
1.8 考察	
1.9 川路通学合宿から考える地域人教育	
1.10 おわりに	
第2章 飯田 OIDE 長姫高等学校での地域人教育の効果について —問題解決能力に焦点を当てて—	136
2.1 はじめに	
2.2 先行研究・基礎知識	
2.3 問題意識・目的	

2.4 調査の内容	
2.5 調査結果	
2.6 考察	
2.7 結びに代えて	
第3章 いいだ人形劇フェスタと地域人教育	148
3.1 はじめに	
3.2 調査概要	
3.3 飯田の人形劇文化の概要	
3.4 いいだ人形劇フェスタの理念や目標	
3.5 いいだ人形劇フェスタの変遷	
3.6 いいだ人形劇フェスタのこれから	
3.7 地域人教育への示唆	
3.8 おわりに	
おわりに	158
参加者の感想	159
地域の文化を育むということ：感想に代えて	164
おわりに	170
謝辞	172
執筆者一覧	173

調査実習の概要

福森 敏也・松本 奈々子

2016年度の飯田フィールドスタディは、2016年9月21日～24日の3泊4日にわたって実施された。参加者は、牧野教授、李准教授、新藤准教授、松山助教、大学院生5名、学部生13名の、計22名であった。

実習初日の21日には、まず飯田人形劇場にてオリエンテーションがあり、4日間の行程や注意事項などを聞いた。そして、引き続き同会場にて、牧野光朗市長による講義が行われた。学生はあらかじめ市長の著書『円卓の地域主義-共創の場づくりから生まれる善い地域とは-』を読んで参加していたこともあり、市長からの問いの投げかけに対して、学生の側からも活発に意見が挙げられた。また、東京大学の学生とともに、飯田 OIDE 長姫高校の1年生も市長の講義を聴講しており、高校生の意見も混じってさらに活発な議論の場となった。市長の講義が終わると、バスで千代公民館へと移動し、農家民泊の宿泊先農家との対面式があった。ここでいくつかのグループに分かれ、それぞれ農家のお宅へと移動した。農家の方々の話に花が咲き、また千代でとれた美味しい野菜や果物をご馳走になるなどして、楽しい一晚を過ごした。

2日目の朝は再び千代公民館へと集合し、農家の方々とのお別れ式が行われた。お世話になった農家の方々とは名残惜しい別れとなったが、一方で別々のお宅に宿泊した学生どうしの間では、各々の宿泊先でどんな楽しい体験をしたかという話で盛り上がった。午前中はそのまま千代公民館にて、飯田市公民館副館長の木下氏より、飯田市の公民館および社会教育行政の取り組みについて話を伺った。その後ごんべえ邑へと移動し、五平餅・ソーセージ作り体験を行った。五平餅は一部農家にて民泊の際にふるまわれていた場合もあったようだが、同じ五平餅でも作り方や味付けが違っていたりして、興味深く食べている学生も見受けられた。午後は引き続きごんべえ邑にて万古溪谷沢登りツアーのお話を伺い、そのあと川路公民館に移動して川路通学合宿の取り組みについて伺った。公民館が実際に行っている2つの事例を聞いたことにより、午前中の活動枠組みに関する講義が、より具体性を伴った形で学生たちに受け止められたものと思う。この日の最後には、川本喜八郎人形劇美術館にて映画鑑賞と展示物の見学とを行い、飯田に根付いた文化に触れて2日目を終えることとなった。

3日目の朝は、飯田市公民館にて、飯田人形劇センター理事長の高松和子さんに飯田市の人形劇を軸にしたまちづくりについてお話を伺った。その後マイクロバスで飯田 OIDE 長姫高校に移動し、地域人教育の取り組みについて学んだ。まず、長姫高校の教室で地域人教育の概要を浅井先生、飯田市公民館の小島主事から伺い、さらに高校生は自らの地域での活動についての発表を聞いた。その後、大学生は数人ごとに分かれて、実際の地域人教育の現場に参加させていただいた。公民館、神社、街の商店街、他地域との連携など飯田の街のさまざまな拠点が学びの現場となろうとしているのを体験した。長姫高校のプログラムの次は飯田高校に向かい、飯田高校生と

交流会をおこなった。3日目の最後のプログラムは、飯田市のライブハウス CANVAS にて桑原利彦さんが活動しているりんご並木ネットワークや音楽祭についてお話を伺った。お話の後は、音楽ライブが引き続き行われ、懇親会では熱い想いを交わす姿が見られた。

最終日の朝は、飯田市公民館で、3日目にお話を伺った地域人教育の Sturdyegg のメンバーの高校生が行っている活動内容についてお話を伺った。空き家の有効利用、過疎地域の活性化、高校生の投票、地域イベント、地域産業など多種多様なテーマと接近の方法で高校生が地域活動の場を自ら切り開く姿が伺えた。その後、飯田市の美術博物館にて、デジタルプラネタリウムを鑑賞した後、博物館の事業説明とバックヤードの見学を美術博物館の学芸員の方が行った。

以上が、2016年度飯田実習の概要である。行政や学校と連携しながら、地域をフィールドに行われている多様な取り組みについて、現場の第一線で活躍する方々と出会い、お話を伺うことができたことは、参加者一人一人の今後の糧となるだろう。実習後のゼミでは、まず各自が感じたことを共有し、その後関心をより深めるため、追加調査を行った。後に続く本章はその学びの成果が記されている。

ここで改めて、実習、及び追加実習において、関わってくださったすべての方々にお礼を申し上げます。ありがとうございました。



体験活動プログラム2016 スケジュール

参加者:男性10名 女性10名 教員4名 計24名

日	日程			内容	講師等	会場
	開始時間	終了時間	時間(分)			
9月21日 (水)	13:00	13:30	30	受付: 飯田人形劇場		
	13:30	13:50	20	〇オリエンテーション	あいさつ: 牧野篤教授 日程説明: 企画課	飯田人形劇場
	13:50	14:00	10	休憩 ※飯田OIDE長姫高校 入場		
	14:00	16:00	120	(総論1) 1 市長講義 〇円卓の地域主義 ―共創の場づくりから生まれる善い地域とは―	牧野 光朗 (飯田市長)	飯田人形劇場
	16:00	16:50	50	移動: マイクロバスにて「飯田人形劇場」から「千代山村広場」		
	16:50	17:00	10	農家民泊対面式		千代山村広場
	17:00			(体験1) 2 農家民泊 〇宿泊先農家との交流	◆農家民泊	
9月22日 (木) 祝日	9:00			移動: 「各農家」から「千代公民館」に集合		
	9:00	9:15	15	お別れの式		
	9:15	11:25	130	(総論2) 3 飯田市民館・飯田市の社会教育行政の取組 〇飯田市の公民館や社会教育行政の取組を学ぶ	飯田市教育委員会 生涯学習スポーツ課・飯田市民館	千代公民館
	11:25	11:40	15	移動: 「千代公民館」から「ごんべえ色」		
	11:40	14:00	140	(体験2) 4 五平餅づくり体験&昼食	ごんべえ色	ごんべえ色
	14:00	15:10	70	(ケーススタディ1) 5 公民館の活動について ① 〇地区公民館の実践事例①	千代公民館 万石溪谷沢登りツアーの取組	ごんべえ色
	15:10	15:40	30	移動: マイクロバスにて「ごんべえ色」から「川路公民館」		
	15:40	16:50	70	(ケーススタディ2) 6 公民館の活動について ② 〇地区公民館の実践事例②	川路公民館 通学合宿の取組	川路公民館
	16:50	17:20		移動: マイクロバスにて「川路公民館」から「川本人形美術館」		
	17:20	18:30		(ケーススタディ3) 7 川本喜八郎人形美術館 視察	川本人形美術館スタッフ	川本喜八郎 人形美術館
			夕食 (各自) 移動: 徒歩にてシルクホテル チェックイン 宿泊	◆シルクホテル		
9月23日 (金)	8:45	9:00	15	移動: 徒歩にて「シルクホテル」から「飯田市民館」		
	9:00	10:20	80	(ケーススタディ4) 8 人形劇を通じたひとづくり、まちづくり	高松 和子 氏 (いいだ人形劇センター理事長)	飯田市民館 2階 展示室
	10:20	11:50	90	休憩・昼食 (11時50分までに飯田市民館に集合)		
	11:50	12:15	25	移動: マイクロバスにて「飯田市民館」から「飯田OIDE長姫高校」		
	12:15	13:30	75	(総論3) 9 地域人教育の取組について ① 〇飯田OIDE長姫高校・飯田市民館からの説明	飯田OIDE長姫高校 浅井教諭 飯田市民館 小島主事 ※地域人教育4時間にて実施	飯田OIDE長姫 高等学校
	13:30	15:30	120	(ケーススタディ5) 10 地域人教育の取組について ② 〇グループワーク (公民館主事・高校生・東大生・院生)	飯田OIDE長姫高校 浅井教授ほか 飯田市民館主事会 地域人教育PJメンバー ※地域人教育5~6時間にて実施 途中休憩あり	飯田OIDE長姫 高等学校
	15:30	16:00	30	移動: マイクロバスにて「飯田OIDE長姫高校」から「飯田高校」		
	16:00	17:15	75	(ケーススタディ6) 11 飯田高校生との交流	長野県立飯田高等学校学生	飯田高等学校
	17:15	17:30	15	移動: 「飯田高校」からりんご並木		
	17:30	18:45	75	夕食 (各自)		
	18:45	20:00	75	(ケーススタディ7) 12 まちづくりの新しいカタチ 引き継ぎ、懇親会 (20時から)	桑原 利彦 氏 (りんご並木ネットワークコーディネーター)	CANVAS
	22:00		宿泊	◆シルクホテル		
9月24日 (土)	8:45	9:00	15	移動: 徒歩にて「シルクホテル」から「飯田市民館」		
	9:00	10:20	80	(ケーススタディ8) 13 地域人教育から更なる展開 学校教育の枠を越えた取組	スタディエッグのメンバーなど	飯田市民館 2階 展示室
	10:20	11:00	40	会場片づけ・移動 (飯田市民館から飯田市美術館)		
	11:00	12:30	90	(学芸員資格取得) 14 飯田市美術館の取組 〇デジタルプラネタリウム鑑賞 〇飯田市美術館の事業説明、施設見学など	飯田市美術館学芸員	飯田市美術館
	12:30			終了・解散		

報告書の構成

鯛 仁和

本報告書は3部構成からなっている。

フィールドスタディを終えた後の授業で、それぞれの感想やもっと調べたいと思ったことを出し合い、意見交換をしていく中で、フィールドスタディの中の大きなウェイトを占めていた「地域人教育」について、〈地域〉〈人〉〈教育〉と3つに分け、それぞれに関心を持ったことを調べていく中で、〈地域〉〈人〉〈教育〉が相互的につながりあい、OIDE 長姫高校で行なわれている「地域人教育」をより重層的に浮かび上がらせることができるのではないかと考えるに至った。

第1部〈地域〉では、飯田というまちが歴史的にどのような土地であるのか。どのような風土を持った地域であるのかについて記述している。

第2部〈人〉では、第1部を踏まえて、その飯田という土地にどのような人が住み、彼らがどのような活動をしているのかに注目している。人々はどのように活動し、どのような想いを持っているのか。それらが飯田というまちをどのようにかたち作っているのかについて記述している。

第3部〈教育〉では、川路地区の通学合宿や地域人教育など具体的な事例を主に調査し、様々な教育のあり方や今後の可能性について検討している。

以上のような構成で、飯田という〈地域〉を土台にして、〈人〉が様々な活動を繰り広げ、その中で行われる〈教育〉というものについて書かれた報告書となっている。

第 I 部 〈地域グループ〉

執筆者：帆玉，日隈，寺田，吉田，福森，増田

はじめに

増田 健也

第I部では、飯田で行われている「地域人教育」の土壌をなす「地域」の特性について着目し研究していく。「地域人教育」をはじめとする飯田ならではの人の営み・教育のかたちについて明らかにするためには、その教育が提唱され実践された飯田という地域の特徴を明らかにすることが不可欠だと考えるからである。

この「地域班」の報告では、1章で地理的歴史的沿革を明らかにし、2章でその歴史が形成した文化・産業の基盤について述べ、3・4章で地域の産業についてより詳細な分析を加える。そして5章および6章では、こうした地域で形成され一方で地域を彩ってきた文化について掘り下げていく。このように「地域」の成り立ちと発展のありようを、他の地域との比較検討を交えながら分析し、飯田の特性を浮き彫りにしていくこととする。

第 1 章 飯田市街地の地誌

帆玉 光輝

1.1 はじめに

1.1.1 主題設定

私は昨夏、調査実習で飯田市街地を歩いているとき、ふと道幅の広さが気になった。交通量の多い道ではないが、中央分離帯が存在しており歩道も存在したため、異様に広く感じたのである。その理由は、後日、市役所の方から以下のようなお話をいただいたことですぐに分かった。

“飯田市街地は 1947 年の大火によって、その多くが燃えました。そこから復興する際、飯田市街地の街路は防火線となるために拡張されたんです。”

現在の飯田市街地には、近世以来の飯田城下町として残っている面の他に大火以後に復興した計画都市の面がある。そして、その両面が現在の飯田市におけるコミュニティ形成に大きく寄与しているように私には感じられたのである。

そこで、私は飯田市、とりわけ現在の飯田市街地の地誌を調べることにした。飯田市街地の地誌的特異性を明らかにすることで、本報告書に掲載されている飯田市特有の活動の基盤を明らかにできるという考えから至った主題設定である。

1.1.2 本章の構成

本章では、飯田市街地の地誌、その中でも文化的側面は他章に掲載されているため、地理的側面と歴史的側面について記述する。2 節では飯田市街地の地形・気候などの自然地理について整理し、3 節では飯田市街地が城下町として発達した近世以降の歴史を「街」というマクロな視点から時系列で記述していく。

1.2 飯田市街地の自然地理

1.2.1 地理的位置

飯田市は長野県南部に位置し、その中でも市街地は風越山（1535m）を背後にした大地の上であり、「丘の上」からは東方向に伊那盆地の中央部を流れる天竜川を見下ろすことができる。（図表 I-1-1・図表 I-1-2 参考）



図表 I -1-1 飯田広域図 (『地理院地図』¹より作成)



図表 I -1-2 飯田市街地図 (『地理院地図』¹より作成)

¹ 国土地理院 『地理院地図 (電子国土 Web)』 入手先 URL : <https://maps.gsi.go.jp/index.html>
(アクセス日:2017-1-28)

1.2.2 地形

標高は 450m～550m くらいである。そのなかでも飯田城址は天竜川沿いの下段から見ると小山のような高まりの上にあるが、そのような地形が形成された背景には伊那谷中央断層帯がある。伊那谷中央断層帯とは概ね天竜川に沿って盆地中央部北東—南西方向に走る活断層²で、この断層の活動によって古い扇状地が持ち上げられ、現在のような丘陵ができた。さらに丘陵の下方が松川や野底川によって浸食されたために 30～50 度の急傾斜を持つ段丘崖が形成された。急傾斜は崩れやすいため、崩壊を防止するために様々な安定化工事がなされている。この丘陵の上に飯田城が建てられ、それ以後、飯田城より北西方向に街が拡大していったため、飯田市街地、その中でも旧市五地区（橋北・橋南・羽場・丸山・東野）は「丘の上」と呼ばれる。

また土地利用もこの地形を生かしたものとなっている。「丘の上」の古い扇状地は段丘化しており地下水位が低いため水利条件は良くないが、松川や野底川から御用水を引き深井戸を掘るなどを行うことで城下町が出来た。一方、松川や野底川沿いは氾濫原や低位段丘が広がっており主に水田に利用されてきた。しかし、近年はダムや堤防などの河川整備によって氾濫が少なくなったため、氾濫原でも宅地化が進んでいる。

1.2.3 気候

太平洋に近い内陸地にあるため、内陸性気候と太平洋側気候とを併せ持っている。一年を通して気温差が大きく、8月の平均最高気温が 30 度を越し、しばしば 35 度を超す猛暑日となる一方、1月の平均最低気温はマイナス 3.8 度まで下がり、時にはマイナス 10 度以下まで下がることもある。しかし、寒冷的な長野県の中では温暖な地域に分類される。また、降水量が少なく、年間平均降水量は 1500 ミリほどである。冬季の降雪量も長野県内の他地域と比較すると少なめだが、南岸低気圧の影響で時に激しい降雪を観測することがある。東西を山に囲まれた盆地のため風は弱い、春にはフェーン現象が起り乾燥した強い西風が吹く。

1.3 飯田市街地の歴史

1.3.1 近世飯田城主の推移

近世の飯田城主を以下に時系列順に並べて記す。

1590～93 毛利秀頼

1593～1600 京極高知（秀頼の女婿）（10 万石）

1601～13 小笠原氏（5 万石）

1613～17 幕領（幕府の直轄地）

1617～72 脇坂氏（5 万 5 千石）

1672～ 堀氏（2 万石）

² 地震調査研究推進本部 『伊那谷断層帯』 入手先 URL : http://www.jishin.go.jp/main/yosokuhizu/katsudanso/f051_inadani.htm（アクセス日 2017-1-28）

1.3.2 飯田十八町の形成

飯田城は 1590 年に毛利秀頼が入部するまで現在より小さい規模のものだった。それまでの城は山伏丸・本丸・二の丸までで追手門も水の手御門までだったことが伝わっている。(図 1-1-3)そこで、1590 年に入部した毛利秀頼は三の丸を設け、追手門も三の丸の外に西向けに設置し直した。そして、城外に既に建てられていた伊勢町・番匠町に続き、以下の町屋を造設した。

- ・本町一丁目・二丁目
- ・池田町（池を埋め立てて造った）
- ・伊勢町二丁目
- ・十王堂町（本町二丁目の西側にあった十王堂を移動しその跡に造られた）

また、伊勢町の北裏にあった薬師堂を移し、その跡に城外に散在していた家中屋敷を集めた。そして、その「丘の上」から上方へ向かう経路として南方に箕瀬町を建てた他、北側も繁栄させるために伊那街道を設置し直し宿町が建てられた。

秀頼の死後入部した京極高知は伊那軍 10 万石の領主で、その支配の拠点を飯田城に置いた。京極支配下での城下町造営は以下のように進展した。

- ・知久町一丁目・二丁目
- ・田町（田を埋めて造った）
- ・鍛冶町（鍛冶が多く居住していた）
- ・大横町
- ・城下の町屋を基盤状に整備
- ・家中屋敷を追手門の外側にも建設

→城下町全体を惣堀で囲む

- ・十王堂を箕瀬枡形に移設

→箕瀬枡形周辺は町屋となる

また、1590 年に松尾（飯田城から 2.4 km ほど南東に行った地域）の小笠原氏が武蔵国本庄（現埼玉県本庄市）へ移封となったため、残された松尾の町民が願い出て、伊勢町二丁目の西側にあった御手洗池を埋め立て、町屋を建設した。これが松尾町である。その時松尾にあった峯高寺が移転したことで、峯高寺町も立てられた。さらに谷川筋周辺もそれぞれ以下のような開発が進む。

南側：家中屋敷を建設

北側：南北に二丁分の町屋（名残町）を建設

→その東側を家中屋敷地に

脇坂氏が入部した 1617 年の頃には人馬の流れが京都から江戸へと変化していた。そのため、飯田城下から江戸への出入り口となっていた名残町には伝馬負担が課されることとなり、名残町は「伝馬町」へと改称した。また、1648 年惣堀の外側に町屋が三丁分建てられ桜町となった。

以上が飯田「十八町」の成り立ちである。この「十八町」をより詳しく見ていく。「十八町」は

「城下町屋」と「宿」の二つに区分された。

城下町屋とは、飯田城の西側に造設された以下の十三の町のことである。

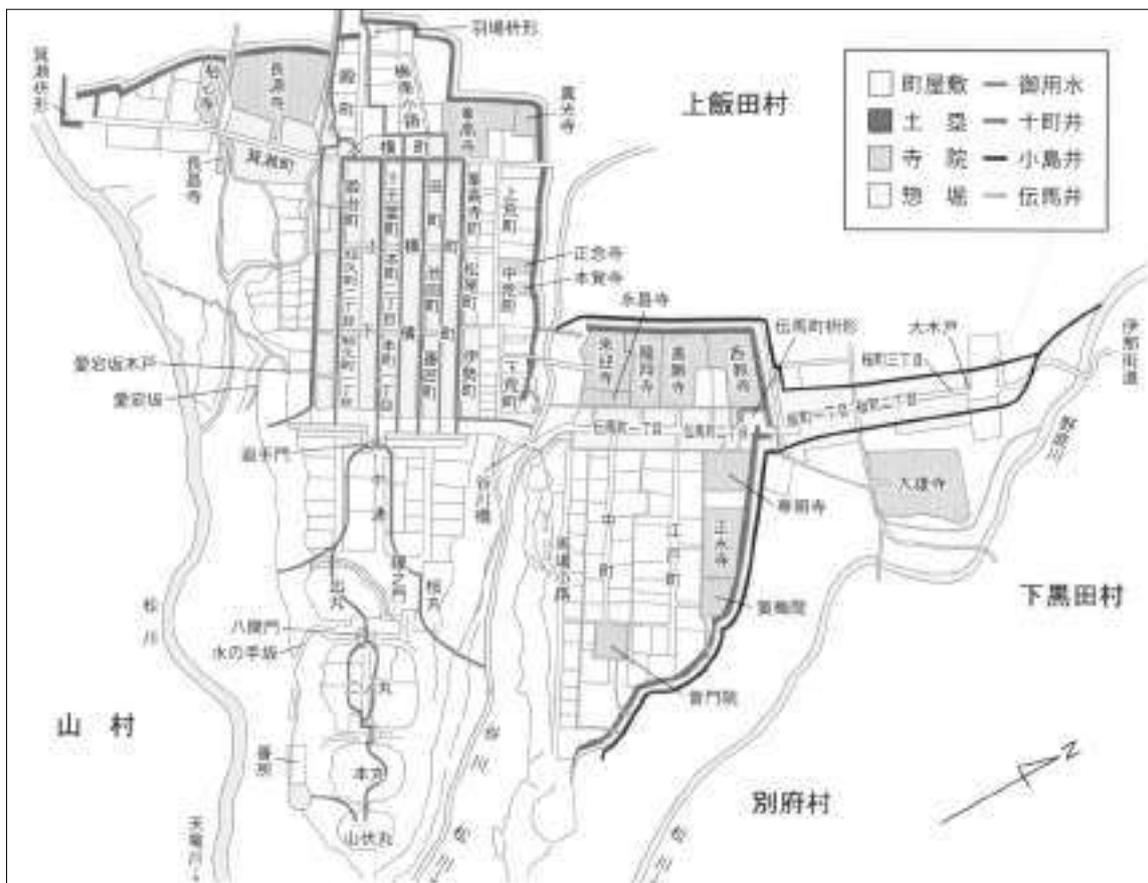
伊勢町（松尾町一丁目）・松尾町（松尾町二丁目）・峯高寺町（松尾町三丁目）・番匠町（現通り町一丁目）・池田町（現通り町二丁目）・田町（現通り町三丁目）・本町一丁目・本町二丁目・十王堂町（本町三丁目）・知久町一丁目・知久町二丁目・鍛冶町（知久町三丁目）・大横町

城下町屋の区域は、東西に延びる4つの通り（松尾町通り・池田町通り・本町通り・知久町通り）と南北の横町（堀端通り・下横町・上横町・大横町）で区切るように造設されている。これらの十三町は飯田城下の町人として成立した。

また、堀端通りから谷川を越え北へ向かう伊那街道の両側には以下の宿場町が造られた。

伝馬町一丁目～二丁目・桜町一丁目～三丁目

これらの五町は飯田の交通機能を支えた。



図表 I-1-3 近世の飯田城下町（飯田・上飯田の歴史 上巻より引用）

1.3.3 飯田城下町の繁栄

1672年脇坂氏と代って堀氏が飯田城に入城した。この時の藩主堀親昌は江戸屋敷にいた嫡子・

親貞に対して送った書状の中で、当時の城下町に関して以下の3つの指摘をしている。

(1) 信濃の南端にある飯田は東海道から信州への入り口となっており、三河や遠江の各地から物資が運び込まれる重要な信州の流通の要となっている。

(2) 前所領の烏山と比較して飯田城下は大変賑わっている。烏山城下では月数回だった定期市が飯田ではほぼ毎日のように城下十三町のどこかで順番に開かれていた。

(3) 2万石の領主である堀氏にとって、5万5千石の脇坂氏からそのまま引き継いだ飯田城下町は規模が大きすぎる。烏山から移った家中全員に侍屋敷を配分し足軽たちを住まわせても、まだ空き家が残っていた。さらに、城下町の町人たちが、領主が小規模化してしまったことで飯田が今後衰退するのではないかと危惧している。

これらの指摘から幕藩体制下の飯田城下町が非常に繁栄していたことが分かる。

1.3.4 扇町の産物会所

飯田城下には十八町以外の町々が含まれていた。そのなかでも、近世後期に知久町通りの南側に発達する扇町について本項では記述する。扇町は、1947年の大火以降そのほとんどが扇町公園・飯田市立動物園となっている。

江戸時代の扇町の様子を描いた扇町絵図を読み取ると、扇町二丁目南側には「産物会所」があったこと分かる。産物会所とは「江戸時代、幕府・諸大名が領内に特産物の産出を奨励し、あるいは専売を目的として設けた機関」（広辞苑 第六版）を指す。扇町の産物会所の場合では、飯田藩が一部の商人たちに紙や元結などの取り扱いを独占させ、その権益を保護することで税を集める機関であったことが伝えられている。幕末、会所の周辺には会所の運営やそこと密接な商人たちが集まっていた。すなわち、幕末の扇町は産物会所を中心として、紙や元結をはじめとする飯田藩の特産物を独占的に取り扱う問屋や商人の集まる街だったようだ。

1.3.5 近代飯田の行政沿革

ここからは明治維新後の飯田市街地について記述する。その前に近代における飯田の行政上の沿革を以下にまとめた。

1871年 飯田藩→飯田県（廃藩置県）

筑摩県に合併

76年 長野県に統合

89年 飯田→長野県下伊那郡飯田町（市政・町村制施行）

1937年 飯田町と上飯田町が合併して飯田市に

1.3.6 明治初期の行政転換

1871年7月廃藩置県によって、飯田藩は飯田県となる。版籍奉還で知事となった堀親広は東京への移住を命じられ、前藩主の堀親義は飯田城を出て松尾に隠棲することとなる。同年11月には

筑摩県が設置され飯田には県の出張所が置かれた。そして、1878年に地方三新法が施行されると、翌年下伊那郡の郡役所が設置された。これは交通・商業の要所である飯田が下伊那の政治の中心となったことを意味し、飯田にはこのほかにも多くの機能が集中した。

1.3.7 協同社の設立

明治初期、旧藩士は厳しい立場に追い込まれた。1870年藩政改革によって藩士の家禄が削減されたことに加えて、廃藩置県によって飯田藩が消滅した後、旧藩士が家禄を受け取ることに對する批判が強くなっていったために、政府が家禄の奉還を促すようになったのである。そして、ついに1876年には金禄公債証書発行条例が交付され、旧藩士は自立する必要に迫られた。

そこで、旧藩士は1871年8月飯田城の外郭・城門・堀などが撤去された跡地の開墾を願い出て、9月から飯田城の堀の埋め立て・開墾を始めた。

また、1874年5月旧藩士180余名が集会し、士族結社である協同社が設立された。協同社は主として旧城内の開墾地に関する財産管理のために発足したが、その後飯田の士族たちの中核となる。協同社は旧城地・武家地などに土地を所有しており、それを運営することで飯田町の発展に寄与していった。

1.3.8 明治の都市計画

明治に入り、上述の協同社によって新たに以下のような都市計画が展開された。

(1) 堀の埋め立て

1871年に旧外堀が埋め立てられたことで堀端通りと追手門に面した道との間に新たな土地が生まれた。そこで、協同社はその土地を間口4～6間、奥行き14～18間に分割した。ここで特筆すべきことが2点ある。

1. この寸法は近世の飯田町人地の敷地寸法とほぼ等しい。
2. 近世の飯田城下町では、大横町を除き、^{たて}竪町（東西方向の町）が基本だったが、この土地では横町の構造となっている。すなわち、間口が一部の例外を除き堀端通りを向いていた。

また、埋め立てで接続された、城内（三の丸）の道と飯田十三町の町割りとの間に連続性を持たせるような街路構造となっている。（現在の飯田市街地図を見ると、東西方向に走る道が銀座通りを境にわずかに方向転換していることが分かる）

これらによって旧外堀の埋め立て地は市街化し、それまで寂しかった堀端通りは飯田随一の繁華街と変容した。この街路は後に銀座通りと呼ばれるようになった。

(2) 谷川橋の架け替え

谷川橋とは現在のめがね橋（長姫橋）の場所にあった木橋で、橋北五町と橋南十三町を結ぶ交通の要所であった。しかし、水面に近い低位置に架けられ、両岸が急な坂道となっていた。すなわち、飯田城の重要な防御機能を果たしていたのである。1878年、交通に不都合だった谷川橋の

架け替え工事が行われた。この時、工事に必要な大量の石を士族が飯田城郭の石垣から提供したため、この橋は城の別名から長姫橋と名付けられた。この長姫橋のおかげで谷川を挟んで南北に分断していた飯田市街地の連続性は高まった。

(3) 水の手新道開削

旧水の手道は城内の出丸と二の丸の間から崖下に下りる急な坂道であった。それに代わる水の手新道は三の丸付近から下り旧水の手道と接続するように開削された。この新道の開削により、谷川橋から旧城内を通って下松川橋まで簡単にアクセスできるようになり、谷川以北を含め松川を挟んだ南北の分断も解消された。また、この新たな道により、長姫橋はより重要な交通の要所となり、元々堀や刑場に近く寂しい場所だった旧谷川橋付近は、「市街第一等の処」として変容していく。

1.3.9 明治期の旧飯田城内

これらの都市計画を経て飯田市街地は変容したが、とりわけ、旧飯田城内は大きく変容したため、以下に整理しておく。

- ・本丸跡→長姫神社
- ・二の丸・出丸跡南側→飯田中学校・飯田小学校
- ・二の丸・出丸跡北側→下伊那郡役所・飯田警察署・連隊区司令部・地方裁判所
- ・追手町・常盤町・主税町→料亭・芸者置屋などの花街

1.3.10 大平街道の改修

大平街道は飯田と木曾谷とを結ぶ峠道である。その改修工事は 1899 年から 1904 年にわたって行われた規模の大きいものだった。その背景には、1894 年の中央線誘致失敗がある。これによって中央線は伊那谷ではなく木曾谷に通ることとなり、飯田は中央線に連絡する道路の確保が急務となったのである。この改修と三留野駅（現南木曾駅）の開設によって、飯田周辺の流通ルートは飯田～三州街道～辰野～東京の他に飯田～大平街道～三留野駅～中央線～名古屋も一般的となった。これと前後して飯田周辺では道路網が次々と整備され、交通網の近代化が図られた。

1.3.11 鉄道の開通

1894 年の中央線誘致失敗以後も飯田では鉄道敷設への動きが展開されていた。そして、1919 年飯田駅の位置が決定し、ついに 1923 年伊那電気鉄道（伊那電）が飯田駅まで延伸され、辰野まで鉄道で連絡できるようになった。これに伴いさらに以下のような道路整備がすすめられた。

- (1) 「駅前横貫道路」...駅前を横切り、大平街道に接続
- (2) 箕瀬町付近の新道...白山通りなど
- (3) 谷川線...現国道 151 号線の一部（始点：現銀座通り中央交差点 終点：鼎村）

これら交通網の整備により、上飯田村へ東野地区・飯田駅周辺・箕瀬周辺の三方向から市街地が拡大し人口が急増した。

しかし、飯田～辰野間のみでは不十分と考えた下伊那の人々から、豊橋～辰野まで各私鉄を直通させる構想が挙がる。すなわち、既に存在していた豊川鉄道（豊橋～長篠）・鳳来寺鉄道（長篠～三河川合）・伊那電（天竜峡～飯田～辰野）に加えて、三信鉄道（三河川合～天竜峡）を設立することで豊橋～飯田～辰野を直通させるという構想である。この構想は資金繰りや建設工事で難航したものの1937年に実現する。そして戦時下の1943年、兵員・物資輸送効率化を進めるために上記の私鉄4社は国に買収され、国鉄飯田線となった。

また、1920年代には自動車輸送も盛んに行われるようになり、まず南信自動車飯田町を拠点として各方面へバス路線を開設した他、飯田～三留野間でも大平自動車株式会社が運転を開始した。他にも続々と複数の会社がバス事業に参入し、飯田のバス路線網は拡充されていったが、1930年に昭和恐慌が起これると、小規模だったバス事業者は次々と合併することとなった。

1.3.12 飯田大火とその復興

戦後間もない1947年4月20日飯田市街地は未曾有の大火に襲われる。現在の扇町公園周辺で出火した火は乾燥した強い西風（フェーン現象によるもの）に煽られ、市街地の約48万㎡に延焼した。³終戦直後に市街地の多くが焼失した飯田市では早速図1-1-4のような都市復興計画が実行される。ここで着目すべきは次の3点である。

- ・街路の全体的な拡張
 - ・市街地を走る十字の幹線（並木通りと谷川緑地帯）
- ←防火帯としての機能
- ・扇町公園
- ←出火点の緑地化

この復興計画には市民の協力が不可欠だった。道路の拡幅に伴い、道沿いの商店は店舗の縮小を余儀なくされたからである。しかし、市民はその負担を受け入れ復興計画に協力した。

さらに市民の協力は続く。道幅を広くしたことで市街地はやや殺風景となったが、1952年、ここにりんご並木を造成する計画が飯田東中学校で挙がった。中学校の学友会を中心に具体化されていった計画は、はじめ財政面の不安や実を心無い人にとられてしまうのではないかという心配から大人に納得されなかったが、中学生の熱意によって徐々に理解が広まっていき、1953年11月ついに植樹が始まった。そして完成したりんご並木は現在も飯田東中学校の生徒と市民によって手入れがなされており、飯田市のシンボルとなっている。

また、1953年には扇町公園内に飯田市営動物園が開園し、大火の出火点は、復興計画による緑

³ 総務省消防庁 『平成26年度消防白書 附属資料10 昭和21年以降の大火記録』 入手先
URL : <https://www.fdma.go.jp/html/hakusho/h16/h16/html/16s10000.html> (アクセス日 2017-1-28)

地化を経て子どもたちの娯楽施設へと変容した。



図表 I -1-4 飯田市街地復興計画図（飯田・上飯田の歴史 下巻より引用）

1.3.13 合併後の公民館の動き

1956年飯田市は周辺7村と合併し新制飯田市が誕生する。この際、公民館についても全国の事例に基づき「中央本館—分館」構造に変容する方針であったが、結果的に旧村公民館は独立館として残され飯田市街地には中央公民館が設置された。さらに1960年代半ばには、旧飯田市に設置されていた橋南・橋北・羽場・丸山・東野の五分館も独立館化する動きが活発となり1968年には独立公民館へと変化した。

1.3.14 高度経済成長期における変容

新制飯田市画誕生した1956年は経済白書が「もはや戦後ではない」と記した年でもあった。

飯田市も都市復興計画がほぼ完成し、高度経済成長期へと突入する。それに伴い飯田市街地では以下のような変化があった。

(1) 谷川緑地

1959年から60年にかけて防火帯として機能していた谷川緑地の埋め立て、公園化が進んだ。錦町～長姫橋の1300㎡を埋め立てる工事が進み、吾妻町には中央公園が設けられた。現在谷川は上記の範囲すべてが暗渠化され、東和町部分には2013年に完成したラウンドアバウトが整備されている。

(2) 街路整備

交通量の増加に伴い、各地で街路の拡張や舗装が進んだ。とりわけ銀座・知久町では街路両側にアーケードが設置された。

(3) 水の手線の改修

前述の水の手新道はその後にも延長・改修がなされ市街地の西を走る三州街道と東を走る遠州街道とを接続していた。その後谷川線の開通によって主要路線ではなくなったが、その後にも松尾・鼎方面から飯田市街地へ入るための重要な路線として機能し続けていた。そのため、高度経済成長期には幅5mの砂利道では交通に支障をきたすようになり、そこで、1959年度改修工事が始まった。改修工事には3年近く要し、62年度に現在の完全舗装された水の手通りが完成した。

(4) 市役所新庁舎の建設

1961年（昭和36年）6月、伊那谷一帯は梅雨前線に伴って豪雨によって大水害を受ける。（三六災害）飯田市街地でも崖崩れ・土石流・洪水が起り、広範囲にわたって大打撃を受けた。この直後、当時の松井卓治市長は市役所庁舎の移転を決定し、現今宮町2丁目にあった庁舎は1962年旧大久保小学校跡（現在の旧庁舎）へと移転した。

(5) 中央自動車道の開通

1975年中央自動車道中津川～駒ヶ根が開通し、飯田インターチェンジが開業した。その後1982年に中央自動車道が全通すると、地形上閉鎖的であった飯田市は三大都市圏へのアクセスが容易となり、大きく変容していく。

1.3.15 「丘の上」の現在

1974年4月中央自動車道の開通を見越して、ユニーと西友という2つの大型店が開店し、これらの大型店はそれぞれ繁盛した。しかしこの頃、時代の情勢を受けて市街地では以下のような問題点が表面化した。

- ・若年層人口の大都市圏流出
 - ・飯田市街地と郊外とで職住分離が展開
- 郊外にも人口が流出
- ・顧客の大都市圏流出

- ・車社会への移行に伴う商店街の地盤沈下
- ←「丘の上」は車でのアクセスが悪く、広い駐車場もなかった
- ・飯田駅の地位低下
- ←中央自動車道全通に伴う高速バスを中心とした交通網の一般化
- そして、この流れに伴い「丘の上」では1970年代から90年代にかけて空洞化が進み、以下のような現象が起きた。
- ・1970年、本町通り（近世以来問屋街として発展）の間屋が飯田卸売団地（松尾地区）に移転
- 跡地は市営駐車場に
- ・高校の相次ぐ郊外移転
- ・1991年、大規模小売店舗法が改正に伴い出店規制が緩和
- 商業施設の郊外移転
- 95年、前述の大型店2店舗も閉店・移転
- ・1992年、東栄町にあった飯田市立病院が八幡町へと移設
- しかし、その一方でこの状況に危機を感じた「丘の上」では90年代以降以下のような再開発への動きが活発化した。
- ・1993年、橋南地区を対象とした活性化に関する研究会の発足
- ・1994年、橋南地区再開発事業の準備組合発足
- 飯伊拠点都市地域基本計画の素案作成
- ・1998年、「飯田まちづくりカンパニー」（第三セクター）の設立
- ←同年、中心市街地の活性化に関する法律の制定
- ・2001年、「トップヒルズ本町」（商業施設・市分庁舎・住宅からなる10階建複合ビル）が完成
- これらの再開発への動きを背景として、一時期危機に瀕していた「丘の上」は、再び飯田市街地の誇りを取り戻しつつある。

1.4 おわりに

ここまで飯田市街地の自然地理・歴史的側面を概観してきたが、最後にそれらと文化的側面との接点について考える。

(1) 大都市圏との関係

飯田市街地は周辺の大都市圏と次の2つの地理的關係を持ち合わせていると考えられる。

- ・木曾山脈（西側）と赤石山脈（東側）に挟まれた伊那谷に位置しているため、大都市圏からのアクセスが難しい
- ・周辺地域からのアクセスが難しい下伊那への出入り口として機能しており、交通の要所となっている

一見、相反したこの2つの關係を持ち合わせていることで、近世以後、飯田は下伊那を代表して大都市圏との交通を求めてきた。そして、その願いは伊那街道、大平街道、飯田線、中央自動車

道、さらにリニア中央新幹線によって徐々に実現されつつある。これらの交通手段は市民の生活も常に変容させた。元結や製糸の生産・流通から 70 年代前半の大型店の進出まで飯田の盛衰は他地域との関係に大きく影響を受けていることが分かる。概略的に考えれば、交通手段の発展は地理的に閉鎖していた飯田を開放し産業の発展を進めた一方で、大都市圏への人口流出にもつながっているといえるだろう。

(2) 「丘の上」の城下町

飯田城は防衛の観点から段丘上に建設したと考えられる。結果的にそれは城下町と同じく段丘上に広がることとなり、現在も市街地の中心は「丘の上」にある。そのため、市街地は周辺地域からもやや遮断された位置にあるといえ、近世以降、市街地は周辺地域とは異なる商業の町として発達した一方で、郊外との連絡手段を新設していくことで、その拡大が図られた。

しかし、1970 年代以降職住分離が進んだことで人口が流出し郊外の商業が発達すると、旧来からの商習慣を守っていた市街地の商店街は逆に取り残されることとなった。現在、再び誇るべき「丘の上」を取り戻すべく再開発が進んでいる。

(3) 大火

1947 年の飯田大火は市街地の様相を一変させた。現在の市街地の町並みは、城下町としての町並みというより大火後の計画都市としての町並みの印象が強い。大火後市街地のあらゆるところに設けられた防火帯はその後飯田の特徴となっていく。扇町公園は元々大火の発火点の緑地化のために生まれたものだが、ここに出来た動物園は飯田市の重要な施設となっている。また、谷川緑地の埋め立て後に設けられた中央公園は、隣接する中央公民館とともに文化活動の中心となっている。そして、拡幅し殺風景となった並木通りには中学生によってりんご並木が植樹され、現在もそのエピソードとともに飯田市を象徴する存在となっている。

以上の飯田市街地の地誌的特異性を基本的事項として踏まえた上で次章以降を読んでいただくことで、本章が本報告書を読み進める読者の一助となれば幸いである。

引用文献・資料, Web ページ

飯田市歴史研究所編 『飯田・上飯田の歴史 上巻』, 飯田市教育委員会, 2012.

飯田市歴史研究所編 『飯田・上飯田の歴史 下巻』, 飯田市教育委員会, 2013.

国土地理院 『地理院地図 (電子国土 Web)』 入手先 URL : <https://maps.gsi.go.jp/index.html> (アクセス日 : 2017-1-28)

地震調査研究推進本部 『伊那谷断層帯』 入手先 URL : http://www.jishin.go.jp/main/yosokuchi/zu/katsudanso/f051_inadani.htm (アクセス日 : 2017-1-28)

総務省消防庁 『平成 26 年度消防白書 附属資料 10 昭和 21 年以降の大火記録』 入手先 URL : <https://www.fdma.go.jp/html/hakusho/h16/h16/html/16s10000.html> (アクセス日 : 2017-1-28)

第2章 飯田遊郭史を取り巻くダイナミズムと現代「風俗営業」の分析視角提供の試み

日隈 脩一郎

2.1 はじめに——飯田の夜に誘われて

「眠らない街」とは、よく聞く陳腐なフレーズだ。しかし、歌舞伎町でも朝は飲み屋で人は寝酒し、六本木駅の朝はプラットフォームで悪びれもせず横になる、クラブ帰りの若者たちであふれる始末。渋谷、上野、池袋など、都内にあるその他多くのいわゆる歓楽街と呼ばれる街、どこでも事情は同じである。とすると、冒頭に掲げたフレーズは次のように換言できよう。「どんな街でも、いつかは、そしてどこかは眠っている」と。もちろん、昼と夜との、あるいは夜と昼との境界に戯れる人たちのふるまいが、そうした街の不眠を装っているのだが。

所変わって飯田でも、まるでそうして日の出を待つかのように酒をあおり続ける人々を、筆者は目撃した。

「社会教育への取り組みが進んでいるっていうんで、来たんですよ」

「社会？歴史とか文化のってことかい」

「いやまあ、それもあるんですけど、公民館とかあるでしょう、その取り組みが進んでいるってんですよ」

時刻はすでに午前1時半を回っており、若干呂律が回らない。意味もなくグラスを揺り動かす手が少し赤い。

「そうなんか。Jさん（スナックのママさん）知ってたけ？」

Jさんははっきりとした二重で、少しピンク色が混じった白い肌をしている。

「いや～知らないわね」

他の客数名も、特に声を上げない。中には飯田外からの来客もあったが、地元飯田に暮らす人も含め、「飯田型公民館」のことを知らなかった。そもそも、公民館にはほとんど用もないという人たちばかりだった。ゆく客、来る客をしばらく眺めていると看板の時間になった。2時半。都内のスナックも閉まる店はこのくらいで閉まるが、少し早めだ。

翌日も飽きずに足を運んだ。その日はJさんの誕生日だった。こういうお店には付き物だが、イベントごとには他の曜日の従業員もいる。前日にもいた、一個下のNさんの他にももう二人いた。

「おお、S君来てくれたん？」

二日目にして名前を覚えられるというのは、酒飲みの（わずかな）経験からしても珍しい。こういうのが、楽しかったりするものだ。

他の客が誕生日プレゼントと称して缶の中にお金を入れていたので、真似して入れてみた。たま

たまその日はバイトの給料日で、市内の信用金庫に走って現金を工面しておいたので、助かった。いや、むしろ苦しんだのか。とはいえ、誕生日にキャッシュだなんて、ちゃっかりしている。そのスナックでは、グラスが空になりそうになると、勝手にお酒を注がれるようになっている。あとで地元の人に聞いた話だと、飯田市民にある程度は共通する気質らしく、悪気はないとはいうが、まあスナックなんてそんなものだろうとも思った。

その日は、バイト上がりの N さんともう一人のバイトの女性、それに客としてきていた 40 代の男性二人と 5 人ではしごをした。まずは、歩いて 5 分程度のところにあったラーメン屋に足を踏み入れたが、若い人でごった返していた。スナックにはおじさんばかりだったので、少し安心した。とはいえあまり落ち着けず、すぐに次の店へ。次の店もスナックだった。アイドル好きの N さんと、モーニング娘から AKB, 嵐まで、いろいろとデュエットした。専門学校生の N さんは、月に 2, 3 度は東京に出て地下アイドルのライブを観るという。少しアイドルをかじっている私は、後日アイドルのライブ現場で N さんに再開することになる。

午前 4 時。さすがに皆疲労の色が見える。どうやら解散のようだ。一緒に飲んだ T さんがお金を出してくれた。貧乏学生にはありがたい。これだから飲み屋巡りはやめられないのである。

「また飯田に来なよ、今度はきれいな中国人ママさんがいるところに行こう」

最後に握手をして別れた。今にも道端で寝てしまいそうな足どりで宿泊先のホテルに帰った。あくる日の講義でどうなったかは、想像にかたくない。

2.2 議論の目的と背景

以上のような体験は、筆者にとって特段目新しいものではないと思われたものの、東京で過ごす夜とはやはり少し異質だった。その異質さを言語化してみせることが、本稿が遠く見据えることではあるが、本稿の仕事自体は、そこまでは辿り着かない。

そのため目指すところはひとまず飯田における風俗営業についての記述ということになるが、社会教育学演習において、風俗営業の記述を試みることに対しては、いささかアリバイめいたことを付言しておく必要があるだろう。

風俗営業とは、学校教育をその中核とするような公教育とは、一見互いに排反する領域にあると思われる。例えば、風俗営業等の規制及び業務の適正化等に関する法律（昭和二十三年七月十日法律第二百二十二号、以下「風適法」）では、13 条 2 項で以下のように定められている。

“都道府県は、善良の風俗若しくは清浄な風俗環境を害する行為又は少年の健全な育成に障害を及ぼす行為を防止するため必要があるときは、前項の規定によるほか、政令で定める基準に従い条例で定めるところにより、地域を定めて、風俗営業の営業時間を制限することができる”

風適法はさらに、店舗型性風俗特殊営業については、第 28 条で学校や図書館、児童福祉施設から半径 200 メートル以内での営業を禁止している。そのため、風俗営業の輪郭を浮かび上がらせ

ることは、やや逆説的ながら教育（学）という領野——あるいは領分とってよいだろう——を照射することになり得るのではないだろうか⁴。

ところで、風適法第 2 条によれば風俗営業とは以下の各号のいずれかを満たすものとされる。

(1) キャバレー、待合、料理店、カフェーその他設備を設けて客の接待をして客に遊興又は飲食をさせる営業

(2) 喫茶店、バーその他設備を設けて客に飲食をさせる営業で、国家公安委員会規則で定めるところにより計った営業所内の照度を十ルクス以下として営むもの（前号に該当する営業として営むものを除く。）

(3) 喫茶店、バーその他設備を設けて客に飲食をさせる営業で、他から見通すことが困難であり、かつ、その広さが五平方メートル以下である客席を設けて営むもの

(4) まあじやん屋、ぱちんこ屋その他設備を設けて客に射幸心をそそるおそれのある遊技をさせる営業

(5) スロットマシン、テレビゲーム機その他の遊技設備で本来の用途以外の用途として射幸心をそそるおそれのある遊技に用いることができるもの（国家公安委員会規則で定めるものに限る。）を備える店舗その他これに類する区画された施設（旅館業その他の営業の用に供し、又はこれに随伴する施設で政令で定めるものを除く。）において当該遊技設備により客に遊技をさせる営業（前号に該当する営業を除く。）

映画等も含めた文芸作品において、不良学生が以上のような施設に出入りする表象が選び取られるのも、無理からぬことである⁵。また、いわゆる「フーズク」と称されるような業態は、風適法においては、既述の性風俗特殊営業と称されることを注意されたい。

さて、すでに語ったところによれば、飲み屋に集まる人たちは社会教育のことなど「いや～知らない⁶」のであって、その発言には、飯田において社会教育という語で総括され得る活動がしつかりと根付いており、自覚され得ない自明の所与として存在するのか、あるいは、やはり飲屋に集う人々というのが、社会教育が包摂する領域から、排除とは言わないまでも、すっぱり抜け落ちていることを示しているのか、というさしあたって二つの解釈があり得るだろう。とはいえ、その二分法を採用してみても、とどのつまり明らかになるのは、社会教育のいわば臨界が一体どこに現出しているのか、ということだろう。本稿の意図は、実にアリバイめいているとはいえ、ここにある。

また、別の背景もある。飯田 OIDE 長姫高等学校を訪れた際、生徒たちとある種のフィールドワークをする機会を得、その際同行したある公民館職員の方に、谷川沿いにある青線地帯の名残

⁴ そもそも、教育がセクシュアルなもの全般を意図的に排除する政治的なシステムであるという指摘もあり得る（井上章一『性欲の文化史 1』、講談社、2008、pp.7-11.）。

⁵ 吉田喜重監督『ろくでなし』（1960）は、好例である。あるいは近年では真利子哲也監督『ディストラクション・ベイビーズ』（2016）も挙げられよう。

⁶ 筆者が訪れた飲み屋は、上記のスナックに限らず、居酒屋や小料理店にも及ぶが、どこでも「社会教育」的な話題への反応が想像よりも芳しくないものだった。

をご教示いただいた。

青線とは、警察組織の所有する地図上で青い線で囲われている地域だったということに由来しており、非合法の売春施設が集まった区域のことである。例えば東京では、現在の新宿区歌舞伎町1丁目あたりなどを筆頭に、6カ所ほどあったと伝えられる。対して、赤線は売春が公認されていた地域のこと、地図上では営業許可が許された区域として、赤線で囲まれていた。この赤線と青線との区別は、1872年にいわゆる芸娼妓解放令なる太政官布告が発されたことに淵源する。これは、売買春を大幅に規制することを意図したものだったが、実態としては機能せず、1900年には条件が緩和されるに至った。

飯田では、1882年に長野県議会において赤線地帯の設置が議決され、いわゆる「飯田遊郭」が形成された。赤線地帯としての飯田遊郭は、1956年に制定された売春防止法（売防法）の施行に伴い幕を閉じ、2002年に久保田楼、2005年に深津楼が取り壊されるまでは面影をとどめたものの、現在では記録と記憶とに頼るしか、その痕跡を手繰り寄せる手段はなくなっている。

本稿では、飯田遊郭と、現在市内で展開されている風俗営業との連続性・非連続性を見届けることになる。特に青線は、見かけ上は酒類の提供に従事する店が集まる区域であり、風俗営業は文字通り脱色されたものであるからして、本稿の仕事は歴史や法のダイナミズムが飯田においてどう表出したかを探るある種の端緒となるだろう。

2.3 先行研究の検討と方法

本節では、研究の方法として何が適切か、また、本稿の関心と近い研究としてどのようなものがあるのかといったことに簡単に触れ、見通しをよくしておこう。

2.3.1 飯田から遠く離れて——遊郭、盛り場研究の一般的な事例の検討

飲屋街や歓楽街のような「街」、換言すれば「盛り場」自体は、教育学が元来扱ってこなかったところだろう——むしろ、社会教育やその施設の政治的な秩序・アート（技術）に関する空間を扱う問題系については、一定の蓄積があるだろう。既存の諸学について少し見渡してみても、盛り場自体についての学術的な研究は、施設や構造にしか目を向けてこなかったことが指摘されている⁷。

例えば、都市工学や建築学のなかで盛り場を扱った研究はある⁸ものの、それらは都市の構造や盛り場を形成する一群の建造物が有する構造を記述するものに限定される。吉見は、社会学の内部におけるこうした傾向を以下のように批判的に検討しながら、盛り場を「出来事」として捉える独自の手法を打ち立てた。

⁷ 「【インタビュー】歌舞伎町のフィールドワークから見えたもの— 社会学者・武岡暢さんに聞く(前編)」 入手先 URL : <http://credo.asia/2014/10/24/takeoka1/> (アクセス日 : 2017-2-2)

⁸ 例えば地理学では、杉村暢二“歓楽街と中心商店街との関連” <東北地理学会編『東北地理』 vol.20, no.4, 1968> pp.228-234., 土木工学では、大矢正樹“盛り場空間の変遷とその要因について”『土木計画学研究・講演集』 vol.32, 2005. など。

“基本的に「盛」は、エネルギーの高い、高揚した状態を指し、「サカリがつく」という言い方に示されるようにしばしば性的なコノテーションを含んでいると考えられる。……「盛り場」とはもともとは流動的で一時的な「盛（サカリ）」を、他の場所よりも濃密に抱えた空間であり、したがってこの言葉の本来の重心は、「容器」である商業施設や娯楽施設よりもまず、「中身」である「盛」そのものにあるのである”⁹。

飯田、とりわけ「丘の上¹⁰」と言い慣わされるような空間のみを対象とするのではなく、そこに集い交歓する人々を主役とする「出来事」として捉える分析視角を、筆者は吉見と共有したいと思う。

一方、歴史学のなかでは空間の通時的な形成過程とともに、それに与したアクターが問題化されてきた¹¹。ところで街というものは、そこにおける主体たる生きた人間、住民なくしては成立し得ないというのは言を俟たない。そのため、実証主義諸学が十全に機能し得るべく対象を建造物や街の構造に限定してきたことは、方法論的にやむを得ない事情があったとはいえ、本稿の目的からして参照度は低いものとなる。かくて、改めて、吉見的な社会学、や歴史学といった分野の研究事例を参照することが有用になるだろう。

ただし、こうした方法的立場に立つということには、無視できない問題が横たわっている。それは、人の移動に伴う困難である。実は、社会学において繁華街や娯楽街の研究が貧弱な現状を呈しているのは、それがひとつの原因だとさえされている¹²。

あるいはまた、そういった「街」とそれに伴う産業は切っても切り離せないものだが、風営営業全般についての学術的な研究は、管見のかぎり多くはない。特に、それら産業に従事する者に対する調査は、ほとんどないといってよからう¹³。さらに、風俗営業とは浅からぬ縁にある性産業¹⁴自体の研究、とりわけ日本において主流である室内型のそれについての研究は、世界的に見てもほとんど存在しないことが指摘されている¹⁵。

⁹ 吉見俊哉『都市のドラマトルギ——東京・盛り場の社会史』、河出書房新社、2008、pp.30-31.

¹⁰ 概ね東西を追手町小学校から飯田駅、南北を水の手通りから並木通りまで囲んだ市域と、本稿では考えておく。

¹¹ 方法論的に、また事実としての過誤が指摘されているとはいえ、網野義彦が展開した史学は、筆者の問題意識と重なるところである。とりわけ、無縁・公界・楽の概念は、高度情報社会においてアップグレードされるとするならば、有用な分析概念となるだろう。

¹² 武岡、*op cit.*

¹³ 各種ルポルタージュなどはあるものの、アカデミックな手続きを辛うじて経たと認められるものとしては、北条かや『キャバ嬢の社会学』、星海社、2014.、飯田泰之・荻上千キ『夜の経済学』、扶桑社、2013. などにとどまる。

¹⁴ 「性産業」といった場合、性風俗特殊営業に従事して性的なサービスを提供する主体、あるいはヌードモデルやポルノ女優をも含めたより広範な射程をもつ。

¹⁵ 武岡暢“客引きとスカウトは何故いなくなるのか——娯楽街のストリートにおける法と経

以上のような困難を克服するべく、現在のところ唯一とり得る手段と考えられるのは、フィールドワークやインタビュー調査ではある。しかし、本稿執筆のための実地調査や質問票作成等の時間が取れなかったため、基本的に本稿では文献での調査が主となることを免れない。

2.3.2 飯田を対象とした先行研究・公的調査の検討

飯田における現代の風俗産業を中心的に扱った研究は、管見のかぎりでは見当たらないものの、前項で触れたように、近代以前の様子については建築学や歴史学の研究が散見される。とりわけ、飯田におけるそうした分野の研究の先端を担うのは、飯田市歴史研究所と都市史研究会である。両者は提携関係にあり、こと飯田研究については事実上一体化したこの研究共同体のみが存在しているといえるだろう。建築学では、遊郭を構成する建造物に関する研究として久保田楼を取り上げたもの¹⁶、歴史学では、都市史の観点から飯田遊郭の構成や、そこで働く娼妓の生活を記述したもの¹⁷などがある。

公的な統計に関してはどうだろう。飯田市によりまとめられている各年度版の市政概要によれば、本稿が寄せる統計データとして（１）風俗犯（賭博、わいせつ）の発生・検挙状況、（２）産業別の事業所数・従業者数の推移、などが公表されている¹⁸が、例えば（２）については、年度ごとに産業の分別に「飲食業」「飲食サービス業」と別々の名前があてられていたり、他の産業と抱き合わせて算定されていたりするなど、有意な情報を汲み取るのは難しいと言わざるを得ない。

2.4 遊郭という制度

本節では改めて、飯田遊郭の成立について見ていく。ただその前に、「遊郭」という制度自体の成立過程をたどってみよう。

2.4.1 近代公娼制度以前

集娼自体は応仁の乱以降の京都にすでに見られたといい、それを後追いする形で 1589 年には豊臣秀吉が遊郭の設置を公認したが、これが制度の起源とみられる¹⁹。江戸時代に入ると 1617 年には、幕府が京都の島原・大坂の新町・江戸の新吉原のみにおいて遊郭の設置を公認し、公娼制度が開始された。もちろん、古今東西を問わず、公認もあれば、黙認されていた事実上の売春施設（茶屋や宿場町における旅籠屋）、為政者から隠れて営業された場所もあった。公娼制度は、そ

濟” <立教大学グローバル都市研究所編『グローバル都市研究』vol.6, 2013> pp.25-40. など。

¹⁶ 伊藤毅 “喜久水酒造蔵・飯田遊郭久保田楼” <飯田市歴史研究所編『飯田市歴史研究所年報』1号, 2003> pp.110-128. など。

¹⁷ 齊藤俊江 “飯田遊郭と娼妓の生活” <佐賀朝・吉田伸之編『シリーズ遊郭社会 2 近世から近代へ』, 吉川弘文館, 2014> pp.179-199. など。

¹⁸ 飯田市「市勢の概要 2013（平成 25 年版）」 入手先 URL : <http://www.city.iida.lg.jp/soshiki/8/shisei-gaiyouh25.html>（アクセス日：2017-2-2）

¹⁹ 永井良和 “遊郭の形成と近代日本——「囲い込み」と取締り” <井上章一編『性欲の文化史 1』, 講談社, 2008> pp.13-39. など。

のため実態としては機能しておらず、幕末の開港後には、居留地に休息所と称して売買春が行われる施設が設置されることもあった²⁰。

近代以前の公娼制度は、必ず隣接する領域として私娼を産出せざるを得ず、1790年に京都で祇園などでも遊女屋の公認が行われるようになると、前述の公娼制度は大きな変容を遂げるようになった。公権力は、かくして実態の後追いをするという姿勢を見せるようになったが、天保の改革により黙認されていた非公認遊所の原則禁止が再確認されると、ほとんどモザイク状の売買春の状況が現出されるようになる²¹。

2.4.2 近代公娼制度の成立と飯田遊郭の展開と終焉

前項で確認したような状況を一変させる転機となったのが、1872年にペルーの商船マリア・ルス号が横浜港に停泊を求めたことに始まる、一連の事件、いわゆるマリア・ルス号事件だった。

マリア・ルス号は、実は当時の清国人を奴隷労働力として乗せた船であり、ひょんなことからそれが知られるようになると、明治新政府は奴隷制反対との立場から、船内の調査と法的な手続きを取るようになる。この事件は、不平等条約の締結下にあった日本政府の名声を高めることになり、ペルーの奴隷貿易への関与を終焉に導いた世界史的意義のある事件であったが、裁判の過程で、日本政府に冷や水を浴びせられる事態が起こったのだ。それは、ペルー側の弁論の一部に、日本の遊女が、前借金という形で事実上奴隷労働を強いられた存在ではないか、という主張があったことだ。

日本政府は性急な措置を取り、マリア・ルス号事件の判決が出てからおおよそ1カ月後には、太政官布告第二九五号、通称「芸娼妓解放令」を發布した²²。こうして、建前上は婦女子の売買春からの解放と、前借金などの負債を一切破棄することが法的に履行されたが、この布告は売春を個人の自由意志によるものとして、女性の身体保護および公衆衛生の名の下に売春自体は温存する方向へ、国内の政策を進展させることになり、結果的に公娼許可区域はむしろ増加した²³。布告はまた、実際上の芸娼妓業の統制を各府県に委ねるという道を切り開くことにもなった²⁴。

²⁰ 本項は、吉田ゆり子“幕末開講と「倭夷之差別」——外国人向け遊郭成立序説”<佐賀朝・吉田伸之編『シリーズ遊郭社会 2 近世から近代へ』、吉川弘文館、2014> pp.29-68.、および、佐賀朝“居留地付き遊郭——東京と大阪——”<佐賀朝・吉田伸之編『シリーズ遊郭社会 2 近世から近代へ』、吉川弘文館、2014> pp.69-96. に多くを負った。記して感謝する。

²¹ 本項は概ね、佐賀朝“序文”<佐賀朝・吉田伸之編『シリーズ遊郭社会 2 近世から近代へ』、吉川弘文館、2014> pp.1-26. の要約である。

²² この布告を、急場しのぎとする評価もあるが、ボツマンは、それ以前から政府内で婦女子の人身売買が議案とされていたことを指摘し、それとの連続性の中で事件を捉えている（ダニエル, V. ボツマン“奴隷制なき自由？——近代日本における「解放」と苦力・遊女・賤民——”<佐賀朝・吉田伸之編『シリーズ遊郭社会 2 近世から近代へ』、吉川弘文館、2014> pp.116-117.）。

²³ 大日方純夫『日本近代国家の成立と警察』、校倉書房、1992.

²⁴ 現代でも、各都道府県条例は風俗営業の取締りにかなりの効力を発揮していることは見逃せない。

こうして、公娼制度は法的に整備されることになり、日本各地で遊郭の成立が相次いだ²⁵。1876年には、飯田においても遊郭の招致運動が起こり、前述の通り 1882年に県内では5番目に公認された²⁶。長野県内では、1877年の時点ですでに芸娼妓業従事者の梅毒検査や集住の義務付けが法定の制度としてスタートしている。社会教育の観点から一瞥しておきたいのは、「青少年に悪影響をあたえる」として、飯田町（当時）内での反対運動が起こっていることである²⁷。結局、中心居住地から離れた荒地に隔離された二本松に遊郭が建設された。

当時の飯田は、養蚕業や水引業の隆盛により長野市に次ぐ県内2位の遊興費を誇ったという²⁸。その背景には、アメリカ国内での女性の社会的進出などに伴うアメリカ向け生糸輸出の増大があり、また、恐慌の時代に突入して以降、遊郭が下火になっていったのも、生糸産業への打撃にその要因が求められる。このように、当然といえば当然だが、世界経済のシステムの中に、飯田が組み込まれていることには注意を払っておきたい。また、世界規模のシステムだけでなく、全国に及ぶ貸座敷経営者ネットワークがあった²⁹からこそ、飯田における遊郭が成り立ち得たことは付言しておく。

さて、ホイッグ史観に陥らないためにも、廃娼運動についても見ておこう。早い時期では1889年にはすでに、早川権弥県会議員が長野県会に廃娼案を提出している。第一次世界大戦中から戦間期にかけて、特に先進国では銃後の女性の社会進出が進み、『南信新聞』1930年11月16日号では、「公娼廃止論」が一面トップで掲載されるなどの状況が現出するなかで、廃娼決議案が同年12月に長野県会で採択された。しかし、猶予期間が10年与えられている中でいわゆる十五年戦争が本格化し、有名無実化した。戦争が、女性の社会的位置付けに対して、このように相反する2重のベクトルをはらんでいるという事実は非常に興味深い。このあたりの事情についてはさらに、戦中、綱紀肅正ムードの中で中国朝鮮半島の軍慰安所に飯田の芸娼妓が動員されるという事態もあった³⁰。先述の公衆衛生や、国家というイデオロギー的な価値のために、女性が犠牲にされたという事実は、重く受け止めなくてはならないだろう。

戦後、最後の輝きを見せた飯田遊郭は、7楼が経営を続けたというのが、GHQの勧告に基づいて

²⁵ やや時期はさかのぼるが、明治初年には東大本郷キャンパス近くの根津にも公認の地域があった。

²⁶ 飯田では、江戸時代にはすでに私娼の存在が確認されている（齊藤俊江“飯田遊郭と娼妓の生活”<佐賀朝・吉田伸之編『シリーズ遊郭社会2 近世から近代へ』、吉川弘文館、2014> p.179.）。

²⁷ *Ibid.*, p.183.

²⁸ いきなり時代を下るが、1920年の長野県勢調査によれば、飯田町内で旅館飲食店浴場業に従事する女性（業主）が男性と比し、突出して多いことは特筆すべきだろう。従業者としても、繊維工業に次ぐ多さである（田中雅孝“戦前期飯田町の商工自営業者層の構成”<飯田市歴史研究所編『飯田市歴史研究所年報』9号、2011> p.56.）。

²⁹ 齊藤, *op cit.*, p.198.

³⁰ 飯田市歴史研究所編『いとなむ はたらく 飯田のあゆみ』、2007。また、飯田からの満州移民という事象を、これと連関させつつ論じる道筋があり得るだろうが、本稿ではその可能性を示唆するにとどめておこう。

1956年に売防法が制定され、飯田遊郭は公娼空間としての役割を終えた。その後、各楼は一部が貸間業やアパート業を営むことで延命した³¹ものの、現在ではその面影をたどる手立てはほとんどない。

2.5 おわりに——課題と展望

そろそろまとめに入ろう。最初に確認したように、筆者としては「丘の上」の分析視角として、盛り場を「出来事」として捉えるという道筋をつけたが、具体的な研究方法としてのインタビューやフィールドワークという手法は採用し得なかった。

文献調査に基づいて述べたことは、基本的に史実とされることをただなぞったものに過ぎず、本稿独自の仕事とはいいがたいが、ひとつ可能性を示そうとわずかに強調してきたこととしては、飯田における遊郭、あるいはその後の風俗営業を、近代日本が否応なく組み込まれていった主権国家体制、あるいは現代においてはグローバリゼーションのなかで捉え得るということが挙げられる。それは、近代以前にも貸座敷業者の全国的ネットワークという形で、飯田に鉄道が開通することに先立って表出していた状況が、より大規模化したこととも捉えられるかもしれない。

リニア新幹線開通に伴い、東阪経済圏にこれまで以上に組み入れられるであろう飯田が、商業地域としての道をたどるか、あるいはベッドタウン的な位置を占めるかは予測がつかない。飯田の現在の風俗営業についての実態は、本稿ではほとんど手付かずのままとなったが、青線の具体的な相貌なども含め、遊郭との連続性・非連続性を取り出すことは、結局課題として展望されるにとどまった。とはいえ、踏み込んでの記述はなかったものの、歌舞伎町や浅草（吉原）、池袋など、今では性風俗特殊営業が蔓延している盛り場（というよりもフーズク街）を「丘の上」と対照させることには、留保が必要だろう。交通の要衝は、洋の東西、時代の前後を問わず盛り場となり得る。リニアが飯田をどう変容させるのか、注目が集まる。

性営業を非合法として取り締まる動きには、逆説的にそうした営業を陰に陽に延命させる効果がある。そのため、警察権力による強制的な介入などは（風適法の法文上、きわめて限定されているとはいえ）できるだけ引かねえばならないだろう³²。溝口健二監督の遺作『赤線地帯』（1956）は、売防法が論じられる状況下での娼婦の生き様の主体性を描いたものだが、男性映画監督が女性をまなざされる表象として描写するという政治性は等閑視できないとはいえ、過度なパターンナリズムによる主体性の無視は、許されないだろう。

いま、溝口作品について挙げたが、遊郭を題材とした文芸作品は数多い。永井荷風が失われてゆく向島の花街を描いた『濠東綺譚』（1951）、神代辰巳の傑作ロマンポルノ『赤線玉の井 ぬけられます』（1974）、売りに出される少女のみなぎる生命力を描いた『大地の子守歌』（1976）な

³¹ 伊藤毅 “喜久水酒造蔵・飯田遊郭久保田楼” <飯田市歴史研究所編『飯田市歴史研究所年報』1号, 2003> pp.110-128.

³² 売春の禁止が法的に履行され得ない可能性については、瀬地山角『お笑いジェンダー論』, 勁草書房, 2001. における論考 “セックスワーク論——売春は禁止できない——” を参照。

ど、色事は創造のインスピレーションを作家たちに与えてきた。フロイトは、その初期には性的なエネルギーのみをリビドーと呼んだが、後期には生の本能すべてをリビドーと称するようになった。その中には創造のエネルギーも含まれよう。とすると、飯田の歴史に思いを致すとき、それを昔のこととばかり捉えるのではなく、現在にその遺産を浮かび上がらせようとは、間違いなく独特の文化を育む飯田の創造性に寄与することとなる。そう見得を切ることは、牽強附会にすぎないだろうか。

さて、本稿は、「教育(学)」の輪郭を少しでも浮かび上がらせることを目的としていた。判定は、読者諸賢にお任せし、筆をおくとしよう。

引用文献・資料, Web ページ

飯田市「市勢の概要 2013 (平成 25 年版)」入手先 URL : <http://www.city.iida.lg.jp/soshiki/8/shisei-gaiyouh25.html> (アクセス日 : 2017-2-2)

飯田市歴史研究所編『いとなむ はたらく 飯田のあゆみ』, 2007.

飯田泰之・荻上チキ『夜の経済学』, 扶桑社, 2013.

伊藤毅“喜久水酒造蔵・飯田遊郭久保田楼”<飯田市歴史研究所編『飯田市歴史研究所年報』1号, 2003>.

井上章一“まえがき—文化の中に性を読む”<井上章一編『性欲の文化史 1』, 講談社, 2008>.

大日方純夫『日本近代国家の成立と警察』, 校倉書房, 1992.

大矢正樹“盛り場空間の変遷とその要因について”『土木計画学研究・講演集』vol.32, 2005.

齊藤俊江“飯田遊郭と娼妓の生活”<佐賀朝・吉田伸之編『シリーズ遊郭社会 2 近世から近代へ』, 吉川弘文館, 2014>.

佐賀朝“序文”<佐賀朝・吉田伸之編『シリーズ遊郭社会 2 近世から近代へ』, 吉川弘文館, 2014>.

佐賀朝“居留地付き遊郭—東京と大阪—”<佐賀朝・吉田伸之編『シリーズ遊郭社会 2 近世から近代へ』, 吉川弘文館, 2014>.

杉村暢二“歓楽街と中心商店街との関連”<東北地理学会編『東北地理』vol.20, no.4, 1968>.

瀬地山角『お笑いジェンダー論』, 勁草書房, 2001.

武岡暢“盛り場の不可視性増大過程の分析—2000年までの歌舞伎町を事例に”<ソシオロゴス編集委員会編『ソシオロゴス』vol.33, 2009>.

武岡暢“客引きとスカウトは何故いなくなるのか—歓楽街のストリートにおける法と経済”<立教大学グローバル都市研究所編『グローバル都市研究』vol.6, 2013>.

武岡暢【インタビュー】歌舞伎町のフィールドワークから見えたもの—社会学者・武岡暢さんに聞く(前編) 入手先 URL : <http://credo.asia/2014/10/24/takeoka1/> (アクセス日 : 2017-2-2)

田中雅孝“戦前期飯田町の商工自営業者層の構成”<飯田市歴史研究所編『飯田市歴史研究所年報』9号, 2011>.

ダニエル, V. ボツマン “奴隷制なき自由?—近代日本における「解放」と苦力・遊女・賤民—”
<佐賀朝・吉田伸之編『シリーズ遊郭社会 2 近世から近代へ』, 吉川弘文館, 2014>.

永井良和 “風俗営業のコントロール—〈囲い込み〉から〈個人認証へ〉” <宝月誠・進藤雄三編『社会的コントロールの現在—新たな社会的世界の構築をめざして』, 世界思想社, 2005>.

永井良和 “遊郭の形成と近代日本—「囲い込み」と取締り” <井上章一編『性欲の文化史 1』, 講談社, 2008>.

北条かや『キャバ嬢の社会学』, 星海社, 2014.

吉田ゆり子 “幕末開講と「倭夷之差別」—外国人向け遊郭成立序説” <佐賀朝・吉田伸之編『シリーズ遊郭社会 2 近世から近代へ』, 吉川弘文館, 2014>.

吉見俊哉『都市のドラマトゥルギ—東京・盛り場の社会史』, 河出書房新社, 2008.

第3章 航空宇宙産業クラスター加入と「知の拠点」 構想

寺田 恭行

3.1 はじめに

3.1.1 課題意識

2016年夏、三泊四日で飯田市を訪れた。このフィールドワークの中で印象的だったのは、飯田駅前の市街地からでもその存在感に圧倒されるような周囲の山々と、市街地の中心を横切るリンゴ並木だった。

聞けばこのリンゴ並木、1953年に飯田市立東中学校の中学生の発意により作られたそうだ。彼らは1947年の大火の焼け跡にリンゴの木を植え、町とともに飯田の人々の心も美しくしていく。この活動を通じて飯田の復興を達成しようとしたのだ。数々のトラブルを乗り越え、その手入りは先輩から後輩へと引き継がれていった。自分たちの手で美しい街を作る、この考えが飯田のまちづくりの基本精神となった。リンゴ並木は、飯田市民の心のシンボルなのだそうだ。

そんな飯田は現在、転換期を迎えていると感じる。飯田は2027年に先行開通するリニア中央新幹線の東京・名古屋間の長野県停車駅として決定したのだ。それだけでなく、愛知県・岐阜県・三重県が進めている国際戦略総合特区「アジア No.1 航空宇宙産業クラスター形成特区」（以下航空宇宙産業クラスター形成特区）に飯田の企業が参加することになり、さらに「知の拠点」整備構想案が打ち出された。

飯田の中心市街地再開発事業は外部資本である大手デベロッパーに頼らず「飯田まちづくりカンパニー」主導・行政支援で行われている、という話からも分かるように、リンゴ並木の精神、自分たちのまちを自分たちで作ろうとする「ムトス」の精神が飯田の特徴のはずだ。しかし、この転換に際して、飯田は新たな局面を迎えつつあるのではないだろうか。リニア開通や工業化により外部との繋がりが大きくなった飯田の在り方が変わっていくのではないか。このような関心から、飯田地域がどのように変わりつつあるのかを、工業面から探っていこうと考えるに至った。

3.1.2 本章の概要

本章では、飯田が工業的にはどのような地域で、どう変わろうとしているのかに注目する。その中で、この「ムトス」の精神の色濃い地域がより強く外部と繋がることで、どんな変化が起こっていくのかを考える。

大まかな流れとしては、自然・市街地・リンゴ並木ばかり印象に残っていた飯田について、まずは従来の工業をまとめ、航空宇宙産業クラスター形成特区とは何なのかをふまえた上で、「知の拠点」整備構想案を読み解く。そして、産業の活性化に伴う変化と「ムトス」の精神がどうつな

がり、飯田がどう変わっていくのかを考察していく。

3.2 飯田という地域と工業

3.2.1 先行研究

それでは、「ムトス」の精神と飯田の工業の関係はどのようなものなのだろうか。「ムトス」と工業を直接的に結びつけて論じている文書は見つからなかったので、「ムトス」と飯田の工業について別々に調べた。

〈「ムトス」について〉

まず、ムトス飯田推進委員会は年度ごとに活動報告を公開している³³が、2014年度のものを確認すると、ムトス飯田推進委員会としての取り組みは主に住民有志のまちづくりの支援であり、内容としては「飯田という地域に愛着を持てるようなイベント」「飯田の環境保全」「飯田に住む人間の暮らしを豊かにするもの」「観光時の見どころとなるような取り組み」といったものに大別され、工業的な要素は見られない。

また、ムトス飯田事業について調べ、考察した石原³⁴を参照しても、支援されている活動は市民主体のまちづくりであり、支援の審査選考基準からは工業的な活動が除外されているわけではないものの、工業的な取り組みは読み取れない。

〈飯田の工業について〉

飯田の工業についての調査・考察はいくつか行われており、地域の変化や将来への取り組み、展望を述べているものを挙げる。

井草³⁵は飯田市の企業への支援制度について調査し、企業立地に関する事業活用（企業立地促進事業、企業振興促進事業）、地域の持続的発展のための地場産業振興センターの活用、同センターの三遠南信地域における連携強化に向けての活用の3つを提言した。しかし、この文献においては地域の変容について、制度の成功／失敗以上のことを確認することはできない。

しかし、中瀬³⁶は飯田市の今後の取り組みについて、航空宇宙産業クラスターだけでなく地域ぐるみの環境経営の取り組みにも言及しており、行政・地域・企業のつながりへの意識がうかがえる。さらに、金子・樋上は、“長野県飯田市の機械金属工業に形成された企業間ネットワークと

³³ ムトス飯田推進委員会「ムトス飯田まちづくり 活動報告集」, 2014.

³⁴ 石原江理「Uターン就職された市役所職員へのインタビューと、ムトス飯田事業について」、『2015年度飯田市社会教育調査実習報告“飯田”というつながり』第Ⅱ部第5章, 東京大学教育学部社会教育学研究室, 2016.

³⁵ 井草祐美『長野県飯田市における工業振興政策の方向性』, 高崎経済大学地域政策学会, 2012, pp.91-92.

³⁶ 中瀬哲史『日本のエレクトロニクス産業の発展方向（下）—「京都企業」モデルからの脱却—』, 経営研究, 2016, pp.18-19.

その展開を飯田ビジネスネットワーク支援センターの機能の変化とともに検討”³⁷し、“企業間ネットワークの構築が開発産業の拡大、地域活性化、人材確保、技術の高度化”³⁸につながったことを明らかにした。そして、今後のインフラの発達などにより、“飯田市とその周辺地域においてものづくりにおけるネットワークや物流、商業などで大きな変化”³⁹が予測されるという展望を示した。

以上から、飯田には「ムトス」の精神と企業への行政的支援が存在することが確認できる。そして両者は現時点では直接的に関連してはいないものの、今後の動向により商業、さらには観光業にまで変化が及べば、「ムトス」の精神と工業の関連が大きくなっていく可能性も出てくる。よって、この報告書において両者の関連を考察することにも意義があるのではないかと思う。

3.2.2 従来の飯田市の工業

この報告書において、現在そして今後の飯田の地域と工業を考察するにあたって、今までの飯田の工業について知る必要があると考えた。よって、ここでは従来の飯田市の工業について、歴史的な流れもふまえながらまとめていく。

まず、金子・樋上⁴⁰によると、

“飯田市の近代工業の発展は 1923 年の現 JR 飯田線飯田駅の開業に端を発した。そして第二次世界大戦を通じて大手企業の下請け事業を行う地域として発展した。1960 年代後半には飯田市の積極的な企業誘致により、機械金属工業が本格的に拡大した。さらに、1975 年の中央自動車道開通以降、精密機械、電子、光学機器といった高度な技術を持った企業の集積地として発展した。この流れの中で、地域ぐるみで産業振興に取り組む拠点施設が必要になり、1983 年に長野県、飯田市、地元産業が一体となって「財団公益法人飯伊地域地場産業振興センター（以下振興センター、現公益財団法人南信州・飯田産業センター）」が設立された。しかし、1990 年代のバブル崩壊後、飯田市の中小企業の受注量は大幅に減少し、転換期を迎えることとなる。これらの企業を支援するため、振興センターは受注確保や地場産業の集積化・ネットワーク化を進め、地域産業の振興を図った。この他にもいくつかの行政的な支援がなされ、地域に根差した地場産業を軸とした産業振興が図られてきた。”

飯田市の産業の就業割合を、井草（2012）⁴¹を参照して以下にまとめる。以下の五つの図は井草（2012）からの引用である。

³⁷ 金子愛・樋上龍矢「飯田市における機械金属工業による企業間ネットワークの構築」, 地域研究年報, 2013, p.75.

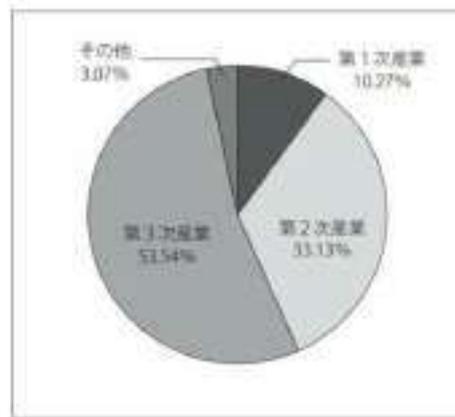
³⁸ *Ibid.*, p.76.

³⁹ *Ibid.*, p.76.

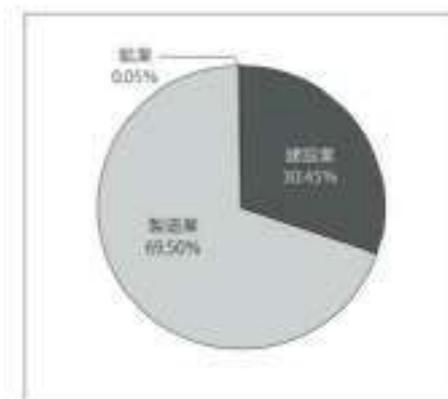
⁴⁰ *Ibid.*, pp.64-65.

⁴¹ 井草祐美, *op cit.*, pp.84-85

2000年代になり、飯田市の産業の就業割合は以下ようになった。第1次、第2次産業就業割合ともに全国平均を上回っており、どちらも飯田を特徴づける産業といえる。

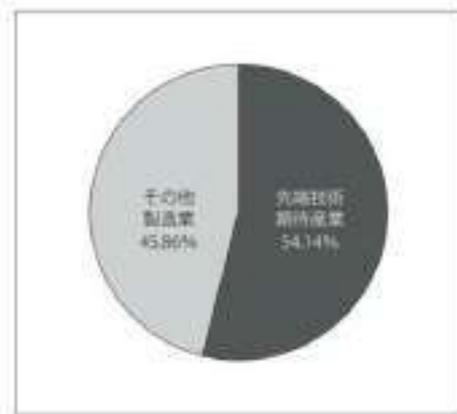


図表 I-3-1 飯田市における産業別就業割合

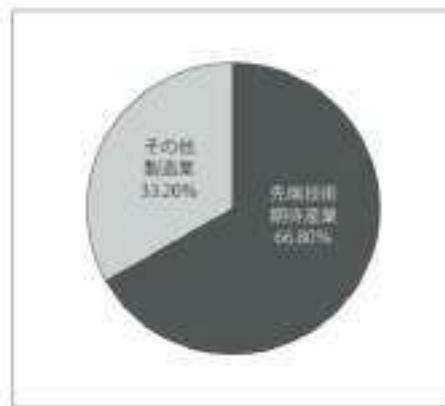


図表 I-3-2 飯田市における第2次産業別就業割合

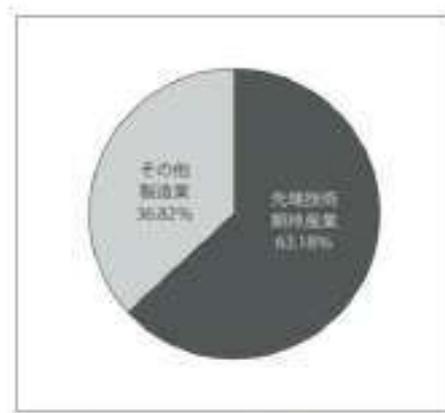
そして現在、先端技術産業、特に、日本標準産業分類における製造業の中の「電子部品・デバイス・電子回路製造業」、「機械器具製造業（電気機械器具製造業、はん用機械器具製造業、生産用機械器具製造業、業務用機械器具製造業、輸送用機械器具製造業）」、「情報通信機械器具製造業」の3つの産業分野（先端技術期待産業）に目を向けると、飯田の先端技術期待産業の従業者数の割合は以下ようになる。



図表 I -3-3 飯田市における先端技術期待産業の従事者数割合



図表 I -3-4 飯田市における先端技術期待産業の製造出荷額等割合



図表 I -3-5 飯田市における先端技術期待産業の粗付加価値額割合

フィールドワークでは工業的な面は見えてこず、また飯田工業高校が 2013 年に廃校になり、飯田 OIDE 長姫高校に統合されたという情報もあったので、飯田に工業のイメージはなかった。しかし、上に見てきたように、飯田の工業的な歴史やデータから、飯田の特徴として工業、特に先端技術期待産業が挙げられることが分かる。航空宇宙産業クラスター形成特区に飯田の企業が参加することになったのも不自然なことではないことが確認できた。

3.3 航空宇宙産業クラスター形成特区とは

それでは、このような特徴を持つ飯田の企業が参加を決めた航空宇宙産業クラスターとは何なのか。ここでは、この航空宇宙産業クラスター形成特区についてまとめていく⁴²。

航空機産業は今後大きな成長が見込まれる産業である。今後の 20 年間で、航空旅客輸送量は全世界で約 2.6 倍、ジェット機の新規需要は全世界で約 1.6 倍になると予想されている。このように、航空機産業は世界的な成長産業だが、特にアジア・太平洋地域を見ると、前者は約 3.5 倍、後者は約 2.4 倍になると予想されている。また、航空機産業は裾野が広く、技術波及効果の大きな先端技術集約型産業である。

ここで中部地域について言及する。かつて、航空機の部品の多くは木製であった。だから、良質な木材の集積地域であり、木材の精密加工に熟達した職人が多数存在した愛知・岐阜・三重地域に航空機工場が設けられ、この中部地域が日本の航空機生産の中心となったのだ。ここでは、日本の航空機・部品生産額の約 5 割、航空機体部品では約 7 割が生産されており、日本の航空宇宙産業の拠点であるといえる。

航空機産業は、信頼性・安全性・軽量化・高性能化などの観点から非常に厳しい技術的要求がなされる。この産業においては日本のシェアが世界的に大きく、日本企業の高い技術力には今後も発展が期待されている。そしてこの産業の波及効果の大きさから、航空宇宙産業を日本の経済の成長エンジンとなる産業と位置付け、その振興に国家戦略として取り組むこととなったのである。

すなわち、航空宇宙産業クラスター形成特区とは、この国家戦略に取り組むために様々な措置を取ることであった中部地域の特区のことである。

3.4 「知の拠点」整備構想案と航空産業宇宙クラスター加入の狙い

3.4.1 飯田市の重点戦略・重点プロジェクトと航空産業宇宙クラスター加入の狙い

今後の地域産業の持続的発展を図るため、これからのリニア時代を見据え、飯田市は様々な取り組みを行なっている。飯田市の重点戦略・重点プロジェクト（以下重点戦略）には 3 つの視点に基づいている。その 3 つの視点とは、「支え、育む産業基盤づくり」「未来を見据えた地域産業の魅力、強み、人材の強化」「新しい力による新しい産業づくり」というものである。この視点の

⁴² 「アジア No.1 航空宇宙産業クラスター形成特区」 入手先 URL : <http://www.pref.aichi.jp/ki-kaku/sogotokku/future/index.html> (アクセス日 : 2017-1-30)

もと、大きく2つのプロジェクトが実行されている。「若者が帰ってこられる産業をつくる」ためのプロジェクトと、「飯田市への新しい人の流れをつくる」ためのプロジェクトである。ここでは前者、特に後述の「知の拠点」に焦点を当ててまとめていく。

「若者が帰ってこられる産業をつくる」とはどのような取り組みなのか。これは、産業振興に寄与する「知の拠点」の形成、新たな産業分野・地域産業の高付加価値化への挑戦、地域産業の担い手確保という、教育、産業、人材の3つの領域での取り組みであると理解できる。

では、「知の拠点」とは何なのだろうか。すなわち、「知の拠点」とは、「リニアバレー構想（リニア時代の地域発展の構想）の実現に資する産業振興と地域振興に寄与する学術研究」の拠点である。2015年8月に打ち出された「知の拠点」整備構想は次の通りである。

“「知の拠点」には、産業振興と地域振興に寄与する様々な「知」を集積できる機能を整備することにより、多様な主体(市民・研究者・企業・団体等)が集い、交流し、協働して教育・研究・創造などの様々な取り組みが実践・展開され、知識・経験・情報が集積、発信される拠点として活用する。”

“また、活力ある地域経済の実現に向けて、「人的ネットワーク」をベースにした研究開発の拠点として、高等教育機関や試験・研究機関など新たな価値を創り出す機能を集積するとともに、企業・大学・研究機関・金融機関・行政などの多様なプレーヤーが相互に関与し、地域にダイナミズムを創発できる拠点づくりを進める。”

“「知の拠点」に地域産業の中核的な支援機関である南信州・飯田産業センター、工業技術センター、飯田 EMC センターと学術研究の核となる信州大学航空機システム共同研究講座を集積することで、航空機システムという新たな分野の拠点を創り出し、地域産業における研究開発の動きを活発化し、産業の高度化、高付加価値化を実現する。”

“また地域づくりの「知」の集積、創造・発信拠点機能を整備することにより、地域の独自性や強みを磨きつつ新たな価値を創発し、ブランド力が高まることで南信州地域が世界からその価値が認められ、多くの人財が共鳴して集まる地域となり、小さな世界都市や多機能高付加価値都市圏の形成に寄与する。”⁴³

この「知の拠点」を活用し、人材の収集や、航空宇宙産業クラスターへの参入など、産業的な挑戦をしていくことで、地域を活性化させていこうというのが一連のプロジェクトの産業面の姿であるといえるだろう。

3.4.2 飯田市の取り組みの成果と展望

ここでは、航空宇宙産業クラスター参入における飯田市の取り組みの成果と展望をまとめる。

⁴³ 長野県飯田市「産業振興と地域振興に寄与する学術研究の「知の拠点」整備構想(案)（旧飯田工業高校の利活用方策案）」, 2015, p.1.

【これまでの成果】

“経済産業省の支援によりコーディネーターを配置、(公財)南信州・飯田産業センター、金融機関とも連携、人材、技術、資金面におけるサポートを実施。更に、経済産業省の支援により、特殊工程の拠点工場を整備し、サプライチェーン（ボトルネック工程の解消）を強化。”

“AerospaceIIDA も、地域中核企業である多摩川精機を支える重要なサプライヤーへと成長、多摩川精機の B787 パイロットコントロールシステムの部品や B737max 向け飛行制御装置用センサユニットの受注獲得にも貢献した。他にも多くの取り組みをしているが、この二つのプロジェクトだけでも、最盛期には飯田地域全体で〈5 億円/年〉規模の売上を見込む。”⁴⁴

【今後の課題と課題解決の方向性】

“多摩川精機については、継続的に Tier1 としての受注獲得を可能とする体制構築が必要。Tier1 レベルへのレベルアップにより、設計権・販売権を獲得することで、収益性・業界での存在感を飛躍的に高めることが可能。また、AerospaceIIDA については、多摩川精機を支える存在でありつつも、他企業からも受注獲得ができる更なる体制強化が求められる。”

“そのため、関係者の更なる底上げのためには、とりわけ、高度技術者の育成、新たな研究開発に対する支援、試験・評価機能の強化 に対応する更なる環境整備が必要となる。”

“こうした課題に対し、「知の拠点」の整備を通じ、地域での更なる産業振興へ繋げる。”

※Tier1...システムインテグレータ。システムインテグレータとは、顧客の業務内容を分析し、問題に合わせた情報システムの企画、構築、運用などの業務を一括して請け負う業者のこと。システムの企画・立案からプログラムの開発、必要なハードウェア・ソフトウェアの選定・導入、完成したシステムの保守・管理までを総合的に行う⁴⁵。

※AerospaceIIDA...「飯田航空宇宙プロジェクト」で築かれた信頼関係を基に企業の壁を乗り越え、結いの精神を持って生まれた共同受注体⁴⁶。

【これまでの取り組み】

問題点

- ・地域の人材を育てる大学がない
- ・各企業の OJT による教育の経営能力、管理・技術力、資金力の不足

⁴⁴ 萩本範文「新しい産業づくりへの取り組み」、第3回地域しごと創生会議、2016、p.11.

⁴⁵ 「IT用語辞典 e-Words」入手先 URL：<http://e-words.jp/w/%E3%82%B7%E3%82%B9%E3%83%86%E3%83%A0%E3%82%A4%E3%83%B3%E3%83%86%E3%82%B0%E3%83%AC%E3%83%BC%E3%82%BF.html>（アクセス日：2017-1-30）

⁴⁶ 「エアロスペース飯田入手先」URL：<http://www.aerospace-iida.com>（アクセス日：2017-1-30）

解決策

- ・企業 OB の活用
- ・外部の大学，支援機関の活用

→飯田産業技術大学の創設

【知の拠点づくり】

上記の取り組みでは地域力の向上に限界が訪れた。そこで飯田市が打ち出した「知の拠点」整備構想は以下の通り。

- ・人材の吸引
- ・企業の吸引

→知の集積・人材育成システムの重層化

(研究機関，航空機システム工学共同研究講座（信州大），航空機システム試験場（公設試），南信工科短大，工業系高等学校という各機関の集積）

→航空機システム・装備品事業への挑戦（Tier1 へ）

この「知の拠点」の核こそ，航空機システム・装備品事業分野への挑戦である。大まかな仕組みとしては，

- ・高度な知の集積と人材の育成

→①「信州大学航空機システム共同研究講座」の設置

- ・研究開発を支援する試験，評価機能の強化
- ・工業技術センター，EMC センターの機能拡充

→②公的試験場としての機能強化

という 2 つの取り組みの相互作用により，地域産業を振興していこうというものである。この「知の拠点」の候補地として，廃校になった旧制飯田工業高校が挙げられている⁴⁷。

3.4.3 産業振興の知の拠点

以上のように様々な施設の整備・機能拡充が計画されているが，4 の最後に主要な施設の機能を説明する。

- ・南信州・飯田産業センター

“南信州とは，長野県南部の「飯田市と下伊那郡」を指す，人口約 18 万人の地域です。標高 3 千メートル級の中央アルプスと南アルプスに挟まれており，中心を天竜川が流れています。古くから数多くの地場産業が興り，地域の歴史と風土の中で育まれ発展してきました。

⁴⁷ 萩本範文，*op cit.*，2016，pp.12-13.

近年になり、地域に根ざした地場産業を軸とした地域ぐるみの産業振興対策の必要性から、昭和 59 年に長野県、市町村、業界が一体となって第三セクター方式で当センターが設立されました。施設は、多目的大ホール、各種会議室等があり住民と地場産業とのふれあいの場として、また業界の新商品開発、需要開拓、人材養成のための研修、情報提供事業の推進等を行っています。また、地場製品の常設展示即売場、喫茶店がありますのでご利用ください。”⁴⁸

・工業技術センター

“工業技術センターは急速な技術革新に伴う技術の高度化、製品の品質向上及び保証といった新たな時代のニーズに対応するため、また、飯伊地域の中小企業の技術向上を図るため、地域における人材、技術、情報、資源を効果的に活用した新技術・新製品の開発並びに情報の高度化を図ることを目的として、昭和 62 年 2 月に設立されました。

本センターは、依頼試験、機器貸出、技術相談等を行っております。工業製品の測定試験、各種測定機器の校正を行い、校正した計器類には試験成績書と校正シールを発行します。また、顕微フーリエ変換赤外分光光度計 (FT-IR) および、ガスクロマトグラフ質量分析計 (GC/MS) を用いた微量有機成分、臭気等の定性分析、他にも走査型電子顕微鏡および X 線元素分析装置を用いた工業製品の元素分析等も行っております。更に製造時のトラブル対策、新規事業、新製品開発等に対する技術支援、相談等を行っております。”⁴⁹

・EMCセンター

“電磁波（電波）は私たちの生活のあらゆるところで利用されています。ところがパソコンや携帯電話などからは不要な電磁波が出されています。それらの電磁波によってテレビの画面やラジオにノイズが入ったり、医療機器や自動車に影響を及ぼすことがあります。

今後も電波利用製品は益々多様化し、軽量小型化が進むことによって、電磁ノイズを出さず、電磁派の影響を受けない製品の開発が必要です。EMCセンターは製品から出ているノイズのレベルを測定したり、電磁波を照射したとき、製品が誤動作しないか試験評価できる施設です。”⁵⁰

・航空宇宙産業クラスター拠点工場

“(公財) 南信州・飯田産業センターは、今後成長が期待される航空機産業に着目し、「中京圏に近いという地の利」と「当地域に厚く集積している精密加工・電気電子技術の基盤」を活かして、平成 18 年 5 月より「飯田航空宇宙プロジェクト」に取り組んでいます。このたび、航空宇宙産

⁴⁸ 南信州・飯田産業センターHP「南信州・飯田産業センター」入手先 URL : <http://guide.isilip.org/?cid=37541> (アクセス日 : 2017-1-30)

⁴⁹ 公益財団法人 南信州・飯田産業センターHP「工業技術センター」入手先 URL : <http://guide.isilip.org/?cid=37534> (アクセス日 : 2017-1-30)

⁵⁰ 南信州・飯田産業センターHP「EMCセンター」入手先 URL : <http://guide.isilip.org/?cid=37530> (アクセス日 : 2017-1-30)

業クラスターを強固なものとするため、航空機産業における特殊工程技術（熱処理・表面処理・非破壊検査）機能を有する「航空宇宙産業クラスター拠点工場」を整備しました。

地域内全体の実施可能な工程幅を広げ、地域内一貫生産体制を確立し、国内外の航空宇宙関連コンポーネントや部品メーカーからの受注獲得を目指します。また、国際戦略総合特区「アジア№1 航空宇宙産業クラスター形成特区」へ貢献し、強い地域産業の形成を目指します。”⁵¹

・飯田産業技術大学

“飯田産業技術大学とは社会人のための働きながら学ぶことのできるバーチャル大学です。最近では述べ 1000 名を越える受講者の皆様に勉強していただき、社会人大学として皆様のお役にたつ講座の開催を心がけています。

今年度も技術講座, 経営講座, 特別講座を 3 本柱とし, 数多くの講座を開催・予定しています。”

52

3.5 飯田地域の変化と今後の展望

ここまで見てきた計画は、他の産業クラスターや地域づくりも見据えた大きなもので、とても産業、特に工業の面だけで把握しきれものではない。上記の取り組みに加えて、これらの取り組みを支える機能として教育機関の増強も図られている。この報告書の最後に、飯田市がどのような方向に地域を作っていくとしているのか、学術面と人口面から見てまとめる。

・信州大学航空機システム共同研究講座の概要について

“飯田地域（知の拠点：旧飯田工業高校）に信州大学のサテライトキャンパスを設置し、航空機システムの研究開発と高度人材育成を行う。（学部生，社会人学生の受け入れ）”

“信州大学内に航空宇宙システム研究センターを設置し、航空機システム共同研究講座が行う研究内容に応じて必要な支援（専門教授の派遣等）を行う。”⁵³

・信州大学南信州キャンパス構想について

“共同研究講座 4 年間の実績を評価し、その後の将来性を見極める中で、信州大学が設置する「先鋭領域融合研究群」の一つに格上げとなる可能性も秘めている。”

“航空機システム分野のみならず、バイオをはじめ新分野の共同研究講座への広がりも期待される。”

⁵¹ 南信州・飯田産業センターHP「航空宇宙産業クラスター拠点工場」入手先 URL : <http://guide.isilip.org/?cid=54686> (アクセス日 : 2017-1-30)

⁵² 南信州・飯田産業センターHP「飯田産業技術センター」入手先 URL : <http://college.isilip.org/?cid=34791> (アクセス日 : 2017-1-30)

⁵³ 産業経済部工業課「『信州大学航空機システム共同研究講座』の運営を支援する コンソーシアムの立ち上げについて」, 2016, p.2.

“まさに、当地域が切望する高等教育機関設置の第1歩として期待できる。”⁵⁴

飯田市はこれらを含む様々な取り組みにより、交流人口や定住人口の増加を見込んでいる⁵⁵。定住人口については、学部生、社会人学生、労働者が挙げられ、UターンだけでなくIターンを期待した構想である。このような発展の中で、地域はどのように変わっていくのだろうか。これについて、飯田市のHPより、企画課・工業課は以下のような文面を公表している。

“この度の「知の拠点」整備構想においても、将来的な高等教育機関の設置を目指しており、「信州大学航空機システム共同研究講座」の開設も、その取組に通ずるものです。少子化の進行など大学を取り巻く環境がますます厳しくなるなか、高等教育機の設置に向けては、大学等と連携・協力し、新たな「知」や「価値」の創造に通ずる教育・研究活動の実績を積み重ねつつ、その価値を発信し広く認められることが重要であり、リニア中央新幹線の開通効果を最大限活かすためにも、地域の強みを活かしながら今からできることを着実に進めていくことが重要と考えます。”

56

つまり、飯田市は新たな「知」や「価値」の創造だけでなく、これを広く発信し、地域の強みを生かして発展していくことを意識している。その方法の一つとして、地域づくりや段階的な発展が計画されている。

“飯田市歴史研究所の移転も、地域振興の知の拠点づくりに向け、南信州の歴史・文化・風土など地域の価値を探究する学術研究機能や、地域づくりの情報発信機能の更なる充実を目指してのことであり、南信州・飯田産業センターと同じくその機能を拡充し旧飯田工業高校へ移転することで、知の拠点の一翼を担おうとするものです。”

また、当地域における高等教育機関の設置に向けた考え方ですが、これまでも南信州広域連合における「プロジェクト会議」で検討を重ねてきた経過があります。このプロジェクトでは、高等教育機関の設置に向けては段階的な取組を長期に亘って行うことが適当との判断のもと、まずは特定の専門分野に関する大学院大学を目指し、大学院大学設置により一定の知的集積が実現した後にその後の展開として4年制大学等の設置を目指すとの方針が、平成26年3月に確認されているところです。”⁵⁷

⁵⁴ *Ibid.*

⁵⁵ 長野県飯田市「産業振興と地域振興に寄与する学術研究の「知の拠点」整備構想(案) (旧飯田工業高校の利活用方策案)」, 2015, p.4.

⁵⁶ 飯田市企画課・工業課「【提言】旧飯田工業高校を活用した4年制大学などの誘致について」
入手先 URL : <https://www.city.iida.lg.jp/soshiki/34/teigen16-05-26-01.html> (アクセス日: 2017-1-30)

⁵⁷ 飯田市企画課・工業課「【提言】旧飯田工業高校を活用した4年制大学などの誘致について」
入手先 URL : <https://www.city.iida.lg.jp/soshiki/34/teigen16-05-26-01.html> (アクセス日: 2017-1-30)

また、人口増加に関して、「人」という面について調べると、飯田市のHP⁵⁸を見てわかるように、行政がU I ターンに対する支援を良く意識していることが分かる。U ターンした人々はもともと飯田出身であるということもあり、地域になじめないということはあまりないのではないかと思う。しかし、この部分は調査や事例を見つけることができなかった。一方、I ターンした人々に関しては、様々な感想が公開されており⁵⁹、また、過去の報告書⁶⁰を参照しても、行政の行う里親制度、ワーキングホリデーなどを利用し、さらに、市域活動への参加／不参加にかかわらずおすそ分けなどを通じて地域との交流もあるようだ。こうしてI ターンをした人々が生活の中で地域の良さを知り、地域に染まっていくことが予想される。

しかし、信州大学南信州キャンパスの設置により大学生が飯田に入ってくると、また別の「断絶」が起こる可能性がある。大学在学四年間という短期間で、彼らはどう地域に溶け込んでいけるのか。飯田風越高校に行ったアンケート調査⁶¹によると、地域活動・市民活動のうち、特に公民館活動に高校生が参加しない理由の大半が「参加するきっかけがない」「身近に公民館の情報が少ない」というものが挙げられている。小学校から中学校、高等学校へと学年が上がるにつれて地域とのかかわりが薄れていくというのはよく言われていることだが、地域の学生であってもそうなのだから、外部から入学した学生はなおさらだろう。将来的にやってくるであろう彼らが飯田に溶け込めるかどうか、飯田の住民主体のまちづくり文化の今後を考えるにあたって重要になってくるのかもしれない。

工業化による人口流入と地域の関わりについては、参考になるものが見つからなかったため、残念ながら今回の報告書では言及することはできない。しかし、地域の「断絶」に関する先行研究でも言及されている通り、“普段それほど接点を持つことがない世代間での情報の断絶は著しく、それがそのまま人的繋がり希薄さに繋がってしまう”⁶²という。工業化に伴う生産年齢人口の増加は必然であり、彼らが地域と結びついていくための仕組み作りも今後求められるだろう。

3.6 終わりに

7-1-30)

⁵⁸ 飯田市HP「結い[U I] ターン」入手先 URL : <https://www.city.iida.lg.jp/site/yuiturn/>
(アクセス日 : 2017-1-30)

⁵⁹ *Ibid.*

⁶⁰ 櫻井美果・志津田萌「飯田市美術博物館が作る“飯田”というつながり」『2015年度飯田市社会教育調査実習報告“飯田”というつながり』第I部第3章、東京大学教育学部社会教育学研究室、2016。

⁶¹ 古江広樹「飯田市高校生の地域参加の現状」『2012年度飯田市社会教育調査実習報告 人の元気でいきるまち—うみだす・ささえる・つなげる・はぐくむ—』第I部第3章、東京大学教育学部社会教育学研究室、2013。

⁶² 魚屋伸・三留智人・若山勇人「課題と提言」、『2012年度飯田市社会教育調査実習報告 人の元気でいきるまち—うみだす・ささえる・つなげる・はぐくむ—』第III部第5章、東京大学教育学部社会教育学研究室、2013、p.118。

以上のように、航空宇宙産業クラスター加入という工業的な視点から、飯田という地域についてまとめてきたが、「(人を呼ぶことにつながる)産業を活性化させる仕組み」と「地域において人を結びつける仕組み」について、後者の重要性が示唆されることとなった。しかし、飯田の市政経営の方向は「帰ってこられる産業づくり」「住み続けたいと感じる地域づくり」「帰ってきたと考える人づくり」の3つを軸に、多様な主体による協働が形作る文化経済自立都市である。つまり、人のつながりについても行政の考えるところであり、この意識が飯田市歴史研究所の移転などにも表れている。第3章では「帰ってこられる産業づくり」の一部である航空宇宙産業クラスターに関する構想と、それに伴う人の動きについて書くにとどめる。

引用文献・資料, Web ページ

アジア No.1 航空宇宙産業クラスター形成特区 入手先 URL : <http://www.pref.aichi.jp/kikaku/sotokoku/future/index.html> (アクセス日 : 2017-1-30)

飯田市「結い [U I] ターン」入手先 URL : <https://www.city.iida.lg.jp/site/yuiturn/> (アクセス日 : 2017-1-30)

飯田市企画課・工業課【提言】旧飯田工業高校を活用した4年制大学などの誘致について」入手先 URL : <https://www.city.iida.lg.jp/soshiki/34/teigen16-05-26-01.html> (アクセス日 : 2017-1-30)

井草祐美『長野県飯田市における工業振興政策の方向性』, 高崎経済大学地域政策学会, 2012.

石原江理「Uターン就職された市役所職員へのインタビューと、ムトス飯田事業について」, 『2015年度飯田市社会教育調査実習報告“飯田”というつながり』第Ⅱ部第5章, 東京大学教育学部社会教育学研究室, 2016.

魚屋伸・三留智人・若山勇人「課題と提言」, 『2012年度飯田市社会教育調査実習報告 人の元気でいきるまち—うみだす・ささえる・つなげる・はぐくむ—』第Ⅲ部第5章, 東京大学教育学部社会教育学研究室, 2013.

エアロスペース飯田 入手先 URL : <http://www.aerospace-iida.com> (アクセス日 : 2017-1-30)

金子愛・樋上龍矢『飯田市における機械金属工業による企業間ネットワークの構築』, 地域研究年報, 2013.

公益財団法人 南信州・飯田産業センターHP「南信州・飯田産業センター」入手先 URL : <http://guide.isilip.org/?cid=37541> (アクセス日 : 2017-1-30)

公益財団法人 南信州・飯田産業センターHP「工業技術センター」入手先 URL : <http://guide.isilip.org/?cid=37534> (アクセス日 : 2017-1-30)

公益財団法人 南信州・飯田産業センターHP「EMCセンター」入手先 URL : <http://guide.isilip.org/?cid=37530> (アクセス日 : 2017-1-30)

公益財団法人 南信州・飯田産業センターHP「航空宇宙産業クラスター拠点工場」入手先 URL : <http://guide.isilip.org/?cid=54686> (アクセス日 : 2017-1-30)

公益財団法人 南信州・飯田産業センターHP「飯田産業技術センター」入手先 URL : <http://college.isilip.org/?cid=34791> (アクセス日 : 2017-1-30)

櫻井美果・志津田萌「飯田市美術博物館が作る“飯田”というつながり」『2015年度飯田市社会教育調査実習報告“飯田”というつながり』第I部第3章, 東京大学教育学部社会教育学研究室, 2016.

産業経済部工業課「『信州大学航空機システム共同研究講座』の運営を支援する コンソーシアムの立ち上げについて」, 2016.

中瀬哲史『日本のエレクトロニクス産業の発展方向(下) —「京都企業」モデルからの脱却—』, 経営研究, 2016.

長野県飯田市「産業振興と地域振興に寄与する学術研究の「知の拠点」整備構想(案) (旧飯田工業高校の利活用方策案)」, 2015.

萩本範文『新しい産業づくりへの取り組み』, 第3回地域しごと創生会議, 2016.

古江広樹「飯田市高校生の地域参加の現状」『2012年度飯田市社会教育調査実習報告 人の元気でいきるまち—うみだす・ささえる・つなげる・はぐくむ—』第I部第3章, 東京大学教育学部社会教育学研究室, 2013.

ムトス飯田推進委員会「ムトス飯田まちづくり 活動報告集」, 2014.

「IT用語辞典 e-Words」入手先 URL : <http://e-words.jp/w/%E3%82%B7%E3%82%B9%E3%83%86%E3%83%A0%E3%82%A4%E3%83%B3%E3%83%86%E3%82%B0%E3%83%AC%E3%83%BC%E3%82%BF.html> (アクセス日 : 2017-1-30)

第4章 持続可能なコミュニティのためにできること

—観音寺市との比較—

吉田 美穂

4.1 はじめに～飯田での気づき～

昨年9月、飯田での実習に訪れた際、最も印象に残っていることに「学生と行政職員の方の距離が近い」ということがある。公民館活動や地域人教育といった独自の活動があるが、これらを通して学生側と行政側のコミュニケーションが活発に行われている印象を受けた。

特に飯田 OIDE 長姫高校の高校生が、高校の中だけで地域活性化の学びを行うのではなく、自ら動いて行政職員の方や地域の人々を巻き込んで、自分たちの街を賑やかにしようとしているという事実に驚かされた。

またこれと同時に、高校生だけでなく地域の特性を生かして地域を盛り上げようとしている市民の方がたくさんいらっしゃることを、学ぶことができた。地域を盛り上げるための活動といえば、飯田に来る前は行政の方がイベントを主催したり、何かしらの方策を立てたりするというイメージを持っていた。だからこそ、飯田の市民の方々の取り組みには驚かされたし、非常に感銘を受けた。

飯田での研修以前は、私は地方の地域活性化に関してとりわけ関心を持つことがなかった。地方出身でありながら、地方の活性化・復興に対するある種の諦めや、アクションを起こしたとしても「どうせ何も変わらない」という気持ちが強かった。

しかし、こうした飯田市での取り組みを学んだことを通じて、地域の活性化の可能性を感じるようになった。地域活性化は必ずしも、行政しか行うことができないとは限らない、むしろ市民が主体となっている活動の方が多様かつ柔軟な取り組みを行うことができるのではないかと感じた。

私は、私自身の地元の市について地域活性化や持続可能なまちづくりのために行なわれていることに関しては、行政による取り組み程度しか知らなかった。そこで、①住民が主体となった取り組み②その住民を確保するための取り組みとして行われていること（Iターン・Uターン）③及び大学との連携による動き、という観点に絞る。まず飯田市での取り組みを参照型として見つつ私の地元の市での取り組みについて調査しようと思う。それを踏まえた上で、両市の違いや共通点について考え飯田市での今後の取り組みとして今までになかったこととして可能なことはないかを模索したいと思う。

4.2 飯田市での取り組み

4.2.1 住民を主体とした活動～飯田 OIDE 長姫高校の生徒～

飯田市で行なわれている地域活性化・持続可能なまちづくりのための取り組みの中でも、私が最も印象に残っているものは、高校生が主体となってイベントを企画したり、地域の人とのつながりを持つための学習を行ったりしていることである。飯田 OIDE 長姫高校の学生たち、とりわけ **Sturdy Egg** の学生が行っていた活動は、私にとってはどれも目新しいものだった。例えば遠山郷の魅力を伝えるために、「楽しい」をモットーに様々なイベントを実行したり、「桜咲造」というセアスペースを設けたり、という企画は全て **Sturdy Egg** の学生たちが主体となって行ってきたものである。

ここで注目すべきなのは、学生たちの企画したイベントや取り組みは授業外でも行われているという事実である。通常、地域学習や地域を知るための学校外での実習といえ総合の時間の間で収束してしまう印象が強い。しかし彼・彼女たちは自主的に動いて、地域の人々や行政の方々との協力を得ながら、ここの高校の学生たちは学びの場として学校と地域の二つが与えられている、というよりは学校と地域が一体化したような環境の中で学んでいるように思われる。つまり、OIDE の先生だけが教師ではなく、学生たちと何らかの形で関わりを持っている地域の大人たちもまた、教師であるのだ。

こうした飯田 OIDE 長姫高校の学生たちの姿を見て、私が感じたのは学びの経験ができるのは高校生だけでなく、先生や地域の人々・行政の方々もまた然りなのではないかということだ。もちろん、知識を与えられ教えられる対象は学生である。しかしこの地域人教育では、学生が主体的に地域の人同士が関わることでできるイベントを企画したり、地域の人が集って楽しめる場所を作るためにはどのようなことをすれば良いかということを考えたりした上で、学生側から先生や地域の人々・行政の方々に対する意見の発信がある。学生が学校の教師や地域社会の人々から学ぶという一方のベクトルだけでなく、このように学生側からの発信の機会も設けられており、双方向のベクトルがあることによって、より良いものにするために市民全員が地域の盛り上がりのために何かしらの形で貢献できる潜在性を秘めているのである。

4.2.2 結い(UI)ターン

現在、空き家バンク制度が全国的に広まっている。飯田市もその一つで、2017年1月現在7件の空き家が募集対象となっている。これと並行して「地域振興住宅」というものが設けられており、「人口減少などの諸問題を抱える中山間地域において、地域の振興を担う方の定住を促進するため」(飯田市)に住宅が提供されている⁶³。我々が9月のフィールドスタディーでお世話になった千代地区はまさにこの「地域振興住宅」の制度の対象の地区であり、私がお世話になった方もこの制度を利用して関西地方から引っ越してきたとおっしゃっていた。

飯田市に移住する人の目的としてどのようなものがあるだろうか。飯田市のホームページに掲載されている移住者の声の中には「食べ物の美味しさ」「豊かな自然」「子供の育てやすさ」など

⁶³ 飯田市ホームページ「結い[UI]ターン」入手先 URL : <http://www.city.iida.lg.jp/site/yuiturn/>
(アクセス日 : 2017-1-20)

という魅力に惹かれて移住をしてきたという声が多い⁶⁴。

こうした魅力は都市圏に住み、生活している人々にとっては日常生活の中では得難いものである。だからこそ、これらをうまく発信することができれば、飯田を訪れたい、飯田に住みたいと思えるきっかけが増える可能性がある。

移住という形に限らず、飯田市外から人が訪れるきっかけとなるように発信することは、持続可能な社会を作るために非常に有効であると思われる。この詳細については最終章で述べることにする。

4.2.3 大学との連携

大学と連携して地域をより良いものにしていこうということも印象に残ったものの一つである。我々東大生のみならず、飯田市では大学生を積極的に受け入れており、常に外部から見た飯田とはどのようなものかということ意識している。

これを実践する組織の一つとして、飯田大学連携会議「学輪 IIDA」という組織がある。まさに私たちが参加した南信州・飯田フィールドスタディーも大学連携の動きの一つである。飯田市では東京大学に関わらず様々な大学がこのフィールドスタディーを経験しており、飯田市について学んだのちにフィードバックを行っている。

こうした動きは“大学との専門的な知見と、飯田が培ってきた様々な取組との融合により、取組の高度化が期待出来る”⁶⁵とされている。

飯田市の中に大学は存在しない。そのような環境の中で大学との連携を図るということは一見、困難のように思われる。しかし、大学との連携にも様々な方法があり、県内にある大学による高校生を対象としたキャリア教育、また飯田市から離れた場所にある大学との連携により新たな知見を取り入れるということも行っている。

4.3 観音寺市での取り組み

4.3.1 商店街を中心とした取り組み

観音寺市の大きな取り組みの一つとして、商店街の商工会が中心になって街に賑わいを取り戻そうとあらゆる手を使ってイベントを行ったり、商品開発をしたりしている。

観音寺市の商店街には商店街復興委員会があることが暗示しているが、かつての賑わいはなくなってしまう。人々を呼び戻し、商店街の楽しさや商店街についてもっと知ってもらおうという気持ちから始まった企画のひとつに、「Shop in Shop」というものがある。この取り組みは商店街の店の中の一区画を、別の店が借りてその店の商品を置かせてもらう、というものである。例えば、衣料品店の中にケーキ屋の商品があったり、着物屋でパン教室が開かれたりするという

⁶⁴ 飯田市ホームページ「地域振興住宅のご案内」入手先 URL : <http://www.city.iida.lg.jp/soshiki/6/shinkoujuutaku.html> (アクセス日 : 2017-1-20)

⁶⁵ 学倫 IIDA ホームページ「知のネットワークへの挑戦」入手先 URL : http://gakurin-iida.jp.org/wp-content/uploads/2012/01/challenge_knowledge.pdf (アクセス日 : 2017-1-28)

ものである。

従来の顧客が他の店の商品に触れる機会になる上に、これまで商店街にはさほど関わりのなかった新たな顧客層を取り込み、商店街について知る機会になりうる。

Shop in Shop はコミュニティーデザイナーの山崎亮氏が提案したもので、もともとは衣料品店を営む家族が、息子がパティシエになって観音寺市に戻ってきたものの初期投資が足りずに実家の両親の店の一区画を利用して始まったものだったそうだ。ここに目をつけた山崎氏が、商店街の他の店でも取り入れられないかと提案したのが Shop in Shop である⁶⁶。

さらに、Shop in Shop の取り組みを進めるために商店街の店と他の店をつなぐパイプ役として、「今宵も始まりました」という Ustream による番組がある。これは「かんおんじまちなかプロジェクト」の一環で商店街の人々が集まって観音寺市について語るもので、フォロワーは千八百人を超えている。商店街で生きる人々の姿をありのままに映し出していて、ここを通じて新たなつながりができている。この取り組みについては、観音寺市以外の地方自治体も影響を受けて同じように番組作成に取り組んでいるところがある。

また、最近商店街で盛り上がりを見せている企画のひとつに「かんおんじパンストリート！」というイベントがある。これも商店街のお店の一区画を利用して、四国全域からベーカリーショップが訪れ、商品を販売するというものである。このイベントは 2015 年から行われているが、毎年かなりの人気を集めており 2016 年は市内外の 47 店舗のベーカリーショップが集まった。元々、観音寺市内にはベーカリーショップは有るものの数が少ないために、こうして多様なベーカリーショップのパンが手軽に手に入るということで数多くの市民が商店街に集まり、売り切れ続出だったとのことだ。2015 年に行われたものは 1 万人の来場者を見込み、観音寺市の人口の 6 分の 1 が商店街に足を運んだということになる。

観音寺市の外に向けた発信も行われている。商店街の中にある呉服店の店長が、香川の名産品であるうどんを柄に取り入れた手ぬぐいを作ったが、店舗でおくだけでは売り上げはさほど見込めそうにない。そこで着手したのが SNS を利用した宣伝・アピールだ。Facebook を利用して、インターネット上でコネクションを作り、その上でこのうどん手ぬぐいを使った写真を投稿し拡散する。すると、うどん手ぬぐいを買いたい人が続出し現在では、観光地のホテルなどでお土産として取り扱われたり、ふるさと納税の一商品となったりしている。

こうした取り組みのキーワードとして見えてくるのは「新しさ」である。従来のものだけでは人を十分に打ち込めるほどの魅力が不足している、という現状に直面した。商店街に限らずビジネスにおいて、足が遠のいていった顧客を取り戻すための施策として新商品を開発するということがある。

これと並行して新商品の開発だけでなく商店街という場所を生かした新たなイベント、従来は

⁶⁶ 全国商店街支援センター「商店街の～ラストチャンスという覚悟が呼び起こした変化の連鎖 新たな取り組み企画提案事業」入手先 URL : <http://www.syoutengai-shien.com/case/report/article/dvmij3000000ctce.html?channel=main> (アクセス日 : 2017-1-19)

なかったものと呼び水としておくことで従来の顧客を呼び戻すだけでなく、これまで商店街に足をそれほど運ぶことがなかった新しい層を商店街について知ってもらうことで、新たな顧客として取り入れることも可能なのではないだろうか。

4.3.2 空き家バンクを生かしたIターンとUターン

現在、観音寺市を含む香川県の西部（西讃）では至る所に空き家が目立っており、特にお年寄りが亡くなってから空き家のまま放置されているケースが後を絶たない。また、持ち家を複数件持っているケースも多く、家族が都会に出て住む人がいなくなったことで空き家になってしまう家を放置してしまうこともしばしばある。

こうした空き家をうまく活用できないかと考えられたのが、空き家バンクである。全国的にも行われている活動として知られているが2017年1月現在、西讃地区で募集されている空き家の数は85件に上る⁶⁷。

こうした空き家に新しい住民を受け入れるための呼び水として観音寺市が掲げているものの一つに地域の産業がある。観音寺市は農業が盛んだがレタスの生産は日本一を誇る。また、地価が安いことからレタスの生産を始め、農業のしやすい環境を安価に提供出来ることを売りにしており、主に都心部に在住していて農業をしてみたいと考えている人々を対象に積極的に空き家を販売・貸出している⁶⁸。

もう一つ大きな産業として酒造業がある。観音寺市には明治時代から続く老舗の酒造がありこれを求めてIターンする人もいるようで、10年前に観音寺市に移住して以来酒造業で仕事をされている方の声の中には「酒造用のお米作りを地元でお願いすることで、農業振興や地域コミュニティ形成の一助になれば」（観音寺市）⁶⁹というものもある。

外から人を呼び込むことは、長い目で見ると人口減を食い止めるための一つの手段になる。現状、観音寺市では地元で生まれ地元で育ち、地元で仕事を持っている人たちがほとんどであるコミュニティが多い。そのようなコミュニティに外部の人が溶け込むことは、時には地域独特の閉鎖的な性質で難しさを伴うこともあるが、これを乗り越えてこうした取り組みを続けていくことによって地域社会の担い手を確保していくことにつながる。

4.3.3 大学生との連携～観光産業～

観音寺市でも県外の大学生との交流を通じて、地域の活性化のためになるヒントを得ようとする取り組みが行われている。その全貌を調査するため、昨年11月に明治大学駿河台キャンパスで行われた、「藤江ゼミ公開シンポジウム」に参加した。

⁶⁷ 観音寺市ホームページ「観音寺市で暮らしませんか」入手先 URL : <https://www.city.kanonji.kagawa.jp/site/ijyu/>（アクセス日：2017-1-18）

⁶⁸ *Ibid.*

⁶⁹ *Ibid.*

藤江ゼミの学生たちは実際に夏休みを利用して観音寺市に滞在し、観光産業という側面から観音寺市を活性化できないかと模索している。

彼・彼女らが提案したものの中でも、情報発信の方法については非常に興味深いものがあった。まだ実現には至っていないが、主にインターネットを使った手法で動画サイト You Tube に観音寺市の高校生とともに編集した動画を配信しようというものや、観音寺市内の景色・人々・食べ物など様々な写真を投稿してアピールしようというものがある。

夏休みの後、ゼミ生たちが体験したことについて実際に東京に戻った時に後輩のゼミ生にプレゼンテーションをして観音寺のアピールを行ったそうだ。「自然が豊か」「ここで写真を撮りたい」という意見もある一方で、「手間をかけて観音寺市に行って、観光をしようとは思わない」という意見もあった。

また実際に観音寺市に訪れたゼミ生の中には「ゼミのプログラムとして、地元の方があらゆるところを紹介・案内してくれたから楽しいと感ずることができたが、もし地元の方とのふれあいがなく、学生だけで行こうとするならば、これほどは楽しめなかつたろう」という人もいた。

アクセスの悪さ、という壁を守り超えるためには人と人とのつながりがその場所にあるかどうかということ、外部から来た人たちを受け入れられるかということが重要なのではないか。

このように考えると、人と人とのつながりが生まれるような体験型のイベントが、人々を惹きつける大きな魅力になるのではないかと思う。まさに、飯田 OIDE 長姫高校の生徒が行っていたような取り組み、例えばツアーを組んだり、地元の食材を使った商品を開発してそれを人々に食べてもらったりということ、そのものではないかと思う。

観音寺市でも似たような取り組みが、まだ初歩の段階ではあるが、行われている。高校生が主体となって、「かんおんじ町歩きツアー」を定期的に開催している。観音寺市内の魅力的だと思うところを高校生がピックアップして、ボランティアとして観音寺の街を案内しているのである。

また「よるしるべ」というイベントが今年から開催されている。これは商店街の広場や、寺の門を利用してプロジェクトマッピングを行い、様々なデザインを施し歩く人々を楽しませるという企画である。

いずれも、観音寺市の外から人をしっかり取り込むというよりは、市内の人々が自分たちの街を自分の足で実際に歩くことで見直すきっかけになり、それでいて楽しむことができるという点で、非常に有意義なものであると思われる。

4.4 各市での地域活性モデル

4.4.1 飯田市のモデル

こうして各市の取り組みの特徴を比較した時に、まず飯田市のものは地域の人々で作っていくことを実現させようとしていることが挙げられる。それも無理やり強制的なものではなく、「自分たちがこういうことをやりたい」という気持ちから学生や市民の方々は動いている。例えばここで述べた地域人教育を中心として地域の人々を巻き込んでいく取り組みはその一つであり、また

公民館を使って行われる学びを生み出そうという取り組みもそうであろう。飯田市の未来のために動いている人は、高校生や行政の方に限らず、市民が数多くいるという点が特筆すべき点である。また、このような活動のヒントを得るために大学など外部との連携も強い。

さらに注目すべきなのは、その活動の場所が飯田市内のいたるところにあるという点だ。学校現場だけでなく公民館や市内にある空きスペースなど、多岐にわたる。そこで行われる学びはまさに、飯田に住む人たちの生きる姿を学ぶというものだろう。

4.4.2 観音寺市のモデル

観音寺市での取り組みは街の特性がうまく活かされている、換言すれば街の特性がわかっているなければ実現は難しかったのかもしれない。観音寺市の取り組みの特徴としては商店街に市内在住の人を呼ぶために、それまで目新しさを取り入れた大勢の人が喜ぶイベントを開催した、ということがある。またこれと同時に Facebook や Ustream と言った情報網を使ってその取り組みを外部にも発信している。

観音寺市は飯田市に比べると、大学生との結びつきは比較的弱いと思われる。先に述べた明治大学との交流は定期的に行われているものの、その規模はまだ小さく観光産業として大学生のアイデアを取り入れるまでもまだまだ時間がかかりそうなのが現状である。観音寺市は今以上に、外部からの視点を取り入れていく必要があるのではないか。

しかし高校生を主体とした動きはかなり盛り上がっている。観音寺市内の高校生が商店街の空きスペースに集まって放課後の時間を過ごしたり、高校生が研修として訪れた先のお土産を大量購入し、その場所で市民に販売するなどイベントを企画したりしている。またそこには地域の大人も入ることができる。先述した「かんおんじ街歩きツアー」は市内の人に限らず市外の人も参加対象として、高校生が主体となって行われているものである。

こうしてみると、観音寺市は活動の主体は高校生と商店街の方が中心となっている。市民全体としての動きは飯田市に比べると弱い側面がある。外部との連携としても現状では大学に限れば先述した明治大学のみで発展途上という段階である。

ここでの学びは市外の人を魅了するような観光資源を見つけるということ、また市内在住の人を商店街に人をもう一度呼び戻すための施策ということではないだろうか。

飯田市		観音寺市
高校生・市民・教師・行政	主体	商店街・高校生
強い	外部との連携	発展途上中
街の人の生きる姿	学び	観光資源

図表 I-4-1 各市における取り組みの特徴

4.5 おわりに

以上のことを振り返ってみると、飯田市にも観音寺市にもそれぞれにあった形でコミュニティ作りへの取り組みが行われている。軸としてみてきたのは地域社会に住んでいる住民が中心となった動き、一つは空き家バンクを利用して外部から U ターン・I ターンとして市民を新たに呼び込む動き、もう一つは大学や外部の機関との連携である。その中でもそれぞれの市に共通する点としては、市民と学生が中心となった動きがあること、それは強制的なものではなく自分たちが「楽しい」と思えるからやっているという 2 点があげられる。

飯田市は地域の人で地域を作っていくということがベースにあるが、これから新たに取り組む可能性があるとするれば、商店街を中心とした活動は一つの手段ではないだろうか。9 月に飯田市の研修に来た時、飯田の商店街通りも歩いたことを覚えている。所々でシャッター街が目につく中でも、今でもお店を営んでいる方々が実際にたくさんいらっしゃって、また並木横丁では昼は安価にランチをいただけ、夜は居酒屋として大勢の地域の方が集まる場所になるお店が新しく出来ている。商店街の人々が何らかの形で地域の人々が集まるような場所・空間を作り、ひいてはそれを飯田市の外に発信できるようになることは持続可能な社会を作る上で大いに資するものになるのではないか。

商店街は全国的な動きとして、1990 年代・2000 年代頃から復興のための取り組みが行なわれている。飯田市の商店街に関しても、老舗のお店でも売上が最も好調だったのは 1980 年代頃だったとされている⁷⁰。商店街に人をもう一度呼び込み、商店街を中心に地域の人々が集まって楽しむことができるようなきっかけがあれば、それは商店街でビジネスを行う人にとっても、それ以外の市民にとってもプラスになるものではないだろうか。

また、もう一つの手段として観光産業があるのではないかと私は思う。現在、観光産業は日本全国で力を入れて取り組まれている。しかしながら、観光で利潤を得ることができる地域は限られており、有名な観光名所があるところや、東京・大阪・京都・名古屋などのいわゆるゴールデンルートが中心である。その他の地域にももちろん、観光の魅力となるものはあるがアクセスの悪さなどが理由でそれほど大きな産業とはなりえないケースが多い。

観光庁の『観光白書』ではインバウンドというキーワードがあるが、今後インバウンドの需要はますます高まっていくと思われる。この流れに乗じて従来のゴールデンルートから外国人観光客を呼び込むことが可能なのではないだろうか⁷¹。飯田市のある長野県では「南信州 DMO」がある。観光を売りにするためには、まずその土地にある魅力を磨き、その後に関する情報を広く発信することが必要になってくる。

私が飯田市の観光産業にとって非常にメリットになるであろうと考えたのはリニア中央新幹線

⁷⁰ 橋本暁子・鈴木将也・周 雯婷 石坂 愛・金 延景・渡邊瑛季 『飯田市中心街における商業機能の変容』 入手先 URL <http://www.geoenv.tsukuba.ac.jp/~region/pdf/nenpo35/nenpo35-01.pdf> (アクセス日:2017-1-14)

⁷¹ 観光庁ホームページ「観光白書」 入手先 URL : http://www.mlit.go.jp/kankocho/news02_000283.html (アクセス日 : 2017-1-19)

が開通し、飯田市にもリニア新幹線が停車するということである。飯田市を訪れて飯田市について知るきっかけを持つ人が増えるのは確実であるし、観光の面で魅力があれば、それは飯田市で滞在するきっかけにもなる。東京や大阪などの都心からのアクセス面が大幅に変わるという点にも注目すれば国内外問わず、多くの観光客を見込めるのではないかと思う。年代・国籍・地域を問わず幅広い層をターゲットにして観光産業を伸ばすことができるのではないだろうか。

例えば人とのつながりが感じられる体験や豊かな自然を感じられるような経験、また新鮮な食材も飯田市には豊富であり、遠山郷で行われている霜月祭など古くから大事にされてきた伝統のお祭りもある。私自身が経験したことを一つ挙げるとすれば、農家の方の家での民泊は人の優しさ・暖かさを感じられた上に都会ではなかなか手に入らないような新鮮で美味しい野菜を使った料理もいただき、また時間の関係上農作業に関わることはできなかったが農業の楽しさをたくさん語っていただき、1日宿泊しただけで飯田市の魅力を感じ取ることができた。

飯田市の魅力はこれだけではない。商店街の人が中心となって行われる取り組みも観光産業として発信していけば人を呼び込むきっかけになるかもしれない。今飯田市にある観光資源を生かして観光産業が発展すれば、それは人材サイクルがうまく循環することにもつながる。飯田市にたくさんある魅力を多くの人に発信することは、持続可能な社会を作るための一つの方法ではないかと私は考える。

引用文献・資料, Web ページ

飯田市ホームページ「結い[UI]ターン」入手先 URL : <http://www.city.iida.lg.jp/site/yuiturn/> (アクセス日 : 2017-1-20)

飯田市ホームページ「地域振興住宅のご案内」入手先 URL : <http://www.city.iida.lg.jp/soshiki/6/shinkoujuutaku.html> (アクセス日 : 2017-1-20)

学倫 IIDA ホームページ「知のネットワークへの挑戦」入手先 URL : http://gakurin-iida.jp.org/wp-content/uploads/2012/01/challenge_knowledge.pdf (アクセス日 : 2017-1-28)

観光庁ホームページ「観光白書」入手先 URL : http://www.mlit.go.jp/kankocho/news02_000283.html (アクセス日 : 2017-1-19)

観音寺市ホームページ「観音寺市で暮らしませんか」入手先 URL : <https://www.city.kanonji.kagawa.jp/site/ijyu/> (アクセス日:2017-1-18)

経済産業省ホームページ「がんばる商店街 30 選」入手先 URL : <http://www.meti.go.jp/press/2013/02/20140226001/20140226001-4.pdf> (アクセス日 : 2017-1-15)

全国商店街支援センター「ラストチャンスという覚悟が呼び起こした変化の連鎖～商店街の新たな取り組み企画提案事業」入手先 URL : <http://www.syoutengai-shien.com/case/report/article/dvmij3000000ctce.html?channel=main> (アクセス日 : 2017-1-19)

橋本暁子・鈴木将也・周 雯婷 石坂 愛・金 延景・渡邊瑛季「飯田市中心街における商業機能

の変容」入手先 URL : <http://www.geoenv.tsukuba.ac.jp/~region/pdf/nenpo35/nenpo35-01.pdf>
(アクセス日 : 2017-1-14)

第5章 「飯田型公民館」と「学習する地域」

福森 敏也

5.1 はじめに

5.1.1 報告書の作成に至るまで

私がこの報告書で原稿を執筆するのは、今年度で3回目となる。一昨年度は、拙稿「飯田で飲食店を営む人々の暮らし」にて、飯田の中心市街地で居酒屋やレストランを経営する方々の「こころ」に迫った。昨年度はテーマをがらりと変え、「下伊那テーゼに学ぶ公民館のあり方」と題して、発表から50年を経た「公民館主事の性格と役割（下伊那テーゼ）」に注目しつつ今のような公民館活動のあり方が目指されているのかを調査した。

これまでの興味関心、とりわけ昨年度の調査内容を踏まえて、私は今年度も「飯田型公民館」の特徴と広がりについて更に深く調べてみたいと思うに至った。中でも私が興味を持ったのが、飯田市が「飯田型公民館」のノウハウを他地域にも知らせるべく企画している「解体新書塾」である。というのは、昨今の地方創生ブームの中で、活発な活動を行っている自治体に学びに行くことは各地で行なわれているだろうが、飯田市はその特徴的な公民館活動を自ら率先して「輸出」を試みようとしているように見え、そこにどういった真意があるのか気になったためだ。

ところが、実際に飯田市でお話を伺い、さらには「解体新書塾」に参加した兵庫県尼崎市の職員の方々にもお話を伺いに行くと、単なる「輸出」と「輸入」の関係ではない、より相互発展的な関係が見えてきた。両市の置かれた全く異なる状況の中で、それぞれの実情に応じてどのような地域のあり方が目指されているのか、私の伺った内容を報告したい。

5.1.2 調査概要

2016年12月15日に、「飯田型公民館」と他地域の関わりについて、飯田市公民館副館長・木下巨一氏にお話を伺った。その後、2017年1月6日に、木下氏のご紹介により「未来を拓く自治と協働のまちづくり研究集会」および「解体新書塾」を通じて飯田市と関わりのある兵庫県尼崎市へ訪問した。尼崎市では、尼崎市男女共同参画課の奥平裕久氏と顧問の船木成記氏より、「みんなのサマーセミナー」と「みんなの尼崎大学」の取り組みについてお話を伺い、そのまま「みんなのサマーセミナー」実行委員会の会議にも参加させていただいた。本章では、両市で伺った内容をもとに、互いの地域活動のあり方と関連・相互発展について、関連する文献の内容も交えつつ述べてゆく。

5.2 飯田市と尼崎市の関係の発端

5.2.1 飯田型公民館の特徴と「ガラパゴス化」

長野県飯田市は、昨年度までの報告書でも幾度となくふれられているように、公民館活動が非

常に盛んな地域である。その特徴を改めて述べるに当たって、まずは戦後の公民館史の流れを大雑把にさらっておきたい。

第2次世界大戦の終了後、GHQによる占領下の日本は、戦前の軍国主義・全体主義的価値観に対する反省から、民主主義を基盤とした政治への転換を目指していた。このとき、「民主主義の学校」として、庶民のレベルにまで民主主義的な思想を広める拠点とするべく、社会教育課長・寺中作雄らによって構想されたのが公民館であった。寺中によると、公民館は“多方面の機能を持った文化施設”であり、すなわち“社会教育の機関であり、社交娯楽機関であり、自治振興機関であり、産業振興機関であり、青年養成機関であり、その他町村において必要と思えば尚いろいろの機能を持たしめて運営することができるが、要するにそれらの機能の総合された町村振興の中心機関である”⁷²。それから各地で公民館建設の機運が高まり、あらゆる場所で地域課題の解決に向けての活発な議論が行われるようになった⁷³。

しかし、1970年代以降、新自由主義的な政策のもとで公民館の再編や指定管理化が進み、「社会教育の終焉」と呼ばれるような事態が訪れた。高度経済成長を背景に社会の構造は大きく変化し、特に都市部では人々の地縁的な関係が希薄になっていった。そんな中多くの自治体において、行財政の効率化を狙い、それまで独立であった公民館を首長部局の下へ再編したり、公民館の統廃合を進めて対象地域を広域化したり、指定管理者に運営を委託したりといったことが行われた。その結果、地域の実情に沿っていない講座形式の学習活動が増えるなどして、公民館での活動が地域の課題解決になかなか結び付かないことが多くなってしまった。

ところが、全国の多くの公民館がこのような歴史をたどった一方で、飯田下伊那地域には今なお「社会教育の終焉」を微塵も感じさせない活発な「公民館」活動が根付いている。飯田市では、中央の飯田市公民館を連絡調整役のハブ公民館としながら、市全体に20の地区公民館と105の分館が存在している。その20の地区公民館すべてに市の若手職員が主事として配置され、公民館主事の仕事を通じて住民活動の最前線に立つ中で、自治体職員としての力量形成がなされる仕組みとなっている。住民にとっては、「公民館」は自分たちの暮らしに密接に結びついた議論の場であり、生活上のあらゆる課題を乗り越える糸口となる場である。この「公民館」活動を貫いているのが「4つの原則」、すなわち、①地域中心の原則、②並列配置の原則、③住民参画の原則、④機関自立の原則、である。牧野篤(2012)は、これらの4原則が“直前の原則を保障する関係の体系をとっている”としており、飯田の公民館制度の特徴を“極めて高度かつ強固な地域性と自立性”と表現している⁷⁴。

このような特徴をもつ飯田市の「公民館」は、全国の他の公民館と区別して「飯田型公民館」

⁷² 寺中作雄『公民館の建設』公民館協会、1946、pp.7-12.

⁷³ とりわけ飯田下伊那地域の公民館の勃興については、拙稿「下伊那テーゼに学ぶ公民館のあり方」(2015年度飯田市社会教育調査実習報告『“飯田”というつながり』第I部第1章)も参照されたい。

⁷⁴ 牧野篤『人が生きる社会と生涯学習—弱くある私たちが結びつくこと—』、大学教育出版、2012、p.153.

と呼ばれる。「飯田型公民館」は、牧野光朗飯田市長の言葉を借りれば、講座中心・貸館型の他の公民館とは異なる独自の進化を遂げたという意味で、“ガラパゴス化”している。このように、他の公民館が半ば衰退しているような実状にあり、飯田だけが孤立無援の状態で「公民館」活動を行っているという現状は、飯田にとっても悪影響を与えかねないものである。そこで、市長から木下氏へ「飯田型公民館を全国に広めてほしい」との要望があったという。このときちょうど、フィリピンのレガスピ市に飯田型公民館のノウハウを広める事業も行っていたことから、国内他地域へも同じように広めていこうという機運が高まった。ここで、飯田と足並みをそろえ始めたのが兵庫県尼崎市である。

5.2.2 尼崎市の「学習する地域」構想

兵庫県尼崎市は、大阪と神戸という 2 つの大都市の間に位置し、阪神工業地帯の中核として、最盛期の 1970 年前半には約 55 万人の総人口を誇った都市である。高度経済成長期の人口の大幅な社会増の中で、飯田などに比べるとくだんの通り地縁の関係が希薄となり、尼崎市内の公民館も、全国の多くの自治体と同様に講座中心・貸館型の運営がなされるようになった。現在、人口は約 45 万人であり、市内の公民館は 6 つのみである。

尼崎市は、これまで多くの課題や困難にぶつかってきた都市でもある。まずひとつは、高度経済成長期の公害問題である。国内有数の工業地帯として工場が立ち並び、そこから出る排煙や排水が、人々に甚大な健康被害をもたらした。また、それとほぼ同時期に、ベトナム戦争を背景としてベトナムからの移民難民が数多く流入してきたということもあった。日本語が通じず、日本の文化も知らない海外の人々を社会的に排除してしまうと、犯罪や貧困問題につながってしまうことが懸念された。そして、1995 年には、阪神淡路大震災という未曾有の大災害が尼崎を襲った。これらの課題や困難に立ち向かうためには、人々の「学び」が不可欠であった。

こういった地域特性をもつ尼崎市の職員に、船木氏は 2012 年より「顧問」という立場で就任した。船木氏は(株)博報堂より尼崎市に出向し、ソーシャルマーケティングの専門知識を活かしつつ、現在まで 5 年にわたり尼崎市のブランディングを行ってきた方である。その船木氏が就任当時から思い描いていたのが「学習する地域」という構想であった。確かに尼崎市の公民館は「社会教育終焉論」の延長上にあるような実態かもしれないが、船木氏が考えるには、人々の「学び」の力そのものが衰えたわけではなく、暮らしのあちこちに「学び」は根付いているのだという。それは、上に述べたような数多くの困難を、住民たちの「学び」によって解決してきた市の歴史を見ても明らかである。公害問題に対しては、子どもの体調不良に対する親の気づきが「学び」につながり、企業や市に対して訴訟を起こすに至った。移民難民に対しては、市民が中心となって「日本語読み書き教室」を開催し、社会的包摂を目指した。尼崎にはこのような、「飯田型公民館」ほど顕在的ではないかもしれないが、しかし着実な「学び」の営みがある。これを基軸に据えた地域づくりを行えないかというのが、船木氏の「学習する地域」構想である。行政分野で重要なキーワードである「自治と協働」という言葉についても、それを動かすエンジンは「学習」なの

だと船木氏は言う。この構想は、当然「飯田型公民館」の考え方と調和的なものであった。

5.2.3 飯田・尼崎両市の連携へ

木下氏と船木氏の初めての出会いは、2013年2月に飯田市で開催された「未来を抱く自治と協働のまちづくり研究集会」であった。この企画者として木下氏と船木氏が一緒になり、その集会の中で船木氏が「学習する地域」構想を宣言したのが、飯田市と尼崎市が足並みをそろえてゆくきっかけになったのだという。船木氏の「学習する地域」構想を具体化していく上で「飯田型公民館」の考え方はひとつのヒントになると思われたため、飯田市と尼崎市とで置かれた状況は大きく異なるものの、学びあえる部分を互いに学びあうような関係を目指して、両市の連携はスタートした。その後「未来を抱く自治と協働のまちづくり研究集会」の第2回が2015年12月に尼崎市で、第3回が2017年1月に長野県松本市で行われたが、いずれも両市が参加し、相互に学びあいを進めている。

5.3 飯田市による「解体新書塾」の取り組み

5.3.1 「解体新書塾」の概要と経緯

飯田市は、「ガラパゴス化」からの脱却を図るため、「飯田型公民館」の考え方を国内他地域に広める取り組みとして、2014年より「解体新書塾～公民館・地域自治のあり方をとらえ直す自治体間研究～」を実施している。これまで、第1回が2014年10月18～20日に、第2回が2016年2月21・22日に、いずれも飯田市内で開催された。本項では、解体新書塾の概要と開催に至るまでの経緯について記述する。

2014年に実施された第1回には、兵庫県尼崎市・長野県松本市・駒ヶ根市の自治体職員と、大学教授ら研究者、飯田市民など、総勢68名が参加した。第1回のテーマは「住民自治を支える自治体職員の力量はどのように育つのか」というものであり、有識者による講義や、飯田市の現役公民館職員への公開インタビューなどが行われた。

2016年に実施された第2回には、第1回に参加した3市に加え、長野県上田市・石川県内灘町・島根県邑南町の3市町からも参加があり、研究者や市民らも含めて計42名が参加した。第2回は、「住民自治力」を高めるために、そこに暮らす住民自身が学ぶこと、そして個人としての学びから集団としての「学び」と活動に広がっていくことを、「学びあう地域づくり」と捉えた上で、それを支える自治体の在り方を考えることがねらいとされた。そのねらいのもとで、研究会では、木下氏と船木氏の対談や、九州大学八木教授による講義、飯田市・牧野市長による講義などが行われた。

この「解体新書塾」が開催されるに至った経緯は、まず、2節1項に記したような課題意識からである。「飯田型公民館のガラパゴス化」という事態に関して、域内で優れた実践が展開されているということ自体は当然悪いことではないが、一歩飯田という地を離れると、公民館という存在が蔑ろにされて住民どうしの「学び」が十分に行われていない現状があるとするならば、それ

は「われわれ飯田さえ上手くいってればそれでよい」と言われていたような話ではない。木下氏によると、市長より命を受け、他の地域を巻き込んだ取り組みが何かできないか画策していたところ、飯田市公民館の元職員であり木下氏の先輩にあたる長谷部三弘氏より「それは『解体新書塾』だ」というお言葉があったのだという。「解体新書」はかの有名な杉田玄白・前野良沢による人体解剖の翻訳書であるが、それを飯田型公民館に当てはめて「解体」してみようという意味を込めて、この名前に決定したそうだ。

こうして開催に至った第1回の解体新書塾に、尼崎市からは船木氏ら職員十数名が参加した。木下氏と船木氏は、それ以前に開催された「未来を抱く自治と協働のまちづくり研究集会」にて卓をともししており、船木氏が当時すでに抱いていた「学習する地域」構想を具体化するにあたって、飯田型公民館をひとつのインスピレーションとすべく、解体新書塾へ参加するに至ったという。単なる研修ではなく、互いの中に自己満足でおわらないような関係をしっかりとつくり、自治体のトップまで巻き込みながら、変えられるところをとことん変えていこうというのが解体新書塾のスタンスであり、この取り組みは次項で記すような大きな効果をもたらすものとなった。

5.3.2 「解体新書塾」がもたらした効果

この「解体新書塾」の成果と課題には様々なものがあるが、飯田市ホームページに掲載された第1回の記録には、以下の3点にまとめられている⁷⁵。

(1) 飯田型の公民館制度や現場主義の仕事を通して飯田市の職員が獲得した「住民自治を支える職員の力量とその獲得のプロセス」についての共通点が明らかとなり、このことを参加した自治体職員や研究者が共有することができた。

(2) 主体である住民が力量をつける営みを支えることが自治体職員の役割であり、そう考えると自治体の職員には飯田型の公民館の経験の中で獲得してきた「住民に巻き込まれる力」が根底にあることを確認することができた。

(3) 一方で、地方自治の本旨である住民自治、住民との協働の意義などの理解の及んでいない職員層も少なからず存在することも見えてきており、その意味では飯田の職員の一層の意識改革の機会が必要であることが課題である。

今回木下氏に伺った話の中でも、これらに近い内容の成果が語られていた。木下氏によると、「解体新書塾」に参加した尼崎市の職員の感想からは、次のような成果を読み取ることができるという。1つは、「主役は市民なのだ」という意識が尼崎でも芽生えたことであり、もう1つは、その「主役」としての市民とともに、自治体職員も汗をかくことが必要だと多くの職員が感じていたことである。これらの2点から、飯田型公民館の根幹をなしていると言える基本的な考え方

⁷⁵ 飯田市ホームページ「解体新書塾の全記録」入手先 URL : https://www.city.iida.lg.jp/uploaded/life/29494_57459_misc.pdf (アクセス日 : 2017-1-29)

が、尼崎市の職員にも共有されたものと見える。実際に、たとえば尼崎市の大庄公民館では、「大庄公民館ことはじめの会」と題して、公民館が用意した講座を市民が受講するという従来の形ではなく、「何をやりたいか」という根本のところから市民と一緒に話し合っ決めていく取り組みが始まったそうだ。加えて、3 つめの成果として、尼崎の「地域」の概念が変わったということがあるという。尼崎市内の6 つの公民館を人口あたりに換算すると、7~8 万人に一館ということになるが、それではあまりに広すぎて「地域」の隅々にまで「学び」を行き届かせることができない。尼崎市には飯田市のように細かい自治会や集落の単位がないが、これからはより細かい単位で「地域」を見ていく必要があるという意識改革が始まったようだ。

奥平氏に伺った話からも、尼崎市の公民館のあり方の変化の一端を垣間見ることができた。従来の貸館型運営の「私の学び」が、「みんなの「学び」」へと変わってきたという。奥平氏は以下のように述べていた。

“公民館で自分たちの学びだけで終わってた人たち、公民館利用者、尼崎では「都市型」の話はいろいろ聞いているかもしれないですけど、やっぱりこう言ってみたら「生きがいくくり」みたいな、趣味の集まりを貸館としてやって、そこで例えば大正琴を弾いたり踊りをしたりとかっていうことで、「自分たち楽しいなあ」「よかったなあ」で終わってしまっていたことを、公民館が「いや、それをじゃあ地域の人たちに教えてあげてくださいよ」ということで、自分がやってきたことをオープンにする場、誰かに伝える場みたいなことを、去年から持ち始めて、その人たちは今までずっと「私の学び」で終わってたところなので、「そんなんうまくいくか、恥ずかしいわ」みたいな感じやったんやけど、いざやってみると、そこに「誰かに伝える」ということの楽しさとか、子どもが一人だけ来てくれたこともすごく嬉しくて何かやっていくみたいな、そういうところに動き方を変えていったりとか。”

この話の中の“「誰かに伝える」ということの楽しさ」という言葉は、尼崎でも市民主体かつ共同的な「学び」が展開されはじめたことを、象徴的に示しているように思う。「都市型」と言われる講座中心の公民館が、飯田型公民館のような、住民が誰に言われたわけでもなく勝手に動いていくような場へいきなり転換することはできないだろうが、そこにうまく具合にテコ入れしていく様子が描かれている。

逆に、解体新書塾を主催したことによって、飯田市自身にとってはどんな効果があったのかについても伺った。木下氏は以下のように述べていた。

“この事業の中で尼崎の職員の人たちは本当にこう加速的っていうかな、爆発的につながりを増やしてるんだよね。その中でやっぱり見る目が変わっている姿があって、飯田の公民館はそういう仕組みの土台の上におのずから主事は学べるんだけど、ここの人たちは自分たちでそういうのを作っていくっていう、要は作り上げていく姿に、職員の姿勢に飯田の主事たちはすごく学んで

るっていうか。何も無いところから作っていくっていうことの、この人たちのやる気みたいなのはすごいなって。(中略)ある意味日本の公民館ってもともと、戦争で荒廃した日本の国を地域からなんとか復興していこうっていう、それをそこに住む人たちが自分でやっっていこうっていう呼びかけで始まったもので、尼崎が今ちょうどそういう姿っていうか、課題を抱えた街が、そこに暮らす人たちが自分たちで当事者・主体になって、そういう問題を解決できるまちづくりを始めようっていう、要は戦後の草創期の公民館ってこういうエネルギーだったんだなあっていう、そういう原点を見るような場所?...っていうのが、尼崎のいろんな試みにも飯田の主事を何人も連れて行くとるんだけど、やっぱりそういう振り返りになってるね、主事たちが。”

様々な困難を乗り越える「学び」が尼崎市に潜在していたことを考えると、全く何もなかったわけではないだろうが、少なくとも飯田のように自治体職員と住民の関係を支える強固な基盤があるわけではない尼崎において、眠っていた何か動き出すパワーには底知れぬものがあるようである。その姿に飯田の主事たちが学ぶという、相互に高め合う関係がこの話から読み取れる。

次節では、このように大きな変革の力をもつ尼崎市が、飯田との関係もありながら近年始めた取り組みについて述べてゆきたい。

5.4 尼崎市「みんなのサマーセミナー」と「みんなの尼崎大学」

5.4.1 「みんなのサマーセミナー」の概要と経緯

尼崎市では、2年前の2015年8月より「みんなのサマーセミナー」(以下、「サマセミ」)を実施している。サマセミは、市民自らが講師となり、自らの得意分野を生かして授業を行い、他の市民が生徒として話を聞くという、参画型の学習イベントであり、「学習する地域」の実現への試金石として展開されているものである。財政的な困難もある中で、公民館のような学習の拠点を新たに建設せずとも「学び」の場を創出している、優れた取り組みであると言える。本項では、サマセミの概要と開催に至るまでの経緯について記述する。

サマセミは、2015年8月8日・9日に第一回が開催され、翌2016年8月6日・7日に第二回が開催された。尼崎市内の百合学院中学高等学校・旧聖トマス大学を舞台として、みんなのサマーセミナー実行委員会と尼崎市の共催という形で開催されている。市役所の担当課は社会教育課と協働・男女参画課であり、両課の「提案型協働事業」という位置付けになっている⁷⁶。実行委員会は、市内の学校職員やコープこうべなど、さまざまな団体に属する有志個人が集まって結成されたものであり、市と役割分担をしながらサマセミの運営に当たっている。例えば、当日の時間割の作成は実行委員会が行うが、一方個人で請け負うのが難しい問い合わせ対応などは市が行い、講師の呼びかけは実行委員会と市とで協力して行う、などといった役割分担がなされている。運営資金は、有志による寄付金やクラウドファンディング、企業協賛、市の補助金などにより賄われており、また多くのボランティアスタッフが運営に携わっている。講師となるのは中高生から

⁷⁶ 「提案型協働事業」には補助金が交付され、サマセミの資金源のひとつとなっている。

お年寄りまで老若男女さまざまであり、すべて無償である。市長や教育長なども一講師として授業を受け持っていたりする。そして、市内外の誰もが無料で、生徒としてこの授業を受講することができる。生徒の男女比はほぼ半々であり、約4割は尼崎市外からの受講生で、特に30代～50代の現役世代が多いというのが特徴である。授業の内容も、暮らしに直結する身近な内容から、社会問題を取り扱ったものまで多種多様である。これまでの講座タイトルを例に挙げると、「おいしそうなナシをかこう!!」や「みんなで作ろうオリジナル兜!」のように、「学び」の敷居を下げて、みんなが楽しく参加できるようなものも数多く用意されている。さらに、朝礼や校歌、皆勤賞などの学校的な要素もあり、「いま自分は学んでいる!」という実感が得られるような2日間となっている。第一回は170講座が開講され、約3,000名の生徒が参加した。翌年の第二回には倍の320講座となり、約3,500名の生徒が参加した。

8月6日(土) 1時間目 (09:30 ~ 10:20)		
講座 1 SONODAヒリオバトル in サマセミ <small>2名 高橋 隆夫</small>	講座 2 茶椅子をもっと知ろう! <small>2名 高橋 隆夫</small>	講座 3 かんたん!新選エゴパック作り <small>2名 高橋 隆夫</small>
講座 4 やさしい野菜生活のはじめかた <small>2名 高橋 隆夫</small>	講座 5 わたしのこころの気気をほきましよう <small>2名 高橋 隆夫</small>	講座 6 チョコチョコ牛切り絵体験 <small>2名 高橋 隆夫</small>
講座 7 スマホで学ぼう! ぽっくもDSAI 教室 <small>2名 高橋 隆夫</small>	講座 8 おもしろき、こともなき世をおもしろく <small>2名 高橋 隆夫</small>	講座 9 任意分教員 <small>2名 高橋 隆夫</small>
講座 10 わくわくスタンシル <small>2名 高橋 隆夫</small>	講座 11 オープンデータでまちを考える <small>2名 高橋 隆夫</small>	講座 12 留読長寿 <small>2名 高橋 隆夫</small>
講座 13 大学4年生と考える! 「今」をどう生きる? <small>2名 高橋 隆夫</small>	講座 14 こころの不思議 <small>2名 高橋 隆夫</small>	講座 15 スマホ写真の楽しみ方 <small>2名 高橋 隆夫</small>
講座 16 割り箸から見える環境保全 <small>2名 高橋 隆夫</small>	講座 17 野菜の育て方 <small>2名 高橋 隆夫</small>	講座 18 各都府県にシジュウ翁を植える <small>2名 高橋 隆夫</small>

図表 I-5-1 時間割の一例（「みんなのサマーセミナー」ホームページより77）

77 「みんなのサマーセミナー」ホームページ 入手先 URL : <https://samasemi.jimdo.com/%E6%8E%88%E6%A5%AD%E5%86%85%E5%AE%B9%E3%81%AF/>（アクセス日：2017-1-31）

尼崎市のサマセミのモデルとなったのは、愛知県で 28 年にわたり開催されている「愛知サマーセミナー」(以下、「愛知サマセミ」)であった。船木氏の知り合いの方が愛知サマセミのリーダーを務めていたというのが発端で、その方に尼崎でレクチャーを開いてもらったり、尼崎市民が愛知サマセミを見に行ったりして準備を進め、尼崎のサマセミの結実に至ったのだという。初めて愛知サマセミを訪問したのが 2013 年のことだったというが、このときには「せっかく来てくださるのなら、ぜひ尼崎の市長に講座をもってほしい」という愛知の主催者側からの要望があり、稲村和美市長が、母親市長、かつ女性市長としての話を教壇で行ったそう。この愛知サマセミには、尼崎市の学童保育関係の職員が 28 年前の発足時から関わっており、奥平氏はその職員の方とも「尼崎でもやりたいね」という話をしたという。はじめは私立高校の 3 人の先生が集まって、「学習指導要領に拠らない、本当に自分たちの教えたいことを教えたい」ということで、わずか 8 講座からこの愛知サマセミは始まったそうだが、30 年近くの時を経て講座数は 3 日間で約 2,000 講座にまで膨れ上がった。奥平氏はこれを“生き物のようなイベント”と表現していたが、それはもうなんとも刺激的な 3 日間であったようだ。1 年後には、船木氏が運営している社会的事業のプラットフォーム「ソーシャルドリンクス」のメンバーも、15 人ほど愛知サマセミの視察に伺い、ついに 2015 年に尼崎市でも「みんなのサマーセミナー」の開催に至った。

最初は、「財政的にあまり余裕のない尼崎市でこんなイベントが開けるだろうか」という懸念もあったというが、これまで 2 回の開催で軌道に乗りつつある。次項では、この取り組みがもたらした大きな効果について記述する。

5.4.2 「みんなのサマーセミナー」がもたらした効果

前項のような経緯でスタートした尼崎のサマセミは、開催 2 年目にしてすでに多くの効果をもたらしている。具体的には、市民が尼崎という暮らしの拠点において、新たな出会いや発見を行う場として機能していると言える。奥平氏は、サマセミという場について次のように語る。

“街の人が自分の経験とかを元に話をして、それを街の人が聞くっていう、どっかから偉い人を呼んできて話を聞いてっていうことじゃなくて、身近な人のそれまでの潜在していた経験や知識なんかを知ること、*「尼崎ってすごいんだ」とか「面白い人がいるんだ」とか、そんなこととか、その活動に興味を持って普段の活動に参加していく、そんな場にしていこうってことで「みんなのサマーセミナー」やってるんやけど...*”

奥平氏は、サマセミをこのような出会いと発見の場にしたいと考えているが、以下の参加者の感想からは、まさにその想いに違わない、魅力的な「学び」の場となっていることが見てとれる。

“講師の方と新たな縁を得ることがあり、このイベントの醍醐味を感じました。来年と言わず、定期的にいろんな場所でこの様な場が増えたらいいなと思います。”

“オープンでフラットな雰囲気での開催。とても良かったです。尼崎の魅力はやはり「人」だと再認識しました。”

実際、サマセミでの出会いが、サマセミ以外の場への学習活動へ派生的に展開していった事例もすでにいくつか存在する。例えば、サマセミに参加したひとりの若者が、再開発ビルの元々カフェであった空間をリノベーションして、「私設寺子屋」のようなものを作った例があるという。彼の呼びかけで約 250 人ものがリノベーションに関わり、完成した「学び」の空間では、様々な市民が講師として講座を開いている。ワンドリンクを場所代とし、講師はみな手弁当という形で、ここ 2 年の間に 100 講座ほどが開講されたそうだ。さらに、もうひとつの例として、尼崎市がソーシャルビジネスコンペを開催した際に「子どもたちに書くことの楽しさを伝えたい」というビジネスプランでエントリーしてきたライターの方が、サマセミをきっかけに市内でボイストレーナーをやっている人と出会い、「書いたことを口に出して表現する」という、プラスアルファが加わった新たな講座に生まれ変わった、ということもあったという。サマセミにおける出会いと発見は、こういった二次的な学習活動を生み出す可能性を秘めている。

また、サマセミは他者との出会いや発見の場であるばかりでなく、自分自身に対する発見の場にもなりうるような仕組みとなっている。奥平氏は、次のようにも語っている。

“実際これやってみると、2 日間で初年度は 170 の授業があったんで、1 日 50 分の 5 時間授業で 10 教室、それからいろんな講座がダーッと集中してるから、ひとつ例えば司法書士による相続遺言制みたいな聞きに行こうと思った人が、せっかく来たから次の時間、これ土曜日の 3 時間目なんで、次の時間 4 時間目もせっかくやから面白そうなの聞いてこうみたいなことで、自分が興味のあることプラスアルファのことに出会える場にも実際なってきた。それから、愛知もこれは言ってたんやけども、「planned happen (計画された偶然性)」という言い方をするらしいんやけども、偶然に出会う、面白い人に出会ったりとか、ほんまに普段やったら行かない話を、聞かない話を聞く場を持つことで、その人の視野が広がって、ほんとはそこを聞いたら「あ、面白そうや」「自分はそんなことに興味があったんや」っていう気づきがあったりとか、それとか「社会ってこうなってるやん」っていう気づきがあったりとか、そういう場面になってるんじゃないかなあと。実際アンケートもそんな意見があったりとか。”

通常の公民館事業などであれば、何か一つのテーマについて講座が開かれ、それに興味のある参加者が集まって、話が終わったらそれで帰ってしまう、ということが多い。しかしサマセミでは、奥平氏も述べている通り、目移りするようなあらゆる講座が次から次に用意されていることで、あることに興味を持ってやってきた市民が別のことにも興味を持つ、といったことが往々にして起こっているのである。参加者からは「受けたい授業が重なってしまった」という主旨の感想も

数多く寄せられており、たくさんの魅力的なテーマを前にして、いわば「学び」への関心がインフレーション状態にある様子が伺える。

このような出会いや発見は、来年度以降の「みんなのサマーセミナー」や、次項で詳しく取り上げる「みんなの尼崎大学」で、さらなる広がりを見せていくように思われる。

5.4.3 「みんなの尼崎大学」構想へ

尼崎市では「学習する地域」の実現に向けて、「みんなのサマーセミナー」の発展形態にあたる「みんなの尼崎大学」というものが現在構想されている。サマセミはそれ自体すでに優れた取り組みであるが、年に1度、2日間だけのイベントとして「学び」を行うばかりでは、残念ながら「学習する地域」が具現化しているとは言い難い。そこで、この「学び」をより恒常的なものとしていくための構想が「みんなの尼崎大学」である。すでに何回か「みんなの尼崎大学オープンキャンパス」として市内各地でイベントが開催されており、市民にとって「学び」がますます身近なものとなりつつある。また、2016年11月26日・27日には、この構想のキックオフフォーラムとして「みんなの尼崎大学はじまるの会！」も開催された。

	開催日	テーマ	場所
第1回	2016年6月28日	ゴミ袋より「知恵袋」 ～面白がって環境活動に取り組む方法を考えてみよう～	あまがさき環境 オープンカレッジ
第2回	2016年7月21日	私たちの「大学」をつくる ～学生会館の素敵な使い方を考えてみよう～	聖トマス大学
第3回	2016年8月18日	つなげる地元ビジネス ～地域の新しいビジネスを考えてみよう～	尼崎創業支援 オフィスアビーズ
第4回	2016年9月7日	アマの公民館の「実は」を聞く ～来るべき公民館の未来を描いてみよう～	小田公民館
第5回	2016年11月9日	まちとつながるDIY	尼崎傾奇者集落
フォーラム	2016年11月26・27 日	みんなの尼崎大学はじまるの会！	園田学園女子大学
第6回	2016年12月4日	子育てをみんなで面白がるヒント	あまびっと
第7回	2017年1月20日	未来をつくる「キョウドウ」を学ぶ	コープこうべ 塚口店 2F
第8回	2017年2月17日	千年前から地域の学び場	富松神社

図表 I -5-2 「みんなの尼崎大学」開催テーマ (Facebook ページより筆者作成⁷⁸)

⁷⁸ 「みんなの尼崎大学」 Facebook ページ 入手先 URL : <https://www.facebook.com/ucmamagasaki/> (アクセス日 : 2017-1-31)

これまでの開催テーマを見てみると、ゴミ問題や子育ての悩みなど、日々の暮らしに直結するような毎回異なるテーマについて、毎回異なる場所で学ばれていることがわかる。大学や公民館はもちろん、小売店や神社なども開催場所になっているのが特徴的であり、どんな場所でも「学び」の場となりうることを象徴していて、地域に根付いた学習活動が展開されていくことが期待される。

こういった「学び」の場は、「みんなの尼崎大学」が実現するまで存在していなかったわけではない。むしろ、そういった場は多分に存在していたといえる。例えば、以前から市が主催していた講座は約 500 あり、さらに指定管理者が委託を受けてやっている講座や、コープこうべなど民間の企業・団体が独自でやっている講座まで加えると、年間 1,000 を超える講座が尼崎市内で展開されていた。これらの学習活動の拠点も、公民館や地区会館、地域振興センター、大学など、多種多様であった。しかし、これだけたくさんの学習機会がありながら、異なる拠点で展開される活動間に連携はほとんどなく、また、来る人が固定化している、内容がマンネリ化している、予算や人手が不足しているといった課題を抱えている活動も数多く存在した。そこで、市の首長部局が中心となって、これらの多様な学習活動の連携・相互調整を図り、互いの顔が見えるような学習活動のプラットフォームを構築しようとして始めた試みが「みんなの尼崎大学」である。いわば、これまでバラバラに存在していた「学び」の場の再コーディネートである。

「みんなの尼崎大学」はまだ模索段階ではあるが、地域の学習活動が新たな出会いを生み、その出会いがさらなる学習活動を生むような市民主体の好循環が、すでに尼崎市で始まりつつある。

5.5 おわりに—飯田・尼崎両市の「学びあう」未来へ向けて—

これまでみてきたように、飯田市における公民館活動は、地域住民自身が自らの暮らしをよりよいものにしてゆく原動力となっている点で、極めて優れた活動である。この活動が「解体新書塾」によってどう広まっていこうとしているのかを捉えることが、筆者の当初の関心事としてあった。しかし、当然のことながら、飯田と他地域では置かれた状況が全く異なるため、飯田で行われている活動をそっくりそのまま「輸出」して、同じことを他地域でもやれば同じようにうまくいくわけでは決してない。このことは、「解体新書塾」などを通じて現在絆が深まりつつある尼崎市との関係においても、もちろん例外ではない。

飯田市の地域的特徴として、多くの人の暮らしが市域内で完結しているということが挙げられる。すなわち、暮らしの土台である家庭、そして自治会や集落といった基礎単位が、学校や職場といった昼間の活動の場と大きく分離することなく、混ざりあうようにして日々の生活を形づくっている。飯田の場合はそこに、強固な社会教育の伝統が根付いていて、「善き市民住民」が自治体職員と共同でものごとにあたることで、地域の「善き明日」が築かれるということへの直感的理解がある。

一方尼崎では、大阪と神戸という二大都市との間で多くの人々が行き来し、人々の暮らしが市域の枠を超えて展開している場合が多い。さらに、45 万人の人口のうち毎年約 2 万人が転出・転

入で入れ替わっているということもあって、人々の関係性はいくぶん流動的である。そのような中で、課題に事欠かない街という地域特性があって、その課題を媒介とした人々の流動的なつながりが、これまではいくぶん潜在的に、これからはより顕在的に「学び」を生み出して、「善き明日」を築いている。

両市の特徴を相対化すると、飯田市は「コミュニティ」ベースの街、尼崎市は「アソシエーション」ベースの街であると言える。前者は地縁関係に裏打ちされている分、地域特有の課題に密着しやすいという特性があるが、一方で、NPOの活動に代表されるような、地縁の枠組みを超えて同じ課題を持つ人どうしが結びつく営みが比較的弱い可能性がある。後者は逆に、地縁の枠組みに囚われず多くの人と共通の課題を共有することができるが、例えば防災や防犯など、よりローカルな関係がものを言う課題への対応は比較的弱い可能性がある。両市でお話を伺っていると、こういった自らの特性を理解しながら、互いに持てるものを出し合っていくような自治体関係が望まれているように感じた。

飯田においても尼崎においても、キーワードとなるのはやはり「学び」である。より質の高い市民住民の「学び」が行われるべく、飯田市と尼崎市が互いに「学びあって」いる。このような相互発展的な関係が今後も続いていくことに期待し、両市の未来に注目していきたい。

謝辞

本稿の執筆に際しまして、大変お忙しい中お話を伺お聞かせくださいました飯田市公民館の木下様、ならびに尼崎市役所の奥平様、船木様に、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

引用文献・資料, Web ページ

飯田市ホームページ「解体新書塾の全記録」入手先 URL : https://www.city.iida.lg.jp/uploaded/ife/29494_57459_misc.pdf (アクセス日 : 2017-1-29)

寺中作雄『公民館の建設』公民館協会, 1946.

牧野篤『人が生きる社会と生涯学習—弱くある私たちが結びつくこと—』, 大学教育出版, 2012.

「みんなの尼崎大学」Facebook ページ 入手先 URL : <https://www.facebook.com/ucmamagasaki/> (アクセス日 : 2017-1-31)

「みんなのサマーセミナー」ホームページ 入手先 URL : <https://samasemi.jimdo.com/%E6%8E%88%E6%A5%AD%E5%86%85%E5%AE%B9%E3%81%AF/> (アクセス日 : 2017-1-31)

R. M. Maclver『コミュニティ：社会学的研究；社会生活の性質と基本法則に関する一試論』[Macmillan and Co., Limited, 1917, 3rd ed., 1924.] 中久郎・松本通晴 監訳, ミネルヴァ書房, 1975.

第6章 飯田におけるイベント活動の検証

増田 健也

6.1 はじめに

飯田における実習を通じて目を引いたのは、様々な主体により個性豊かなイベントが開催されていることだった。具体的には公民館を舞台として行われているもの、学校の教育の一環となされているもの、個人や少人数のグループがリーダーシップを発揮して行われているものなどがあった。そしてそのどれもが地域の人々を巻き込み「楽しそうな」活動を行っていることが非常に印象的だった。

筆者個人の経験となるが、群馬県・東吾妻町でオリエンテーリングイベントの運営に携わったことがある。結果として町外からやってきたオリエンテーリング愛好家には楽しんでいただけたものの、「町にたくさん人が来てくれる」と町の人に期待されながら地域の人々を上手く巻き込んで事業を行えなかったということに対する後悔も残った。そのような経緯もあって地域を舞台としたイベントに期待されること・できることについて考えるようになった。そうした中で飯田で行われるイベントを見て、何かヒントが得られるのではないかと考えた。

そしてこのことが近年よく言われている「地域おこし」に与する可能性があることもまた感じている。もちろん「地域おこし」を主目的とすればイベントそのものが壊れる可能性も孕んでいるが、どのような点で「地域おこし」に寄与しているかを考えることは十分に意味のあることだと考えた。

以上の動機から、地域におけるイベントを分析する研究を行うに至った。

6.2 研究方針

6.2.1 リサーチ・クエスチョンの設定 と意義

リサーチ・クエスチョン：イベントを行うことで地域に何をもたらしうるか

このようなリサーチ・クエスチョンをたてて検証することの意義として

- ・地域を魅力あるものにし人々が少子高齢社会の中で生き甲斐をもつ手段を示しうるということ、および論文集全体の趣旨に照らすと
- ・飯田の人や教育のあり方を定義する地域文化の醸成・発展の様子を明らかにできるということがあげられよう。

6.2.2 先行研究

地域のイベントにフォーカスした事例に関しては、主体は様々であったが共通して「地域活性化」が目的化している場合が多い。ここでは一つのそのような取り組みおよびその効果検証について紹介する。

【愛知県名古屋市の事例⁷⁹】

名古屋市桜山地区においては「まちプロデュース」という団体により、新たな地域コミュニティの創生によりまちの活性化が図られており、そのイベントとして①トークイベント②大規模イベント③カルチャー教室、の3つが行われた。これに関して参加者・運営スタッフに対するインタビュー調査により効果が検証されており、結果として

- ・はじめてのイベント参加の際にはコンテンツが重視されるが2回目以降はコミュニティメンバーに魅力を感じて参加する人が多い。
- ・9割以上がコミュニティのメンバーとイベント外で会っている。
- ・大規模イベントが最も印象に残りやすい。
- ・運営スタッフとして自主的に活動する場がある方がコミュニティへの帰属意識が高い。
- ・自己成長できる場を求める向きもある。

ことをあげており、結果としてイベント開催がコミュニティ形成・継続に役割を果たすことが実証されていた。

6.2.3 研究方針

以上のように「地域おこし」が主目的であるようなイベントの効果検証は先行的に行われてきたが、飯田におけるイベントはそのような色は薄く「みんなで楽しむ」ことに主眼がおかれている印象を実習を通じて持った。ゆえにここでは

- ・主体や目的が違う場合には、どのようにイベントがどのように運営されているかを検証する。
- ・目的としては「地域おこし」をメインに据えないものとする。
- ・イベント主体として「地域の人」に加え、飯田独自の制度・文化のもとで運営されている「公民館」を設定し、可能であれば差異を明らかにする。

という方針をたてることとする。

6.2.4 研究手法

- ・2015年11/24日・25日にインタビューを実施、および資料受け取り
- ・対象及び内容：

桑原さん（Canvas）…後述事例①②について

北林さん（橋南公民館）…後述事例②について

6.3 事例①:「華齢なる音楽祭」のケース

6.3.1 「華齢なる音楽祭」事業について

⁷⁹ 名古屋都市センター「平成26年度 市民研究報告書 地域イベント開催による地域活性化への効果」入手先 URL：<http://www.nup.or.jp/nui/user/media/document/investigation/h26/shimin26.pdf>（アクセス日：2017-1-29）

「華齢なる音楽祭」とは、飯田で行われている「60歳以上の高齢者による音楽祭」である。以下にその概要を記す。

“「いい年をして・・・」ではなくて「いい年だから」こそ、この円熟・華齢なる音楽パワーをみんなで楽しみたいというユニークな音楽祭です。そんなコンセプトのもと企画した音楽祭の出演者は60歳以上です。最も華のある年齢の音楽愛好家たちによるコンサートで、ジャンルも合唱、器楽演奏、フラダンスなど多彩で聴いて見て楽しめる音楽祭です。いつもの音楽祭では若い人達の中でなんとなく肩身の狭い思いをしていた高齢者が、この音楽祭では主役です。歳をとって影で生きるのではなく、スポットライトを浴びてそれぞれの音楽を発表することにより、より元気で活力ある高齢者を一人でも多く増やしたい思いです。この元気で病をも払拭し病院通いも極力減らせるようなことを望んでおります。高齢化が進む長野県において重要な取り組みと考えます。”⁸⁰（『華麗なる音楽祭|公共的活動応援サイト・長野県みらいベース』）

このイベントは現在までに4年開催されており初回は来場者500人であったが、現在は700人もの来場者を動員していて、遠方からの来客や立ち見をする来客も現れるようになったという。

6.3.2 事例分析

6.3.2.1 事業目的

公的な資料等での設定では

- ・音楽を核とした高齢者と若者の世代間交流
- ・地域のまとまりと新たな文化の創生
- ・高齢者の抱える諸問題に対処できるコンサートモデルの形成

が目的とされているが、イベントの立ち上げに関わった桑原さんによればもともとは実行委員長の前嶋さんと桑原さんの出会いに始まり同窓生を巻き込んでできたものであり、イベントコンセプトとしては「楽しむこと」を据えていた。

また直接の目的ではないものの、桑原さんによればこのイベントは「ベテラン世代が輝く舞台を用意する」といったことも企図されているという。

6.3.2.2 参加主体

（演奏者）

事業の性質上、平均年齢約84歳の高齢者が参加しているがその出自は様々である。とりわけ特徴的なのが、合唱の先生やかつてプロを目指した人といった「セミプロ層」の参加といった点

⁸⁰ 華麗なる音楽祭|公共的活動応援サイト・長野県みらいベース」入手先 URL : http://www.mirai-kikin.or.jp/products/detail.php?product_id=170（アクセス日：2016-12-16）

である。また、もともと地域で議長をつとめていた人も参加しており、様々な背景を持った高齢者が参加していることが伺える。

(運営スタッフ)

こちらの運営者は地元高校生と「シニア大学」と呼ばれる高齢者のための大学の生徒の中から有志を募り運営に協力してもらっている。とりわけ、シニア大学においては授業の一環として「華齢なる音楽祭」運営スタッフボランティアを設定している。

6.3.2.3 事業の様子・意識された点

本項では活動の目的を鑑みた上で「華齢なる音楽祭」で桑原さんが留意した点について取り上げる。

- ・参加者および運営者それぞれに「役割」を認識させる

「華齢なる音楽祭」では、高校生はイベント運営のボランティアを行う一方、高齢者の方々はこうした高校生に対し、卓越した音楽技術を披露する、このようにそれぞれの役割を意識させ双方向・対等の関係性を築くことが意図されている。この作業を経ることでイベント運営は義務的なものでなくなり継続性をもつようになるのではないだろうか。

このような双方向的な役割の認識のために、桑原さんは交流会のセッティングを行い、人々との関係性を可視化している。

- ・イベント運営に関しては丸投げするがどのような形になっても前向きにとらえる

イベントを運営させるに際しては、「どのようなことをやるか」のみ指示を行い他のことについては決めずに放任している。ただし、結果に関しては「何でもいい」というスタンスで臨み、肯定的に見なすと決めている。例えば「華齢なる音楽祭」の運営スタッフに対しては「食事をつくろう」ということだけ決めて、具体的に何をどう作るかは定めていない。そこでスタッフは料理品目を自ら決定し、準備を進め、米炊きに失敗しながらもなんとかこなしたという。

こうすることによって、参加者・運営者に「自分で作る」という当事者意識、自分のおかげでなんとかなった」という自己肯定意識を持たせ、それが結果として楽しくイベントを行うことにつながる。

- ・紹介を行うことで人的ネットワークの拡大を図る。

このイベントにおいては桑原さんの仲介もあり、高校生と高齢者がつながりをもっていることに大きな特徴がある。というのも、高校生は地域を越えて通学・移動を行っているという点で地域の活動に巻き込むことは難しいためである。勿論その他の面でも人的ネットワークを作り、覚えてもらっているという。こうしたネットワークの構築によって別のイベントを行う際にも有効活用できる。

6.3.3 総括

このイベントは以下のように総括可能である。

項目	事業目的	参加主体	事業の様子
事項	<ul style="list-style-type: none"> ・楽しむこと ・音楽による世代間交流 ・高齢者への活躍の舞台提供 	<ul style="list-style-type: none"> ・演奏 →高齢者 ・運営 →実行委員会+高校生・シニア大学の高齢者 	<ul style="list-style-type: none"> ・「役割」を持たせ、意識させる →対等な世代交流 ・参加者に「丸投げ」する →当事者意識をもって楽しくイベントを行う ・桑原さんの仲介のもと世代間交流 →特定地域に留まらない高校生と高齢者のつながりを産む

図表 I -6-1 「華齢なる音楽祭」総括

このように、このイベントは「地域」に関することは全く目的としていない。しかし様々な主体が対等な関係のもとで協働してイベントを作り上げるという作業を通じイベントそのものの規模を大きくしながら人的ネットワークを拡大させていくという効果があるのではないだろうか。

6.4 事例②:公民館で行われるイベントのケース

6.4.1 公民館でのイベント事業概要

飯田市の公民館が主導して行っているイベントとして以下のようなものがあげられる。

- ・地域の伝統的な祭事
- ・運動会、文化祭
- ・その他、地区の住民のやりたいこと

ここではとくに運動会について取り上げる。

6.4.2 事例分析

6.4.2.1 事業目的

この運動会に関しても、北林さんによれば「やりたいからやる」という動機に基づくものである一方、町が好きだからという動機も見られる。また、慣習として続いている側面はあるが、中身に関しては毎回要望に応じたマイナーチェンジがなされているという。

6.4.2.2 参加主体

(参加者)

町民が参加する。参加に関しては任意であるが、多くの参加者を集めている。

(運営者)

地域ごとにやりたい人を募って実行委員会を立ち上げて運営が行われる。公民館主事がリーダーシップをとることはまずない。

6.4.2.3 事業の様子・意識された点

運動会に限らず，公民館が主催するイベントにおいては，以下のように運営されている。

- ・行動のメインは実行委員会を中心とした町民，公民館主事は主にバックアップ

公民館におけるイベントであったとしてもそれをどのようなものにしていくか，という舵取りは実行委員会の手によって行われている。これに関して，飯田には歴史的に社会主義が活発だったという歴史があり⁸¹，こうした歴史から根付いている「平等で誰かが威張ることのない風土」「自分たちのことは自分でやるという風土」が大きく影響しているのだという。

一方で公民館主事の役割は，支援（各種調整や公的機関との窓口としての役割）や人々への刺激が主だったものとなり，桑原さんによれば「公民館がなくなってもイベントはできる」のだという。ただし一方で，これからの時代においてイベントを残していくためには主事の役割が増していくだろう，とも予見されている。

6.4.3 総括

このイベントは以下のように総括可能である。

項目	事業目的	参加主体	事業の様子
事項	<ul style="list-style-type: none"> ・楽しむこと，やりたいことをやる ・地域への愛 	<ul style="list-style-type: none"> ・参加 →地域の人々 ・運営 →地域の実行委員会を中心とした人々 	<ul style="list-style-type: none"> ・イベントを形成していくのはあくまでも人々 →平等および自治の風土が影響 ・公民館主事はあくまで支援・刺激を行う (これから役割は増えていくとされている)

図表 I-6-2 公民館で行われるイベントの総括

6.4.2.3 でも述べたが，公民館で行われているとはいえイベントの主目的や運営の実態としては町の人々による手作りのイベントと何ら変わりがないことが伺える。

⁸¹ この事実に関しては桑原さんの談話の中で言及されたことであるが，佐々木敏二『長野県下伊那社会主義運動史』，信州白樺，1978.によれば，江戸時代以降社会主義運動が行われ，大正時代以降も弾圧の中社会主義組織が存続し続け，いわゆる「転向の時代」においても活動を続ける活動家が多数存在していたという。このことから社会主義が活発であったことが伺える。

6.5 考察

以上2事例について、共通点を洗い出し飯田におけるイベントの特質を顕在化させるとともに、それが飯田というまち全体にもたらしうる効果を考え、最後にどのような形で一般化できるかを考えていく。

6.5.1 共通点

以上2つのイベントにおいて共通する点として以下のものがあげられる。

- ・やりたいことを実行して楽しむという動機

「華齢なる音楽祭」に関しても、公民館のイベントに関しても「地域をどうする」というような必要に迫られてやっているという雰囲気は全くなく、自分の好きなこと、好きな地域でやりたいことを楽しくやる、という風土が存在していたように見えた。

- ・実行委員会をメインとして町の人々が自ら主体的にイベントを運営すること

これに関して、行政や外部団体からの指導があるということもなく、また実行委員会も運営スタッフに対して指示・指導を行っていくということではない様子が伺えた。あくまでも人々が自らイベントを動かしていく、という様子が見えた。

6.5.2 イベントの効果考察

イベントの効果を考えるにあたり、上記で示した2つ目の論点が重要である。各種コミュニティの仲間とともにイベントを主体的に、当事者意識をもって動かす実感を得ることで自己肯定感を醸成することができることがインタビュー結果からも伺えるからである。こうした自己効力感から今後もイベントを持続させていくモチベーション、ひいては新しいイベントおよびその他の活動を起こしていくモチベーションを生み出すことができるのではないだろうか。

また、イベントを通じ、実行委員会を中心に様々な人々がつながりを持つという点も注目すべきポイントだと感じた。桑原さんへのインタビューでも言及されていたが、人的ネットワークの拡大により「次何かするときに」それを生かすことができよう。

以上のことから、イベントを起爆剤としそれを自らの手で作ったという当事者意識や自己効力感と、イベントを通じて生じた人脈の相乗効果によりイベントが継続・発展していくことが分かる。そしてこれが結果として「やりたいことができ、活気のあるまち」という風土の醸成、およびその「やりたいことの実行」のメカニズムになっているととらえることができる。

そしてそのようなプロセスの下で独自の文化を形成してきた都市が飯田であるということもできるだろう。イベントとは少し離れるが、飯田の歴史を振り返るとまちのシンボルたるりんご並木の沿革についても以下のように「当事者意識をもって事業を行い、その結果やりたいことをする風土、活気のあるまちを作り上げた」ことを示唆する記述がある。

“自分たちの地域のことは自分たちで考え、実行する。焼け跡の中で地元中学生が描いた「自分

たちの手で美しいまちをつくらう」という夢は、りんごの木の枯損や実の盗難など幾多の困難を乗り越え、市民の心に浸透し、やがてまちづくりの基本精神となった。ムトスの精神が息づくまちづくりである。”⁸²

6.5.3 一般化可能性について

それでは他の地域においても一度何かのきっかけで上記のような特徴を備えたイベントや事業が実施されさえすれば、同じようなメカニズムで「やりたいことができ、活気があるまち」形成につながるのだろうか。

飯田は歴史的に社会主義が活発な地域で「自分のことは自らで行う」という意識が非常に強く、このような風土があるからこそ「やりたいことをやる」の精神でイベントを開催でき、さらにその連鎖が発生すると考えることができる。普通の「地方の一地区」の住民がそのようなメンタリティを持っているかということに関して今回は実証していないが、未知数な部分大きい。

それでも一度ブレイクスルーがあれば軌道に乗る可能性はあるので「自らの手で作り上げ自らで楽しむ」という形のイベントを手探りながら行うことの意義は十分にあり、一方でこのようなイベントを通じてこそ地域の魅力形成・活性化がなされうると考える。

6.6 おわりに

本項ではイベントの実施における状況やその分析を通じて「やりたいことができ、活気があるまち」の形成過程について明らかにすることができた。そして飯田というまちはそのような過程を経て形成されたまちだということを明らかにできた。

地域文化がこのように形成されてきたということを鑑みれば、飯田という地域をハード・ソフト両面において形成したのはまぎれもなく飯田の「人」であろう。こうした「人」の営みについて、以降の章において更に明確になっていくだろう。

謝辞

最後に本章の執筆のため時間をとってお話ししてくださった桑原さん・北林さんにはこの場を借りて御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

引用文献・資料, Web ページ

「華麗なる音楽祭 | 公共的活動応援サイト・長野県みらいベース」入手先 URL : http://www.mirai-kikin.or.jp/products/detail.php?product_id=170 (アクセス日 : 2016-12-16)

佐々木敏二『長野県下伊那社会主義運動史』, 信州白樺, 1978.

名古屋都市センター「平成 26 年度 市民研究報告書 地域イベント開催による地域活性化への

⁸² 牧野光朗『円卓の地域主義 共創の場づくりから生まれる善い地域とは』, 事業構想大学院大学出版部, 2016.

効果」入手先 URL : <http://www.nup.or.jp/nui/user/media/document/investigation/h26/shimin26.pdf> (アクセス日 : 2017-1-29)

牧野光朗『円卓の地域主義 共創の場づくりから生まれる善い地域とは』, 事業構想大学院大学出版部, 2016.

おわりに

増田 健也

第Ⅰ部では、「地域」をテーマとして考察を行った。各章で明らかにされたことをまとめると、以下のようなになる。

第1章では、飯田市街地の地理的・歴史的特性を概観することで、飯田が交通の要衝である一方、周辺地域に対して独立性を持ちながら文化を育んできたことを明らかにし、それが現在の飯田におけるコミュニティ形成の基盤となっていることをみた。第2章では、近世からの遊郭史を参照しながら、飯田遊郭がグローバルな動態の中で位置付けられることを示しつつ、社会学などの隣接諸学を補助線として現在の飯田における風俗営業との連続性を探るための道具立てを準備した。第3章では、飯田市の「帰ってこられる産業づくり」「住み続けたいと感じる地域づくり」「帰ってきたいと考える人づくり」という3つの地域活性化の軸のうち、「帰ってこられる産業づくり」について、歴史的な強みである先端技術工業を活かすために、教育機関を整備するという構想を明らかにした。第4章では、移民や学生を中心とした動き、大学機関との連携、Uターン・Iターン、という3つの視点から他地域（香川県観音寺市）との比較を行い、今後の飯田市の活性化及びより多くの来往者・移住者の実現のための施策について考え、「商店街を中心とした動き」と「観光産業」という可能性を提案した。第5章では、飯田の地域的特性が現れた「飯田型公民館」をめぐって、他地域（兵庫県尼崎市）とどういった関係が築かれているのかに着目し、単なる輸出と輸入の一方通行な関係ではない、相互に〈学びあう〉ような発展的関係が結ばれていることを明らかにした。第6章では、飯田におけるイベントの形成過程を分析することで、飯田が「自らの手でやりたいことを実行し楽しむ」風土や人脈の広がりによって文化を形成してきた、ということを明らかにした。

以上のことから、飯田市では、産業面においても文化面においても、「外部との交流」と「内部の独自性」の双方が両立し、相互作用をきたしてきたことが見てとれる。「外部との交流」という面で見れば、飯田は交通の要衝としての特質から様々な産業・文化の流入を受けてきた。本論文でも取り上げた「遊郭文化」「航空宇宙クラスター産業」がまさにその好例であろう。一方で「内部の独自性」について言えば、第4章・第6章で示されたように、住民が主体性を持って独自の形に発展させてきた人のつながり・コミュニティが存在しており、結果として独自の「まち」としての文化が生まれた。そしてこれからは、第5章で示したように、こうして生まれた独自の文化をツールに「外部との交流」が主体的に行われ、またそれを受けて「内部の独自性」が熟成されていくという、相互作用の物語を紡ぎ出すことができるだろう。すなわち、外部からの人・産業の呼び込みや外部との文化交流が活発に行われていることと、内部における多様な住民の自治意識の高さが相互に作用した結果、飯田独自の産業・文化が形成されているのである。

第Ⅱ部では、こうした飯田の街で生き、産業や文化の担い手となってきた「人」の姿に着目し

て研究を進める。というのも、我々が飯田の大きな特質として位置付けた「地域人教育」は、「外部との交流」と「内部の独自性」の両立をなし得た飯田の地域性や人のあり方、とりわけ第6章で示したような飯田の人々の「やりたいから・自主的に」という精神文化が前提となってくるからである。この作業を通じて独自の産業・文化形成・文化発展のプロセスをより鮮明にすることは、飯田という街と「地域人教育」という飯田独自の教育について、重層的に理解する足がかりとなるはずである。

第Ⅱ部 〈人グループ〉

執筆者：豊田，松本，野村，木戸，小林，村上

はじめに

野村 明日香

地域という舞台で、人々が互いに関わり合うことで、その地域を特色づける文化や歴史や産業が形成されていく。一人ひとりの人間は、まるで触媒のようである。

この章では、理性や感情をもつ一人の人間として、あるいは人々が集まってできた組織に所属する一人の人間として、飯田で生きる人々の活動に焦点を当てて、飯田という地域をとらえたいと思う。

なお、人が活動を行う場である「地域」の章と、人間の意図的な活動である「教育」の章に挟まれた本章では、地域で生きる人という視点から具体的な教育活動に携わる人という視点へと、人々をとらえる視点がだんだんと変化していくようにテーマの配列を行った。

第1章 飯田市社会教育関連活動従事者の生活観の分析

豊田 瑠璃

1.1 はじめに

9月に飯田市を訪れて行ったフィールドワークでは、様々な立場にある方々がそれぞれ地域に関わっていく様子に触れた。飯田という地域内で多くの人々が発信源となり、ひとやまちに日常的に関わっていくその様相は、確かに私が生きてきた地域などでは見られないものであるように感じた。しかし、そのダイナミックさの片鱗を確かに感じる一方で、やはり飯田の特殊性の在り処や発生源はどこか判然とせず、1度目に飯田を後にする時には腑に落ちない想いも強く感じていた。

そこで、筆者が飯田の方々に共通して感じた「働く」ということの捉え方が異なるのではないか?という問いに端を発して、飯田の特殊性を見出そうとしたのが本稿の取り組みである。「働く」ことや生きるということに対して、両者に共通する価値軸を持って向き合うような態度を感じたのである。ここで言う「働く」とは、賃金を得て仕事に従事することのみならず、社会の中で役割を担って何らかの価値を生み出す行為をも広く含むものとする。

近年、社会構造の変化と共に、働き方や幸せのあり方が少しずつ変化している。「働く」ということは社会の中で役割を担うことであり、それは本来自分の価値観や生き方と密接に関わっているはずのものである。飯田で生きる方々にとって、「働く」ということがどのように生活の中に位置付けられているのだろうか。その言葉から、飯田に限らず、これからの社会と人が関わり合いながら生きていく上で重要な姿勢を見出せるのではないか。そのような問題意識を持って本稿を展開する。

1.2 調査目的

フィールドワークで最も印象的だったのは、お話を聞かせてくださった方たちが共通して、「働く」とこととプライベートの境界が曖昧な生活観を持っているように感じたことである。これは、地域で人々のつながりや企画を紡ぐ立場にいる社会教育関連職員の方やNPOの方だけでなく、千代地区でお世話になった民泊先の方や飯田長姫OIDE長姫高校の先生方などからも感じたものである。例えば、初日にお世話になった千代の民泊先の方は、釣りの大会の主催や学校での科学教室、苔玉作り教室、生垣作り、公道の紅葉の管理などを農業の傍らになさっていた。仕事は退職されており、様々な活動は殆どボランティアと仰っていたが、地域のための活動を自分の「楽しみ」としてとても精力的に行っていた。また、千代公民館の方のお話や飯田市社会教育関連職員の方々、飯田長姫高校の先生方、りんご並木まちづくりネットワークの桑原さんが、地域創生

のための仕事を一辺倒にしているというよりも、普段の生活と仕事が少しずつ混在したような領域で新たなネットワークやプロジェクトの萌芽を生み出しているような印象を受けた。

仕事とプライベートの時間をきちんと両立することを示す「ワーク・ライフ・バランス」という言葉が近年叫ばれているが、そういった労働と余暇を二項対立のものとして扱う近代以降の経済学的な世界観に反して、「働く」ということが生活の一部として混ざり合ったものであると捉える考え方も存在する。このような考え方には、自ら見出した目的や意味の元に働き、生活をするさまが顕われている。仕事へのやりがいを見出し、自分の価値観に従いながら社会の中で役割を果たしていくという「働く」ということの意義は、飯田の方々のような態度と大きく関わってくるのではないだろうか。

以上のような観点から、飯田に住む方々はご自身が社会と関わる行為をどのように認識しているのかを、彼ら自身の目を通して描きだし、そこから飯田の特殊性を見出すことが本稿の目的である。もちろん飯田で様々なかたちで動いていらした方々が上記のような労働観に基づいた「ワーク・ライフ・ブレンド」の実現であると型に入れ込むことは危険であるが、エイブラハム・マズローが自己実現理論で述べるように、「人間にとって仕事は遊びと同じように自然な行為である」という人間観に基づき、彼らがある役割を担って社会と関わり合う様子と、そこから生み出されているものを捉えようと試みる。

調査にあたって、りんご並木まちづくりネットワークの桑原さん、NPO 法人飯田人形劇センター事務局長の木田さんがインタビューにご協力くださった。その調査結果をもとに整理・分析を行うほか、フィールドワークで聞かせていただいたお話や関連の文献を適宜整理して記述する。

1.3 インタビュー概要と結果

1.3.1 インタビュー概要

インタビュー調査は、2016年12月26~27日に飯田へ赴き、りんご並木まちづくりネットワークの桑原利彦さんと人形劇事務局長の木田さんに対面でのインタビューを行い、いずれも自由回答式でお話を伺う形式をとった。まず、お二人のバックグラウンドを整理する。

桑原さんは現在、りんご並木まちづくりネットワークのコーディネーター、IIDAWAVEのヘッドプロデューサー、ムトス飯田推進委員をはじめとして飯田のまちづくりに深く関わっているほか、株式会社トライアドにて音楽と飲食に関する業務に携わっている。そのほかにもお弁当屋やライブハウスなど様々な形でお仕事をなさっている。高校を卒業してから20代の頃は、プロの演奏家になるために東京で個人的に指導を受ける傍ら、バイトでライブハウスでの伴奏をしており、その頃から、仕事と遊びが一緒であるという感覚だったという。

木田さんは、NPO 法人飯田人形劇センター事務局長として、川本喜八郎人形美術館の管理をしながら、市民文化や人形劇文化の活性のため公演の企画などに携わっている。大学卒業後は、工業ガス関連のメーカーで勤めていたが、もともと勉強したいなと思っていた映画学を大学院で学び、京都で人形劇に携わっていた。その後は香川県で、人形劇の養成とともに運営などをやりな

から人形劇を本格的に勉強した後に、東京の公立文化会館で公演の企画などを5年ほどやってから、飯田の人形劇に携わらないかというお話をいただいて飯田の街に移っていらした。

1.3.2 インタビュー結果

本節では、インタビュー結果を項目ごとに整理する。

①「働く」ということの捉え方について

まずはじめに、2名の方々がご自身の仕事や活動をどのように捉えていらっしゃるのかを整理する。また、ここでは調査の際にお話を聞かせてくださったIさんとHさんのお話も参考にしたい。Iさんは飯田の一般企業に勤める傍ら、個人的に行っていた陶芸や絵などの趣味が人とのつながりの中で広がっていき、今では飯田のフリーペーパーの表紙のイラストやポスターなどを手がけている。また、Hさんは、千代で民泊という活動に携わっている。前述の通り、農業の傍ら、民泊だけでなく科学教室や苔玉作りなどに楽しみながら精力的に取り組んでいる。

桑原さん

“高校生の知り合いが多いから、市役所で高校生との討論会がどうのってというのがあって、おれに紹介してってまわってきて。高校の軽音の顧問もすごく仲良しだよ、よく飲みに行くし。音楽っていうのを一つのキーワードとして、いろんなところと繋がっていく。それがおれの仕事になっていくから、主たる仕事は何？って聞かれても答えられない。今日は仕事だけど今日は仕事じゃないってのはあんまりなかったりする。”

“好きなことのためにやってる。おれは仕事でやってるけど、趣味でやってる友達もいる。もちろん日当は払う。けど、そいつは普段別の仕事してるようなやつ。その5人はこれだけじゃやっていけないから普段別のことをやってる。そいつらにとっては、こういうのは仕事じゃなくて遊ばなわけだ。果樹園やってる傍らこういうのをしているやつも、仕事の傍らアルバイトでやってるのも。大変なこともあるけど、仕事と思いつつながら責任持ってやってるけど、遊んでるって言われることもあるよ。”

木田さん

“基本的に混ざっています。それは就職する時にそういう仕事に就こうと考えていた。お金がなくとも、日常的にずっとやりたい世界にいたい。余暇は余暇で、っていう様に成り立っている企業も少ないのかも。”

このように、桑原さんと木田さんは、仕事とプライベートが完全に分断されているという従来の静的な仕事観というよりも、両者が混ざり合うものとして捉えているのがわかる。そして、仕事とプライベートが混ざり合うグレーゾーンの内を揺れ動きながら社会的な役割を果たしていく

という動的な様相が見受けられる。

一方で、IさんとHさんのお話から描きだされる生活観はまた少し異なる。Iさんは、仕事を仕事として捉え、仕事ではない領域で飯田に広く関わっている。仕事とプライベートの境界は曖昧ではなく、しかしプライベートな時間に行われる「趣味」という個人的な活動がいつの間にか飯田の人々と関わり合ってソーシャルなものとなっているのである。プライベートな時間については、とにかく「楽しいこと」に意識的に関わっていきこうとしていたとおっしゃっていた。また、Hさんは建築事務所を定年退職し、その後は主に農業を営んでいる。農産物は主に自家用と娘婿に仕送りし販売は行っていない。苔玉作り、釣り大会の主催、民泊、科学教室などの活動は、趣味からなんらかの機会を経て徐々に広がっていったものである。このお二方に見受けられるのは、桑原さんと木田さんのような「仕事」と「プライベート」が混ざり合っただけの中を揺れ動くような動的な仕事観というよりは、「仕事」とは異なるが「ソーシャル」な領域を「プライベート」な領域の中に包含している生活観であった。

描きだされた2つの型の生活観は異なるものの、遊び、楽しみながら地域の人と関わっていくことは共通している。そしてまた、それをかなり意識的に行っているのが特徴的である。

②喜びの源泉と意義付けについて

次に、桑原さんと木田さんがそれぞれ上記のように社会と関わり合いながら、どのようなことに喜びや意義を見出しているのかを整理する。

桑原さんは、「楽しい」ということをより深く見て行っただけのときどんなことに喜びを感じるかという問いに対する言葉は以下の通りである。

“「相手がいること」だよ。ひとに聞いててもらって喜んでもらうこと、ひとに見せてかっこいいなって言ってもらうこと。”

“目の前のひとがにっこり喜んでくれるのが最高に幸せだよ。本当はただそれだけだよ。”

“幸せって何か？ひとから褒められること、認められること。いい奴だな、とか。(中略)自分がいなくなっても何もかわらないだろうなって感じちゃうのは悲しいよな。”

そしてそれは、自分の働きかけによって得られた客観的な効果への達成感とは違うという。そのプロジェクトの客観的な達成度というのは一時的なものでしかないのも、それよりも小さな喜びの積み重ねに幸せを感じるのだという。またその中で、地方振興というのは「まちが褒められる要素」が増えることであり、それは他でもなくそのまちである必然性がなければならず、その必然性があるからこそ楽しさを感じるのだと話してくださった。

また、自分の達成感として感じる喜びについては、以下のようなお答えをいただいた。

“ひととひとを繋げたときに喜びを感じる。(中略)高校生のフォークの子達を、千代に連れて行っ

て、おばちゃんたちに聞かせる。そういうのが楽しい。それぞれのひともってるポテンシャルを活かすために、このひとはこれをやったらいいだろうな、って思ったときにそれを発揮してもらうためにひとを紹介し引き合わせる。あの人の話は面白いから...って言って。そういうときに、これはおれの成果だなって感じる。引き合わせただけで、自分自身が大成功したってもんじゃないけど、イベントにこの人を連れてきて・司会この人にやってもらって...って組み合わせて、それでひとりひとりが幸せを感じる。素材を合わせて活かしていく料理と一緒に。そういうときに、ああ自分でよかったんだろうなって思う”

木田さんは、ご自身のお仕事について、

“飯田にはフェスタがあり 38 年ずっと続いている。人形劇センターは 3 年。フェスタは夏の 3 日間だけど、365 日人形劇の街にしたい。日常的に関われるようなものにしていきたい。(中略)けど、それはエネルギーも時間もかかるので、それをどうしていくのかが課題です。将来的にはやはり、子供のためだけのものじゃないから、外に出てった人がインタビューで飯田出身ですとみんないうのが夢。そのくらい、このまちの人形劇を通じたまちづくりや教育が豊かになり、飯田の人たちがいろんな分野の第一線で活躍するようになるような土壌をそだてたい。”

とお答えくださった。そしてその夢の傍ら、日々の業務の中で喜びを感じる瞬間や成果を感じる瞬間について話してくれたことは以下の通りである。

“公演後のお客さんの笑顔かな。現状では新しい仕事に追われている状態なので、正直完全に楽しめる段階まで至ってるとも言えない。ただ、桑原さんとのネットワーク会議などで、普段感じられない情報を聞けるのも楽しい。まずはわたし自身がここに根付いていくのが一番かな。ワークショップとかそういう場じゃないところでつながって、相手側がやってることに耳を傾けて。”

お二人には、共通して以下の 3 つの点が見出せる。自分の専門分野を持ち、その上に自分だからこそその役割や意義をはっきり見出していること、自分の働きかけの先にある目的に他者がいること、その他者と相互的に関わり合いながら価値を生み出していくことを望んでいることである。

③周りのひととのつながりについて

次に、周囲の人とつながっていく様相についてインタビュー内容から整理する。

桑原さん

“元々クラシックだったんだけど、(中略)飯田に帰ってきて食堂とかを手広く手伝っていたけど、じきに自分で自分の店を始めた。そういう時も、個人的に教えたりサークルに教えに行ったりと

ギター先生はずっとやってた。そういううちに地域のお祭りとかに呼ばれたり、飯田市のイベントに呼ばれたり、プロデュースを任されたりするようになった。愛知花博での全国地方都市のPRで飯田市のを任された関係で市役所の人たちと仲良くなったし、ある村の村長さんとは地域のイベントやってる時からの友達で、職員さんも一緒に飲むかって感じ。ある村の村長も、イベント関係で知り合った人。またある村の村長も消防会議所をやっててその時からイベントしょっちゅうやってたし…。文化って軸で繋がっていったんだね。”

“「音楽」や「イベント」っていう軸があっただけでずっと続いているのかもしれない。地域の中でそれを好きな人っていうのはやっぱり似てる。村長の、その下の人たちとかとも繋がっていく。たまには音楽やったらいいんじゃないかって、バンドを組み始めたり。企業的な、どっちがクライアントでどっちが…っていうのがないから、対等につながる事ができた。それから、牧野先生がああいうことをやってて、全国の人と「まちづくり」というジャンルの中で知り合ったひととも繋がったまま。そういう一つのジャンルのなかでの付き合いってのは一生。同志社の文化政策の教授二人とはすごく仲良しでバンドも組んでる。演奏して、それぞれの立場で話してる。(中略)そういうふうにごんごん繋がっていくのよ。もともとはギターやってたってとこから始まって、ある意味「楽しい場所」「楽しむためのハレの場所」で出会ってるわけだ。そういうふうには仕事じゃない時間につながったひとと、仕事にまた戻ってくる。その積み重ねで今がある。自分も楽しいし。”

木田さん

“飲み会とかでつながることもありますが、勤務時間に文化会館行ってつながることもあります。”
“定時で上がったあとはさまざまですが、育児してることが多いかな…”

桑原さんと木田さんの認識のなかでは、つながりの生成は完全にプライベートな領域というよりも自分の社会的な役割に近い領域でそれを軸として頻繁に行われている。それは、イベントでの交流、勤務時間での関わり、飲み会などである。そして、そこで生まれたつながりは、同様にイベントや仕事、飲み会などといった場で再確認され維持されているのである。そして、そのつながりを維持する楔として機能しているのが、「音楽」「人形劇」そして「地域を大切にしたい」である。

これからの社会に必要なつながりの性質として、ロンドンの経営学者であるリンダ・グラットン氏は以下の3つを挙げている。目的を共有しあえる同志、緩く繋がっている人々、そして自己再生のコミュニティである⁸³。お二人は、その3つが混ざり合いながらバランス良く人との関係を往来し、仕事で広がるネットワークとして、また「楽しみ」を生むネットワークとして、新しい価値や可能性を得るネットワークとして、「楽しい場」をプラットフォームとして広げているのである。

⁸³ リンダ・グラットン 『ワーク・シフト』池村千秋訳、プレジデント社、2012、第9章。

④飯田の風土について

ここでは、①②で描き出した個々人の内的世界観と③で考察したネットワークの土台にあるであろう飯田の風土について検討する。まず、インタビュー内容から、その基盤の要素として考えられるものを抽出する。

桑原さん

(飯田の特殊性についての質問に対して)

“「楽しい」っていう意識を忘れないようにしてる人たちが飯田には多い。それこそ、公民館の主事の制度がおおきいかな。自分も市民だっていう意識が当たり前になってる空気。”

“ひとの上下関係が希薄だと思う。「平場」という精神がある。社会には階層ってものがあるけど、そういう階層を超えたところで腹を割って話すってことはなかなかないと思うんだ。でも飯田では、そういう気取らない場所ってものを作りやすい。(中略)そういうのに捉われないひとたちが多い。そういう立場とか年齢とかっていうのが希薄なところだと思う。たとえば人形劇のフェスタとかでも顕著に表れていると思う。そういうのが飯田としてはかなりの特徴なんじゃないかな。”

(「平場」が形成されているのは、何故かという問いに対して)

“中に入ってる俺みたいな人間が、上も下も一緒だからねっていう意識でやってることがひとつ。飯田の場合は基本的にそういう地位にある人間が威張ってないんだ。(他の地域もたくさん見てるけど、)飯田の議員さんたちにはほんとにそういうひとがいない。それが下の人間が気楽に喋れる要因なのかもしれないな。なんで威張ってないのか？ それはもともとこの飯田が社会主義が強くて特権意識が嫌われたとこだったことがあるかな。公民館が残ってるのもそれかな。(中略)そのおかげで、「平場」が形成されてるのではないか。この地域の評価対象が、地位とか収入にない。”

“地域住民の自治って感覚がすごい強いから。だから飯田市もそういう形でサポートして、公民館は残ってきてるんだとおもう。公民館の立場のひとがすでに住民だから。住民自治の拠点ってことは住民自治をするひとたちがいるってことなんだ。行政のコントロールでもなんでもなくて、行政は二人三脚の形で入ってきた。公民館っていうのは教育文化の拠点だし、そこではみんなが並列。対等。一緒に花火したりお祭りしたり。そういうのがネットワークされてるから「平場」ってのがあるのかもな。”

(そういう方々が公民館にどういうバランスで関わっているかという問いに対して)

“例えば松川町では、子育て世代の横のつながりがない。そういう世代こそ、子どもたちのために地域で楽しいことやっていこうってのがあるから。働き盛り、で仕事終わってからまで10時からジムやったりするから大変だよ～っていうけど、子供達のためだし、スタジャンとか自分たちでつくってたり。楽しそうにやってるんだ。”

木田さん

(飯田の特殊性についての質問に対して)

“ここの印象としては、人生を楽しんでいる人が非常に多い。(中略)ちょっと言葉は悪いんですが、この市民の方々は「妄想癖」ってのが他の地域よりあるのかな。痛車、ゆるきやらってのを大の大人が真剣になって話せる場ってのはそんなになんないかな…。コミュニケーションが好きってのはあるってのもあるけど、その上にどうしたいっていう想像力が働いて。パチンコ屋が少ないなと思ってる。そういう意味でも、豊かな楽しみ方を知っている。なにかをみつければ空想を膨らましてこういうことをやりたいっていうような。”

“市民のずっと引き継がれている「楽しむ」っていう感覚はここの特徴かなあって。そして、いろんな立場の方々が「あつまる」ってのは他の地域ではない…。(中略)こういう普段顔合わせないだろうって人たちが自主的にあつまってくるってのが特殊だなあと思ってる。たぶん自分で楽しもうって…「なんとなく」集まってくるんですね。”

“香川県では市民の人との関係を築こうってエネルギー、意識が低かった。自由に交われる場所ってのがこっちにはあるから。プラットフォームがあるから馴染みやすいかな。そういう場でも、わたしたちはこれやるのはいはいどうのこうのっていう事務的な話より、なんでもない話が多い。行政の方々も砕けた方も多かな。”

“一つ、オカフェスワークってのが特徴的かもしれないね。これは、10周年でいろんな人が関わっている。コスプレ、お酒、痛車、大道芸なんでもあり。あれがひとつの飯田の特徴かもしれない。大きくなっているけど、力のあるプロデューサーが置かれな。いいじゃん、自分たちは自分、他の連中は他の連中でいいじゃんって感じらしい。プロデューサーがいないってのが「飯田らしさ」。緩くひろがっているけど、みんな楽しめる。楽しむっていう積極性も併せ持っている。大きくなっていくにつれて、誰かが力を持って、すこしずつギクシャクしていくって感じにはならないんですね。”

(具体的にどういった場がプラットフォームになっているか)

“りんご並木のまちづくりネットワークもそうだし、公民館もそうだし、イベントそのものもそうです。”

(飯田の生活観に対して)

“飯田に限らず、地域では、公私の分離できない働きかたをしてるひとも多いと思うんです。でも波及していかない。波及していくためのコミュニティ、プラットフォームがない。特に違うってのは、こういう点かもしれないね。”

仕事周りの環境や飯田の地域で感じることについてお答えいただき、先に検討した桑原さんと木田さんの「働く」ということの捉え方を支えている点について抽出した。回答からは以下の2点を整理できる。住民の人々が心豊かに楽しむことを知っていることと、プラットフォームの存在とその「平場」という性質である。前者は、すでに検討したような「楽しむ」という態度と合

致する。

後者についてであるが、桑原さんと木田さんのお二人がともに、ひととひとを繋げるプラットフォームの存在に言及している。そして、桑原さんはその特性を「平場」という言葉で繰り返している。まず「平場」という言葉は本来の意味では「平場【ひらば】①平坦な土地。②平土間に同じ。③(幹部だけの場に対して)一般の人たちの場」である⁸⁴。桑原さんの言う「平場」は三つ目の意味に近い。ただし、ニュアンスとしては、行政の立ち位置にある人もどこかで幹部の立場にある人も市民も、そのような肩書きに関係なく対等な立場として相手と対話することのできる場という意味で使われていた。そしてそれは、桑原さんによれば、教育文化の拠点である公民館に育まれた飯田の風土であり、その結果として人形劇フェスタやオカフェスワークの雰囲気にも顕われているのだという。

1.4 考察

1.4.1 飯田の一般性と特殊性

はじめは、個々人の内部に、飯田の特殊性として彼らの生活観を見出そうとした。もちろん、インタビュー調査によって、「働く」ということと遊びの境界が曖昧であるという想定は全くの誤りとは言えず、少なくとも飯田に広がるネットワークで中心的な取り組みをなさっているお二方の仕事観には合致することがわかった。また、定時制の仕事に就いている方のお話では、仕事は仕事であるが他に「趣味」という領域が他のひとと繋がっていき、かなりソーシャルな色を持った領域に属していることも描き出すことができた。

しかし、このような生活観は果たして飯田に特有のものなのであろうか。今回行ったインタビュー調査では、主に NPO 法人という立場から飯田に関わり、また「音楽」や「人形劇」などの芸術という軸をもって生きてきた方のお話であった。このような属性をもっている方を都会で調査しても、その個々人の内部に同様の仕事観を見いだせるかもしれない。もしくは、飯田に限らずひととの関わりが密接な地方では同様の生活観を見いだせるかもしれない。

むしろ、飯田の特徴は、個々人内部というよりも個々人を取り巻く「状態」の方に強く浮かび上がってきたのではないだろうか。「豊かな時間を過ごす」ということに意識的な個々人や「こうしたい」という思いを抱える個々人を次から次へとつないでいくプラットフォームの存在が飯田の特殊性なのではないだろうか。

ここで、インタビューから導き出される飯田の特殊性を整理するために、①個々人の内的な生活観、②それを育み、また広くつなげていく基盤となっているネットワーク、③さらにそれを生んでいる飯田のシステム、の三層に分けて改めて整理した。それが次の表である。

⁸⁴ 三省堂『大辞林 第三版』, 2006.

① 生活観	「楽しむこと」や「遊び」という要素が日々組み込まれていく、2つの型の生活観。 上下関係がない 他者や地域への関心
② ネットワークの展開	プラットフォームの存在 「平場」という性質 軸の共有（「飯田」への想いや課題など）
③ 飯田のシステム	公民館(地区分館) 主事制度

図表Ⅱ-1-1 飯田の特殊性

①の生活観ではなく、そのような個人をとりまく②の「状態」のほうに飯田の特殊性があるとするならば、そのような基盤の在り方については、桑原さんへのインタビューで何度も伺った「平場」という言葉から考察できる。主体的な住民たちの態度によって成り立ち続けてきた公民館制度が、人々の豊かに生活を送ろうという態度と、立場に依らず同じ市民として対話する態度を培う。そうして「平場」というプラットフォームが生まれ、再び人々の「想い」や「楽しみ」を地域へと開いていくのである。

今回は職員さんにお話を聞けなかったため検討することはできなかったが、少なくとも飯田でネットワークを紡ぎ出すファシリテーターのような役割を担っている桑原さんがそういう認識を強く持っているということは特筆すべきことである。飯田市公民館主事の木下巨一さんの報告書によれば、公民館主事を経験した職員が共通して学んでいることの要素として、「主体は市民、行政は支え手という意識」を挙げている。そこでは、「住民自身の手で事業の企画運営がなされることが本来の公民館の有様である」という関係への認識の上で、地域組織のリーダーに求められるのは上意下達の意味決定の拘束力ではなく「参加者全体の意見を引き出すことができる能力、話し合いで結論に導いていくファシリテーション力、説得力ある説明、相手の考えの傾聴、粘り強い説得」などであることを職員たちが体得的に学んでいくというのである⁸⁵。今回、飯田市職員さんへのインタビュー調査を行うことはできなかったため十分な検討はできないが、このような記述で見られる姿勢は桑原さんの認識と合致しており、飯田市職員の「平場」への参与の在り方にも現れていると考えられる。

リンダ・グラットソンは、「遊び」について、以下のように述べている。

“チャラランポス・マイネメリスとセーラ・ロンソンは、(仕事が遊びになる)この四つの形態を逸

⁸⁵ 木下巨一「飯田市における公民館主事の位置付け～課題と可能性～」(飯田フィールドスタディ資料)。

脱、回避、強化、逆転と呼び、それを遊びと祝祭的行動の基本要素と位置付けている。日常と違うことをする時、日常の時間と場所の枠を越えて行動するとき、なんの制約も受けずに行動していると感じられるとき、手段と結果の関係に関する固定観念を離れて柔軟に振る舞うとき、私たちは「遊んで」いると言える⁸⁶。”

気軽に参加して話せる「平場」がつむぐネットワークは、新たな人と出会い、軸を共有し、また新しい考えや可能性に開かれていく契機となって、例えば「音楽」「まちづくり」やその他の生活課題などの軸がある意味で「遊び」に転じさせてくれる装置として機能しているのではないだろうか。

以上のように、内的な価値観はもちろん重要であるものの、むしろそれを引き起こしてまたつなげていく「平場」の存在と、①と②の相互作用が飯田の特徴であると考えられる。その個々人の生き方とネットワークが次々と共鳴していく相互作用が、約6割もの市民が社会活動に参加している⁸⁷という飯田の風土を生み出しているのではないだろうか。平成27年度末に飯田市によって行われた調査では、社会教育関係団体に属して音楽や舞踊、競技などのさまざまな活動を行っている人はのべ約5.3万人と示されている⁸⁸。飯田の土地で、地域と関わり合いながら主体的に楽しむ姿勢が生まれ、そうした中で生まれるネットワークがさらに人を巻き込んでいく。その網の目は、おそらく緩く広く濃く、市民それぞれが望む強度で繋がることを可能にしている。

1.4.2 応用可能性について

飯田型社会教育移出の取り組みはすでに行われており、JICA 草の根技術協力事業を受託して展開されたフィリピンのレガスピ市でのプロジェクト、未来を拓く自治と協働のまちづくりを目指す飯田研究会、解体新書塾などが主に挙げられる。

前節において、個々人のそれぞれの趣向が緩く地域へと展開されていく装置として、ネットワークの存在を挙げた。そのネットワークの基盤が、プラットフォームの存在とその「平場」という性質、軸の共有の3つである。そのプラットフォームとは、時には人そのものであり、飲み会であり、時にはイベント会場であり、時にはどこかの施設であったり、飲食店であったりと多様な形態をとって飯田中に広がっている。桑原さんは、そのような性質を支える一つの重要なシステムとして飯田では公民館の存在や主事制度が機能していることに触れていた。それがネットワークのダイナミズムを生み出す一つのシステムとして機能し、その網が人を巻き込み、人の主体的な生きる姿勢を再び育てるように見受けられる。しかし、他地域への応用を考えた時には、重層的なプラットフォームを生み出す源泉が必ずしも飯田と同じ公民館制度である必要はない。自治と協働のまちづくり研究集会では、佐藤健飯田副市長が次のように述べている。

⁸⁶ グラットソン, *op cit.*, p.270.

⁸⁷ 飯田市教育委員会「飯田市教育委員会の組織概要」(飯田フィールドスタディ資料)。

⁸⁸ *Ibid.*

“「人」であったり、「人のつながり」であったりというそのところが、たまたま飯田の場合は公民館という形で機能しているところかなという風に理解をしています。(中略)それがNPOであっていいと思いますし、社会福祉協議会であっていいと思いますし、商店街の再開発という切り口であっていいのかもしれませんが、そんな形で地域社会に関わっていく人を育てる、育つ、そういう場であれば、同じようなことが起こるのかなというふうに思っています⁸⁹。”

また、インタビューで、桑原さんは他地域の市の職員に大人と高校生を繋げていくことが難しいと相談された時に、以下のように答えたと話してくれた。

“「楽しい」という意識を忘れないようにしているひとたちが飯田には多い。それこそ公民館主事の制度が大きいかな。システムから気質が育つことがある。こういうシステムがいい、ってのから気質が育つ。出会うプラットフォームが飯田にはある。そういうのを導入できたら、意味はあるんじゃないか。だから、会場設営のお手伝いなどで、高校生やお年寄りや地域の大人と引き合わせる機会を作る。そういう機会を仕掛けることなんていくらでもできると思うよ。意図的にお互いに負荷をかけて、いきなり高校生と繋がろうとするんじゃなくて、まず、高校生と繋がってる大人に声をかける。ダンススクールの先生とか。クラブの先生とか。生徒たちから信頼を集めてるから。そしてその人を要としてどんどん繋いでいくんだ。」「そしてその時には、職員さんたちのこういうしたいってのを、そういう大人と共有していなければいけない」”

“飯田では公民館制度を基盤として「平場」というプラットフォームが生成されていく風土を、必ずしも同じシステムによって引き起こしていく必要はない。飯田でそれが「自然」「当然」となるほどに深く根付いているだけに、他地域で同様の重層的なネットワークが自然と生まれる風土までに定着するのは一朝一夕のことではない。しかし、様々な形で人が対等な立場でつながり、お互いの軸を共有し、緩く楽しみながら繋がっていく場の設置という形で、飯田の人々に垣間見える2つの型の生活観は他地域でも豊かに養い得る可能性が示されている。”

1.5 おわりに

『ワーク・シフト』(2012)でリンダ・グラットンは、社会は、テクノロジーの変化、グローバル化の進展、人口構成の変化と長寿化、社会の変化、エネルギー・環境問題の変化という5つの変化によって今後大きな変革を迎えると述べている。そして、そこから予測される未来の社会は、正の側面と負の側面両方を持ち合わせており、正の側面に向かうには、①あくまでも好きな仕事

⁸⁹ 未来を拓く自治と協働のまちづくりを目指す飯田研究集会 「未来を拓く自治と協働のまちづくりを目指す飯田研究集会 未来を拓く自治と協働、飯田公民館の地平を超えて～成熟社会・日本における、持続可能な地域・コミュニティに必要なものをあらためて探る2日間～記録」p. 172. 入手先 URL: <https://www.city.iida.lg.jp/uploaded/attachment/10383.pdf> (アクセス日: 2017-1-31).

を選び、遊びと仕事が連続したかたちでプロフェッショナルを目指すこと、②大勢の人と緊密に結びついてネットワークを結び、協力してイノベーションを起こしていくこと、③自分自身が何を大切にしているのかを知り、情熱を傾けられる体験を重視していくこと、の3点のシフトを必須としている。さもなければ、いつも時間に追われて孤独に苛まれる社会となってしまうという⁹⁰。社会を変えていく様々な波は、飯田のまちにも同様に波及する。特に、人口減少と高齢化は日本の他の都市を先駆けて進んでいる。インタビュー調査にご協力くださった方々の生きることへの態度は、リンダ・グラットソンの提唱する3つのシフトに見事に合致するように感じられた。先に示した2つの型の生活観は、自分の楽しいこと、ひいては生き方に対して能動的に心を向ける姿勢である。

さらに、桑原さんは、高齢化について次のように話している。

“若者のいない街は廃れていくっていうじゃん。でも、若者を取り込むためにあれこれすることだけが、その街が若返るってことなのか？（中略）高齢化することを憂うんじゃなくて、高齢化する中で精神的に若返ることを考えるべき。若者の奪い合いに意味なんてない。高齢化するのは当たり前なのに、それがいかんいかんってするのは誤り。悲壮感漂わせるのはいかん。元気な年寄りの街だって胸張ってもいいんじゃないか。そういう街になったらいいんじゃないか。そしてらかなり幸せになると思うんだ。”

今回の調査では、どうしても飯田市内で中心的な活動をしている方々が対象となり、周縁に位置する方々が本当に前述したような生活観を持ち、またその姿勢がひととの「つながり」を介して地域へと向けられているのかを十分に検証することはできていない。よって、あくまでも仮説提起の域となってしまう。しかし、それでもこの調査によって見えてきたのは、地域振興への切迫感というよりも、今いる人たちが楽しみながら生きていくことを第一とする想いであった。そして、その態度を育み、また緩く確かにつなげていく「つながり」が飯田の盛んな住民自治と主体的な生き方の基盤になっている。私たちは課題先進地域である飯田に、社会が直面する課題に対する一つの強い姿勢を見いだせないだろうか。

謝辞

最後に、お忙しい中、インタビューにご協力くださった桑原さん、木田さんに心より感謝いたします。特に桑原さんは、2日間の飯田での調査の間とても厚くもてなしてくださいました。みなさまのご協力のおかげで本報告書を仕上げることができました。また、今回の報告書のみならず、みなさまから伺えた「生きる」ということへの姿勢は、首都圏で生きながらこれから就職活動を迎える私個人にとっても大変学びの多いものでした。ありがとうございました。

⁹⁰ グラットソン, *op cit.*, 第4部.

引用文献・資料, Web ページ

飯田市教育委員会 「飯田市教育委員会の組織概要」(飯田フィールドスタディ資料)。

木下巨一「飯田市における公民館主事の位置付け～課題と可能性～」(飯田フィールドスタディ資料)。

リンダ・グラットソン 『ワーク・シフト』池村千秋訳, プレジデント社, 2012.

三省堂『大辞林 第三版』, 2006.

未来を拓く自治と協働のまちづくりを目指す飯田研究集会 「未来を拓く自治と協働のまちづくりを目指す飯田研究集会 未来を拓く自治と協働, 飯田公民館の地平を超えて～成熟社会・日本における, 持続可能な地域・コミュニティに必要なものをあらためて探る2日間～記録」p.172
入手先 URL : <https://www.city.iida.lg.jp/uploaded/attachment/10383.pdf> (アクセス日 : 2017-1-31).

第2章 華齢なる音楽祭—多世代交流の機会に関する考察—

松本 奈々子

2.1 はじめに

2016年9月、飯田実習3日目の夜、飯田市の中心街に位置するライブハウス CANVAS にて、桑原さんの行っている地域活動に関するお話を聞き、その後にはライブも楽しませていただいた。ライブ後の熱い空気が充満する場で心地よいグルーブ感を覚えながら周りを見渡すと、各々の想いを目の前の人に伝え、真剣に議論する人々の姿があった。時間は飛ぶように過ぎ、外に出ると静かな夜の飯田のまちが広がっていた。その夜は、CANVAS での体験を何度も反芻しながら火照った頭で帰路についた。追加調査をするにあたって、あの空間を作っていた桑原さんとお話したい、そして桑原さんの音楽イベントでどのように人が出会い、関わっているのか詳しく調べてみたいと強く思い、「華齢なる音楽祭」の追加調査を始めた。

本稿では、多世代、多地域の市民の協働で上演されたコンサート「華齢なる音楽祭」に注目し、飯田における多世代交流の機会としての文化イベントを考察する。実習で学んだように、飯田市には「地域」に根ざした公民館活動を基盤に住民自治が活発に行われてきたという歴史が蓄積されている。しかし、公民館の分館の取り組みにおいては、高齢者が主に活動を行っていて、若年者や中学高校生の地域活動への参加率が低いと述べられていた。実際、中学生や高校生は、公民館という自治組織が根ざす「地域」からは離れた生活になり、学校という場所や共通の部活、趣味で集まる人間関係が基盤となる。そのため、地域を超えて他市や他地域の同世代の友達と興味で集い、活動することが多いという。一方で、公民館という地域の区分に限らない、人々の多層的な活動のなかで、地域が形作られていくことを示唆しているような活動が行われている。OIDE 長姫高校の地域人教育の実践では、他の地域と共通する地域課題をテーマに設定する、多地域と連携しながらプロジェクトを実行するなど、地域と関わりを多様な形態で生み出している傾向がみられた。さらに、下伊那地方で開催されているシニア大学に代表されるように超地域的に行われている高齢者の活動もある。

少子高齢化の進行やリニア開通など飯田という「地域」が絶えず変化するなかで、これまで蓄積されてきた「地域活動」の歴史を活かしつつ、多様な活動が層を成しながら地域で繰り広げられていくことが重要になるだろう。そのなかで、2.2 で詳しく述べる世代間の分断という課題は考慮しなければならない項目である。本稿で注目した「世代」や「地域」を超えたコンサート、「華齢なる音楽祭」の実践から、飯田の地域活動において「多世代交流」をとらえようとする一つの視点が見えてくるのではないだろうかと考える。

2.2 「多世代交流」

2.2.1 視点とその意義

少子高齢化による人口統計の変化、社会保障制度などの社会協約の衰退により、これまでの「社会」を問い直し、子供、若者、高齢者、地域、家族のありかたを再考する契機が訪れている。「多世代交流」「世代間交流」という視点は、高齢化、人口減、財政難、家族の変容と人間関係の希薄化等の地域社会をめぐる状況を背景に、分断される世代間の連帯を構築し、「人の関わり」や「連帯」を軸にした「社会」を目指すなかで注目されている⁹¹。

世代間の価値観の衝突はしばしば社会保障の分野で問題視されてきた。世代とは、「一定期間に出生し、同じ歴史的社会的経験をもち、それゆえほぼ類似した精神構造と行動様式をもつ一群の同時代者」のことを指す⁹²。世代交流とは、異なる世代間の交流を指し、高齢社会においては以下の2点の意義を見出せる⁹³。

まずは、「多世代交流」が固定された他世代への意識に揺さぶりをかけるという点である。高齢者への介護等福祉の充実がもとめられる一方、アクティブシニアと呼ばれるような活発な高齢者らの社会参加が進んでいる。多世代交流はこのような多様な高齢者のありかたを柔軟に理解し、世代を超えてお互いのできることを活かしながら社会を形作る態度を生み出す。

2点目は、家族や企業ではない場において、外に開かれた組織を構築し、社会と個人をつなぐ役割を果たすという点である。核家族化や企業の雇用形態の変化により、かつての家族や企業などの伝統的な組織の中で行われていた世代間の交流はみられなくなっているが、家族や企業ではない組織において、老年・中年・若年という三世代間の金銭・サービス・精神・愛情的交流を支える仕組みを編成することが求められている。

2.2.2 多世代交流の実態と課題

高齢者の多世代交流に関する施策としては、「長寿社会対策大綱」、また、高齢者の多世代交流に関わる事業として「高齢者の生きがい促進総合事業」がある。後者の事業は高齢者と若い世代が交流を図り、相互理解を深めることとし、高齢者と若い世代でグループを構成し、野外活動、創作活動、緑化活動等を行う事業としている。また、厚生労働省は、高齢者の生きがいと健康づくりを促進するために、高齢者向けの施設や事業の整備や老人クラブへの助成事業を行い、活動の中に交流事業が展開されている。自治体レベルでは、その地域の特性に合わせた多世代交流事業が展開されている。

長寿社会開発センターの調査報告書にあるように、多世代交流の場は家族、社会福祉、ボランティア等地域活動への参加など多岐に及ぶ⁹⁴。本稿は、地域活動の場における多世代交流に焦点

⁹¹ 広井良典編『ケアとはなんだろうか』、ミネルヴァ書房、2013.など

⁹² 青井和夫『長寿社会を生きる』、有斐閣、1999.

⁹³ *Ibid.*

⁹⁴ 青井和夫ほか『高齢化社会の世代間交流：世代間交流による高齢者の社会参加促進に関する基礎研究』、長寿社会開発センター、1994.

を当てる。平成 25 年度「高齢者の地域社会の参加に関する意識調査」において、老人クラブや自治会、町内会に参加する高齢者の割合は高く、同じ世代内で行う活動により参加していることが示されている。また、同じ調査から、高齢者の持つ文化の継承活動、高齢者のみまもり活動やボランティア活動などの地域福祉活動という形で、高齢者の社会参加が盛んに行なわれていることが示された⁹⁵。

高齢者が社会に参加するなかで若い世代との出会いや交流の機会が増えることは確かである。しかし、高齢者と若い世代との交流については、未だ模索途中であることが調査の結果より示唆されている。まず「若い世代との交流」に参加したい高齢者は約 6 割いたが、実際に参加している高齢者の割合は約 4 割だった。世代間の交流を促進するために、高齢者が必要であると感じるのは、「交流機会の設定」であり、最も高い 3 割を占めている。さらに、先に述べた高齢社会における多世代交流の意義とした世代間の相互理解や世代を超えた連携や連帯という点については必ずしも調査結果から導き出すことができない。

これらの実態を踏まえて、今後、交流機会を積極的に設定することに加えて、交流機会の内容のさらなる充実が求められている。その際に、今一度多世代交流の意義、そして上記の調査結果をふまえて何が参加を阻んでいるのか、高齢者と連携や連帯へと発展しないのはなぜかを問う必要があるだろう。次項では、「華齢なる音楽祭」の仕掛けを分析し、多世代交流の機会のフレームワークを考察する。

2.3 「華齢なる音楽祭」の考察

2.3.1 概要

“この合唱団のよさは歌のうまさより、皆が面白がって参加していることでしょう。”

“面白さが一人よがりなものでなく、見聞きする人たちに共感されるものなら、その面白さは、お互いの中で相乗効果を生み、双方が楽しさや生き甲斐をより強く感じられるに違いありません。”⁹⁶

「華齢なる音楽祭」は、出演者全員が 60 歳以上の音楽イベント/コンサートである。2014 年から毎年開催し、2016 年も飯田市鼎文化センターで第 3 回目の音楽祭を迎えた。飯田市出身の福島茂喜さんを実行委員長に、飯田高校出身者、Canvas の桑原さんの音楽仲間などが「実行委員会」を立ち上げ企画、運営を担っている。さらに、音楽祭を経験した人が実行委員会に加わることもある。さらに、実行委員会に加えて、当日の中心的な存在である、出演者、ボランティアそして観客などの参加者が多数いる。出演者は、飯伊の団体を中心に 15 団体を公募し、加えてシニア大学の学生と飯田市の高校生のボランティアが裏方を支える。各グループは各 2、3 曲ほどのパフ

⁹⁵ 日本、内閣府、「高齢者の地域社会の参加に関する意識調査」2003, 入手先 URL : <http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h25/sougou/zentai/index.html> (アクセス日 2017-1-31).

⁹⁶ 多胡輝『人生 90 年 面白く生きるコツ』, 幻冬舎, 2015.

オーマンスを披露した。コンサートの演目は合唱合奏ダンスと多分野横断型で構成されていた。

2.3.3 三つのテーマ

インタビューや資料から、「華齢なる音楽祭」には主に以下の三つのテーマが重なり合って構成されていることがあきらかになった。

まず一つ目は、「高齢者が中心となる文化イベントのありかたを模索すること」である。「60歳以上の」とはいつても、「いい年をして」ではなく、「いい年だからこそ」の魅力を活かした、合唱や演奏、フラダンスなど多彩な音楽グループのオムニバス形式の音楽会である。これまでの高齢者が参加するコンサートが、第一線として活躍する時代は過ぎても「まだまだ頑張っていてこれくらいできます」を見せる機会だったが、本音楽祭は、高校生から高齢者まで多世代のそれぞれの今が活躍する姿を見せ合い、喜び合うという意味で、地域文化のなかで高齢者が前向きに取り組むことを意図している。さらに、高齢者地元の医療機関の協力を得て、出演者や来場者の安全ケアへの取り組みも行った。子供の親が気兼ねなく参加出来るように、託児サービスを用意している子育て世代が参加するイベントがあるように、高齢者用トイレの設置、階段の上り下りの介助など、高齢者の方が音楽会に快く参加出来るケアのありかたを模索している。

二つ目は、世代間が交流することである。ゲストには地元出身の高校生または大学生で実力を認められているグループを呼び、若い世代も参加した。また、ステージの設営や介助などの裏方としてシニア大学の高齢者の方、高校生が事前に研修を受け、舞台裏を支えた。

三つ目の軸は、「地域間、地域内の連携」である。音楽祭の出演者は公募で、第一回は飯伊、第二回は県内、第3回目は県外にも公募枠を広げた。飯田から音楽を核に飯田市内、南信地域全体、そして全国との交流生み出すことを目指した。コンサートの本番の後には交流会を行い、普段は個々で活動してつながることのないグループが交流関係を深める機会をもった。

音楽祭において、これらのテーマの設定は参加者に対して答えを提示するためのものではなく、参加者が問いに出会うことができるような仕掛けとして提示されていた。以下、音楽祭の仕掛け/演出とその解釈を記す。

2.4 仕掛け:ものさしの提示

桑原さんは「人と人がつながると何かができる」そしてそのためには何か共感できるものが必要であるという。しかし、音楽祭の参加者は多世代にわたり、音楽とはいつても、世代で興味や見えるものが異なっている。そのため、「音楽」という共通項に加えて、年を超えても同じように共感することのできるものさしを提示するような仕掛けが、どの世代に対しても水平な視点で、楽しんで参加する素地を生み出していたといえる。

2.4.1 「年齢」を超える

この音楽祭では、出演者を60歳以上と制限している。この制限は、ただ60歳以上の高齢者に

発表の機会を与えているのではなく、60歳以上の高齢者に文化イベントにおける中心的な役割を任せることで活躍する高齢者のあり方を提示した。高齢者の「今だからこそ」のパフォーマンスは若い世代に全く負けず劣らず観客を魅了していたという。

また、会場の受付、舞台転換、お昼ご飯（カレー）の準備、駐車場の係、など様々な裏方に支えられているこの音楽祭では、この裏方の仕事を飯田の音楽関係の高校生とシニア大学の学生が担っていた。舞台上の裏方の担当をしたシニア大学学生と高校生は、事前にプロの方からケーブルの巻き方、ステージの変更のときの注意事項など研修を1日受け、世代は違っても同じことを同じように学び、新しいことに会う感動を共有する機会となった。

前者が年齢で分けるケースで後者が分けないケースであったが、それぞれが年齢の持つイメージの境界を超えるようなパフォーマンス/行為をそれぞれの場所で行い、それをお互いに尊敬し、認め合うお互いへ水平な視点を生み出すのに機能していたといえる。

2.4.2 「コンサート」というかたち

華齢なる音楽祭は音楽発表会ではなくコンサートだとインタビューの際に桑原さんは繰り返していた。多くの場合発表会では、出演者・班に平等に時間と条件が与えられ、それぞれの班の発表が淡々と連なることが多い。発表者や観客も、自分の知り合いの時間だけ聞きにきて、あとは帰ることが多い。一方で、コンサートでは、パフォーマンスとして全体を楽しんでもらうことを目指しているため、照明、音響、MCの進行などがそのパフォーマンスを支え、全体の構成などの演出が施すことも欠かせない要素である。華齢なる音楽祭では、具体的には、世代を意識したMCを発表の合間に挟む、舞台上の技術的な演出にプロジェクションマッピングなどの先端技術を使う、歌と合奏を混ぜて飽きさせない構成にするなどのプロ顔負けの演出が施された。音楽祭では、自分の知り合いがいない部分でも楽しむことができるため、観客のほとんどが最初から最後まで会場にいたという。

舞台上に発表者が発表内容を持ち寄れば成立するのが発表会で、持ち寄った発表内容を調理し、皆がコンサート全体を通して楽しむ内容、場をつくるのがコンサートである。コンサートの演出は世代や顔見知りであることなど関係なく、出演者も観客もその場にいるだけで、無条件にパフォーマンスを喜び楽しむことができる共感の場とそのようなコンサートを皆でつくるという協働の場としての共通意識を用意したといえる。

2.5 仕掛け:協働の仕組み

上記のように、音楽祭では、出演、受付、舞台部、カレーづくりなどタスクごとに高校生と高齢者が分けられ、その後そのタスクと一緒に遂行するにあたって、参加者はグループのなかでその状況を見ながらグループ内の役割、ふるまい方を考えることになった。このような音楽祭のゆるやかな枠組みは多世代が「協働」してコンサートをつくる時間と空間を生み出した。有機的に人々が関わり合うその「協働」の過程で、多世代交流のソフトとハードの条件が相互に影響しあ

いながら生成されていった。

2.5.1 ソフトの条件:「べき」の解体

音楽祭では、高齢者に対して実際にどう振る舞う「べき」という指標やそれを裏付ける高齢者へのイメージに基づいた役割の設定はされていない。コンサート参加者同士の具体的な相互行為は、高齢者はケアされ、若者はケアする「べき」という文脈からはなれた地点において繰り返される。コンサートを進行させていくための実践とその時間を共にし、その場その場の偶発的な事態に対応するべくお互い折り合いをつけて行くなかで自らの役割とその遂行の方法を見出していく。そこで生まれる高齢者と高校生の互いへの意識は衝突しあうのではなく、相手への配慮にもとづく交流や、お互いへの興味を生む。例えば、高齢者の手をひいて舞台の上へと送った高校生は、その高齢者が舞台上で行ったパフォーマンスする姿を見て感動したという。この経験のなかには、介助を必要とするひと、舞台上で輝くひととしての高齢者というように、2つの高齢者のイメージが混ざっている。従来の印象論からみるとその二者は相反するようであるが、実践においては必ずしも明確に線を引いて遠ざけるものでもないイメージであることに気づく。高校生は、自分が高齢者になった時に、音楽祭のステージで演奏することを夢見るのである。

2.5.2 ハードの条件:基本的なケアの仕組み

さらに、高齢者が安心してコンサートに参加するための基本的なケアの仕組みを構築することを試みている。高齢者のためのコンサートでは、怪我や命の危険に突然出会うことが予測される。そのため、何かがあったときのための、基本的なケアを拡充することで、高齢者が文化イベントに参加する際の妨げをひとつ取り除くことになる。今年からイベント保険への加入、そしてさらに、飯田病院から保健師さん二人を配備するようになった。しかし、高齢者用のトイレやエレベーターを整備するのではなく、それらの基本的な課題に対する、音楽祭らしい、飯田らしい対応策を人の力でどう対処していくかのノウハウをつくっていこうという方針で仕組みづくりに取り組んでいる。鼎文化センターのトイレは階段を降りた暗い地下に設置されている。70歳から80歳の高齢者の方が手を取り合って降りているのを見て、危ないと感じ、代わりに階段に高校生を配備することにしたそうだ。

2.6 おわりに

多世代交流の意義は、画一的な見方で捉えられてきた世代、年齢とそれを基盤につくられてきた社会基盤の仕組みを、価値多元的に捉え直しながら社会を紡ぎ直そうとする動きの潮流のなかで唱えられてきた。それは交流が境界を引きなおし、定義し直して行く契機となるからであり、実践においては異なる文化や物の見方の人が対話し多声的な空間で出会い、その境界を探り培うことを保証する機会がもたれているのである。「華齢なる音楽祭」の事例の考察を行うなかで、世代や年齢、自分を形作る「境界」を他の多様な参加者との共感と断絶のなかで探り培う動きの

生成を支えている多世代交流の仕組みが見えてきた。

2.1 に述べたように「地域で」という見方や接点のみでない、趣味や共感による広いつながりがこれから求められるだろう。地域を超えて他市や他地域から興味で集い、活動をする高校生や下伊那地方で開催されているシニア大学の活動にもその傾向と可能性は示されている。この動きのなかで、音楽祭が飯田という地域を足場に、飯伊という「地域」に限定されるものではなく、さらに広がりをもった「地域」を描いていくのか、地域間、地域内の人々の経験/体験を検討することを今後の課題としたいと思う。さらに、次回の音楽祭に実際に参加し、参加者へのインタビュー、アンケートや参与観察などをもとに音楽祭を参加者の視点から多角的に見てみたいと思う。

この度 調査にあたって、Canvas の桑原さん、飯田 OIDE 長姫高校 2 年の菅沼さんにインタビュー調査を行いました。お忙しい中、ご協力いただきありがとうございました。

引用文献・資料, Web ページ

青井和夫ほか「高齢化社会の世代間交流：世代間交流による高齢者の社会参加促進に関する基礎研究」、長寿社会開発センター，1994.

青井和夫「長寿社会を生きる」、有斐閣,1999.

香川秀太，青山制彦（編）『越境する対話と学び 異質な人・組織・コミュニティをつなぐ』，新曜社，2015.

華麗なる音楽祭実行委員会（2015）『華麗なる音楽祭』[DVD]，長野県飯田市.

多胡輝「人生 90 年 面白く生きるコツ」，幻冬舎，2015.

日本，内閣府「高齢者の地域社会の参加に関する意識調査」，2003 ,入手先 URL : <http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h25/sougou/zentai/index.html> (アクセス日 : 2017-1-31)

広井良典編『ケアとはなんだろうか』，ミネルヴァ書房，2013.

マシューカブラン他編『グローバル化時代を生きる世代間交流』，加藤澄訳，明石書店，2008.

第3章 飯田市美術博物館と「人」

野村 明日香

3.1 はじめに

“博物館が『楽校』になってほしい⁹⁷。”

これは、教育学者である小笠原喜康が、チルドレン・ミュージアム研究会の願いとして挙げているものである。「楽校」としての博物館には、「社会に光る個性的な知を育む場」という意味が込められている。飯田市美術博物館(以下、美術博物館とする)の教育普及活動の様子を見ていく中で、私はこの言葉を思い出した。

美術博物館に初めて伺った際、企画展や講演会・講座の多さに驚かされた。頂いた三つ折りのリーフレットで、企画展は毎月のように行われ、毎週何かしらの講演会や講座が行われていることが示されていた。どれ程の人がこの美術博物館や企画展・講座・講演会に関わっているのだろうと関心を持った。

当たり前であるが、どのイベントにも、背景には「人」がいる。「人」と一言で簡単に表せるが、その内実は、様々な立場の人々の集合体である。美術博物館に関係する「人」を試みに列挙してみると、近隣住民、来館者、学芸員、学校、先生、地域の団体・研究者、地域外の団体・研究者...と、実に多様な人がいる。その人達が、それぞれ美術博物館に何かしらの形で関わっている。立場が異なれば、考えも変わってくる。そのような状況で、多くの企画を円滑に進めていくために、どのような人と人の関係性が築かれているのだろうか。本稿では、「楽校」として積極的に活動する、美術博物館の教育普及活動の背景にある、「人のつながり」に焦点を当てる。活動の拠点である美術博物館を中心に関係性を整理し、そこから浮かび上がる特徴をまとめる。

3.2 調査方法

教育普及活動の背景をよく知っているのは、美術博物館の学芸員の方々であると考えた。そこで、本稿執筆にあたり、12月17日に美術博物館を訪れ、人文分野のOさん、自然分野のMTさん、美術分野のKさんとMYさんにお話を伺った。インタビュー内容は図表Ⅱ-3-1のとおりである。

インタビュー内容に関して補足する。夏に美術博物館に伺った際、地域における少子高齢化が取り組むべき地域的課題の一つとして触れられていた。また、来館者や講座・講演への参加者は多くが高齢者であるということを知った。そこで、子どもと美術博物館のつながりはどうなっているのか、少子高齢化が進む中でどのように若年層にアプローチしていけばいいのか、特に考える必要を感じたため、特に子どもに向けた教育普及活動の実際を対象とした項目を設けた。

⁹⁷ 小笠原喜康編『博物館の学びをつくりだす—その実践へのアドバイス—』、ぎょうせい、2007、p.iii.

他に、同日開催されていた「古文書講義」を見学させていただき、適宜文献による調査を行った。

トピック	質問内容
全体について (展示・講演会・講座)	企画や準備で重要な事 背景にある人と人のつながり 来館者・参加者の反応
講演会・講座一般について	目的 開催を支える仕事(仕組みや工夫) 参加者の状況(地域住民か否か, 年齢層) 参加者に感じられる変化 学芸員側の変化 開催時の住民との協力 今後の方針
児童・生徒向けの講座・講演会について	各学校段階でのイベントと目的 参加者, 教師, 学芸員の反応, 意見, 考え 今後の方針

図表Ⅱ-3-1 インタビュー内容

3.3 地域博物館について

本節では、美術博物館の具体的取組について分析する前に、地域博物館が一般的にどう定義され、どんな役割が期待されているのかについてまとめる。

伊藤寿朗は、目的別分類における博物館の三つの型として、地域型・中央型・観光型を挙げている⁹⁸。この中の地域型が「地域博物館」に該当する。地域型・中央型・観光型の特徴を見ていく。地域型は「地域に生活する人々のさまざまな課題に博物館の機能を通して応えていこうということを目的とする」⁹⁹。つまり、地域型は博物館機能により、地域住民が抱える課題解決を支援することが目的とされている。中央型は、「全国・全県単位等で科学的知識・成果の普及を目的とする」。地域等、人々の生活に根差した範囲ではなく、それを超えた、より広い範囲を視野に活動をしているという特徴がある。そして、観光型とは、「地域の資料を中心とするが、市民や利用者からのフィードバックを求めない観光利用を目的とする」。つまり、地域住民というよりは、観光客を主な対象者としている。

この中で、美術博物館は何に該当するのか。美術博物館の基本テーマは「伊那谷の自然と文化」、
「自然と人間のフュージョン(融合)」である¹⁰⁰。また、開館以来、「伊那谷の自然と文化」の特徴、

⁹⁸ 伊藤寿朗著『市民のなかの博物館』、吉川弘文館、1993、pp.13-16。

⁹⁹ *Ibid.* p.15 図表 4。

¹⁰⁰ 飯田フィールドスタディの講義、飯田市美術博物館『飯田市美術館 2028 ビジョン・基本プ

環境と人の営みの関わりを探りつつ、地域住民の営みの背景、要素、特徴、精神性を明らかにし、人々の生活を豊かにする目的での活動が行われてきた¹⁰¹。このことから、美術博物館は、地域の自然や文化を対象として、地域の特徴や人々の生活の背景にあるもの等を提供することで、地域住民の生活を発展させていくこと、現在抱えている問題や疑問を解消していくことを目的としているとわかる。そのため、美術博物館は「地域博物館」に該当する。

それでは、一般的に地域博物館にはどのような役割が期待されているのか。一つには、「体験する」である。地域住民にとって、地域の歴史、生活、自然を学び、体験する場¹⁰²を提供することが求められている。また、それを通して、博物館の研究成果を地域社会に還元する¹⁰³事である。地域社会に向けての活動をする、子ども、住民と学芸員が触れ合う機会が増え、子どもや地域住民の視点に立った資料収集や展示に経験を活かすことが出来るという、学芸員と住民の関係形成に起因する効果も指摘されている。加えて、地域博物館の目的でも触れたように、地域や社会における問題解決の糸口を示すことである。学芸員と住民の間に繋がりが形成され、地域社会と良好な関係を作ることで、隠れていた文化の発掘や地域文化の豊かさを再認識する機会ができ、問題発見、解決へとつながっていく。

以上のことから地域博物館と地域住民の関係性を考察する。役割から考えると、博物館は地域住民に場や地域文化について発信し、住民はそれに参加することで資料収集や展示に活かしているような経験を学芸員に提供する。つまり、地域に関する情報を媒介とした互恵的関係があると言える。

3.4 美術博物館に関わる飯田市住民の傾向

本節では、美術博物館に関わる飯田市の地域住民にある特性について、学芸員が持つ印象と、自分が古文書講座見学时に持った印象をもとにまとめる。

3.4.1 学芸員から見て

飯田市住民について、インタビューの中で二つの特性が挙げられていた。

一つ目は、美術への親しみである。KさんとMYさんのお話では、日常生活の中で、高齢者の個人的な集まり等において、住民同士で自分が持つ絵を見せ合うということがあるそうだ。Kさん曰く、「絵にお金をかけることを無駄としない」価値観がある。住民の間に、楽しさや趣味を媒介とした緩やかなつながりが形成され、その中で美術に対する肯定的価値観が育まれ、共有されている様子がうかがえた。他に、菱田春草を顕彰する会である「春草会」等、飯田市にゆかりの

ラン(素案・2016. 12. 15)』, 2016, p.2.

¹⁰¹ 飯田市美術博物館『飯田市美術館 2028 ビジョン・基本プラン(素案・2016. 12. 15)』, 2016, p.6.

¹⁰² 須藤護「地域社会と博物館」全国大学博物館講座協議会西日本部会編集『新しい博物館学』, 芙蓉書房出版, 2008, p.54.

¹⁰³ *Ibid.* p.55.

ある芸術家の顕彰会があることから、美術への関心の高さがうかがわれる。

二つ目は、知識欲である。例えば、MTさんによると、以下のようなことがあった。以前、天竜川の川幅が狭くなり、下にダムが建設されて氾濫しやすくなったため、山を削って4.5mほど土砂で川の周りを埋め立てる工事が行われた。その際に、氷河時代の木の株が発掘され、記録した。「埋もれ木」である。その現地見学会を行ったとき、家族と共に80-90歳くらいの方が来て、以前は天竜川の川岸は現在と違うところがあり、蛇行していたという話を聞き、「昔はメアランダしていたのですね」ということを言った。

「メアランダ」とは、「meander(蛇行する)」という単語で、日常的な英会話ではあまり出てこない。他にも、年代特定に使われる「放射虫」の英単語「radiolarian」等、専門知識や用語を知る人もいた。この例では、年齢に関係なく、新しい知識を得ようとする知識欲の強さが示されている。

以上のように、美術博物館に関わる住民には、「美術への肯定的価値観」、「知識欲」を持つ人が多いということが感じられた。

3.4.2 古文書講座の見学から

見学させていただいた古文書講座は、二つの班にわかれて月一回ずつ(毎月1班：第一水曜日、2班：第三土曜日)開催されている。Oさんに伺ったところ、参加者は平日の方が多く、1班は15、6人ほど、2班は10人程度だそうだ。ただ、所属する班の回に参加できなかった場合は、他班に振替可能であり、見学時(土曜日)には13人が参加していた。参加者は、多くが50歳以上であった。基本的に先生が古文書を読み進めていき、内容や背景知識について話す。そして、受講者が気になったところで質問をするという授業形態であった。この講座は、以前は図書館で行われていたものであり、周辺に旧家が多く、古文書を所持する家が多いため、講座の需要があったことから始められた。

見学していて感じたのは、地域への関心の強さであった。扱われている古文書は地域に関係するものであり、文書に出てきた地名を先生が「現在の〇〇あたり」や「△△さんの所」というと、ほとんどの人が場所をすぐに把握していた。古地図の話をしていた際にも同様であった。加えて、地域の変化にも敏感であった。「前はAだったところが、最近Bに変わっていた」、「今のCは、以前Dであった」、「最近街中でとある碑を見つけた」等、受講者から様々な意見が出ていた。

普段生活していても、地域に対して関心が無ければ、こういった地名や地域の変化に対しても無関心なまま見過ごしてしまう。古文書講座に参加する、熱意がある人達だからという側面もあるかもしれないが、美術博物館に来館する人は、地域への興味が強いのではないかと感じた。

3.5 美術博物館の取り組み

この節では、美術博物館における具体的な教育普及活動について見ていく。まず、概要を示し、取り組みの目的、背景にある思いをまとめる。

3.5.1 教育普及活動の概要

「はじめに」で触れたように、美術博物館では、多くの企画展・講演会・講座が行われている。実際、どの程度の頻度で行われ、どのようなプログラムがあるのか、2016年度に開催されたものを図表Ⅱ-3-2にまとめる。なお、○で囲まれた数字は、開催回数を示す。

分野	美術	人文	自然	子供向け	その他
内容	美術史概論④ 美術鑑賞の会② 春草講座③	歴史文化講座⑧ 民俗文化講座③ 仏教文化講座④ 見学会① 信濃の歴史講座① 古文書講座⑫	生物⑥ 地質⑥ 伊那谷自然史発 表会① 自然講演会② 電子顕微鏡観 察・自然相談⑮ 天文講座④+夜 桜開館中	子ども美術学校 子ども美術学校 作品展 子ども写真学校 ① 子ども科学工作 教室④ 美博小・中・高 校生写真賞	美博まつり (7/30,31) びはく学芸祭 (2/11)

図表Ⅱ-3-2 美術博物館の講座・講演会・催し(2016.4-2017.3)¹⁰⁴

美術博物館設立時から、これ程教育普及活動が盛んだったというわけではない。当初から考えられていたが、だんだんと住民の要請等に応えるために増加していったようだ。図表Ⅱ-3-2でまとめたものは美術博物館で行われる予定のものであるが、他にもワークショップが開催され、館外での活動や、外部団体の活動への協力等も行われている。

3.5.2 教育普及活動の目的、思い

インタビューを通して、どの分野でも「来館者に伝える、興味を喚起する」という目的があると感じた。「住民と文化・歴史・地域・自然・美術をつなげたい」という思いがその目的の根底にあった。以下では、分野ごとに詳しく見ていく。

人文分野では、講演会や講座で扱う内容に関して、地元の人に知ってもらいたい事を扱うそうだ。例えば、2016年度開催の講座では、伊那谷の歴史・民族・芸能、仏像の見方、飯田市出身の文学者(日夏耿之介)ゆかりの地の見学会等、地域文化を伝えることや、地域文化に触れるために必要な知識を身に付けることを意識した内容となっている。また、主催公演で、以前は違う地域から偉い先生を連れてきたが、必ずしも地域のプラスにはならず、将来に生きるようなネットワーク形成のきっかけになるわけでもなかった。そこで、現在では、経験を積んで知識・技術を身に付けた学芸員や地域の研究者が講演を行うこともあるそうだ。

¹⁰⁴ 飯田市美術博物館リーフレット『飯田市美術博物館・上郷考古博物館 2016.4-2017.3』。

自然分野では、住民にとっては当たり前の事であり、見落とされている地域の良さを「発見」してもらいたいという思い・目的がある。そのために、地域の博物館として地域の特徴づけを行い、より展示が活きるようなイベントを開催する、何らかの節目の年にはそれに合わせた内容を扱う等の工夫がなされている。

美術分野では、「美術の魅力を伝える」という目的がある。これは、多くの人に刺激を与え、美術への関心を持ってもらいたい、鑑賞力を身に付けることで深い感動・美術的経験をしてほしいという思いが背景となっていると感じた。美術品を鑑賞すること自体は誰でも出来るが、的外れなものになる可能性があるため、作品のベクトルがわかるように、見方の基本的ラインを伝える講座が提供されているようだ。また、地域博物館は地元に関心をもたせがちになってしまうが、地域の物を保存・尊重する一方で、外から入ってくる新しい文化で地域を刺激することも重要である。そのため、全国的に見て飯田市はどうか、新しく流入した物を飯田市でどのように昇華したのか、入ってきたものと比べてどうか等を意識する必要性についてお聞きした。つまり、ローカル且つグローバルな視点、既存の範囲にとどまらない開かれた地域性を大切にしているということだ。

3.6 美術博物館を中心とした人の関係性

「人のつながり」という、物理的形態を持たないものを一度に捉えることは困難である。そのため、この節では、美術博物館と館外の協力体制、ニーズ把握、住民の変化、学芸員の変化という視点から、人々の関係性について考察する。

3.6.1 協力体制

本項での協力体制とは、展示やイベントを行う際の資料・情報・場所・人材提供等を指す。つまり、一方からの依頼や、両者間の合意により行われる協力について焦点を当てる。

どの分野でも、企画は主に美術博物館の学芸員が行い、必要に応じて館外の人・団体に協力を仰ぐという体制であった。館外の人・団体としては、飯田市教育委員会、住民、住民による団体、企業、研究者、学芸員、地域外の人が挙げられる。

例えば、人文分野では、大きな展示で図録を作成する際は、テキストを研究者に書いてもらうことがあるようだ。自然分野では、地域住民の集まりである伊那谷自然友の会や、長野地域の研究者、国土交通省¹⁰⁵等との連携事例がある。美術分野では、作家自身や作家の遺族、顕彰会や企業との、展示物やコレクションの面での協力に加え、学芸員同士での情報交換も行われているようだ。個人のコレクションは、所有者の名前が世に出ていないため、人脈や学芸員同士の情報交換が重要となる。さらに、他館が今後どのような展示やイベントを行うか把握し、「自館で展覧会を行おうとしたが、有名な作品は他館に貸し出されていたため、展覧会が出来ない」という事態

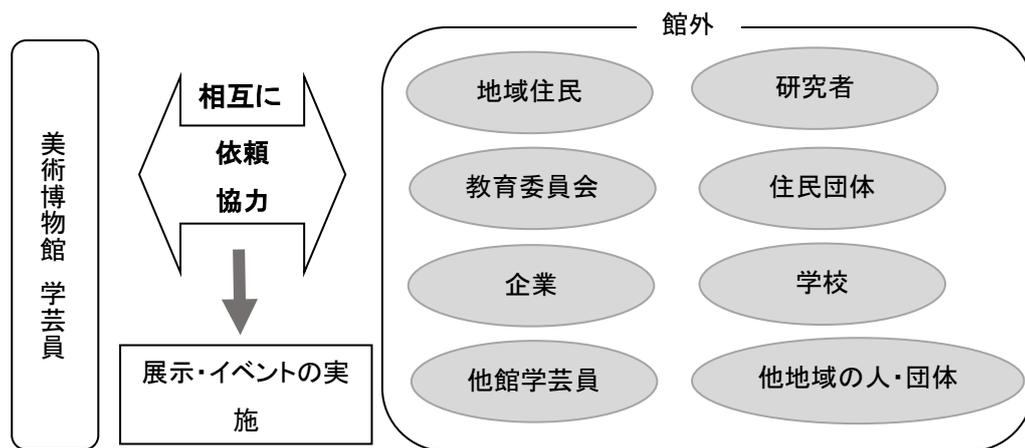
¹⁰⁵ 国土交通省との連携事例：昭和36年の水害のメモリアルイヤーに該当する年に、当時の被害状況をまとめた地図を作製した。

が起こらないように注意する必要があるからだ。

これまで述べてきたようなものとは逆に、館外の人・団体に依頼され、美術博物館が協力することもある。

具体例をいくつか挙げると、人文分野で、2008年に学習院大学で行われた、中世仏画に関するプロジェクトへの協力、IIDA WAVE 主催のイベントに呼ばれて参加するといったことがある。また、美術博物館としてではなく、一人の学芸員として、小学生の夏休みの宿題、自由研究の相談にのることもあるそうだ。美術分野では、春草会の講演にMYさんが参加したり、小学校の先生による春草研究会で学会発表が行われる際に資料提供をしたりする。更に、次節で触れるが、学校から依頼を受けて協力する場合もある。

これらの協力体制を図表Ⅱ-3-3にまとめる。



図表Ⅱ-3-3 美術博物館と館外の協力体制

このような、「依頼⇔協力」という体制が可能にしているのは、目に見えないものの、両者の間で形成されている人と人のつながり、関係性だと考えられる。つまり、美術博物館と前節で触れた人・団体の間に、互いに協力を求めあうことが出来る、信頼関係のようなものが構築されているのではないだろうか。

3.6.2 ニーズの把握

3.5.2で触れたように、美術博物館では、「来館者に伝える、興味を喚起する」、「住民と文化・歴史・地域・自然・美術をつなげたい」という目的や思いのもと、活動が行われている。しかし、単に美術博物館が良いと考えるものを只管提供しても、意義はあるが、住民の心に届きにくい。住民にとって価値があり、魅力的なものとするには、住民のニーズを知る必要がある。

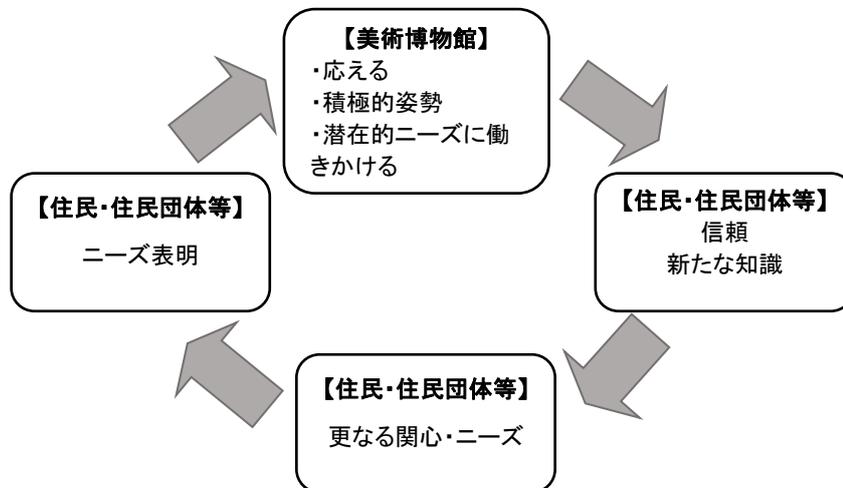
それでは、どのようにニーズの把握が行われているのか、具体的な例を挙げる。美術では、教育員会・学者・司書・文化財参事・学芸員を始めとした美術博物館内外の人々との情報共有、公民館での活動、作家団体との会議、住民との会話を通してニーズを把握している。自然分野では、

伊那谷自然友の会という住民の団体等や、新聞で最近話題になっている事等から知るそうだ。このように、住民の中で顕在化したニーズについては、美術博物館内外の人々、地元のメディア等から把握する。

特に、館内外の人から要望を寄せてもらうためには、要望を聞く姿勢を普段から示すことが欠かせない。せっかく要望を出しても、聞き入れてもらえない、無視されてしまうという状況では、ニーズを表明する意欲が低くなり、新たにニーズを持つ可能性も低くなる。ニーズを持ったり、表明したりしても意味がないからである。前段のように、ニーズを集めることが出来る窓口をいくつも持ち、美術博物館側の積極的に応えていこうとする姿勢、住民側における「自分の意見を聞いてもらえる。応えてもらえる。」という、安心感や信頼感の醸成が必要である。

更に、把握したニーズや美術博物館が地域にとって必要だと考える事をもとに情報を提供することで、住民が新たな知識を得た結果、学習意欲や知識欲が刺激されることがある。これは、それまで潜在的であったニーズが、美術博物館の活動を契機に顕在化するということだ。

これまでのことをまとめると、図表Ⅱ-3-4のように好循環が発生していると言える。



図表Ⅱ-3-4 ニーズに見られる好循環

3.6.3 住民の変化

住民に見られる変化として、興味の喚起が挙げられる。例えば、講演会後に熱心な人は講師のところに来て、質問をしたり、感想を述べたりするそうだ。そして、そのような人は、多くがリピーターである。そうでなくても、良い学びをしたと思って帰る人が多い。また、MTさんによると、講座・講演に影響を受けたのか、地質分野に進んだ子もいたそうだ。以前はそこまで興味を持っていなかったとしても、講座や講演により知識を得ることで、更なる学習への動機づけがなされるということが言える。

加えて、交流範囲の拡大である。Oさんによると、例えば、AさんとBさんが参加した際、Aさんの友達でBさんとは面識がないCさんに会い、それをきっかけにBさんとCさんが友達に

なるということが起こるそうだ。つまり、「友達の友達は友達」というように、思いがけず交友範囲が拡大するということだ。また、学芸員と参加者の心理的距離が近くなる。講座・講演を契機に学芸員と顔見知りになり、質問や会話をすることを通して、より仲が深まっていく。

3.6.4 学芸員の変化

学芸員に見られる変化の一つとして、講座や講演会に取り組む際の意識が挙げられる。Oさんによると、以前は自分の研究発表というような内容的側面に重点を置いていたが、次第に伝え方を重視するようになっていったという。また、MYさんとKさんによると、どう伝えていくのかを考えるようになり、教育普及的スキルが身についたそうだ。加えて、講座を、より能動的参加を促し、相互学習が行われるようなものへと変えていきたいと、どの分野でも言われていた。このことから、講座・講演の形式に関しても、一方的なものから双方向的なものへ、目標意識が変化したと考えられる。

更に、住民からの刺激による成長である。3.4.1で触れたように、住民の知識欲の強さ等に触れて、それが刺激となる場合がある。また、講演や講座を実施することで、内容や展示などについて、直接感想を聞く機会が増え、感触をつかむことが出来る。このような経験を通して、どのようなものが住民に求められているのか等、今後の活動に活かせる知識を身に付く。加えて、住民に伝えるために、自分の持つ知識を言葉にする必要がある。その言語化の過程で、知識の見直し、他者にも理解しやすいような形への再構成、新たな知識の獲得が行われ、既有知識に対する理解が深まるきっかけにもなる。

このように、住民だけでなく学芸員側にも変化・学びが起きている。

3.6.5 まとめ

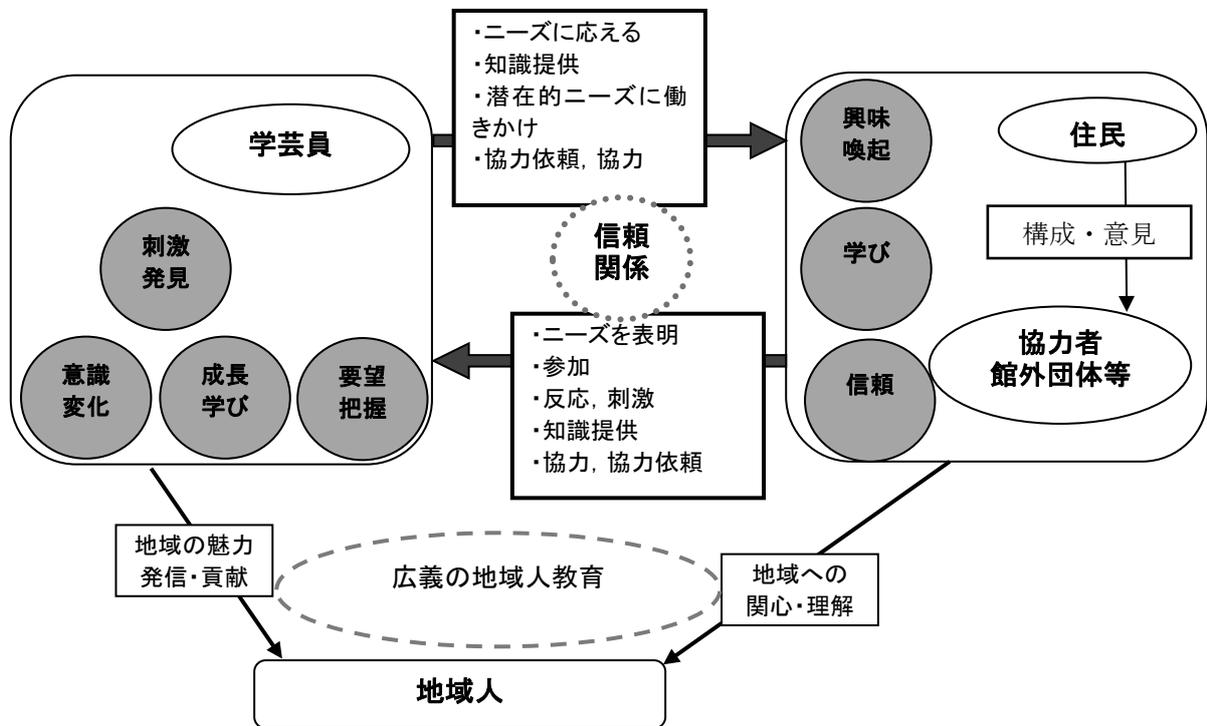
6節でこれまで述べてきたことを図表Ⅱ-3-5にまとめる。美術博物館は、館内外の人々からニーズを把握し、協力して展示・講座・講演を行う。そして、その過程で両者は影響を及ぼし合い、信頼関係が育まれているということがわかる。

この博物館と地域の双方向的関係は、地域博物館に求められるものの根本ではないだろうか。3.3でまとめたものと比べると、地域に関する情報だけではなく「人」を媒介とした、より複雑な影響関係があるということがわかる。住民との触れ合いは学芸員にとって、教育普及的スキル向上の機会にもなり、同時に刺激を受ける機会にもなっている。更に、相互に協力を依頼するという関係も形成されている。加えて、顕在的・潜在的ニーズの両方への働きかけ、住民個人だけでなく、住民により構成されている団体や研究者、他館学芸員、市の教育委員会等、多様な立場の人や団体との関係が、美術博物館では意識され、機能している。

また、このような相互関係を基盤に、「地域を愛し、理解し、地域に貢献する」地域人¹⁰⁶が育成

¹⁰⁶ 牧野光朗『円卓の地域主義 共創の場づくりから生まれる善い地域とは』、東英社、2016、p.144.

されている。美術博物館が提供する情報や学びの機会により、住民に地域への関心、知識、更なる知識欲が生まれている。また、学芸員にとっても、地域の魅力発見・発信、イベント等を通して教育普及的技術向上、地域のニーズに応えていく姿勢への変化等、地域に貢献する存在としての活動機会と成長がもたらされている。地域人教育という、飯田 OIDE 長姫高校で授業として行われている実践を想定しがちである。しかし、美術博物館においても、人と人のつながりに依拠して地域人教育が行われているのではないだろうか。



図表 II-3-5 関係の全体像(色付きの○は発生する影響を表す。)

3.7 子どもとの関係性

3.2 で触れたように、少子高齢化等の地域的課題を背景に、美術博物館にとって、今後活動を進める上で、子どもたちに向けてどのような働きかけをしていくのか考える必要性が出てきている。本節では、学校段階別に子どもと美術博物館の関係性をまとめ、その現状について考察する。

3.7.1 子ども向けの活動について

子ども向けのイベントとして、図表 II-3-2 にまとめたように、子ども美術学校、子ども写真学校、子ども科学工作教室、美博小・中・高校生写真賞等が行われている。美博まつりのワークショップも主に子どもが参加するそうだ。

ただ、すべての学校段階に対して、一様なアプローチがなされているわけではない。図表 II-3-

6 にまとめたように、子どもの年齢に応じて、異なる目的のもと、活動が行われている。就学前の子どもや小学生には、各分野への親しみを持ってもらうことを目的として、体験型のイベントが開催されている。それ以上の年齢の子どもに対しては、自発的学習の支援を目的に、依頼に応じて情報や資料、機材の面で協力する。子どもの年齢に応じて、適切な活動を行おうとする姿勢が印象的であった。

これらのイベントに対して、子どもたちは楽しんで参加しているようだ。この楽しさは、学校の授業には無い体験が出来る事に起因すると考えられる。そして、ただ「楽しい」ということだけではなく、「新しい知識・経験」、「楽しかった記憶」が重要である。美術博物館でどのような体験をして、自分はどう感じたかという記憶が残れば、後日思い出すことで更なる関心につながりやすい。また、そういった経験や記憶があれば、「また行きたい」、「更に知りたい」と感じられ、リピーターとなり、次第に他の展示や講座・講演にも興味を持ち、地域に対する愛着、理解、関心を育むきっかけとなり、地域人として成長していく可能性があるのではないだろうか。

分野	活動	目的	
人文	写真学校、写真賞	飯田市出身の写真家、藤本四八の文化継承のため、若い人の興味を喚起して広めていく。	
自然	就学前	自然体験、プラネタリウム	興味喚起、情操教育
	小学校	美博まつり (化石レプリカづくりなどの体験型ワークショップ)	興味喚起 自分達まで連綿と続いてきた自然の歴史のロマンを感じてほしい。
	高校	依頼があってから 例：飯田高校のスーパーサイエンス107	自発的学習の支援
	大学 ¹⁰⁸	展覧会の資料収集やパネル作成	共同研究者として協力
美術	就学前	ワークショップ ¹⁰⁹	興味喚起
	小学校	美術学校	様々な造形を楽しむ。
	中学校	今は研究段階	学校教育の不足部分を補填する。

図表Ⅱ-3-6 分野ごとの取り組み

3.7.2 子どもとのつながり

子どもと学芸員の間には、図表Ⅱ-3-7のような関係がある。就学前・小学生の子どもには、学芸

¹⁰⁷ 生徒が自分でテーマを設定し、研究するというもの

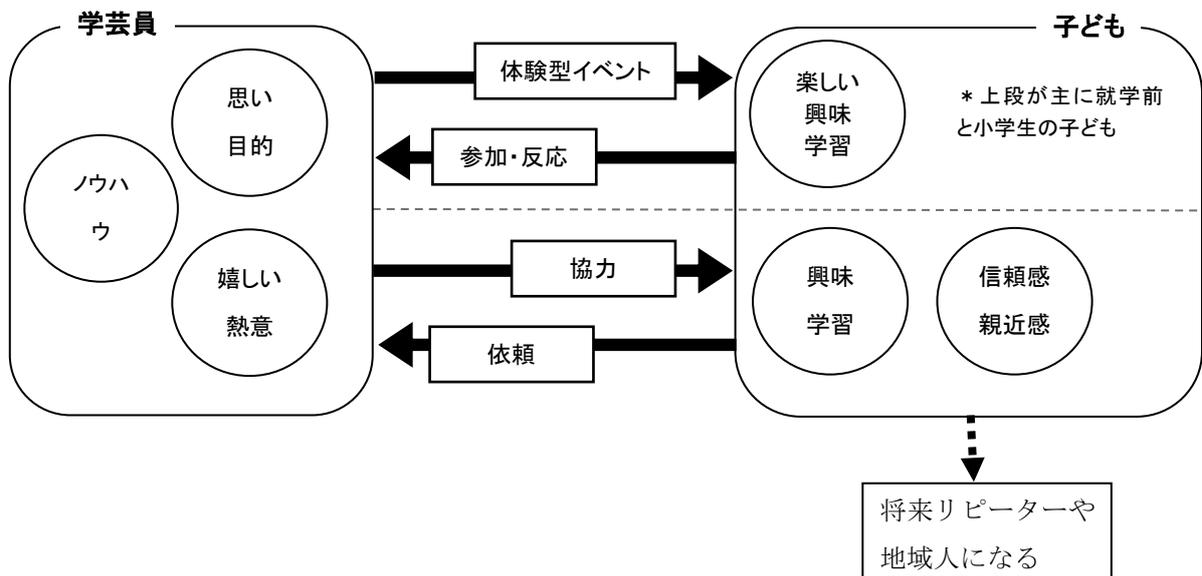
¹⁰⁸ 子どもには該当しないが、児童・生徒・学生に向けた取り組みの一例として加える。

¹⁰⁹ 今年度は開催されていない。

員が図表Ⅱ-3-6のような取り組みを通して、子どもたちの興味関心に働きかける。すると、子どもは学び、「楽しむ」という反応を以てそれに応える。同時に、子どもたちの内部では、当該分野に対する関心が掻き立てられる。個人的に質問をすることもあるそうだ。そのような子どもたちの反応は、学芸員にとっては嬉しく、今後の活動に活かせるノウハウの獲得や活動への熱意向上につながる。また、自由研究についての相談など、個人的な学芸員とのつながりの中で学びが発生している場合もある。

中学生や高校生に対しては、自発的学習の支援を行うことで、学習意欲に応えている。これにより、更なる興味を喚起すると同時に、研究機関・資料保存機関としての美術博物館、そして職員である学芸員への信頼感が形成されているのではないかと考えた。

3.6 で考察したような一般的な関係と異なり、子どもの時期には、特に新しい物や知識に直接触れ、関心を持つということを重視し、今後の学習活動に繋げていけるようにすることが念頭に置かれている。また、美術博物館が学びの中心となるだけでなく、学校で手が回らない部分を補填するという意識されている。幼い時期から美術博物館のイベントに参加することで、内容だけでなく、美術博物館自体にも興味を持つようになる。このような子どもは、成長して他地域に移動していったとしても、帰省の際等に美術博物館を訪れるのではないだろうか。時間を超えたりピーターを育てる事にもつながっていると考えた。



図表Ⅱ-3-7 子どもと学芸員の関係

3.8 今後の目標

今後、美術博物館がどのような関係性を作っていこうと考えているのか、インタビューと美術博物館のホームページで公開されている『飯田市美術博物館 2028 ビジョン・基本プラン(素案・

2016.12.15)』を参考にしつつ述べる。

3.8.1 教育機関との連携

どの分野でも、学校との連携強化が挙げられていた。現在、学校の教員は忙しく、自分の担当教科の研究すらも満足に行えない状況である。その中で、学校外に目を向けることは難しい。美術博物館を訪れるにしても、交通の便の都合上、バスで来なくてはならず、一日仕事となってしまう負担が大きい。美術分野では、出張授業をすると、ただでさえ少ない美術のコマが更に減り、先生の授業時間が削られてしまうという問題があるそうだ。教師も学芸員も「子どものためになることをしたい」という思いで一致しているものの、「多忙さ」に阻まれて十分な協力が出来ないでいる。

このような現状の中で、今後どうしていくのか。現在は模索中であるが、学校のカリキュラムの把握とそれに基づいた企画、提案を行っていきたいと考えているそうだ。つまり、学校や先生の側から歩み寄ってもらうのではなく、積極的に美術博物館から歩み寄る方針だということだ。

子どもに向けた教育だけでなく、全体的な事として『飯田市美術博物館 2028 ビジョン・基本プラン』には、以下のことが掲げられている¹¹⁰。

- ・重点目標として、「多様な学びに学術的に応え、文化の創造と地育力の向上に寄与」
- ・『『地域振興の知の拠点』の一翼を担うために、他の社会教育機関や『学輪 IIDA』等との連携」
- ・「学芸員の持つ専門性や情報網、人脈をいかして、他の教育機関等と連携」
- ・美術博物館の「学芸活動と地域の研究者や研究団体の活動が、活発になり発展する協働」促進
- ・「飯田市歴史研究所や飯田市立中央図書館等との役割分担と連携を図り、『地域振興の知の拠点』の一翼を担うとともに、学校教育機関や公民館との連携のあり方を整え」る。等

これらに見られるように、館外の教育機関との強い協力関係を作っていききたいという方針である。

3.8.2 住民との関係性

更に、講座・講演会の在り方を、より能動的参加を促すものに変えていききたいということが、すべての分野で言われていた。つまり、講座・講演会において、住民と相互学習的關係を築いていきたいということであった。

考えられる方法として、ゼミ形式の講座を開催するという物がある。しかし、学芸員は企画展や他の講座・講演会の企画などで忙しく、継続が難しい。また、考えて意見交換をするためにも、前提となる知識が必要であり、その基礎知識をカバーすることも必要である。そのため、一方的に教える形式の講座と能動的講座の両方が求められ、今以上に学芸員が多忙化してしまう。学芸員主導ではなく、地域住民による学習団体主催の自主ゼミを美術博物館で開催するという方法ならば多少は負担が軽減されるかもしれないが、予定のすり合わせ、継続性などの面で不安が残る。

¹¹⁰ 飯田市美術博物館, *op cit.* pp.7-9.

3.8.3 館内の関係性

加えて、美術博物館内の関係強化が挙げられていた。Oさんによると、人文、自然、美術の三分野があり、それぞれ専門性が高いために意見を一つにまとめる事が難しいという現状があるとのことであった。そのため、美術博物館内でイメージを共有し、分野を超えた関係性強化が必要だと感じているようだ。

そのイメージ共有に対して、現在行われている『飯田市美術博物館 2028 ビジョン・基本プラン』の策定は効果的なのではないかと考えた。個人の頭の中にあるイメージという曖昧なものではなく、言語化することで、明確なものとして館内で共有できる。また、策定の過程で話し合いが行われるため、分野を超えた意見交換の機会となるのではないかと考えた。そして、この文書は、住民からの意見も募集している。つまり、策定に住民も関与している。それを通して、住民と美術博物館の間でも「飯田市美術博物館像」の共有が可能になるのではないだろうか。

3.9 おわりに

これまで、美術博物館に焦点を当てて、その活動における人と人の関わりについて、現状、将来像を見てきた。美術博物館を取り巻く人々の関係性は複雑であり、それが関係者にとって学び合いや成長の機会となり、広義の地域人教育が発生していると考えられる。つまり、学校現場だけでなく美術博物館も地域人育成の場であり、主体・当事者であると言える。しかし、現在抱える問題点もある。調査の中で、問題点や課題に向き合う意志が学芸員一人ひとりの中にあり、課題解決の前提となる意識の共有が行われつつあると感じた。今後、美術博物館内外のつながりとそれに根差した学び合いの機能は、より強固なものになっていくのではないだろうか。

謝辞

最後に、厳しいスケジュールの中、インタビューに応じてくださった学芸員のOさん、Kさん、MYさん、MTさん、その他調査を受け入れてくださった美術博物館の方々、誠にありがとうございました。この場を借りて、御礼申し上げます。

引用文献・資料, Web ページ

飯田市美術博物館リーフレット『飯田市美術博物館・上郷考古博物館 2016.4-2017.3』.

飯田市美術博物館『飯田市美術館 2028 ビジョン・基本プラン(素案・2016. 12. 15)』,2016.

入手先 URL : <http://www.iida-museum.org/7296/> (最終アクセス日 : 2017年1月16日).

伊藤寿朗『市民のなかの博物館』, 吉川弘文館, 1993.

小笠原喜康(編)『博物館の学びをつくりだす—その実践へのアドバイス—』, ぎょうせい, 2007.

須藤護「地域社会と博物館」, 全国大学博物館講座協議会西日本部会編集『新しい博物館学』, 芙蓉書房出版, 2008.

牧野光朗『円卓の地域主義 共創の場づくりから生まれる善い地域とは』, 東英社, 2016.

第4章 博学連携

木戸 玲子・小林 あずさ

4.1 はじめに～飯田市美術博物館と博学連携について～

飯田市美術博物館は、平成元年10月に開館した。「伊那谷の自然と文化」を基本テーマとしており、美術、人文、自然の3部門に分かれて調査研究、教育、展示に取り組んでいる。スタッフ数は、美術部門が4人、人文部門が3人、自然部門が8人となっている。常設展示やプラネタリウムだけでなく、企画展、コレクション展、自然講座や美術講座など多岐にわたる活動を行なっている。2016年9月、私達が飯田市美術博物館へ訪れた際に、学芸員の方々が挙げた現在の問題点として「小学校との連携がうまくいっていない」というものがあった。そこで私達は「博学連携」について調査することとした。

博学連携とは、博物館と学校が連携・協力して子どもの教育に当たる取り組みのことである[13]。学校教育における博学連携は、小学校学習指導要領・中学校および高等学校学習指導要領においても言及されている。学校は博物館等と連携、協力を図りながら、それらを積極的に活用するように配慮しなければならない。しかしながら、全国の学校やその地域の博物館において博学連携がうまく行っている事例は多いとは言えない。地域博物館と地域の小学校との間の博学連携を促進することで、地域に愛着を持った子供たちが増え、地域人を育てる「地域人教育」につながると考えられる。

先述のとおり、飯田市美術博物館も博学連携がうまくいかないという問題を抱えているため、私達は、他の地域の博学連携成功事例を挙げて比較を試みることで、飯田市美術博物館における博学連携の促進に貢献したいと考えた。

なお、博学連携と一括りに言っても様々な連携方法があるが、この報告書においては博物館と小学校の連携（授業の一環として博物館と小学校の連携が行われていること）を「博学連携」として捉えた。この報告書における博物館とは、市立のもので、動物園や資料館も含む。

4.2 飯田市美術博物館における博学連携への取り組みとその問題点

飯田市美術博物館では、小学生を対象としたワークショップや講座、イベントは多く開催されている¹¹¹。また、プラネタリウムは授業に組み込まれている¹¹²ものの、小学校の教育カリキュラムにのっとった連携はあまり見られないというのが現状である。

飯田市美術博物館のホームページには、学校向けに『美博利用ガイド ～びはくへ行こう！～』が提示されている。これは、小・中学校教育との「博学連携」を推進するために作成された文書

¹¹¹ 「飯田市美術博物館」入手先 URL : <http://www.iida-museum.org/> (アクセス日 : 2017-1-10)

¹¹² 「茅野市博物館協議会専門部会 議事録」入手先 URL : <http://www.city.chino.lg.jp/www/contents/1000001463000/files/senmonH241025.pdf> (アクセス日 : 2017-1-10)

であり、保育園・幼稚園や高校、公民館など社会教育施設・機関も参考にしていよい。教員がガイドを参照し、博物館と相談することで、展示見学や学習（講座）など、対象にあわせて内容を変えることも可能となっている。

飯田市美術博物館における博学連携に関して客観的に調査を行なった博物館がある。茅野市八ヶ岳総合博物館では、職員が飯田市美術博物館を見学しその報告をまとめた議事録が作成された¹¹³。その内容を以下に簡単にまとめた。

飯田市美術博物館はスタッフが充実し、友の会によるバックアップも強力なもので、調査研究に非常に力を入れている。しかし博学連携に関しては、まだ充分とは言えない。その大きな理由として、飯田市美術博物館は市街地に位置するため、学校からのアクセスが悪いというものがある。博学連携のためのパンフレットは作成されているが、それを作った理由は、小学校教員の異動が激しく連携講座の内容が継承されないためである。一方、佐久市では学校の先生達が博物館をどう利用するのかという授業案・指導案を自分たちで作って博物館に提案して利用しているらしい。飯田市美術博物館では大学助手・非常勤レベルの研究員が研究員・学芸員として働いているため、大学など他にポストができると抜けていってしまうこともある。博学連携をうまく進めるためには、まず理科の学習指導要領に博物館利用を組み込むべきである。そして学校側には博物館担当の職員を作るべきである。博物館側からは情報提供をする必要がある。博学連携をうまく進めるためには、まず理科の学習指導要領に博物館利用を組み込むという方法もあるのではないだろうか。そして学校側には博物館担当の職員を作ることが望ましい。博物館側からは情報提供をする必要がある。

4.3 他の地域の博学連携成功事例

全国の市立博物館のうち、飯田市美術博物館と、博学連携がうまくいっている博物館についてまとめたものが図表Ⅱ-4-1である。

4.3.1 旭川市旭山動物園

旭山動物園では、教員の博物館に対する理解不足を解消するために様々な取り組みを行っている。園内でのガイドや体験学習に限らず、職員が学校に出向く出張授業も行っている。旭山動物園の特徴的な博学連携活動として、「旭山動物園教育研究会（GAZE）」の組織運営が挙げられる。この組織の目的は「学校と動物園が融合し、こども達に動物のすばらしさを伝える。」といったもので、旭川市やその近郊の教員達と一緒に運営している。学校と動物園双方が融合した教育活動の在り方を探る、大学、学校、動物園の三者間の会議組織である。研究会では教員が参加するワークショップを複数回開いている。

¹¹³「茅野市博物館協議会専門部会 議事録」入手先 URL : <http://www.city.chino.lg.jp/www/contents/1000001463000/files/senmonH241025.pdf>（アクセス日：2017-1-10）

	市民数（人）	市内の小中学校数（校）
飯田市美術博物館	103494	19
(1) 旭川市旭山動物園	342848	56
(2) 名古屋市博物館	2307292	261
(3) 戸田市郷土博物館	137320	12
(4) 美濃加茂市民ミュージアム	56278	9
(5) 信濃川火焰街道博学連携 プロジェクト（3市町村分）	長岡市：274977 十日町市：55251 津南町：10059	長岡市：59 十日町市：19 津南町：3

図表Ⅱ-4-1 各博物館が置かれている市の市民数と小中学校数
(平成28年12月～平成29年1月1日のデータ)

4.3.2 名古屋市博物館

名古屋市立博物館は学校の団体見学を積極的に受け入れており、特に小学校三年生を対象とした「くらし体験事業」は市立小学校の9割以上が参加している。「くらし体験事業」は常設展の「くらしのうつりかわり展」で古い道具をじっくり観察した後に実際に古い道具に触れることができる。また、「出前歴史セミナー」と言って、市立博物館の学芸員が市内の小中学校に出向き、館蔵資料に実際に触れさせるなどして名古屋の歴史や文化を紹介し、ひと味違った歴史学習を行っている。

4.3.3 戸田市郷土博物館

戸田市の郷土博物館では教職員を指導主事として配置しており、博物館資料を使った授業を実施している。市内の小学生は、3年生と6年生の2回、郷土博物館を訪れている。3年生も6年生も、昔の道具を実際に使って稲作体験や火おこし体験、土器に触る体験などを行っている。また、学芸員が学校に出向いて授業をサポートする「出前授業」や資料の貸出も行われている。市としては、子どもたちが生まれ育った戸田に興味を持つきっかけとなり、郷土を愛する心を育むことを期待している。

4.3.4 美濃加茂市民ミュージアム

美濃加茂市民ミュージアムの学校活用は、市内の小・中学校の年間指導計画に位置付けられ、全小・中学校が活用している。また、活動を希望する市内の保育園、市外の学校も受け入れている。博学連携の効果を高めるために、小・中学生を対象とした教育普及事業を担当する「学習係」がある。学習係は、学校間の活動日調整や教員との打ち合わせ、活動準備などの学校活用に関わる全ての業務を行い、実際の活動時は、教員や学芸員とともに児童生徒の学習に携わる。児童生徒の学習の際には、ボランティアも授業に参画している。市内の小中学校の教員（各校より一名）

と文化の森の職員が参画する「文化の森活用委員会」があり、学習活動の工夫や運営を話し合っている。また、「森の学校たより」を作成し、各学校の教職員に配布している。森の学校たよりは学習系の広報紙で、展覧会情報や子ども向けのイベント・講座の情報、活動した学校の様子の写真などを載せている。

4.3.5 信濃川火焰街道博学連携プロジェクト

火焰街道博学連携推進研究会によって運営されているプロジェクト。火焰街道博学連携研究推進会は、博物館と学校との有機的な関係作りによってもたらされる様々な効果を実践によって検証しているグループで、その有機的な関係作りを、各市町村内のことに留めず、信濃川火焰街道という地域間交流を発展させることを目的としている。

「信濃川火焰街道連携協議会」で結ばれた、長岡市・十日町市・津南町の3市町村それぞれの博物館および生涯学習課と小学校が連携して総合的な学習に取り組んでいる。それぞれの地域の小学校や博物館が交流したり、共に学びあったりすることを通して、縄文文化の広がりを実感し、郷土の歴史や文化に親しむことを狙いとしている。

実際の活動としては、3市町村から、「縄文」をキーワードに総合学習する小学校がそれぞれ1～2校集まり、そこに地域の学芸員が密着してさまざまな活動を行っている。

4.4 博学連携促進のための努力

博学連携のために、学校側ではなく博物館側が働きかけた事例は多い。

4.4.1 旭川市旭山動物園¹¹⁴

旭山動物園は、国立科学博物館が実施していた「教員のための博物館の日」を国内でいち早く地方展開した。この事業を行ったのは旭山動物園の奥山英登さん（学芸員）である。旭山動物園においては、奥山さんが博学連携を進めるために様々な取り組みを行ってきた。大きな取り組みの一つとして、「旭山動物園教育研究会（GAZE）」の組織運営が挙げられる。また、これまで学校で行ってきた教育実践事例をもとに、動物園学習の利用の手引きやモデルケースをGAZE会員とともに編纂し、これを「旭山動物園教育連携ガイドブック」として発行している。奥山さんのように、博物館側の誰かが率先して博学連携を推し進めることが、現状の博学連携では大事なのかもしれない。

4.4.2 シルク博物館¹¹⁵

もとは神奈川県が行っていた小学校への蚕種配布事業（小学校に蚕の卵を配布する活動）をシル

¹¹⁴ 「旭山動物園で行ってきた博学連携への10年」入手先 URL : https://www.kahaku.go.jp/learning/schoolchild/tatsujin/pdf/H27/awards27_11okuyama.pdf（アクセス日：2017-1-23）

¹¹⁵ 神奈川県博物館協会（編）『学芸員の仕事』、岩田書院、2005。

ク博物館が引き継ぐようになったことが連携の始まりとなった。飼育についての問い合わせが殺到するようになり、見学に来る学校も現れるようになった。それをうけてシルク博物館は、連携に対応することができるように展示を整備した。

小中学校へ向けて「利用の手引」を作成し、郵送だけでなく校長先生に直接面会しに行き説明して歩いた。しかし手引が硬い感じのするものだったため学校側からの利用や問い合わせはほとんどなかった。そこで、学校側は何を博物館に期待しているのか、何を展開しようとしているのかを考え直した。そしてホームページを導入し、写真入りのわかりやすい手引を掲載したところ、先生や父母から問い合わせが多くなり、来館に結び付く例が見られるようになった。

蚕の飼育方法に関して学校へ出向いて講演をするようになったが、講演後に学校が来館することもなく、出張公演では見せられる資料が少ないため小学生にも伝わり切らず、あまり効果が見られなかった。資料を持ち出して子供たちにも見せる移動博物館の話題も出たが人的・予算的に不可能であった。

私立小学校の先生のほうが何度も来館したり学芸員と相談したり実技講習会に出席したりするため、私立とのほうが、連携が多くなっている。

学芸員は展示現場に立ち、笑顔で声をかけたり、静かに先生や生徒の声に耳を傾けたりするとよい。一方的な説明よりも、子供たちの目がいきいきと輝くような対話が重要だと考える。博物館サイドの考えばかりではなく、先生との積極的な意見交換や子供たちの視点に立って、子供たちの関心や能力を最大に引き出す多面的な取り組みが必要だと考えている。

4.5 博学連携方法の提案

4.5.1 学校と博物館の両方が学び合える学習プログラムの構築

博物館側が博学連携に充てることができる人員や時間等も限られているため、ただ博物館側が学校に協力するといった形の学習プログラムなのではなく、博物館も学校側から何かを学べるようなプログラムにする。

4.5.2 周辺の市町村との連携

信濃川火焰街道博学連携プロジェクトのように、一つの博物館だけでなく、周りの市町村の博物館や小学校との連携は大変画期的な取り組みである。小さな博物館や、市内にあまり多くの小学校がない場合などでも積極的に地域における博学連携を進めていくことができると考えられる。

4.5.3 博物館と学校教育をつなぐ第三者の配置

市民団体や大学など、コーディネーターを間に介して博学連携を行う。メリットとして、学校や博物館の担当者が変わった場合でもその後の博学連携がいままで通りに行われるということが挙げられる。懸念される事柄としては、第三者を配置するためにはある程度の博物館や地域の規模ややる気が必要であるという点が挙げられる。どこの団体もしくは大学をコーディネーターと

するかを決める段階や、コーディネーターの関わり方を決める段階に労力がいると考えられる。

4.6 おわりに

地域博物館と小学校との博学連携により、人々は小学校時代に地域博物館での思い出や学びを得ることができる。そのことによって自分の出身地域に興味・愛着を持つようになり、地域人教育につながっていくと考えられる。博学連携を促進することは、超えるべき壁が多くあり簡単なことではないが、促進のために重要なポイントは、博物館側と小学校側の双方向の協力である。

引用文献・資料, Web ページ

旭川市旭山動物園 入手先 URL : <http://www.city.asahikawa.hokkaido.jp/asahiyamazoo/> (アクセス日 : 2017-1-23) .

「旭山動物園で行ってきた博学連携への 10 年」入手先 URL : https://www.kahaku.go.jp/learning/schoolchild/tatsujin/pdf/H27/awards27_11okuyama.pdf (アクセス日 : 2017-1-23) .

飯田市美術博物館ホームページ 入手先 URL : <http://www.iida-museum.org/> (アクセス日 : 2017-1-10) .

飯田市「【提言】少子化に伴う学区の再編について」入手先 URL : <https://www.city.iida.lg.jp/soshiki/34/teigen14-4-08-2.html> (アクセス日 : 2017-1-10) .

神奈川県博物館協会(編)『学芸員の仕事』岩田書院, 2005.

「茅野市博物館協議会専門部会 議事録」入手先 URL : <http://www.city.chino.lg.jp/www/contents/1000001463000/files/senmonH241025.pdf> (アクセス日 : 2017-1-10) .

黒沢浩(編)『博物館教育論』, 講談社, 2015.

「信濃川火焰街道博学連携プロジェクト」入手先 URL : <http://www.kaen-kaido.com/manabu/project.html> (アクセス日 : 2017-1-23) .

戸田市郷土博物館 入手先 URL : <https://www.city.toda.saitama.jp/soshiki/377/> (アクセス日 : 2017-1-23) .

名古屋市博物館 入手先 URL : <http://www.museum.city.nagoya.jp/> (アクセス日 : 2017-1-23) .

「ぶんけい教育ほっとにゅーず教育の小径」 No. 64 2014年2月号 入手先 URL : <https://www.bunkei.co.jp/school/komichi/pdf/monthly201402.pdf> (アクセス日 : 2017-1-24) .

美濃加茂市民ミュージアム 入手先 URL : <http://www.forest.minokamo.gifu.jp/index/index.cfm> (アクセス日 : 2017-1-23) .

JTB 総合研究所「地域博物館の価値再考 ～「住民参加」から次のステップへ～」入手先 URL : <http://www.tourism.jp/tourism-database/column/2014/05/local-museum/> (アクセス日 : 2017年-1-10) .

おわりに

村上 由紀

地域から教育へ。この第Ⅱ部は橋渡しのような立ち位置にある。

平場，音楽祭，美術博物館，学校。地域における場から教育現場へと遷移しつつ，様々な角度から「人」を見つめ，その繋がり の在り方を考察してきた。様々な関係性が浮かび上がる中，飯田市に張り巡らされた繋がり は，学校内外における地域人教育を支えるものとして機能していた。

「人のつながり」と言う一言で済んでしまう。その曖昧な一言のまま放置することも出来る。しかし，地域というコミュニティは，何よりも「人のつながり」がないと成り立たない。この一言に注目することは，地域の基底部分と向き合うことに近いのではないだろうか。私はそう感じさせられた。

第Ⅲ部 〈教育グループ〉

執筆者：鯛，田口，渡辺，杉田，横井，瀬領

はじめに

渡邊 晃一朗

これまでの章で、地域と人というものに関する報告をしてきた。

この報告書のテーマが「人が育てたまち 人が育つまち いいだ」であるように、私たちは飯田という「まち」が「地域」と「人」の育て合い、支え合いによって編み出されてきた一つの“Tapestry”なのではないのかと、感じた。

この「教育」という章は、今までの「地域」と「人」という糸による“Tapestry”の編み方、とも言えるのだろうか。

どのように飯田という「地域」によって「人」が育ってきたか、また「人」がどのように飯田という「地域」を作り上げてきたのか、その相互作用を少しでも示すことができればと考える。

第1章 子どもたちから見た通学合宿

鯛 仁和

1.1 はじめに

私が長野県飯田市川路地区の通学合宿の取り組みに出会ったのは2年前の2014年9月に行われた飯田フィールドスタディの時であった。長野県教育委員会 HP によると、通学合宿とは、地域の公民館・集会所・青少年施設・学校など宿泊可能な施設で、異年齢の子どもたちが共同生活を行いながら通学する活動である。かつてのように家庭での子どもの仕事がない現代に、異年齢集団での共同生活の機会を与え、衣・食・住といった生活体験を通じて、お互いの立場を理解し、自らの役割を認識して協力し合う心を育むとともに、基本的生活習慣の確立や日常生活に必要な生活技能を習得し、子どもの「社会力や生きる力の向上」を目的としているということである。さらに、子どもたちの活動を支援する立場で地域の大人たちの参画を促し、地域の子どもは地域で育む意識を持つことにより、家庭・地域の教育力の向上を期待している¹¹⁶と書かれている。川路地区においても同様に、「子どもと地域のつながりが希薄になってきている」「親子の関係も希薄になってきている」「友達同士の関係も希薄になってきている」なども問題意識から地域が一体になって子どもを育てる活動として通学合宿が選ばれた。特に「通学合宿」でなければいけなかったという理由があったわけではないが、子どもたちの名前や顔を覚えたい、私たちの顔や名前を覚えてほしいとの思いから通学合宿が選ばれた。

本章では、第2節においてこれまでの報告書の内容を検討したのち、第3節で本章の目的を述べる。第4節では川路地区の、第5節では川路通学合宿についての概要を述べる。第6節以降では、本章のために行った調査の概要とその結果を記述し、最後に考察をするという構成になっている。

1.2 これまでの報告書の内容—先行研究の検討—

私が2年前に通学合宿と出会ってから2年の間、通学合宿について飯田市社会教育調査実習報告書において毎年調査がされ、報告されている。

2014年度飯田市社会教育調査実習報告書『未来（あした）へつむぐ飯田らしさ』第3部、第4章では、資料や川路通学合宿実行委員会メンバーへのインタビューを通して通学合宿実施の概要や背景について述べ、さらに通学合宿の変化や発見を「子ども」「大人」「運営」の3つの視点から述べ今後の課題について検討している。2015年度飯田市社会教育調査報告書『“飯田”というつながり』第Ⅲ部第1章でも、同様に資料調査や川路通学合宿実行委員会座長のAさん、公民館主事、参加児童保護者2名の方に対するインタビュー調査を行い、通学合宿が川路地区で実施でき

¹¹⁶ 長野県教育委員会 HP 「通学合宿について」 入手先 URL : <http://www.pref.nagano.lg.jp/kyoiku/bunsho/tsugakugasshyuku.html> (アクセス日 : 2017-1-22)

ている要因についての調査がなされていた。

これまでの報告書では、実行委員会のメンバーや参加児童の保護者、公民館主事にインタビューすることによって、「川路地区通学合宿」という取り組みがどのように実施され、どのような成果があり、これからの課題としてどのようなものが考えられるかという、取り組みの内実やこれからの迫るものであった。

1.3 本章の目的

今回の報告書では、「通学合宿」という取り組みそのものをこれまでの報告書ではあまり注目されてこなかった子どもたちの視点から描き出すことを第一の目的とする。描き出した結果、新たな通学合宿のあり方やこれからの通学合宿に対して示唆を与えることを第二の目的とする。

通学合宿の本来の目的は「子どもの成長」である。その子どもたちが通学合宿をどのように受け止めているのかを文章に描き出すことは意義のあることであり、これからの通学合宿のあり方を考える上で重要な視点であると考えている。そこから通学合宿のあり方に対して示唆を与えたい。

さらに、本報告書、第3部のテーマである教育について、特に「地域人教育」についても考えられる新たな視点を与えるを試みる。

1.4 川路地区について

川路地区は天竜川の西に位置し、景勝地として有名で、2016年11月には天皇、皇后両陛下がお越しになった天龍峡、天龍峡温泉がある。人口は1968人(2016年12月末時点)¹¹⁷である。なんと、昨年、川路地区は人口が増加したと聞いた。川路地区の近くにある村などからの移住者や都会からの移住者がいたということである。

また、川路地区は天竜川沿いに位置する地区であり、戦前戦後期から河川の氾濫によって何度も被害を受けていた地域である。水害で被害を受けた際には被害のなかった家を共同で使い、地区の住民は家を貸し合いながら、助け合って生活してきた地域だと聞いている。

1.5 川路地区通学合宿の概要

本節では、川路地区で行われた通学合宿の概要を述べる。第1節のはじめには、長野県教育委員会が示している通学合宿の定義や目的を記述した。その他の部分で川路地区通学合宿の特徴として考えられるものを中心に川路地区通学合宿の概要を述べる。

今年度で3回目となる川路通学合宿が6月1日から4日までの3泊4日の間、5年生14名、6年生9名の計23名の参加で行われた。今年からは宿泊場所が天龍峡温泉交流館から川路公民館に変わったが、例年通り実施された。また、保護者や小学校、公民館主事に加え地域住民など

¹¹⁷ 飯田市 HP「飯田市の世帯と人口」入手先 URL : <https://www.city.iida.lg.jp/uploaded/attachment/29601.pdf> (アクセス日 : 2017-1-22)

35名ものスタッフが通学合宿をサポートした¹¹⁸。35名の中には、看護師資格を持っている者や保健師資格を持っている者、料理クラブ会員の方々、通学合宿を経験した中学生、公民館関係者など、とても様々な立場や様々な年代の方達が子ども達のためにまさしく「地域総出（ちいきそうで）」で、地域が一体になって行われている。3回目を迎え、徐々に地域に浸透していると言えるであろう。

今年の通学合宿で初めて行ったことの1つは「まくら投げ」であった。子どもたちからの発案でまくら投げをしたいとの声があり、当初は否定的な意見もあったが、通学合宿の期間中「良い子」を続けてきた子どもたちに対し、「子どもらしさ」も必要との考えから公民館主事の判断で最終日のみ、「見て見ぬふり」をしたということでもくら投げ行われたそう。そのまくら投げは通学合宿始まって以来、ここまで盛り上がったことはないというくらい最高に盛り上がり、子ども達の記憶にも、スタッフの記憶にも残されていた。

このように、地域の人たちそれぞれが子ども達のことを第一に考え、試行錯誤しながら、地域全体で子ども達を育てる取り組みが川路地区の通学合宿である。

1.6 調査概要

2016年12月10日に川路公民館においてインタビュー調査を行った。今年度、川路地区通学合宿に参加した小学5年生5名とボランティアとして通学合宿に参加した中学生1名を対象に自らが経験した通学合宿についてや自らが住んでいる川路地区という場所についてのインタビュー調査を実施した。それに加えて、その後に通学合宿実行委員会の座長に対して通学合宿についてのインタビュー調査を実施した。

具体的に質問した内容は、小学生と中学生に対しては、通学合宿の感想や通学合宿を体験する前まで持っていた通学合宿に対する印象、通学合宿を通して変わったことなどを全員に尋ねた後、川路地区というところに対してどのように感じているか質問した。座長に対しては、通学合宿を始めた経緯や通学合宿に対する思い、通学合宿を実施することで、子どもたちや地域がどのように変化したのかを尋ねた後、これからの川路地区についてどのように考えているのかについてお話を伺った。

1.7 子どもたちから見た「通学合宿」

1.7.1 通学合宿に対する印象

今年の6月、やっと通学合宿ができた。前々から通学合宿というのがあるというのは知っていたし、通学合宿の話聞いていた。わたしたちも早く通学合宿に参加したいと思っていた。あんまり詳しく何をするかよくわからなかったけど、お母さんとか友達とか、いろんな人から楽しいって聞いていたから早くわたしも行きたいって思っていた。みんなで同じ場所に泊まって一緒に学校に行くのって、なんか楽しそうだった。今までそんなことしたことなかったし、考えたこ

¹¹⁸ 通学合宿実行委員会「川路通学合宿だより」2016.

ともなかった。だから、もともと周りの友達みんなと一緒にいこうねっていう話もしていた。わたしたち5年生はクラス全員で15人なんだけど、そのうちの14人が通学合宿に参加した。本当は全員参加したいって言ってたんだけど、予定が合わなくて。来年は全員で通学合宿ができたらいいと思う。

1.7.2 通学合宿の感想

実際に行ってみたらやっぱり楽しかった！もちろん大変だったこともあったけど、みんなと一緒にするから楽しかった。普段は、家でご飯作ったり、片づけをしたりはしないけど、通学合宿ではそれができた。今までしたことがなかったから、見たことはあったけど、やり方がわからなかった。実際にやってみたら、家でもできるようになった。今は、家で毎日しているわけではないけど、たまにお手伝いをするようになった。お手伝いをするとお母さんも喜んでくれるし、そうしたら自分も嬉しくなる。

もう一つ楽しかったのは、まくら投げ！通学合宿の中で一番盛り上がった。最後の日の夜にみんなでまくら投げをした。お風呂に入った後だったけど、汗だくになるくらい思いっきり遊んだ。あんなに広い場所で、あんなに大人数で、たくさんのまくらでまくら投げをするのは本当に楽しかった。

1.7.3 通学合宿後の変化

通学合宿をして一番変わったと思うのは、6年生の人たちと仲良くなれたこと。今までは自分たちの学年の人たちとばかり一緒に遊んでいたけど、通学合宿で6年生と仲良くなって、一緒に遊んだりするようになった。もともと名前は知っていたし、学校の行事で一緒に活動したことはあったけど、仲が良いというわけではなかった。でも、通学合宿は一緒にご飯作ったり、一緒に勉強したり、一緒に学校に行ったり、いっぱいお話ししたりするから仲良くなれた。その時だけじゃなくて、通学合宿が終わってからも話すようになったし、家に遊びに行ったりもするようになった。通学合宿に行く前はあんまりそんなことは考えてなかったけど、やってみて一番変わったのは6年生の仲良くなれたことだと思う。

1.7.4 来年の通学合宿に向けて

来年もまた通学合宿に参加したい。来年はクラス全員で参加したい。中学生になってもボランティアで参加したりしたい。通学合宿は自分たちで作る晩ごはんのメニューを考えたりするので、もっと美味しいメニューを考えたい。来年は、6年生で、最上級生になるのでリーダーとかかもしれないといけないから、もっとしっかりしてみんなをリードしてまとめられるようにしたい。今から考えただけでも楽しみ。

1.7.5 川路地区に対する思い

川路地区について、小学 5 年生はまだ特に特別な思いを持っているというわけではなかった。この川路という場所で生まれ、生活しているということはわかっているが、他の地区や村がある中で、ここに生まれてよかったと思えるほどの経験はまだないと考えられる。今回のインタビューで「通学合宿」についても「飯田市内で行われているところはないと思う。」と言うと、とても驚いていた。すべての地区で同じように行われているものだと思っていたようだ。これから、この通学合宿をはじめとして様々な地域の人と関わりながら成長していくにつれて地区に対してどのような思いを抱えていくのかとても楽しみだと感じた。

1.8 考察

1.8.1 子どもたちのインタビューから読み取れること

今回の小学生に対するインタビューでは、通学合宿が川路地区に定着してきているということが確認できた。今年小学 5 年生は通学合宿に参加する前から「通学合宿」というものをすでに知っていて、内容についてある程度認知していた。それを知っていることにより、みんなで参加し、子どもたちにとってより充実した通学合宿になったのではないだろうか。さらに、通学合宿に実際に参加したことのある中学生も通学合宿にボランティアとして参加しており、3 年目を迎え、少しずつ地域に根ざしつつあると捉えることができるであろう。

1.8.2 これからの通学合宿

このような実態を踏まえて、どのような通学合宿実行していくことができるだろうか。現在の通学合宿は子どもたちにとって、自分たちで決めることができるところはあるが、その自分たちで決める部分については大人の人たちにすでに決められている。最初のまだ通学合宿というものがどのようなものであるか決まっておらず、手探りの状態の時点ではその運用が最も効率的であり、継続していく上でやりやすい形である。しかし、地域に根ざし始め、子どもたちも通学合宿というものがあ程度、認知されてきた現状では、通学合宿の運営にもっと子どもたちを参加させていくということも考えていくのが良いのではないだろうか。子どもも一緒に実行委員会に参加したり、自分たちのやりたいと思ったことを意見したりする場所を作り、その上で自分たちが考えたことを実際に実行することにより、「通学合宿」というものをより自分のこととして考えられるようになる。ひいては、川路地区というまちに対する思いや、地域の人たちに対する思いのようなものもより一層強くなるのではないだろうか。最終的な目標であった、地域の教育力の向上につながっていくと考えられる。この報告書のタイトル「人が育てたまち 人が育つまち いいだ」であるように人が子どもを育て、子どもがまちを育てていけるような形を模索していくのもあり得るのではないだろうか。さらに、子どもたちが積極的に参加することにより、さらに大人たちももっと頑張ることができる活力が生まれ、より相乗効果が生まれていくのではないだろうか。

1.9 川路通学合宿から考える地域人教育

ここまでは、川路の通学合宿について子どもたちの視点から記述し、その上でこれからの川路通学合宿のあり方を考察した。本節では、その川路通学合宿の視点から、さらに地域人教育へ何か新たな示唆を与えることはできないか考察する。本報告書は、全体として地域人教育を学校の中だけで完結するのではなく、「地域」「人」「教育」という視点から考えることにより、俯瞰的に地域人教育を理解しようとしている。そこで、ここでは、通学合宿の取り組みから地域人教育へと架橋することを試みる。

地域人教育と通学合宿は学校種やカリキュラムなど、種々の差はあるけれど、地域が子どもたちに対して、まちに対するおもいを持ってもらうために行われているという点では共通点があり、それぞれの取り組みは互いに参照することができると考えられる。どちらも始まってからまだ時間があまり経っておらず、徐々に地域に定着しつつあるという点でも同様である。

1.10 おわりに

通学合宿という取り組みは、飯田市のフィールドスタディでお話を聞くまで全く知らなかった取り組みだった。しかし、地域の人の頑張りにより継続され、どんどん地域に根付いている。このような取り組みを続けられるのも飯田市のなせる技である。「地域」という土台の上に頑張る「人」がいて、子どもたちがどんどん育っていく。まさに飯田市で行われている教育の一つの理想的な形が体現されていると感じた。これからもこの通学合宿が継続され、より良い形へと進化し続けていくことを大いに期待します。

最後になりましたが、インタビューの手配をしてくださった公民館主事さん、インタビューを受けてくださいました、公民館長さん、実行委員会座長、小学生の皆さん、本当にありがとうございました。

引用文献・資料, Web ページ

飯田市 HP「飯田市の世帯と人口」入手先 URL : <https://www.city.iida.lg.jp/uploaded/attachment/29601.pdf> (アクセス日:2017-1-22)

通学合宿実行委員会「川路通学合宿だより」2016.

長野県教育委員会 HP「通学合宿について」入手先 URL: <http://www.pref.nagano.lg.jp/kyoiku/bunsho/tsugakugassyuku.html> (アクセス日 : 2017-1-22)

第2章 飯田 OIDE 長姫高等学校での地域人教育の効果について —問題解決能力に焦点を当てて—

田口 明日香・渡邊 晃一朗

2.1 はじめに

本論は飯田 OIDE 長姫高校（以下 OIDE と称する）での地域人教育において、どのような問題解決能力が育まれるかについての調査の報告を行うものである。

OIDE における地域人教育には、地域や大学との連携や3年間を通じた学習と実践を包含する体系的なカリキュラムなど、他では見られない特徴がみられるが、それがどのような結果に繋がるのか、というのが本論における問題意識である。

一つ留意したいのは、我々の焦点が OIDE における地域人教育を通して「問題を解決できる能力がつくかどうか」ではなく「どのように問題を解決しようとする人間に育つか」ということにあるということである。

従来は、問題を解決することができるかどうかを焦点にした論が多かった。しかし、問題を解決することができるかどうかを測定することは、問題が解決された状態を一般的に定義できることを前提にしている。しかし、もし問題が解決された状態を一般的に定義できるならば、そこには主観が存在しないことになり、またある時間内でその行動が完結することが前提されている。だが、問題が解決された状態というのは主観的な評価が入らざるを得ず、そのため逐次的な定義は可能であっても問題が解決された状態を一般的に定義することは難しいと判断した。加えて、実生活における問題解決行動は一回きりの行動ではなく、修正などを加えて繰り返されるものでもある。そのため、失敗と成功の区別がそもそも不可能である。

そこで我々が焦点を当てたのはどのような問題解決の過程を身に付けたか、である。それは問題解決に着手することが肝要であるからである。問題解決に着手することができれば、修正を繰り返し、問題が解決された状態に漸次的ではあるが接近することができ、結果的に個々の事例において問題が解決された状態に到達することができるであろうし、その到達した状態が時間を経て何らかの問題を抱えたとしてもまた再度問題解決に着手し、問題を解決した状態に接近、到達することが可能である。そのため、問題解決に着手することに必要なのは、その方法論を一般的な形で身に付け、個別具体的な事柄に応用できることである。それゆえ、問題を解決できるかどうか拘泥せずに問題解決の方法論を一般的な形で身に付けているか、そしてそれをどの程度一般的な形で身に付けているか、そして何よりもその方法論はどのようなものかを、本論では考察する。

また、この場をお借りして、本論の執筆に多大なご協力を賜った方々にお礼を述べさせていただきます。飯田 OIDE 長姫高等学校での調査にご協力くださった浅井先生をはじめとする教職員

及び生徒の皆さまや、本講義にてご助力を賜った教授、院生の方々には心よりお礼を申し上げる次第である。

お読みくださる皆様に、本論が何かを示唆し、何らかの形で知的好奇心をかき立てるものであることを祈る。

2.2 先行研究・基礎知識

飯田 OIDE 長姫高等学校は平成 25 年 4 月に飯田工業高等学校と飯田長姫高等学校が合併し県下初の総合技術高校として開校し、地域人教育はその商業科において実施されている。地域人教育とは、OIDE 商業科の生徒の半分が地元企業に就職し、進学希望者の多くも卒業後に地元就職するなど地元志向が強いという背景から、高校卒業後の生き方を考える「キャリア教育」、地域の貢献する「人材育成」、地域におけるビジネス教育を実施する「職業教育」を目指し、「主体性・自主性」「企画力・実践力」「協働性」「地域理解 持続可能な地域」「郷土愛 誇り」を身に付け自ら行動し、地域の産業、暮らしの中核を担うリーダーを育てることを目的としている。内容としては 1 年生が「地域を知る」、2 年生が「地域で活動する」、3 年生が「地域の課題解決に向け行動する」というように目標それぞれ設定されている。

本論における先行研究では、OIDE における地域人教育の効果研究を行ったものとして、本演習の前年に著された佐々木・名倉の両氏による「2015 年度飯田市社会教育調査実習報告」における「第 3 章 職業高校における地域人教育とその影響」が挙げられる。

この報告書では、名倉氏が地域人教育による「地元に対する意識における変化」を調査し、また佐々木氏が地域人教育による「能力における変化」を調査した¹¹⁹。

「はじめに」で述べたことから、本論における問題意識、目的は佐々木氏のそれと近いものである。調査において佐々木氏は「能力における」を「生徒自身が感じる能力の変化」と「生徒を評価する立場にある教師から見た、生徒の能力の変化」の側面から捉え、主観的にどのような能力が身に付いたと思うかをアンケートにより調査していた。

確かに、それは主観的な評価としては問題ないであろう。しかし、ある程度の客観的な範囲で問題解決能力があるかというところまでは正確に調査しきれていない。そこで、本論では、現実に能力を行使できるかどうかという点に重きを置いて、OIDE の地域人教育による効果の調査を進める。

2.3 問題意識・目的

本論における問題意識は、OIDE における地域人教育においていかなる問題解決能力が生まれ、またそれがどのような要素に起因するのかということである。

¹¹⁹ 佐々木雄大・名倉早都季「職業高校における地域人教育とその影響」『2015 年度飯田市社会教育調査実習報告 飯田』というつながり』第 II 部第 3 章, 東京大学教育学部社会教育学研究室, 2016, P.79.

ここでの問題解決能力とは、何らかの問題について解決策を立案し、必要であれば他者と協働しつつ、その解決策を実行する能力を指し、それを保持しているとはそれらの行動を一般的な手順として説明できる状態にあることを言う。その状態であれば、様々な様相を呈する個別具体的な事象に方法論を適用することができ、問題を解決し得るからである。

以上を踏まえて、本論の目的は、OIDEにおいて地域人教育を受けた生徒の能力の様相と、その能力の形成に寄与したと考えられる要因を調査し、発見することにある。

「はじめに」でも述べたが、能力の有無を調査することは本論の目的ではない。本論の目的は、どのような問題解決能力が育まれているかであり、その原因となる要因を探ることにあるということは、強調しておかねばならない。

能力の有無を焦点にしないのは、有無だけで測定できるものではないからである。有無に加えて、その能力を有すると考えられる場合にはその能力の内実こそが肝要である。その能力の内実によって教育の効果、問題解決行動による影響などが変化してくるから。また、能力が実際は多様なものであるにもかかわらず、単一の尺度で測ってしまうことは、自らが考えているもの以外を視野の外に置いてしまう危険もはらむ。

昨今、「キー・コンピテンシー」などと言われるように、様々な社会における問題に対応する力を養成することの必要性が求められ、また高まってきている¹²⁰。

その中で、具体的な実践例としてOIDEにおける地域人教育について調査し、その内実を明らかにすることは、具体性に欠ける「問題解決能力養成のための教育」に何らかの指針を示し、様々な教育現場において有用な示唆を与えることであろうと思われる。

2.4 調査の内容

以上のことを踏まえ、上記の目的を達成するために、まず地域人教育を受けた生徒がどのような問題解決能力を身に付けたかを調査した。それはどのような問題解決の手順を保持しているかによって測ることができると考えたため、それぞれの生徒に問題解決の手順を一般的な手順として説明してもらうのが妥当と考えた。

そこで、OIDEの生徒にアンケートを実施し、その結果を集計した。アンケートは1年生と3年生に実施したが、それは地域人教育においてどのような問題解決能力が育成されたかを比較することにより明らかにしようとしたためである。

アンケートの内容は以下の通りである。

①「問題」や「課題」といったものをどのように解決すればいいか、できるだけ一般的な手順と

¹²⁰ 文部科学省「OECDにおける『キー・コンピテンシー』について」入手先 URL : http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/05111603/004.htm (アクセス日 : 2017-1-14)

して（例：①～をする②～をする……）教えて下さい（もし思いつかなければ、具体的な体験でも構いません）。

②企画したものを実行する時にどのようにすればいいか、できるだけ一般的な手順として（例：①～をする②～をする……）教えて下さい（もし思いつかなければ、具体的な体験でも構いません）。

③他の人と協働する時に大事なことをできるだけ一般的な手順として（例：①～をする②～をする……）教えて下さい（もし思いつかなければ、具体的な体験でも構いません）。

次に、生徒と教職員の方に対してインタビューも実施した。これは上記のアンケートにて答えられた事柄がどのような要素に起因するものかを明らかにするためである。インタビューはアンケートにて記述量が多い生徒（つまり地域人教育の効果があったと考えられる生徒）に対して実施し、また教職員の方にも実施した。

このインタビューはアンケートの結果に基づいて行った。以下がその概要である。

【日時】 12月20日(火) 13:30～

【場所】 飯田長姫 OIDE 高校

【対象】 商業科 高校3年生7人（男子1人、女子6人）

商業科 先生5人（男性4、女性1）

【質問事項】

●高校3年

①答案に書いたような思考プロセスや能力（問題解決力・企画力・行動力・協働性）を、今までのどんな経験で身に着けたか？どのタイミングで身についたと考えるか？

②このような手順を、地域人教育の授業以外で適用した場面はあるか？

③地域人教育プログラムの長所

●先生

①地域人教育プログラムの概要

②地域人教育で生徒に身に着けさせたい力は？先生の意図・目的は？

③先生の間から見た効果や手ごたえ、生徒に変化はあったか？

④今の高1と高3でプログラム内容を変えた理由は？

⑤地域人教育の今後の課題

加えて、OIDEにて地域人教育において使用した教材を用いて、その要素の調査も行った。

2.5 調査結果

OIDEの高校3年生68名、高校1年生75名、合計143名に対してアンケートを実施し、また、高校3年生7名（男子1名、女子6名）にインタビューを実施し、その結果を以下に報告する。

2.5.1 アンケート結果

アンケートは、3年生と1年生それぞれにおいて、まず質問事項に手順として答えられているかどうかで分類し、できているものとそうでないもので分けた。その後、手順として答えられているものをその内容から我々が特徴ごとに分類した。

高校3年生のアンケートの結果、手順として問題解決の方法を示せていたのは45名であり、23名は手順として示すことはできてなかった。対して、1年生において手順として問題解決の方法を示せていたのは39名であり、他の36名は手順として示すことはできていなかった。

ここでの手順として示す、というのは、問題解決の過程においてとる手段を、段階を踏んだ文章として示せているということを示し、アンケート結果においてそれができていないというのは白紙や具体例、手順として完結していないといったもののことを指す。

ついで、手順になっていたものをその特徴ごとに分類したところ、3年生では「地域に出る・フィールドワーク」といった言葉が出てくるものが19名、「話し合う」といった人と議論するものが6名、「ネットなどで調べる」といったものが10名、「問題の特定をせずにPDCAなどの考え方を基に解決策を打つ」というのが10名という結果になった。それに対して1年生では、「地域に出る・フィールドワーク」といった言葉が出てくるものが3名、「話し合う」といった人と議論するものが8名、「ネットなどで調べる」といったものが22名、「問題の特定をせずにPDCAなどの考え方を基に解決策を打つ」というのが2名という結果になった。

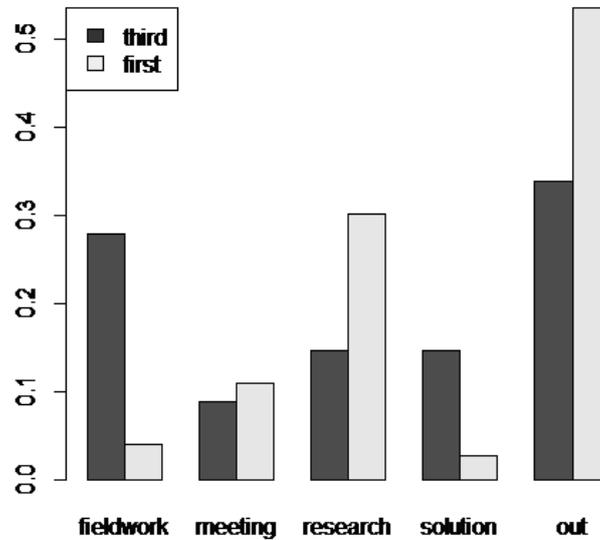
以上を図表Ⅱ-2-1では「地域に出る・フィールドワーク」を「地域に出る」、「話し合う」というものを「話し合う」、「ネットなどで調べる」といったものを「ネットなどで調べる」、「問題の特定をせずにPDCAなどの考え方を基に解決策を打つ」といったものを「解決策を打つ」、それらに該当しないものを「対象外」として示した。

さらに、割合をグラフとして図表Ⅱ-2-2にまとめている。このグラフは、fieldworkが「地域に出る・フィールドワーク」、meetingが「話し合う」、researchが「ネットなどで調べる」、solutionが「問題の特定をせずにPDCAなどの考え方を基に解決策を打つ」、outが「対象外」を示している。

特徴	3年生	1年生
地域に出る	19 (27.9%)	3 (4.1%)
話し合う	6 (8.8%)	8 (10.9%)
ネットなどで調べる	10 (14.7%)	22 (30.1%)
解決策を打つ	10 (14.7%)	2 (2.7%)
対象外	23	39

	(33.8%)	(53.4%)
計	68	73

図表Ⅲ-2-1 設問①の結果



図表Ⅲ-2-2 設問①の回答を割合ごとに表示したグラフ

また、2つ目の質問項目である実行力、3つ目の項目である協働に関しては1年生と3年生の回答に差があるとは認めることができなかった。

2.5.2 インタビュー結果

<生徒>

①答案に書いたような思考プロセスや能力（問題解決力・企画力・行動力・協働性）を、今までのどんな経験で身に着けたか？どのタイミングで身についたと考えるか？

—地域人教育。特に1・2年では、外部講師による講演やグループワーク（KJ法、ブレストなど）で体系的な知識や思考の枠組みを学び、活用する機会が多かった。

—地域人教育。特に1年時のフィールドスタディを通じて、地域の人から話を聞き問題を見つけることの大切さを学んだ。

—牧野市長の講演から課題解決の際に「当事者意識を持つ」ことの大切さを学んだ

—地域人教育の授業の中で学んだ

—地域人教育の課題研究（3年時）での失敗から気づきを得た

—生徒会執行部の経験から「簡単には解決できない課題をどう解決すればいいのか？」ということ学び、地域人教育と生徒会での経験を相互に適用

—グループでの企画が実行に至らなかったという失敗経験から、「危機感や当事者意識を持って行

動していれば実行できたのでは？」と反省し、行動力や主体性を持つに至った。

②このような手順を、地域人教育の授業以外で適用した場面はあるか？

—生徒会執行部の経験

—所属するボランティア推進委員会（委員長）での経験

—生徒会副会長の仕事

③地域人教育の長所

—高校生が主体で地域課題の解決に参画できる点

—自分の頭で考えて行動する力を身に着けさせるプログラムである点

—現場での「実践」まで経験できる点（他校では、教室内で課題を見つけ解決法を話し合うのみ。）

—先生が、生徒の出した提案や意見を尊重してくれるため、やりたいことが実現されやすい点

<教職員の方>

①地域人教育プログラムの概要について

・到達目標

—高1で地域を知り、高2で地域に出て活動し、高3は地域の課題解決に向け行動する

・カリキュラム

高1：「ビジネス基礎」の一部として（105時間中、地域人教育は20~30時間）

高2：「広告と販売促進」の一部（70時間）

高3：「課題研究」（105時間）（金曜4~6限）

・具体的内容

高1：フィールドスタディ+地域に関する講演（大学教授、専門家、社会課題系NPO）

高2：地域イベントの運営+商品開発・情報発信

高3：地域課題発見→地域連携企画・実践（グループごと）→地域への提言活動

→12月 全校課題研究発表会

※補記：成績評価について（高3）

・レポート

・口頭試問（8月）：課題図書・1学期の地域人教育の取り組みについて

【質問項目】①課題図書の内容 ②課題図書から学んだこと ③1学期の地域人教育の取り組みを踏まえ、課題図書の感想 ④地域人教育で取り組む課題に対し、あなたが考えた解決法は？

⑤課題図書の内容を踏まえ、今後の地域人教育でどんな活動をしていくか？

・グループごとで中間報告→生徒同士で相互評価、グループワーク

・課題研究日誌

※プレゼンスキルについての授業もある（教材・ワークシートあり）

②地域人教育で生徒に身に着けさせたい力は？先生の意図・目的は？

—自分で考え行動できる力（課題解決力、主体性、企画力、協働性、地域理解、郷土愛）

—地域に関心を持ち、地域の人の想いに触れることで、生徒が自身の将来を考えることにつなげてほしい

—学校内だけでは学べないことを学ぶ。自分の親より年上の地域の人とかかわる

→コミュニケーション力・場面に応じた対応力・企画力・行動力をつけさせたい

—自らで課題に気づく力をつけさせたい

—生徒たちに自分なりの「哲学」を形成してもらいたい。

・あくまで生徒自身の成長が目的であり、地域への愛着形成は二次的である。

→地域を題材にして、現実社会の課題や変化のスピードを認識してもらう。

→社会の変化に対応できる人材の育成。人材開発の側面が大きい

・生徒たちを学校の外に出すことで即戦力をつけさせたい→専門高校としての役割

・経済産業省が指標化している「社会人基礎力」（コンピテンシー）

③先生のみから見た効果や手ごたえ、生徒に変化はあったか？

—「いつか飯田に帰ってきたい」という生徒が増えた

・交渉力、外部を見る視野の広さ

・「社会の中で自分たちの想いが実現される、形になる」という自信・達成感

—高3の1年間という短期での変化として、

・協賛企業などの外部の大人との交渉力

・人前で話す力

—地元の期待にこたえたいという責任感、粘り強さ

—実践力や社会人基礎力

—プレゼン力、主体性、行動力、自分の意見を主張する力

④今の高1と高3でプログラム内容を変えた理由は？

今までのプログラムは実践重視であり、論理的思考力があまり身につかなかったため。今年の高1から探求型の基礎学習にシフトし、仮説検証のプロセスを学ばせ、思考訓練をさせる。具体的には、社会課題解決を行うNPO団体などの外部講師を呼ぶ回数を年1回から3回に増やし、「講演（インプット）→グループワーク（実践）→発表（アウトプット）」のサイクルを定着させた。外部講師による講演は従来から行われていたが、講演を聞いて終わりといった形式で、生徒の身につけていないと判断したためである。また、テストやレポートで「まちづくりとはなにか」「社会課題とはなにか」といった、「答えがない、思考力を要する問い」を自由記述形式で課すように

なった。特に試験では、事前に問題を知らせ答えを考えさせてくる形式を採用し、効果の大きさを感じている。

⑤地域人教育の今後の課題

- ・リテラシー（伝統的学力）向上と社会人基礎力（実践力）との両立
→前者が生徒に身につけていない。
- *思考力を鍛える「探求型学習」を他の科目にも融合させていく
 - *地域人教育を通じ、社会への関心・学ぶ意欲を引き出す→学力向上にもつなげたい
 - *「地域人教育によって学力上がった」という効果の検証が今後の課題
→大学などの知見も借りつつ、データをとりたい。
- ・地域人教育の継続性（一部の先生の意欲で保たれている）
- ・テストやレポートの「答えのない問い」の評価手法
→定量評価（字数の条件）、定性評価（問題文の条件）はやりやすいが、内容面の評価・点数化は難しい

教職員の方に対する調査の過程で、質問④にあるように、現高校1年生と現高校3年生の間にはカリキュラムに変化があることも判明した。

高校3年生と比べ、高校1年生は問題解決における座学、つまり学校内における問題解決の学習や、社会起業家などによる講演の割合が増加していた。

そのため、今回の調査では、座学の割合が相対的に少なく、地域人教育における実践的な活動を経た3年生と、座学の割合が相対的に多いカリキュラムを1年間消化し、地域人活動における実践的な活動を経ない1年生を比較することになった。

以下、アンケートの結果、判明したことを整理する。

問題解決の手順として示しているかどうかという点では、3年生では66.2%が手順として問題解決の過程を示せていたのに対し、1年生では46.6%が問題解決の過程を示せていなかったということから、3年生の方が比較的、問題解決能力を有していると言える。

「地域に出る」が3年生では27.9%に対し、1年生では4.1%であること、そして「ネットなどで調べる」という項目が3年生では14.7%に対し、1年生では30.1%であること、「PDCAなどの考え方に基づき解決策を打つ」が3年生では14.7%に対し、1年生では2.7%であることから、3年生には地域にフィールドワークのように外向く調査を伴う問題解決能力、もしくは解決策を積極的に回していくという問題解決能力が身に付いている傾向があり、また、1年生には「ネットなどで調べる」という身体的な移動のない調査を伴う問題解決能力が身に付いている傾向があったということが分かる。

また、インタビューにおいて、3年生の生徒は生徒会などをはじめとする課外活動にても実践活動をしていたことが分かった。また同時に、3年生は1、2年生の間のカリキュラムについて

「牧野市長の講演」や「外部講師による講演やグループワーク」によって学んだものを「3年時の課題研究」や「生徒会活動」といった機会に活用することで身に付いたとする意見が出た。

そして以上から3年生の能力の傾向は地域人活動の実践教育を通して形成され、また1年生の能力の傾向は座学などの学習によって形成されたと推測することが、ある程度は可能であろう。

以下、以上の結果を踏まえて考察を進めていくこととする。

2.6 考察

調査結果から考察できることとしては、OIDEにおける地域人教育というのは問題解決能力をただ育成するのではなく、地域において、実地での調査を主とする問題解決能力を育成することができる。そしてこのことから、問題解決能力というのは、それを身に付けた学習方法によってその様相が変わるということもできるであろう。

どうということかという、高校3年生と高校1年生のアンケート結果を比較した場合、顕著な差として「地域に出る」という項目、また「ネットなどで調べる」という項目における割合が挙げられるからである。これは、座学よりも地域に出る実践教育の割合が多いカリキュラムを消化した生徒の保持する問題解決行動は地域におけるフィールドワークのような実地での調査、及びそれを基にした解決策立案の様相を見せるが、座学の割合が多く、地域での実践活動がないカリキュラムを消化した生徒の保持する問題解決行動は地域に出ず、ネットなど主に身体的な移動を伴わないような調査、およびそれを基にした解決策立案の様相を見せ、それはその問題解決行動を身に付けた環境、ここでは実践活動か座学かという学び方の差によるものであると考えられるということである。つまり、意図したものに加えて、学習方法及び環境を学ぶということもできるであろう。何を学んだかというと同様に、どのような方法で学んだかということが重要であるということである。ここでいう学習方法とは、座学や実践活動といったような、生徒という被教育対象への教育内容の伝達方法、もしくはそれを享受する生徒の学び方のことを言う。

さらに、問題解決能力という志向する実践行動と学習内容が近似しているということを考慮すると、その場合には学習方法が実践方法がある程度規定すると言えるだろう。

また、地域人教育で獲得できる問題解決能力を大きく類型化すると地域に出て調査を行う「実地調査型」、話し合いなどを主とする「集団会議型」、ネットや本などの資料を用いる「資料調査型」、解決策を最初から打っていく「解決先行型」の4つを挙げることもできるだろう。

次に考察できることは、問題解決においては3年生と1年生に差が見られたにもかかわらず、実行、協働においてはさほど大きな差がみられなかったということに関しての要因であろう。これは、実行力や協働性といった能力に比べ、問題解決能力が、1年時から座学でインプットした知識体系を3年時の課題調査研究においてアウトプットに移すことで、ようやく自己の中に内面化され、定着する能力であるためだと考えられる。課題を解決する際の思考プロセスを知識体系として習得することは大切であるが、それだけでは定着しないことは、教員へのインタビューからも明らかに読み取れる。講義で得た知識の枠組みを使ってグループワークや発表を行い、実際

に地域に出て地域課題の解決に取り組もうとすることではじめて、問題解決のプロセスが自己の内側に取り込まれ、「問題解決力」となるのだろう。つまり、座学と実践の両方をバランスよく行うことが重要なのであり、両者を行き来することで、自分なりの思考プロセスが徐々に構築され、それをさらにほかの個別具体的な事象にも適用可能となるのである。このようにして問題解決力が自己のうちに築かれれば、問題解決の手順を一般的な形で述べることは可能である。なぜなら、個人に問題解決力が備わっているということはすなわち、問題の解決を試みる際にその個人がたどる思考プロセスを、自分自身で認識しているということの意味からである。逆に、一般的かつ体系的な知識を身に付ける機会がなければ、単に実践活動を行っても効果は薄いと推察することもまた、飛躍したことではないであろう。インタビューに応じた生徒は結果の項で述べたように、実行、協働を必須とする生徒会の活動など、実行と協働に関する実践活動をしていた。しかし、そういった生徒たちにも1年生との間の顕著な差を認めることができなかったということは、前述のように一般的、体系的な知識の学習を伴わない実践活動の効果が薄いということの証左であろう。

2.7 結びに代えて

今回の調査は、問題解決力の有無を通り越して、その質や身に着けるに至った要因といった部分まで踏み込んで考察できた点に意義があり、問題解決力や実践力といった見えにくく測定しにくい能力に関して新たな視点を提示することができたと考える。実践力や協調性に比べ、とりわけ問題解決力は、一般的手順を知識体系として身に着けたうえでそれを個別具体的な事例に適用することが肝要である、つまり知識習得と実践の両方が重要である、という一見すると当たり前であることに改めて気づかされた。この意味において、座学と実践の両方を兼ね備えた地域人教育プログラムは、これらの非認知能力を習得し伸ばす場としては効果が大きく、最適である。ただしそれは、地域人教育がその意図に沿って行われ、正しく機能する、という前提ありきである。飯田を訪問した際、OIDE 商業科3年が1年間の調査研究の成果を発表する成果報告会を見学させていただいたのだが、行動力や意欲、積極性は全体的に高かった一方で、「仮説を立てて検証する」という問題解決の思考プロセスをしっかりと踏めているグループが少なかったように感じた。その結果、「地域がどういう状態になってほしいのか」というビジョンが曖昧な発表や、現状分析が甘いためにグループとしての問題意識が見えにくくなってしまっている発表も見受けられた。先生方もインタビューでおっしゃっていたように、問題解決にあたって各人が持つべき論理的思考力の素地をどのように養成するか、が今後の課題であろう。探求型基礎学習の比重を増やした新カリキュラムを受講する現高校1年生が2年後、現高校3年と比べてどのように問題解決力を身に着け発揮するか、期待するところである。(田口)

本論において、考察に述べた「志向する実践行動と学習内容が近似したことにおいては、学習方法が実践方法を規定する」という仮説には検証の余地があり、これからも検証をしていく必要

があるであろう。

今回の調査及び研究は、問題解決能力という、学校教育では明確にされていないがゆえに評価されるということがなかった概念を、明確に規定することが一つの意義であったように思う。現在では、学校という特殊な環境において、社会自体に存在する問題を取り扱うことは、全ての学校を想定した場合、現実として不可能であろう。しかしそうであるからといって、問題解決能力を評価することを避けてはいけない。問題解決能力が求められているにも関わらず、それを避け、従来の教科のみに対する評価に留まるか、もしくは生徒の個性の重視などという「個性の尊重」を盾に主観主義に陥り評価不可能と断ずることは、教育学に宿る知性の敗北である。現在、我々の知の内側になくものをその内側とすることで人の知りうる前線を押し広げることこそ知の発展であり、従来は主観で測っていたものを客観的なものとして外在化することこそ、学問の為すべきことではないのであろうか。本論が、単なる教科学習に留まらない問題解決という教育の新境地を押し広げる一考であることを、切に祈るばかりである。

最後になるが、本論の調査において多大なご協力を賜った飯田 OIDE 長姫高等学校、特に商業科の高校 3 年生及び高校 1 年生の生徒の方々、さらに浅井先生をはじめとする教職員の方々には、心から感謝の意を表したい。皆様の御協力がなければ、本論に書くべき言葉はなかったと言っても、過言ではない。心より、御礼申し上げます次第である。(渡邊)

引用文献・資料, Web ページ

佐々木雄大・名倉早都季「職業高校における地域人教育とその影響」『2015 年度飯田市社会教育調査実習報告“飯田”というつながり』第Ⅱ部第 3 章, 東京大学教育学部社会教育学研究室, 2015. 文部科学省, 『OECD における「キー・コンピテンシー」について』入手先 URL : http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/05111603/004.htm (アクセス日 : 2017-1-14)

第3章 いいだ人形劇フェスタと地域人教育

杉田 信論・横井 一隆・瀬領 大輔

3.1 はじめに

牧野飯田市長はかつて「全国のみならず、世界のモデルになるような世界都市を目指していくということを、このリニア時代を見据えて私たちの地域が考えていく必要があるということを考えてみると、人形劇のまちづくりといったことも、非常に世界に通用する要素だ、とっております」と飯田市議会で語っている。飯田市民は小学校から人形劇に親しみ、カーニバル、フェスタを通して市民性を形成してきた。人形劇は飯田の教育においてもっとも大切な要素の一つである。そこで今回私たちはいいだ人形劇フェスティバルを題材とし、その課題と今後の展望について考察することとした。その考察を通して、地域人教育について考える。

3.2 調査概要

2016年12月24日にいいだ人形劇センター理事長の高松和子氏にインタビューを行った。高松氏は、いいだ人形劇フェスタ実行委員会の初代実行委員長を務めた経験がある。具体的に質問した内容は、いいだ人形劇フェスタの変遷や、現在フェスタが抱えていると高松氏が考えている課題だ。また、2017年1月11日にいいだ人形劇フェスタ実行委員会のメンバー構成について、飯田文化会館にメールで問い合わせた。飯田の人形劇に関する図書や論文も通して調査した。

3.3 飯田の人形劇文化の概要

3.3.1 飯田の伝統的な人形劇

飯田の人形劇の歴史はおよそ300年前、人形浄瑠璃が伝えられたことに遡ることができる。当時、飯田は林業や養蚕業でおおいに賑わっており、農閑期には人形浄瑠璃の一座を呼び寄せて興行を行っていた。多くの人々がそのような旅の一座から人形遣いを教わり、祭りや結びついて地域の人々の手によって現代まで伝えられている。

現在では黒田人形、今田人形、早稲田人形、古田人形の四座が現存するのみとなっているが、それら四座が「伊那人形芝居保存協議会」を結成し保存継承に向けた取り組みが活発になされている。黒田人形、今田人形が昭和50年に国選択無形民俗文化財に指定された。

また、現在飯田市ではまちづくり・人づくりの核に人形劇が置かれている。飯田市の小学校では人形劇を用いた情操教育がカリキュラムに取り入れられている。

3.3.2 人形劇カーニバル飯田

第三期全国総合開発計画で地方の時代が取りざたされる中で、飯田市は今後の取り組みを模索していた。その際に上記のように市民の生活に根付いており大人数が一緒に楽しむことができる

人形劇に白羽の矢が立ち、飯田市として人形劇を売り出していくことを決めた。国際児童年にあたる 1979 年、行政が主導する「人形劇カーニバル飯田」が開催され、以来 20 年に渡って続いてゆくこととなる。この「人形劇カーニバル飯田」は現在毎夏飯田市で開催されている「いいだ人形劇フェスタ」の前身にあたるものである。

「人形劇カーニバル飯田」では地区の方との交流を大切にしながら分散公演、人形劇人によるパレード、商店のウィンドーに人形を展示するウィンドー人形展などの独自の企画が高い評価を得た。1998 年には第 10 回を記念し「世界人形劇フェスティバル」が飯田で開催された。

3.3.3 いいだ人形劇フェスタ

第 20 回をもって行政主導の「人形劇カーニバル飯田」は終了することとなった。その後、これまでの 20 年の評価と検証が行われ、翌年の 1999 年からは市民が主導し行政がサポートする「いいだ人形劇フェスタ」が開催された。「いいだ人形劇フェスタ」では「みる・演じる・ささえる わたしがつくるトライアングルステージ」を合言葉にしている。そこでは市民と人形劇人が協働してフェスタをつくることにより、人形劇・地域文化の発展やまちの活性化が目指されている。「いいだ人形劇フェスタ」は中学生から大人まで 2000 人を超える市民スタッフの手により運営されており、毎年およそ 300 劇団、1700 人の人形劇人が参加しおよそ 130 会場で 400 以上の公演がなされている。

「いいだ人形劇フェスタ」では人形劇をみる人も演じる人もスタッフとして働く人も全員が参加証ワッペンを購入し、身につけて参加する。参加証ワッペンはみんなでフェスタをつくるシンボルとなるとともに、演劇の入場券にもなる。参加証ワッペンを購入すれば有料観劇券が必要な一部の公演以外は観劇し放題になる。このことが市民の観劇に対するハードルを下げているであろう。

また、劇人の公演は以下の 3 つの公演形態に分けられている。

- ・プロ劇団が意欲的な作品を紹介する A タイプ
- ・上演希望の作品から実行委員会が選考する B タイプ
- ・プロ、アマを問わずに参加エントリーができる C タイプ

このように公演形態を分けられることによって、プロ劇人の意欲が向上するとともにアマチュア劇人の参加への敷居が下がっているであろう。皆でフェスタをつくりあげるという目標が、これらのような工夫となって表れているのではないだろうか。

3.4 いいだ人形劇フェスタの理念や目標

いいだ人形劇フェスタは、基本的な考え方を「市民と人形劇人がともに作る祭典」とした。これまでカーニバルのような市民・劇人・行政の三位一体という結びつきではなく、市民・劇人誰もが自分の思ったこと、やりたいことが提案でき、その提案が皆の賛同を得られれば、皆でその提案が実行できるようにサポートする、行政はあくまでも裏方であり、情報の提供や企画運営

を行うための実務を担う。

この祭典に関わる一切の活動の中核、いわば理念は「みる 演じる ささえる わたしがつくるトライアングルステージ」。みる人、演じる人、そしてこの祭典を支える人のすべてが誰に強制されることもなく、主体的に関わっていこうというものだ。

『演じる』ことは、人形劇の祭典で当然基本となる創造活動であるわけだが、『みる』という行為についても、それは、外側から見れば一見静かだが、内面はとても激しい創造活動であり、『ささえる』ということもまた、まつりをどう構築していくか、企画運営するという面で創造活動であり、三者に共通するものを『創造活動』であると捉えた。また、この三者の関係は固定的なものではなく、その時々によってさまざまな立場に立つことも望ましいことがフェスタの準備会で確認された。」と高松氏は『つながってく。～人形たちと歩んだ 30 年～いいだ人形劇フェスタ 10 周年記念誌』において述べている。

また、高松氏はフェスタの事業を大きく三つに捉えている。一つ目は当然ながら公演、二つ目が交流、三つ目が研鑽である。交流とは、市民と劇人、市民同士、劇人同士、その他さまざまな組み合わせがある。交流事業や広間の開催、パレードなどだ。海外劇団と日本の人形劇の代表者、地元伝統人形座、市の代表者等によるレセプション、ボランティアスタッフと劇人とのお別れパーティーなどが効果を挙げているという。研鑽は、見る力、創る力の向上のためのワークショップの開催、子どもと人形劇に関する研究等、人形劇の向上と人形劇教育に関することなどを意味する。

こうした三つの事業で、人形劇の普及と向上、地域文化の振興、まちの活性化、地域住民の豊かな心が育まれていくことを目標とした。

3.5 いいだ人形劇フェスタの変遷

人形劇カーニバルは、第 20 回を以て終了した。カーニバル実行委員会の解散の後、第 20 回終了後の 1998 年 11 月に準備会設立のための会合が開催される。参加団体は、新しい人形劇カーニバルを考える会、南信州アルプスフォーラム人形劇カーニバルを考える会部会、飯田青年会議所、地元劇人有志、飯田市公民館、市役所プロジェクトチーム、教育委員会、教育長、教育次長、文化課長、人形劇のまちづくり係等と、市民団体と行政の関係者で構成された。

続いて、新たな人形劇の祭典準備委員会設立会議が飯田市教育委員会文化課の呼びかけで正式に行われた。その中で確認されたことは、「市民主体による運営」「新たな基本理念を構築すること」の 2 点であった。翌年 1 月初旬には新たな人形劇の祭典準備委員会が開催されたが、3 月末には準備委員会は解散し、4 月にいいだ人形劇フェスタ準備委員会企画運営委員会が開かれ、新たな人形劇の祭典誕生がいよいよ具体化した。

あたらしい人形劇の祭典「いいだ人形劇フェスタ」は、基本的な考え方を「市民と人形劇人がともにつくる祭典」とした。市民、劇人誰もが自分の思ったこと、やりたいことが提案でき、その提案が皆の賛同を得られれば、皆でその提案が実行できるようにサポートする。行政はあくま

で裏方であり、情報の提供や企画運営を担うこととなった。

行政の裏方としての具体的な関わりは、市長および教育長が顧問、会計監査も行政側の人を含みながら行われる。そして、事業の全体を飯田文化会館人形劇のまちづくり係が事務局として支える。行政は、フェスタがひとづくり、まちづくりを目標としていることを念頭に、市民の発案の質を吟味し、サポートやガイドや、時にはリードしながら進める立場としてかかわることになった。また、市からはカーニバル当時と同様補助金が予算化された。カーニバル第20回の際は世界フェスティバルの特別予算が付いたため比較できないが、その前年第19回の1600万円と比較すると、フェスタ第1回は、それを400万円上回る2000万円が予算化された。

フェスタはその後順調に運営され、10回には世界人形劇フェスティバルを開催。また、韓国の春川人形劇祭、台湾の雲林国際人形劇フェスティバルと「東アジア三田市人形劇フェスティバル友好提携」を締結し、フェスティバル同士の友好と今後の交流を確認しあった。

前述したように、国内最大規模を保ち続け海外劇団からの関心も高いフェスタは、しかしながら、その活動継続において、実行委員の負担増大、人形劇の専門領域関係者との連携や国内外の人形劇情報の収集および飯田からの情報発信の問題など、継続的な発展のための課題が生じ始めた。

その中で、資金の出資者としての市役所側の関与が高まりつつあると高松さんは我々のインタビューに対し語った。実行委員としては負担が軽くなる一方、フェスタの内容の大枠を市役所があらかじめ決めてしまえば、市民の主体性が奪われる危険もある。

3.6 いいた人形劇フェスタのこれから

現在の人形劇フェスティバル実行委員会は以下のような構成の本部委員会と各地域ごとにボランティアを募る地区実行委員会とに分かれている。先項で述べた通り、現在人形劇フェスティバル実行委員会の抱える問題は、行政の関与拡大により「市民による」フェスティバルの成立が危ぶまれつつあるという事である。飯田市が関与を拡大する理由は二つ、一つは市が出資者である事、二つ目は規模拡大によりフェスティバルが、普段の仕事を抱える市民が片手間で務める実行委員会の規模を超えてきていることである。

No	実行委員会内の役職	職業	人形劇との関わり等	年代
1	実行委員長	自営業	元劇団員	50代
2	副実行委員長	小学校教諭（臨時）		60代以上
3	副実行委員長	公民館長		60代以上
4	副実行委員長	高校教諭	劇団員	50代
5	副実行委員長	会社社長	劇団員	50代
6	地区実行委員会	公民館長		60代以上

7	地区実行委員会	公民館長		60代以上
8	地区実行委員会	公民館長		60代以上
9	地区実行委員会	公民館長		60代以上
10	地区実行委員会	公民館長		60代以上
11	地区実行委員会	公民館長		60代以上
12	地区実行委員会	公民館長		60代以上
13	地区実行委員会	公民館長		60代以上
14	地区実行委員会	公民館長		60代以上
15	地区実行委員会	公民館長		60代以上
16	地区実行委員会	公民館長		60代以上
17	地区実行委員会	公民館長		60代以上
18	地区実行委員会	公民館長		60代以上
20	地区実行委員会	公民館長		60代以上
21	地区実行委員会	公民館長		60代以上
22	地区実行委員会	公民館長		60代以上
23	地区実行委員会	公民館長		60代以上
24	地区実行委員会	公民館長		60代以上
25	地区実行委員会事務局	公務員（公民館）		30代
26	地区実行委員会事務局	公務員（公民館）		30代
27	公演部会	会社員	劇団員	60代以上
28	公演部会	無職	劇団員（伝統）	60代以上
29	公演部会	会社員	元劇団員	30代
30	公演部会	会社員	元劇団員	30代
31	公演部会	保育園職員		60代以上
32	公演部会	小学校教諭		50代
33	公演部会	無職		60代以上
34	公演部会	無職	劇団員（伝統）	60代以上
35	公演部会	会社員		30代
36	公演部会	会社員	劇団員	50代
37	公演部会	会社員		50代
39	公演部会	会社員		40代
40	公演部会	会社員		30代
41	公演部会	無職	元劇団員	60代以上
42	公演部会	会社員	元劇団員	30代

43	公演部会	会社員		20代
44	公演部会	会社員		20代
45	交流事業部会	団体職員	子ども劇場事務局	40代
46	交流事業部会	幼稚園職員		20代
47	交流事業部会	幼稚園職員		20代
48	交流事業部会	大学講師		40代
49	交流事業部会	会社員		40代
50	交流事業部会	会社員		50代
51	交流事業部会	病院職員		40代
52	交流事業部会	病院職員		20代
53	交流事業部会	無職	劇団員	60代以上
54	交流事業部会	会社員		60代以上
55	交流事業部会	幼稚園職員		20代
56	交流事業部会	幼稚園職員		20代
57	交流事業部会	幼稚園職員		20代
58	交流事業部会	幼稚園職員		20代
59	交流事業部会	主婦		40代
60	広報部会	団体職員	NPO 法人人形劇センター	40代
61	広報部会	会社員 (新聞社)		30代
62	広報部会	会社員 (放送局)		40代
63	広報部会	会社員 (放送局)		40代
64	広報部会	会社員 (デザイナー)		50代
65	広報部会	会社員 (放送局)		40代
66	広報部会	会社員 (デザイナー)		40代
67	広報部会	病院職員		50代
68	広報部会	会社員		40代
69	広報部会	自営業 (デザイナー)		40代
69	広報部会	会社員 (カメラマン)		30代
70	総務部会	会社員		30代
71	総務部会	公務員		30代

72	総務部会	会社員		30代
75	総務部会	会社員		30代
76	総務部会	会社員		40代
77	総務部会	会社員		30代
78	総務部会	会社員		30代
79	総務部会	会社員		20代
81	総務部会	会社員		30代
82	総務部会	会社員	劇団員	50代
83	総務部会	会社員	劇団員	20代
84	総務部会	団体職員	劇団員	20代
85	パーク部会	自営業		60代以上
86	パーク部会	会社員		20代
87	パーク部会	会社員		20代
86	パーク部会	自営業		30代
87	パーク部会	会社員		30代
88	パーク部会	会社員	劇団員	20代
89	学校代表	小学校教諭（校長 会代表）		50代
90	事務局	公務員（文化会 館）		50代
92	事務局	公務員（文化会 館）		40代
93	事務局	公務員（文化会 館）		40代
94	事務局	公務員（文化会 館）		30代
95	公演企画委員	団体職員	市民劇場事務局	50代
96	公演企画委員	会社員		50代
97	顧問	飯田市長		50代
98	顧問	飯田市教育長		50代
99	顧問	前実行委員長/自営		60代以上
100	監査委員	公民館長		60代以上
101	監査委員	婦人会		60代以上

図表Ⅲ-3-1 人形劇フェスティバル実行委員会本部委員会の構成

一つ目の出資者としての市の関与については、2015年度予算において文化庁からの出資も含めれば収入過半をの飯田市負担金が占めるという現状がある以上当然の事ではあるが、市民主導のフェスタの趣旨やこれまでの経緯を鑑みれば市の関与強化は望ましい事とは言えない。市が出資者である以上安全面などで問題が発生した場合は市も一定の責任を負うことになるとは考えられるが、それについても人形劇フェスタにおいて安全面の責任が追及されるような事態が発生することは無いという事もないが、仮に安全対策が必要だとしても市の意思決定への積極的な関与はその分野に限ればよい。フェスタの発足から二十年近くが経過すれば、徐々に当初の「市民が中心となったフェスタづくり」の理念が形骸化していくのは当然の事ではあるが、市としてはあくまで当初の理念を尊重し、裏方としての関与に徹する事が必要である。

二つ目の問題についてはフェスタの規模拡大に対応した実行委員会の拡大で対応するほかない。会場ごとに設けられる地区実行委員会は、主体的に参加する市民によって成り立っているとは言いつつも実際のところは公民館関係者やPTA役員などの役職者が役職上の業務として引き受けているのが現状である。2006年の調査によれば「公民館の役員として・婦人会や自治会又は職場の代表として」といった役職者としての義務的な参加が9割以上を占めている。地区ごとに形成されることになる実行委員会は、引退した高齢者の活躍の場や地域のつながりを形成する場としての機能を発揮するポテンシャルを持っている。いかに地域の人々を地区実行委員会に引き込めるかが今後の実行委員会の課題であるとともに、地域のつながりを維持発展させていくための重要な要素になる。地区実行委員会とは別に全体の企画・運営を担う組織として、飯田文化会館内に事務局を持つ本部実行委員会がある。本部実行委員会のメンバー表は以下の通りである。多くのメンバーが会社員などで、普段の仕事を抱えながら片手間でフェスタの実行委員を務めているのが現状である。本部実行委員会は責任が重いだけに、フェスタに関わった経験のある市職員OBにきてもらうなどの手は考えられるが、どの程度委員会のキャパシティを拡大できるかは分からない。

もし今後実行委員会が市役所の天下り・出向先となって(あくまで例えであり各委員が委員会に雇用されている訳では無い)、市が主導権を握る形になってしまえば「市民主体」が崩壊してしまう。しかし「市民(=実行委員会)主体」のスタイルを維持しつつ、市の協力を得ながら実行委員会を拡充するにはこれまで以上に実行委員会内部に市関係者が入っていくのが最善の策なのかもしれない。とは言ってみるものの勿論そう簡単にはいかないだろう。似たような例として郡山市の「市民活動サポート職員バンク」制度などがあるが、小さなイベントの会場準備や運営補助がメインで飯田に持ち込むには無理がある。

これからいい人形劇フェスタはどこへ向かうべきなのか、答えはないが、市民のフェスタに懸ける情熱と関係者の善意で答えを探していくしかない。

3.7 地域人教育への示唆

なぜ「教育」の章に人形劇フェスタの話があるのか、それは私達が一つの考え方に至ったから

である。

人形劇と教育の関係で言えば、教育的意義については既に多くの指摘がある。演劇教育とは、子どもたちを演劇活動に参加させたり鑑賞させたりすることを通して人間形成を促そうとする「演劇による教育」の営み、または、演劇活動ではないが演劇的な方法を活用して教育活動を豊かにしていく「演劇的教育」の営みであると定義づけている。そして演劇教育は、広い意味で人間教育の一部であり、目的はあくまでも人間の教育である、と富田博之氏は述べている。人形劇フェスタはただ人形劇を観る祭りではない。「みる、演じる、ささえる。わたしがつくるトライアングルステージ」なのである。何を以て「教育的」とするかについては複雑なので触れないが、そこにはただの文化として・芸術としての人形劇の意味合いに留まらない教育的意義がある。

今人形劇フェスタ実行委員会にあったほうがいいものは何だろうか。先述の通り、新しいメンバーである。地域を愛し、地域の事を考え、地域を創る人たちが必要である。組織を持続的に運営させていくにはその道に詳しいベテランと、元気で革新的な若いメンバーが必要である。

残念ながら飯田市内に大学は無いため、大学生のゼミやインターンという形で意欲ある若者を呼び込むことは難しい。しかし飯田には地域を愛し、地域の事を考え、これからの地域を創る若者たちが沢山いる。それこそまさに OIDE 長姫高校の生徒達ではないか。もし彼らが実行委員会、それも期間中の作業の手伝いではなく 1 年をかけてフェスタを企画するところに参加できればこんなに素晴らしいことはない。手伝いではなく企画に関わるとすれば 1 年がかりであるが故にカリキュラムとしての地域人教育よりも部活動としてのスタディエッグの中でより意欲の高い高校生たちが地域の大人たちと共にフェスタを作り上げられたらいい。実行委員会、地域人教育を外からしか見られない東京の大学生が具体的に何をするのが良いとかどうと事を言うのは僭越はなはだしく、また的外れになってしまうことは間違いないので明示してしまうことは差し控えるし、また実際に何か起きた際に高校生に責任を負わせるわけにはいかないなど懸念事項は多々あるが、受け入れるスキームさえあれば活躍できる学生達が飯田に沢山いるということは、人形劇フェスティバルに限らず何においても希望である。

3.8 おわりに

人形劇は情操教育のツールとして、一つの芸術として認知されている。飯田にとっては人形劇は伝統の人形浄瑠璃も人形劇フェスタも飯田市民の市民教育の中心であった。飯田はこれまでもこれからも「人形劇のまち」として歩いていく。これからも飯田をただの人形劇で有名な町にするのではなく、社会教育の先進都市として、今の人形劇フェスタが守られて行く事を切に願っている。

最後に、人形劇に関するインタビューに応じてくださった高松さん、実行委員会のメンバー表を作成して頂いた人形劇会館の北林さん、そのほか調査演習に関わっていただいた飯田のすべての皆様に深く感謝の意を表し終わりとさせていただきます。

引用文献・資料, Web ページ

飯田市議会「飯田市議会会議事録」入手先 URL : <http://www.kaigiroku.net/kensaku/iida/iida.html> (アクセス日 2017-1-31) .

いいだ人形劇フェスタ実行委員会『つながってく。～人形たちと歩んだ 30 年～いいだ人形劇フェスタ 10 周年記念誌 いいだ人形劇フェスタ実行委員会』, 2010, pp.87-92.

松崎行代“飯田市における文化行政とまちづくりの変遷—人形劇フェスタを中心に—”『京都女子大学大学院現代社会研究科博士後期課程研究紀要』 vol.6, 2012, pp.89-92.

松崎行代“学校教育における人形劇の教育的意義と課題—飯田市の学校における人形劇活動充実のために—”『飯田女子短期大学紀要』 vol.25, 2008, p.65.

富田博之『現代教育 101 選 51 演劇教育』国土社, 1993, P20-21.

おわりに

杉田 信論

教育と一言に言っても様々な教育がある。0歳児への読み聞かせから、老人会の集会まで、人は常に何かを学んで生きている。この報告書の教育の部では、これまでの飯田を受け継ぎこれからの飯田をつくるための人材育成について見るため、特に学校教育における地域人教育に着目した。

「はじめに」でも述べられているように、教育という営みによって、第1部で取り上げた「地域」と第2部で取り上げた「人」が有機的につながるように思える。そのような有機的なつながりがあればこそ、おじいちゃんおばあちゃん、お父さんお母さんから引き継いだ飯田を子供、孫へと引き継いでいけるのではないのでしょうか。地域人教育の充実によってこそ、この素晴らしい飯田が持続可能なものになれるように思える。

飯田ではあらゆるところに教育がありました。この第3部を締めくくるにあたり、調査に協力していただいた皆様に深くお礼申し上げたいと思います。この報告書における教育の部が、飯田における地域人教育に何らかの示唆を与えられれば幸いです。

参加者の感想

杉田 信論

この実習で初めて伺った飯田ですが、とても良い思い出になりました。関わった人は皆優しく、ご飯はとても美味しく、調査実習も悪いものではないな、と思いました。

瀬領 大輔

飯田で感じたのは、飯田という「コミュニティ」に対する愛でした。それはどんなに大きな都市に住んでいても、どんなに歴史ある街で育っても、なかなか得ることのできない、飯田の宝だと思いました。

田口 明日香

実習と追加調査で二回飯田を訪れ、豊かな自然や食文化はもちろんのこと、何より人の温かさが飯田の最大の魅力であると感じました。追加調査をしに一人で飯田を訪れた際、初めて知り合った地元の方々に街を案内していただいたり、飲み会に誘っていただいたりと、とても楽しく充実した時間を過ごすことができました。飯田での様々な人との出会いと、彼らとそこで地域の将来や教育について熱く語りあかしたことは、自分の中で忘れがたい思い出となるでしょう。飯田を実際に訪れたからこそ学べたことや感じたことが多くありました。ここでの学びを、本報告書の執筆で終わるのでなく、これからの自分自身にも還元していきたいと思います。

寺田 恭行

飯田市の工業的な強みを活かして地域を活性化するための構想は、実習で学んだ飯田の魅力をさらに感じさせるものでした。人々の繋がりを強めるための施策については自分で調べるに至りませんでした。今後人口が増えて飯田がどうなっていくのか少しずつでも知っていければと思います。

野村 明日香

夏の実習と単独での現地調査を通して、私が一番印象に残ったのは、地域の方々の地元に対する関心の強さです。飯田市長の牧野光朗さんの話をお聞きした際、知らないから「何もない」と表現してしまうという指摘が為されていました。自分の言動を振り返ってみて思い当たる節が多々あった私は、地元に対して知識や関心を持たずに生活していたということを痛感しました。

「飯田」という、今まで自分が訪れたことが無かった地域を見つめることで、自分が住む地域に対する考え方も変わったように思います。

帆玉 光輝

今夏、飯田に到着した折、私はずっと「遠いわ。」と連呼していました。山道を走るバスに揺られること5時間近く、退屈しのぎにコンビニで買った漫画も早々に読み終えてしまった私は、することもないのに寝られない状態を過ごし、到着してからもずっと「しんどい」とぼっかり言っていました。しかし、4日間の実習を終え、また嫌々ながらバスに乗る時、逆に「だからこの街は良いんだ。」と感じました。

グローバル化により、あらゆるもの、情報、人が互いに簡単にアクセスできる時代となりましたが、その一方で、飯田は地形上、今も昔も都市圏とのアクセスが簡単ではありません。しかし、だからこそ、この街ならではの人と人との近接に結ばれた小さいコミュニティが造られ、それらがさらに結ばれて、大きなものを動かしていく、その原動力みたいなものが南伊那盆地に根付いているように感じられました。その至近感には都市圏では簡単に味わえるものではなく、そのためか、私は飯田滞在中、久々に実家に帰ったような温かい感情を抱いたのを覚えております。

最後に実習中お世話になりました飯田の方々、とりわけ民泊させていただいた近藤様、本当にありがとうございました。

[追伸] 飯田からの帰りは渋滞のため、新宿まで6時間近くかかりました。なんだかんだ書きましたが、リニア開通によって飯田まで簡単に行けるようになることを望んでおります(笑)

増田 健也

飯田について、なぜこのように魅力あるまちを作れたのか。このようなことに主眼を置いて見学・調査を行ってきた。当初、個人的にはシステムチックな要因が働いているに違いないと思っていた。しかし実際にはそうではない、もっとソフトな力学に支えられていた事に気づかされ、恥じ入る思いである。

これから少子高齢化など社会の諸問題が噴出する中で「地方創世」や「コミュニティ」の重要性が声高に叫ばれるだろう。そのとき、この飯田の事例は重要な示唆を与えるであろうと、自分は確信している。

横井 一隆

飯田市での体験を通して「地方は元気がない」との偏見を取っ払うことができました。むしろ、東京で満員電車で揺られている人の方が気分が鬱になります。飯田市の魅力を周りの人にも伝えていきます。

吉田 美穂

飯田での研修で、様々な発見がありました。高速バスで新宿から4時間、着くやいなや信州飯田餃子のお店で「水道水がそのまま飲める」と聞いて驚きました。初日の農家民泊、千代地区は空気が澄んでいてとても気持ちが良かったです。そこで取れた野菜は大変新鮮で美味しくて、東

京では体験できないものばかりでした。高校生が主体となって町おこしをしていることも、公民館が地域の人々の集まる場所になっていることも、人形劇の街として伝統があることも、全てが私にとって非常に新鮮でした。貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。

渡邊 晃一郎

飯田という「まち」に限らず、「まち」というものはそこに住む人との相互作用を起こしつつ、存在していくのでしょうか。

しかし、「飯田らしさ」があるとすれば、それは様々な可能性を秘めている点であり、さらにその可能性を芽生えさせる点ではないかと調査実習、報告書執筆を通じて思いました。

私が担当した地域人教育も改善の途中にあり、完璧なものではないということが調査の中で分かってきました。しかし、完璧でない、”Best”でないことを許容し、進もうとする意思のある人の道を塞がないことが、積み重なって「飯田らしさ」になってきたのではないかと、思う次第です。

殊にお世話になった浅井先生をはじめとする飯田 OIDE 長姫高校の教職員及び生徒の皆さまはじめ、この報告書執筆の過程でご助力を賜りました方々には心より御礼申し上げる次第でございます。

日隈 脩一郎

とりわけ目的意識もなく、観光にでもいく気分で実習に参加した私は、あまりの「実習」っぷりに初日から呆気にとられた。もとより真面目に勉強する性など備えていないから、スケジュールを終えて街に繰り出すことが何よりの楽しみとなった。しかるに、その楽しみは思わぬ副産物として、飯田の歴史性へと目を見開かしてくれた。と同時に、いけ好かない学生を旧知のごともてなしてくれる飯田の人々にも触れ合えた。

言い訳に過ぎないとはいえ、卒業論文の執筆と大学院入試が重なり、本来探究してみたかったことの1/10も出来た気がしないけれど、知れば知るほど、この国の近代化と飯田との強い結びつきに惹かれる。だから、飯田は自分にとっては今後も知るべき、そしてそれゆえに愛すべき対象としてあり続けるだろう。浮ついた気持ちで飯田が第二の故郷などと言うつもりはないが、航空宇宙産業を支え、やがてはリニアが走り、そしてモダニティが輻輳する飯田は、私にとって紛れもなく決定的なトポスとなった。

豊田 瑠璃

2度訪れた飯田で学んだものは、9月に想像していたよりも大きなものでした。ずっと、社会関係資本や「つながり」の必要性が叫ばれる一方で、どこか実感を伴って感じられない私でした。けれど、飯田でたくさんの人と話を真剣に話して・真剣に聞いてもらう時間も、飯田の人たちがそれぞれ気軽に挨拶をしあう空気も、確かに心が休まり暖かくなるものでした。また飯田に訪れ、もっともっと飯田のことを知りたいと思っています。貴重な学びの機会に感謝致します。

村上 由紀

3泊4日のフィールドスタディは、普段の生活では体験することがない内容が盛り沢山で楽しかったです。民泊でお世話になった人、学校の先生など実習でお世話になった人だけでなく、ホテルで会った人やお土産物屋さんの店員さんまで、みなさん物腰柔らかくて温かい人だなあという印象を抱きました。

飯田にはまたぜひ訪れたいと思います。素敵な時間をありがとうございました。

鯛 仁和

ここの感想では、報告書では書けなかった霜月祭についての感想を書こうと思います。

私は、今年の12月に下栗の霜月祭に参加させていただきました。霜月祭は聞いていた通り、煙の中一晩中踊り続けるお祭りで、髪の毛についた煙の匂いは1週間以上とれないまま残っていました。地域の人が書きがれた人数の中、祭を継続していく姿を目の当たりにすることができました。これからもまだまだ知らない飯田の魅力を見つけつつ、関係を続けていこうと思います。

どうもありがとうございました。

福森 敏也

私が飯田フィールドスタディ、およびこの報告書の執筆に携わるのももう3回目となりました。お話を伺う活動に毎年それほど差はないのですが（変わらぬ活動が堅実に続いていることこそ飯田の強みであると思っております）、私が初めて飯田市を訪れたときからして、特に「地域人教育」を中心とする高校生主体の活動に大きな飛躍があったように感じます。日常生活の中に地域との関わりなどほぼ皆無で、ひたすら勉強と部活に明け暮れていた自分の高校時代と比べながら彼らの姿を見て、「彼らの貴重な経験が今後どのように花開いていくのだろう」と興味が尽きません。本報告書は、この「地域人教育」を、飯田 OIDE 長姫高校にとどまらない飯田市全体の営みとして捉えようとしたものです。大変未熟なものではありますが、これが飯田の方々にとっての新たな示唆となれば大変喜ばしいことであると思うとともに、私自身、今後も様々な活動を見させていただいたりお話を伺ったりすることを、非常に楽しみにしております。

また、例年行っている追加調査ではありますが、今年度は、下栗の里の霜月祭りに参加させていただいたり、飯田市公民館とのご縁で兵庫県尼崎市の方々をご紹介いただいたりと、昨年以上に飛躍的な調査となりました。私が執筆した原稿の中で直接ふれることはできませんでしたが、霜月祭りをご案内いただいた上村公民館の野牧主事にも、この場を借りてお礼申し上げます。

今年度3月の報告会をもって、私が飯田市を訪れるのはついに10回目となります。これからも幾度となく足を運ばせていただきたいと思いますので、皆さまどうぞよろしくお願ひいたします！

松本 奈々子

飯田実習を終え、音楽祭のことを考えているとき、私の好きな絵本画家五味太郎さんの絵を思い出しました。五味太郎さんは、輪郭を描いてから面をぬるのではなく、まず面を塗るそうです。面を塗りながら他の面との境目にできた部分が線となるため、彼の絵の輪郭は滲み、揺れています。世代や年齢など自分を他から分ける線はたくさんあり、あらかじめある線を問わずに線の内側を塗っていくこともできるけれど、他の面との境目に交流の時間の経過とともに揺れ、滲み、現れるような線のひきかたもあるのだなど、(まだ知り合ってすすぐなのですが) 飯田の人々と出会って感じました。ありがとうございました。

木戸 玲子

実際に飯田に行き、地域人教育を知ることができ、よかったです。飯田市の皆さんや、関わってくださった先生方に感謝いたします。ありがとうございました。

小林 あずさ

飯田実習では、飯田のことが大好きでもっと良くしていきたいと考えている方々に多く出会うことができました。公民館主事さん、農家の方、高校の先生・生徒、ライブハウスの方、美術館・博物館の方…それぞれ違う角度から、飯田の良いところを伸ばそうと努力されていて、地域全体がいきいきとしているように見えました。このような地域の努力は、地域に住んでいる人々よりも、私たちのように外部から訪れた者のほうがよく見えることがあるかもしれないと感じました。とても貴重な体験をさせていただき、本当にありがとうございました。

地域の文化を育むということ:感想に代えて

松山 鮎子

寒空の下、装束をまとった人形に神輿を担がせ、集落を練り歩く人びと。これは、遠州街道沿いの阿南町にある早稲田神社の正月行事、「神送り」の光景です。神送りは、新しい年を迎えるため、一年の「けがれ」を人形に託し村の外へ送り出す神事です。その祭礼の様子が、上伊那出身の写真家、宮本辰雄氏による『信州地方の人形芝居』に収められています¹。神社では、また、8月にも人形浄瑠璃の奉納行事をおこなっています。お囃子の音にあわせ、舞台上で「三番叟」を舞う人形たち。三番叟は、能狂言においても晴れやかさと可笑しみのある演目ですが、人形の細やかな動きは、人の演じるのとはまた違う興を舞台に添えてくれます。こうした年中行事は、人形芝居の娯楽としての魅力を感じさせるだけでなく、さらにそれが、人の心の平穏や、集落の安寧への願いとともに長年育まれてきたことを偲ばせてくれる気がします。

飯田が「人形劇のまち」であることは、この地を初めて訪れた4年前に知りました。たとえば、日本最大の人形劇の祭典「いいだ人形劇フェスタ」、NHKの人形劇「三国志」や「平家物語」でお馴染み、川本喜八郎の人形美術館、飯田市内の下黒田諏訪神社境内にある人形浄瑠璃の専用舞台など。いずれも飯田と人形との並々ならぬ縁をうかがわせ、その背景にある歴史へ、これまで当地を訪れるたびにさまざまに想像をめぐらせてきました。伊那谷の人の暮らしと人形との結びつきをしめす先の写真も、そうした想像力をかき立てる一枚です。そこで、テーマの奥深さから考えればごく簡単に拙いものではありませんが、今年度は飯田と人形にまつわる歴史に寄せて、学んだことを綴ります。

* * *

日本の伝統芸能の一つである人形浄瑠璃は、江戸時代、諸国を廻る旅芸人らにより伊那谷の各所へ伝えられました。山深いこの地に、全盛期は20以上の人形座が存在したというのだから、ただ驚くばかりです。では、そもそも人形浄瑠璃とはどのような芸能なのでしょう。それについて、浄瑠璃と人形、舞台を成立させるこの二本柱の成り立ちからみてみます。

まず前者は、三味線を伴奏に物語に節をつけて語る「語りもの」の一種で、琵琶法師の弾き語る平曲の流れを汲んでいます。その発生間もない15世紀の末頃は、扇や鼓、琵琶により語りの拍子をとっていたようです。それが、後に考案された三味線を取り入れたことで音楽的に大きく飛躍し、現在に通じる浄瑠璃が成立したといわれます。また、その発展に大きく貢献したのが、江戸初期の大阪で竹本座を起こした竹本義太夫です。彼の語る浄瑠璃が、いわゆる「義太夫節」。これが近松門左衛門の良質な作品群を得て、大阪の文楽（人形浄瑠璃専門の劇場）において庶民の人気を大いに博しました。近松の世話物の代表作「曾根崎心中」の上演当時、作品の影響で心中

する男女が増加し、幕府が心中禁止令を発した—このようなエピソードが生まれるほど、当時の舞台は大盛況でした。なお、この「義太夫節人形浄瑠璃」が明治以降に「文楽」と呼ばれ、今日では一般化しています。

他方、人形の起源も、語りものの歴史と同様に遠く古代まで遡れます。民俗学によれば、かつて人形は厄災を免れ幸運を招き入れるための神事に用いられ、神霊の依り代として威力を発揮したそうです。それが平安時代以降、祝詞をととなえ神仏の靈験を広める、傀儡子(くぐつし)などの旅回り芸人を生み出しました。現在、人形芝居の最古参といわれる淡路人形(上方文楽と同様に三人遣いですが、そちらに比べ頭が大きいのが特徴)も、誕生のきっかけは傀儡子の来訪にあります。詳しくは、兵庫県の西宮神社に仕えた傀儡子百太夫(ももだゆう)が、室町時代後期、かの地を訪れ土地の者に人形芝居を教えたことがその始まりと伝えられています。そして江戸期に入り、世俗的な性格を強めた人形は、民衆娯楽の一つとして舞台上で演じられるようになりました。それにともない、もとは一人で操っていた人形が、現代の文楽にみられる「三人遣い」という複雑な技芸に進化します。これを考案したのも、やはり竹本座でした。人形浄瑠璃の発展における竹本義太夫の功績は、今日、彼が登場する以前を「古浄瑠璃」とし、後のスタイルと区別しているところからもうかがい知れます。

竹本座、豊竹座などの諸座の活躍によって、17-18世紀、一斉を風靡した人形浄瑠璃でしたが、都市では次第に衰退の道を辿りました。具体的には、三人遣いによる演技者の増加が招いた座の経営困難、そこに追い打ちをかけるように出された、「天保の改革」の市中興行禁止令、さらに歌舞伎の流行など、いくつもの出来事が重なったことにその要因があったようです。そして、大きな座が減少し、演技者の多くが職を失った停滞期、残る者たちが活路を見出したのが、旅回りによる人形浄瑠璃の普及でした。実は、伊那谷の人形浄瑠璃の深化と発展は、以上のような背景の下、淡路系の芸人たちが当地へ逗留したことに端を発するのです。

ところで以前、南信州は地域ごとに独立心が強く、他村や他の地区に負けたくないという気持ちは、一面で住民の自治の精神を育ててきたとうかがったことがあります。伊那谷をふくむ信濃国は、古くは平安時代から、中小の領主が互いに勢力拡大のため争いを繰り返してきた地域でした。江戸時代になっても、当地において幕府は小藩分立の政策をとり、中でも伊那谷は、直轄領と1000石から5000石以下の旗本領、他国の城持ち大名の領地などが散在し、ひととき複雑な所領分布でした。伊那谷の人びとの他領の者に遅れまいという競争心や、進取の気性は、そうした土地柄により養われたといえるかもしれません。そして、街道筋に聞こえてくる人形浄瑠璃の評判が、人びとの好奇心を大いに刺激したであろうことは想像に難くありません。

記録によれば、この地に最初に人形浄瑠璃が伝わったのは1647年です。場所は、下條村吉岡。名古屋の幅下団兵衛による興行でした。次いで、1681-1703年頃には、大阪の人形の評判を聞きつけた野池諏訪神社の神官大平氏が、人形をいくつか買い求めています。その頃はまだ、旅回りの芸人の技をまねる程度の芸だったようですが、流行の娯楽を自分たちでも試してみるというところに、伊那人士の気質が表れている気がします。

その後、本格的な人形浄瑠璃がこの地で実演されるようになったのは、前述のように、都市を追われたプロの人形師たちが、伊那谷へと流れついた時期からでした。たとえば、黒田人形は、1688-1703年の元禄年間、正命庵の僧侶正覚真海が、村人に人形を教えたのがその始まりとされています。さらにその後、約半世紀を経て、淡路の人形遣い吉田重三郎、次いで1832年、大阪から同じく人形遣いの桐竹門三郎、吉田亀造が流れ着きました。今では国の重要文化財にもなっている「下黒田の舞台」の建築は、大阪から来た桐竹、吉田両名の指導によるものだそうです。なお、彼ら3名はそのまま黒田で一生を終え、同地の太念寺に葬られました。黒田に限らず、伊那谷を訪れた人形遣いは、当地をよほど気に入ったとみえ、そのまま多くの者がそこに骨を埋めています。こうしてプロの人形遣いたちが定住したことで、伊那谷の人形の技芸は大きく発展し、天保から明治初期にかけ、人形座の数を23ヶ所まで増やし、全盛期を迎えることとなったのです。

* * *

伊那谷に伝わる人形浄瑠璃の特筆すべき点は、それが単なる農閑期の慰みというだけでなく、各地域の土着の信仰、生活と深く結びつきながら、この土地の独自の文化として発展していったことだと思います。それは一面で、浄瑠璃や人形が、本来は暮らしの平穏無事を願う人々の祈りから生まれたことを私たちに教えてくれます。またそれは、オランダの歴史家ホイジンガのいうように、娯楽にみられる遊戯精神の中にこそ、文化を育む土壌があるということをも実感させてくれる気がします²。

さらに、もう一つ。舞台の華やかさ、人形の美しさにばかり目をとらわれていると見逃してしまいがちなのが、それを支える「日常」の存在です。思想家の安田武は、「文化」の「カルティベイト（耕す）」という語源に着目し、農民がその土地をよく耕すことによって良き収穫を得るように、文化は、私たちが日常生活それ自体、その周辺を丹念に「耕す」ことによってしかありえないと述べています³。

安田が具体例として挙げるのは、日本の染物の伝統技についてです。染め物の一種である江戸小紋は、お祭りのはっぴなどで今もときどき目にする機会があると思います。安田は、この江戸小紋の美を見るものに伝えるのは、その工程にかかわるさまざまな人の技だといいます。型紙を彫る人、その型紙を糊置きして染め上げる人、型染めに用いる紙をすく人、さらに、その原料となる楮を生産する人。とくに和紙の質は、原料の楮に決定的に支配されるため、紙すき職人にとって、輸入品と比較にならないほど良質で希少な国産楮を確保するのが最も重要なのだそうです。このように、一つの製品の美しさの成立には、それを成り立たせる職人の技、それに加え、原料となる自然についての造詣、それらを統合したさまざまな生活の知恵の蓄積があるのだと考えられます。

その他にも、たとえばいかなる箏曲の名人がいようと、優れた琴職人、琴や三味線の糸の作

り手がいなくなれば、その音色を実現することはできません。また、琴糸の原料となる絹糸も、ミネラルを豊富に含んだ水の恵みある環境で作られねば良質なものができません。それゆえ、聞くひとが聞けば、絹糸の質の良し悪し、ましてやナイロン糸とでは、琴の音色の違いはくらべものにならないのだそうです。つまり、ここで言いたいのは、私たちが今日その美しさを目にして、あるいは耳にして心動かされるさまざまな風物は、そのような多くの人びとの日々の営み、生活の知恵の総体としての「文化」によって育まれたものなのだという事です。

文楽の世界も、長年、さまざまな職人がその舞台を支えてきました。たとえば、人形の首（かしら）製作。その過程ひとつをとっても、職人の技は、かしの土台となる桐をはじめ、目や眉を動かす仕掛けをつくる鯨の歯、膠(にかわ)、和紙、胡粉(ごふん)（貝殻を粉状にした顔料）、紅殻(べにがら)（ベンガラ。赤色の顔料の一種）など、いくつもの自然の恵みからなる原料によって成り立っていることが分かります。

近年の代表的な人形師の一人に、大江巳之助（1907-1997）という人物がいます。彼は、徳島県の阿波人形浄瑠璃の4代目として、人形のかしらの製作に生涯を捧げました。また、彼の修理したかしらは、現在、飯田の今田人形座にも地域の貴重な財産として保存されています。その大江によれば⁴、人形のかしらは、「荒彫り」といわれる最初の素彫りの時点で、その完成度が決まるそうです。さらに、最も重要なのは、作者が人形に「命を吹き込む」段階、目を描き入れる作業です。この工程は、仏像彫刻などと同様に「開眼」と呼ばれ、かなりの熟練の技を要するといえます。文楽では、舞台の暗闇に人形の肌の白色がよく映えます。また、これは明治半ば以降の人形に限られるのですが、はめ込まれたガラス玉の効果による目の輝きは、舞台上の人形を本当に美しく見せ、そこに魂が宿っていると感じさせてくれます。こうした一つひとつの工夫が、職人の技として今に伝えられ、舞台を支えているのです。

大江は、自身の製作の信条を以下のように語っています。これまで、「太夫、三味線、人形遣いの高度な芸に負けないかしらをつくろうと精進してきた」、だからこそ、「人形師の弟子になるより、人形遣いを師として、舞台を観てかしの表情や動きを研究することが一番の修行」であり、「舞台を離れた人形師はいない」のです。

最近、飯田市龍江の人形師、牧本寿亮氏のインタビュー映像を見る機会がありました⁵。今から2年ほど前、伊那谷の情報番組の中で放送されたものです。牧本氏は、現在、長野県下で唯一の人形のかしらの製作者です。また、先の大江を師として仰ぎ、自身の技を磨いてきたそうです。その彼が、人形作りを続ける理由について、次のように語ります。「自分がつくった人形を、舞台上で演じてもらえるのが嬉しい。だから、人形を作り続けている。少しでも、先人の技に近づけるよう、これからも人形を作り続けたい」。

このお二人の職人の言葉から分かるのは、職人と演者とは、互いに切磋琢磨し合う関係であるだけでなく、職人にとっては自分の作品が舞台上で演者に用いられ、さらにそれを観客が喜んでくれることが、自身の技を支える力ともなっているということです。その意味で、人形浄瑠璃は、舞台上の演者と舞台裏の職人（原料の生産者をふくむ）、それらを味わう「知識」と感性を身につ

けた観客，三者が相互に影響し合うことにより，はじめて成立するのだと考えられます。先述の，日々の営みや生活の知恵の総体としての「文化」のあり方，それを成り立たせる人びとの関係性とは，このようなものなのではないでしょうか。人形浄瑠璃の文化もやはり，長年をかけて人びとがさまざまな技と知恵を蓄積し，暮らしを営むことで，足元の土壌を耕してきたことによりかたちづくられてきたのです。伊那谷の人形の歴史は，まさにそのことを今に伝えてくれている実例である気がします。

ところで，今年，国立劇場は開場 50 周年を迎え，小劇場の文楽公演では近松による古典作品が相次いで上演されています。ただ，東京こそ会場は満員御礼になるものの，全国的にみると，今では文楽にふれたことのない日本人の方が大半を占めています。それもあって，文楽はどちらかといえば高尚で，一部の玄人にしか分からない，敷居の高い「伝統芸能」になっているといえます。また残念ながら，明治期以降になると，伊那谷の人形浄瑠璃も幾度となく存続の危機を迎え，今では，黒田，古田，今田，早稲田の四座を残すのみとなりました。

こうして，文楽をふくめ伝統的な諸芸能が民衆の娯楽として影を潜めていく一方，明治期以降の日本は戦後に至るまで，欧米の技術や生活・娯楽文化を吸収することで発展を遂げてきました。この傾向は，今日もほぼ同様といえます。IT や科学技術の分野において，私たちの生活は驚くほどのスピードで日々刷新されています。また，グローバル化の潮流の下，国境を越えて，人びとの暮らしぶりには以前ほどの差がなくなりつつあります。このような中，自戒を込めていえば，筆者をふくめて観客の大半が，人形浄瑠璃の文化を支える生活の知識とは，ますます切り離された日常を送るようになってきています。

ではそこで何が起こるかという点，既成のもの，他から与えられたものを受け取るだけの生活において，「文化」は，どちらかといえば「よそ」からやってくるものというイメージでとらえられるようになっていくのではないのでしょうか。もちろん，それがすべて一概に悪いというつもりはありません。しかし，文化は，手の届かない高尚なもの，あるいは外からもたらされるだけのものではありません。つまりそれは，自分の今いる地域を成り立たせている土壌，換言すれば，その土地の風土と，蓄積されてきた生活の知恵を知ろうとすることからも芽生えるのだと思うのです。そしてその上で，人と関わり，新たな活動を日常的に自分たちの手で生み出していくことが，固有の文化を育み，豊かな暮らしを実現することに結びつくのではないのでしょうか。

また，現在の飯田における人形劇の取り組み全般をふまえると，そこにかかわる人たちが，かつての伊那谷の住人がそうであったように日常的に人形を慈しみ，またその都度，新たに場を創り出す楽しみを共有してこそ，一つの文化が暮らしに根づき，守られ，いっそう盛んになっていくのだと感じます。飯田と人形をめぐる歴史に想いをはせる時，こうした身近な生活の知恵として蓄積された「文化」の重要性を，あらためて認識させられる気がします。

最後にもう一つ。実際に文楽を一度でも観劇した人であれば，太夫の語り，三味線の演奏，人形の扱い，いずれをとってもある程度の熟練の技がなければ，観るに堪えない舞台となってしまうことが分かると思います。だからこそ，四つの人形座が今もその芸を守り伝えているというこ

とに思いをいたすと、長い時間をかけ醸成された伊那谷の人びとの人形への愛情、情熱の深さを感じ、あらためてそのことに敬意を表さずにはられません。文化は、形式だけをいわば義務的に受け継いでいこうとしても、その精神を継承するのは困難だろうと思います。それが、「人形劇のまち」飯田の過去と今に教えられたことでした。

個人的には4回目の実習であった今年度、以上のことを飯田の皆様から学ばせていただきました。初年度からお世話になっている方々、また今回新たに出会った方々、すべての方々へ心からの感謝の気持ちを込め、飯田の人形劇のますますの発展を祈念して、筆をおきたいと思います。

【注】

1. 宮本辰雄『信州地方の人形芝居』、信濃毎日新聞社、1986、pp.8-30
2. ホイジンガ『ホモ・ルーデンス』高橋英夫訳、中央公論新社、1973
3. 安田武『型の日本文化』朝日新聞社、1984、pp.9-16
4. おおえまさのり『木偶の舞う夢ー最後の文楽人形師大江巳之助の世界』共同プレス、1998
5. 「朝の学び舎 こんにちは伊那谷・シリーズ職人の手：人形浄瑠璃の人形師（飯田市龍江）」2013年9月20日放送
(朝の学び舎 HP <http://www.koaglobal.com/manabiya/home.html>)

おわりに

李 正連

東京大学が夏学期と冬学期の Semester 制から S1・S2・A1・A2 の 4 ターム制に移行してから 2 年目の今年度もそのシステムにまだ慣れない中で飯田実習と報告書づくりに取り組んだ。約 1 か月半くらい 1 タームに従来の一学期の授業を終わらせる 4 ターム制では、追加調査も必要とする報告書づくりがやりづらい面も多く、別途自主ゼミを何回か重ねながら報告書を完成させていった。

調査実習の前には日本社会がいま抱えている現状や問題等を理解するために、いくつかの文献を検討した。学生から最もリクエストの多かった藤田孝典氏の『貧困世代—社会の監獄に閉じ込められた若者たち—』（講談社現代新書、2016）をはじめ、センセーショナルなタイトルや内容で注目を集めた増田寛也氏の『地方消滅—東京—極集中が招く人口急減—』（中公新書、2014）、そして学びを基盤とした地域づくりについての学習のために牧野篤先生の『農的な生活が面白い—年収 200 万円で豊かに暮らす!—』（さくら舎、2014）と『人が生きる社会と生涯学習—弱くある私たちが結びつくこと—』（大学教育出版、2012）を講読した。そしてゲストスピーカーとして厚労省の方に来ていただき、ブラックバイトの実態やその原因などについてお話を伺う時間も持った。

今年度の実習では、最近飯田市が力を入れている「地域人教育」に少し比重を置き、「地域人教育」についての説明を聞くだけではなく、実際「地域人教育」の授業に参加して高校生たちの生き生きとした活動を参観したり、高校生及び担当教員や公民館主事とも意見交換を行った。それもあってか、報告書づくりの際に、「地域人教育」について書きたいという学生が非常に多かった。そこで、飯田の地域人教育を地域、人、教育と三つに分け、多様な視点から重層的に浮かび上がらせることにした。ここでいう地域人教育は高校のカリキュラムとしての「地域人教育」ではなく、飯田全体に関わるより広い意味での地域人教育である。すなわち、報告書づくりでは、「地域」に着目して地域人教育の土壌をなす地域の特性について調べるグループと、「人」に焦点を当てて地域人教育の土台となる地域における人の動きや関わりを考察するグループ、最後に「教育」に注目して「地域」と「人」がどのように相互作用しながら育ってきたかについて検討するグループに分かれて、飯田の地域人教育を単に「次世代の育成」のためのものとしてではなく、飯田という地域に暮らす人々の様々な取り組みや活動、そしてそこから生まれる変化、成長等を含むより広い意味でのものとしてとらえようとした。それにより、本報告書のタイトルは「人が育つまち 人が育てたまち 飯田—地域と人と教育のシンフォニー—」に決まった。

飯田の「地域人教育」における「地域人」とは「地域を理解し、愛し、地域に貢献する人」と定義されている。どうすれば、そのような地域人を育てることができるだろうか。飯田の「地域人教育」の企画にも関わった松本大学の白戸洋教授が、「地域人教育」広報 VTR で「地域の中に居場所がある、役割があることが大事である。期待は人を成長させる」と述べているところにその

答えがあるのではないかと思われる。地域の中に居場所があったり、何か役割があったり、またそれが地域や誰かに役立ち、感謝されたり、やりがいを感じたり、期待されたりするなどの経験は、子どもや高校生のみならず、大人も変化させ、「地域」への愛着も持たせる効果があると思う。

私の故郷は人口約10万人の飯田とほぼ同じ規模の都市農村複合型地域であるが、最近道（県）庁所在地となって人口も増え続けており、景気もよくなってきている。しかし、私は故郷を離れてからずっと将来故郷に帰りたいと思ったことは一度もない。気候や交通の面においても比較的便利でとても暮らしやすいところである。そして、個人的に故郷でとくに嫌な思いをした経験もない。さらに、将来故郷での生活（生計）問題がクリアできるとしても帰りたいという気持ちはまったく湧かない。これに対して自らも不思議に思ったりもするが、上述した白戸教授のお話に触れてなんとなくその理由がわかった気がする。振り返ってみると、私の小・中・高校時代はひたすら学校の勉強や受験勉強で埋め尽くされており、地域との関わりはほとんど持てなかった。とくに高校3年間は毎日夜9時まで学校での自習が義務付けられ、部活動もなく、地域との行事や活動もほとんどなかった。地元の歴史や伝統、経済・文化等の諸知識に触れる時間も少なく、地元の魅力を感じられるような機会もあまり与えられず、地域の中に居場所もなければ、求められる役割もなかった。つまり地域における「当事者」としての感覚をほとんど持てなかったのである。このような環境の中で地元への愛着がわかないのはある意味当然のことかもしれない。私の経験は韓国という少し特殊な事例かもしれないが、国を問わず、子どもの時期の地域での豊かな経験が地域への愛着や関心を高める要素になり得るという点においては共通するのではないかと思われる。

そのような観点から考えれば、飯田は、あえて高校生のための「地域人教育」を取り上げなくても、すでに長らく地域人教育というべき実践を多く積み上げてきた地域と言ってよいだろう。地域の公民館を拠点に住民をはじめ行政や学校、地域の諸団体等が時には連携・協力しながら、様々な活動を通してまちづくりや人づくりに取り組んできた蓄積が飯田にはあるのである。このような蓄積が土台にあったからこそ飯田 OIDE 長姫高校の「地域人教育」が生まれることができたともいえよう。それは、「地域人教育」が学校のみによって担えるものではなく、地域や行政からの協力と連携が基盤となってこそ実現されるものであるという意味でもある。一方、このような高校の「地域人教育」は飯田市民の意識や諸活動をよりいっそう促進させ、飯田市民の地域人教育にさらなる広がりをもたらす契機にもなり得るものとして、今後の取り組みが大いに期待できる。

今回の調査実習においても、飯田の方々から相変わらぬご支援とご協力を多くいただいた。追加調査の際も年末のお忙しい時期にもかかわらず、温かくご対応いただき、心より感謝申し上げます。どうもありがとうございました。

謝辞

新藤 浩伸

これまでに続き、飯田の皆様には本当にお世話になりました。

毎年充実したプログラムを組んでいただいている市の皆様、そして日々のご活動でご多忙な中、時間を割いてお話をしてくださる皆様、農家民泊で宿をご提供くださった皆様に、感謝申し上げます。

学生たちにとっては初めてですが、教員にとっては何度めかのお話を伺う方々の実践も、毎年内容が深まっているのを感じます。そのたび、これが飯田の市民活動の凄さか、と思わされます。

飯田には、様々な学びの風土があることに毎回驚かされますが、その中の一つに民俗学があります。飯田出身の故・後藤総一郎氏（1935～2004）が、1977年に故郷・遠山で始め、飯田を含め全国に展開していった「常民大学」という実践があります。今回の実習とは別に、私はここ数年をかけ常民大学の実践を共同で調査し、昨年秋にまとめました（北田耕也監修、地域文化研究会編『地域に根ざす民衆文化の創造—「常民大学」の総合的研究』藤原書店、2016）。

民俗思想史が専門の後藤氏が目指したのは、民俗学や思想史や柳田国男を単なる学知として学ぶのではなく、自身の生き方と関わらせて学ぶことで、自身の足元を掘り下げ、それにより地域社会や世界のあり方をみとおしていくことでした。行政に依存することなく、「身銭」を切って学ぶことを強調した後藤氏でしたが、図書館や公民館、美術博物館といった社会教育機関が常民大学の活動を支えてきたことも、忘れてはならないことかもしれません。

このような常民大学に限らず、実習を通じて出会った飯田の方々は、わがこととして様々な活動に取り組み、楽しみ、それを通して自身がどう生きるかをつねに考えておられるように思います。私にはそれがとても尊く感じられ、学生たちもきっとどこかそうした学び方、生き方に惹かれるものがあつたのではないのでしょうか。報告書づくりの議論の過程で、「地域」「人」「教育」という三部構成をとることとなりました。今回の実習は、飯田の地域人教育に学びながら、学生が各々の持ち場で、地域に関わりながらどう生きていくかを考えるきっかけになったのではと考えています。

このような機会を与えて下さった飯田の皆様に、心から感謝申し上げます。

執筆者一覧

牧野 篤	教授
李 正連	准教授
新藤 浩伸	准教授
松山 鮎子	特任助教
杉田 信論	教育学部教育実践・政策学コース 3年
瀬領 大輔	同上
田口 明日香	同上
寺田 恭行	同上
野村 明日香	同上
帆玉 光輝	同上
増田 健也	同上
横井 一隆	同上
吉田 美穂	同上
渡邊 晃一郎	同上
日隈 脩一郎	文学部思想文化学科 4年
豊田 瑠璃	経済学部経済学科 4年
村上 由紀	教育学部教育心理学コース 4年
鯛 仁和	教育学研究科生涯学習基盤経営コース修士 1年
福森 敏也	同上
松本 奈々子	同上
木戸 玲子	農学生命科学研究科修士 1年
小林 あずさ	同上

(2016年度ティーチングアシスタント：鯛仁和，福森敏也，松本奈々子)